C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

オーラルヒストリー

伊藤圭一

[元内閣国防会議事務局長]

〈上巻〉

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

伊藤圭一 オーラルヒストリー 上巻

目次

〔伊藤圭一・略歴〕……4

《第1回》……5
特攻隊要員として……7
教師から役人の道へ……11
ボヘミアンのように—満州・熊本・横手……13
アメリカナイズされていた人事院……18
妻・母・祖父……21
防衛大学校をつくる—防衛庁教育局教育課……24
「制服組」との交流……27

《第2回》……31
防衛大の定員を決める……33
術科学校・調査学校・幹部学校……36
情報の聴取・解析・連絡……40
女性自衛官の採用をめぐって……45
概算要求の基礎をつくる—防衛局第一課時代……47
国防会議の設置……51

《第3回》……59
大臣秘書官時代—二次防の発足……61
藤枝長官に進講する……67
国産化の限界……70
一日一日が勝負—秘書官業の面白さ……75
将官クラスの天下り……81

《第4回》……87
調達実施本部と調達庁……89
ナイキとホークの帰属問題……92
災害派遣に動員する—新潟地震……96
過大に扱われた「三矢研究」……102
三次防の策定と『朝日新聞』……109
天皇の官吏かパブリック・サーバントか……112

《第5回》……115
前回の補足と訂正……117
海自の基地・長官の影響力・三次防の決定……121
中ソの脅威とその対策……126
自衛隊を知ってもらう—『科学の脅威』の制作……133
新聞・雑誌記者と交際する……135
広報課の組織と業……138

《第6回》……143
"報道"よりも"広報"を……145
ペンタゴン訪問……148
芸能人と交流する……152
旅客機事故を報道する……156
暗い昭和四十二年……161

《第7回》……167
"大都会"エンタープライズの入港……169
激戦地硫黄島を訪問する—小笠原諸島返還に際して……173
兵器の開発・整備とカネ……177
「非核三原則」は憲法問題ではない……181
中曽根康弘と「診断する会」……184

《第8回》……191
万博・「よど号」・板門店……193
"ショーウインドウ"金門島……196
一次防でなにをやったか……199
日本の防衛力の限界と二次防の内容……203
三次防と研究開発……208

《第9回》……217
『防衛白書』の執筆と中曽根長官……219
海原vs中曽根—対立の真相……224
人事一課長として……229
沖縄基地問題とはなにか……233
三島事件の顛末……236

〈速記〉矢沢　麻里
水野　智子
戸部芳珠子

伊藤圭一略歴

1922 (大正11) 年 4月8日	旅順で生れる
1929 (昭和 4) 年 4月	大連大広場小学校入校
1935 (昭和10) 年 3月	大連第一中学校入校
1940 (昭和15) 年 2月	同校卒業
同年 4月	第五高等学校入学
1942 (昭和17) 年 9月	同校卒業　九州大学法文学部入学
1943 (昭和18) 年12月	九州大学中退　海軍・横須賀第二海兵団
1944 (昭和19) 年 2月	14期飛行専修予備学生　土浦海軍航空隊
同年 6月	鹿島海軍航空隊
同年12月	海軍少尉
1945 (昭和20) 年 5月	神町海軍航空隊
同年 7月	第722海軍航空隊
同年 9月	海軍中尉
1946 (昭和21) 年 8月	秋田県立横手高女教授嘱託
1949 (昭和24) 年 3月10日	第一回国家公務員試験合格 (法律)
同年10月	横手城南高校（元横手高女）退職
同年10月15日	人事院事務官
1954 (昭和29) 年 6月 1日	保安庁教養課
同年 7月 1日	防衛庁部員　教育局教育課
1958 (昭和33) 年 4月	防衛局第一課
1961 (昭和36) 年 7月	藤枝泉介防衛庁長官秘書官
1962 (昭和37) 年 7月	防衛局第一課
1964 (昭和39) 年12月	防衛施設庁施設部企画課長
1965 (昭和40) 年10月	防衛庁広報課長
1970 (昭和45) 年 7月	人事教育局人事一課長
1971 (昭和46) 年 4月	防衛課長
1973 (昭和48) 年10月	防衛審議官
1975 (昭和50) 年 9月	参事官 (教育担当)
1976 (昭和51) 年 7月	防衛局長
1978 (昭和53) 年11月	国防会議事務局長
1984 (昭和59) 年 7月	退官
1984 (昭和59) 年 9月	三菱電機顧問
2000 (平成12) 年 4月	退職

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第1回

開 催 日：2000年11月10日（金）
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時05分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

河野康子（法政大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■特攻隊要員として

伊藤(圭) 最初に、お断りしておかなければいけないのは、私は全く資料を残していません。一方、海原(治、元国防会議事務局長、昭和四十二年七月～四十七年十二月)は、物凄く資料を整理している人なのです。

伊藤(隆) しかし、資料がないんです。

伊藤(圭) お持ちだと思いますが、ないのですか。

佐道 ご自宅に伺って、物置まで見せていただいたのですが……。

伊藤(圭) 私の場合は、全くないのです。というのは、皆さんがインタビューされた方々――例えば後藤田(正晴)さんにしても、鈴木俊一さんにしても、労働次官をされた有馬元治さんにしても、本当に最初から、役人になって国のために尽くそうという志を持った人たちですね。

ところが、私は違うのです。昔、「でも・しか先生」という言葉がありましたけれども、そういう意味では、私は「でも・しか役人」なのです。相当いい加減なところがあったのですが、海原さんという人が厳しい人だったものですから、彼のところで鍛えられて、まあ何とか来たというのが実際です。そういう意味でも、とてもご期待に添えるような話はできないという気がするわけです。

佐道 とんでもないことです。六〇年代、七〇年代に非常に重要なセクションにいらして、様々な事柄に参画していらっしゃったと思いますから、そのご体験を率直にお話しいただければ、それで充分でございます。もちろん、そのお話を冊子にして公開する場合は、改めて目を通していただいた上で、許可をお願いすることになります。

伊藤(圭) 私も広報課長をやっていましたから、新聞記者などに頼んだこともあります。

実は、自衛隊の特集を最初にやったのが『朝日新聞』なのです。疋田桂一郎さんがキャップになりまして、細川護熙さんと柴田さんという記者の三人が中心になって、自衛隊を二ヵ月間取材して記事にしました。

そのときに、私が『朝日新聞』の人たちに条件を付けたのは三つだけです。まず一つは、個人の名前を出すときには相手の了解を取ってほしいということです。それから、「自衛隊のどこを見ても結構だけれども、いろんな秘密に接することが必ずあると思うので、問題がありそうなときは、一度訊いてくれ」ということです。もう一つは、「最初から色眼鏡を掛けて見ないでくれ」と。この三つの条件を出したのです。

ところが、それに対して疋田さんは、「私も全く同感だ。なるべく自分たちの意見を出さずに、武器などを通じて自衛隊の実体を語らせたい」と言ってくれました。そういう形で、F104の取材から始めたのです。「どこの部隊に行って、どんな人に会ってもいいから」と言いましたから、〔彼らは〕いろんな人に会ったのです。

ところが、防衛庁の次に『朝日』が取材したのがNHKです。そうしたら、NHKの広報担当者から私のところに電話がかかってきまして、「どういう取材だった?」と言うから、「全く自由に取材してもらった」ということと、「三つの条件を付けた」という話をしました。それで、NHKの取材をしたあとで、三人の記者に話を聞きましたら、「防衛庁よりも、NHKのほうがよっぽど官僚的だ」と言っていました(笑)。

そういう時代に、海原さんが官房長で、私が広報課長でいたわけです。そのあと、だんだん防衛庁も外に門戸を開かなくなってしまったものですから、今は部外の人がいろいろ文句を言っているようです。私たちの時代は、割合に外部の人と接触しました。

もう一つ、これは海原さんから学んだことですが、国会においては社会党や共産党の先生方と、よくお付き合いをしました。いろい

ろ話し合ったりして……。今は、そういう接触があまりないみたいですけれども……。だから、私が防衛庁を辞めて国防会議に行くとき（異動）に、社会党の先生が一席設けてくれました。それから、役人を辞めますときに、一番最初に電話をくれたのが共産党の先生でした。正森成二さんが、「本当に、ご苦労さまでした」と言ってくれました。ですから、良かったなというような気持ちがあります。

そういうようなことで、ちょっとしたきっかけで役人になってしまったものですから、防衛庁から国防会議へ行くときに、持っていた資料を全部、防衛庁に置いてきたのです。とは言うものの、防衛庁の時代には、多いときは月に何回も講演に行っていたものですから、国防会議に行っても講演を頼まれるだろうと思って、必要最少限の資料だけは持って行きました。しかし、最初の五年ぐらいは全国を回っていましたが、だんだんあとの者が、例えば亡くなった西広（整輝）君とかが出て来たものですから、私も用がなくなったので、「〔資料も〕要らないな」と思って、実は今年（平成十二年）の四月に三菱電機（顧問）を辞めるときに、役人関係のものは全部処分しちゃったのです。

伊藤（隆）　お話しするのが遅かったですね。

伊藤（圭）　それからしばらくして、海原さんから電話が来て、「オーラルヒストリーというのを知っているか」と訊かれて、「知らない」と言ったら、「こういうわけで、俺がやったあとに、君のことを推薦しておいたよ」と。そのときは軽い気持ちで、「そうですか」と言ったのですが……。

伊藤（隆）　気楽に、若い頃から順を追って話をしていただければ結構です。

そこで、まず秋田のご出身だということですが、秋田はどちらですか。

伊藤（圭）　実は、その前の話があるのです。私は、満州の旅順で生まれているのです。

伊藤（隆）　何年ですか。

伊藤（圭）　大正十一年、一九二二年の四月八日です。旅順で生まれました。

伊藤（隆）　お父様の関係ですか。

伊藤（圭）　そこに至るまでの話というのが面白いのです。私の国は、秋田県の横手というところです。私は、戦後、そこで三年間、先生をやるわけですけれども、原籍はそこにあるのです。

佐道　それで、「秋田出身」という中に入っているのですね。

伊藤（圭）　どうして満州に行ったかというと、これも戦争に行くときに焼いてしまったので、「惜しいことをした」と思っているのですけれども……。私の祖父さんが、物を書くのが好きだったのでしょうね、自分の一生を書いたものがあったのです。それを読みますと、戊辰の役のときに、私の曾祖父が横手で戦死しているのです。だから、今でも官軍墓地に曾祖父の墓があります。

佐道　官軍側だったのですか。

伊藤（圭）　秋田は官軍なのです。それで私の祖父というのは、伊藤の家に角間川という町から養子に来ました。その角間川の家というのは、「落合」という姓なのですが、代々学問をやっておった家のようです。養子に行くときに、「将来は勉強させてやる」というようなことだったらしいのですが、曾祖父は戊辰の役で死んでおり、明治維新になっていました。どうにもならなくなって、これはお定まりコースなのでしょうけれども、いわゆる下級武士だから、何になったかというと、巡査になっているのです。

それで、浅舞という小さな町で、駐在所の巡査をやっているときに、私の親父が生まれています。そのときに、県知事が巡視に来たことがあって、祖父が非常に真面目な人だったので、そのことを覚えていてくれたんでしょうね。後に満鉄ができるときに、知事が理事になり、明治四十何年かに大連に行くときに祖父さんを連れて行くわけです。考えてみると、いま南米に行くよりも、当時の大連

は、もっと遠い感じでしょう。「よく行ったものだ」と思うのですが……。

満州に行きまして、祖父さんがどういうことをしておったのか分かりませんが、親父も満州で育ち、中学は旅順中学を出ています。そして、慶応義塾を卒業しまして、満鉄に就職しているのです。その頃に、私が旅順で生まれています。どうして旅順で生まれたのかが分からないのですけれども、とにかく物心がついた頃からは、私は大連にいました。ですから、ずっと大連で育ちまして、小学校、中学は大連で、昭和十五年、一九四〇年に大連一中を卒業して、五高に入るわけです。

佐道 五高ですか。

伊藤(圭) はい。今日、河野康子先生とお会いしたのは偶然だったのですが、内田健三君(元共同通信論説委員長、元法政大学教授)とは五高でクラスメートでした。当時は、二年半で終わったものですから、一九四二年、昭和十七年の九月に繰り上げ卒業しまして、内田君なんかと一緒に東大を受けたのですが、彼は受かりましたが、私は落ちて、九州大学に入ったわけです。そして、十八年の十二月、一九四三年の十二月に学徒動員で海軍に入りました。

伊藤(隆) 学徒動員でも、海軍・陸軍の振り分けがあるのですか。

伊藤(圭) 一応志望を取るのです。私は満州で、中学校の教練では歩くので参ったものですから、「海軍に行ったら、歩かんでいい」と思って、それで海軍と言ったのです。そうしたら、希望通り海軍にやってくれまして、十二月十日に横須賀の第二海兵団に入りました。

ところが、「しまった」と思ったのは、海兵団というのは海岸にありますでしょう。物凄く寒いんですよ。「ちょっと計算外だった」と思ったことがあります。そして、十九年の二月一日に土浦海軍航空隊に行って、第十四期の飛行専修予備学生になりました。

伊藤(隆) 学生のときは、階級はあるのですか。

伊藤(圭) 階級はないのですけれども、准士官の上、少尉の下という処遇です。兵学校を出た候補生の下というのかな、その下の位置付けみたいです。階級は、ありませんでした。

伊藤(隆) これは特攻隊の要員ですか。

伊藤(圭) 結局、そうなっていくのですけれどもね。その年の六月に、霞ヶ浦の鹿島海軍航空隊の、水上機の部隊に行くのです。その頃、どんどん南方で水上機がやられていくのです。「どうせ死ぬのなら、早いほうがいい」と思って、それで水上機を志望して行ったのです。これから先の話になると、やはり戦争を経験した者としての宿命論ですけれども、私はたまたま鹿島海軍航空隊で、零式観測機(ゼロカン零観)という飛行機に乗る教育を受けたのです。零式観測機というのは、船に載せていて、海上から偵察に行くので、「足」(航続距離)が割合短いのです。

伊藤(隆) 戻るときは、どうなるのですか。

伊藤(圭) 戻るときは、着水して、吊り上げるのです。

伊藤(隆) 離陸するときは?

伊藤(圭) 離陸するときは、カタパルトです。隣に北浦航空隊というのがありまして、ここには三人乗りの水上偵察機があったのですが、これは割合「足」が長いのです。同じ水上機を希望したのですけれども、鹿島に行く者と北浦に行く者とがいて、これはどういう基準で選んだのか知りませんが、私はたまたま鹿島へ行ったわけです。北浦に行った者は、かなり多くの者が沖縄で死んでいるのです。「足」が長いものだから、沖縄特攻で……。私どもの鹿島の水上機は「足」が短いものだから、一部は鹿屋まで進出しましたが、結局、沖縄には行きませんでした。

伊藤(隆) 鹿屋から沖縄までも、「足」がないわけですか。

伊藤(圭) 爆弾を持って行きますからね。三座(零式三座水上偵察機)のほうは行ったのですけれども、鹿屋の「ゼロ観」は行かなかったのです。私は鹿島航空隊に残っておりまして、「もう水上機が

なくなったから、『陸』に回れ」と言われまして、神町航空隊に行ったのです。山形の近くの、いま陸上自衛隊の第六師団があるのですが、神町航空隊に行って、今度は陸上機を始めたのです。「中練」（九三式中間練習機、通称「赤とんぼ」）から始めたわけです。

伊藤（隆）　陸軍になったわけではないでしょう。

伊藤（圭）　陸軍ではありません。陸上機になったわけです。水上機と陸上機は操縦の仕方が違うので、また練習機から始めたわけです。

話が前後しますが、私が陸上機に移るのが一九四五年になってからですね。その前の一九四四年、昭和十九年十二月に、我々は少尉に任官するわけです。そして、一九四五年、昭和二十年の五月に、神町の航空隊に行くのです。そこで陸上機の、いわゆる「赤とんぼ」という練習機で、二ヵ月の訓練を受けるわけです。その後、七月の終わりに、私なんかが最初に、いわゆる特攻隊に行きました。これは「神雷部隊」と言って、「桜花」という、爆弾に羽を付けたようなものの搭乗要員として、神ノ池海軍航空隊に行くのです。その基地は、今の鹿島コンビナートがあるところです。そこで、「ゼロ戦」（零式艦上戦闘機）で訓練を受けました。「桜花」は爆弾に羽の生えたもので、プロペラのない飛行機ですから、訓練ができない。それで、ゼロ戦で訓練しているわけです。

実は三月に、沖縄戦で我々の同期の者も、また十三期の者も、何百人かが死んでいるのです。その爆弾（「桜花」）を「一式陸攻」で持って行くものですから、のろいでしょう。だから、「桜花」に乗った者もやられるし、その上の飛行機（「一式陸攻」）もやられてしまうものだから、たくさんの人が死んでしまったわけです。そのあとを埋めるという意味で、七月の終わりに行くのです。

佐道　それは、飛行機の下に？

伊藤（圭）　下にぶら下げて行くわけです。

佐道　人間爆弾みたいなものですね。

伊藤（圭）　人間爆弾です。そして、敵の艦艇の上に行ったところで、一人で乗り込むわけです。それで外すと、スーッと、飛んで行くわけです。最初はロケットですけれども、ロケットで押し進んで、あとは滑空で行くわけです。ですから、プロペラの回転計も何もないのです。あるのは、高度計と速度計だけなのです。速度計で失速しないように持って行って、高度計を見ながら突っ込んで行く。離れたら、最期なんです。

佐道　かなり敵の近くに行かないと、できないわけですね。

伊藤（圭）　だから、そこに行くまでに、大体やられてしまうのです。そういう酷いものだったですね。内藤初穂という人が、いろいろ書いていますけれども、あれなんかを読んでみると、とにかくずいぶん酷いことをしたもんだな、という感じがします。

私は戦争が終わる八月十五日の朝、食堂で食事をしていたのです。そうしたら、「桜花」を発明した太田という中尉がいまして、彼も食事をしていました。しばらく経ったら、「太田中尉が飛び上がった」と言うので、すぐに飛行場に行きました。彼は独りで飛行機に乗って、遺書を三通残して消えて行ったと言うのです。私たちは、「自分の提案した特攻機で、たくさん人が死んでいるから、死んだのだろう」と思ったんですね。

ところが、これが何十年か経ってから分かるのですが、彼は死に切れなくて、北海道まで行って着陸したみたいです。その後、名前を変えて、全く戸籍から抹殺されて生きていたようです。だけど、食うに困って、当時の上官なんかのところを回って、恵んでもらったりしていたようです。近鉄の前の会長だった金森（乾次）という人がいて、戦時中、主計長か何かをやっていたのでしょうね、彼のところにも来たなんて言っていましたけれども……。戦争のときには、そういういろんなことがあったわけです。

伊藤（隆）　そうですか、思いもかけないことがあるものですね。

伊藤（圭）　私は、そこで終戦を迎えるわけです。

■教師から役人の道へ

伊藤(隆)　それは神町ですか。

伊藤(圭)　神町ではなくて、神ノ池です。とにかく神ノ池というところは特攻基地ですから、行ってまず驚いたのは、格納庫のところに祭壇があって、花を置いてあるのです。「これは何ですか」と訊いたら、「しょっちゅう事故があるから、用意してあるんだ」と言うのです。それぐらい酷いものだったらしいですね。私も、神町では事故は見ませんでしたが、鹿島にいたときは、本当に目の前で〔飛行機が〕霞ヶ浦に突っ込んで行った事故を見ました。そんなようなこともあったのですけれども、何となく八月十五日に戦争が終わりました。

そこで、その神ノ池で、「パイロットは〔進駐軍に〕捕まって、すぐに牢獄に入れられるから、早く復員しろ」と言うのです。八月二十三日の復員なのです。私も、困ってしまいましてね。復員といったって、うちは大連のわけでしょう。親父は昭和十四年に死んでいたので、母と弟がいましたが、ぜんぜん消息は分かりませんし、「帰るところがないから、困ったな」と思ったのです。しかし、「とにかく帰れ」と言うものだから、乾パンなんかをもらって帰って行ったわけです。たまたま東京に友達がいたものだから、東京に行ったら、友達も病気で帰って来ていまして、そこにしばらくおりました。けれども、ご承知のように、当時の東京は食べるものが何もないわけです。そこで考えたのは、母と弟の消息は分からないが、原籍地に戻れば消息がつかめるだろうと思って、横手に行ったのです。その前に、祖父さんが死んだときに、一度叔母がお墓に連れて行ってくれたことがあったものですから、何となしに行ったのですけれども……。

横手で親戚に会いましたら、たまたま「女学校の先生にでもならないか」という話がありまして、そこで先生になるわけです。戦争に負けたときに、私がまず思ったのが……。フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』というのがありますでしょう。あれを思い出して、やはり教育が大事だなと思っていたのです。田舎に行って、学校の先生でもやって暮らしたいなという気持ちはあったわけです。それで行ったら、そういう話があったのですけれども、まだ大学も卒業していませんからね。一年で、学徒動員で行ってしまいましたから。私どもの前の、昭和十七年三月に卒業して軍隊に入った者は「仮卒」になります。私どもは「仮卒」にならなかったです。

伊藤(隆)　中途ということになるのですか。

伊藤(圭)　だから、私の「略歴」の間違いは、大学卒業ではないのです。〔九大の〕中退になっているのです。

伊藤(隆)　そうですか。

伊藤(圭)　そうなんです。田舎におって、とにかく母たちの消息を知らなきゃいかんと思いましたし、帰って来るのは母と弟ですから、何か生計を立てなければいかんと思いました。たまたま「先生の口がある」と言うので、勤め始めたのです。だから、正規の教諭でも何でもないわけです。あの頃はゴタゴタしていたものですから、何でもいいからというので、採ってくれたのです。だんだん講習なんかを受ければ、免許も取れるから……というような話だったのです。

佐道　最初は代用教員ですか。

伊藤(圭)　代用教員ですね。「教授嘱託」というのかな。

佐道　教授ですか。

伊藤(圭)　いや、「教諭嘱託」というのかな。

佐道　女学校といっても、当時は高等女学校ですか。

伊藤(圭)　横手高等女学校。そして、私がいる間に、新制高等学校に変わるわけです。

嘱託だったので、講習なんかも受けに行ったりしていたのです

けれども、三年経ったときに、「学校の先生は、とても務まらない」と思ったのです。まず、どういうことが起こったかというと、その頃は、秋田教職員組合がありまして、ストライキを始めるわけです。私は、「ストライキをやる」と言ったときに、迷惑が掛かるのは生徒だと思ったものですから、「ストライキは反対だ」と言ったのです。そうしたら、四十人ぐらいいる先生の中で、私と、もう一人――二人が反対したら、吊し上げられました。ああいうのをイジメと言うのでしょうか、教員組合の代議員みたいなものにさせられてしまったのです。それで、「県の大会なんかに出て来い」と言われて行きましたが、とにかく大変なのです。

そのうちに、私は「学校の先生というのは、視野が狭いな」と思って……。皆さんには、申し訳ないですけれども……（笑）。というのは、例の昭和二十二年のゼネストのときですね。あのときに、「二・一ゼネスト宣言」で、先生方が物凄く張り切るわけです。私は、客観的に見て、占領下において、とにかく統治権を持っている占領軍がいるときに、ストライキなんかできるはずがないと思ったのです。「絶対に無理だ」と言って話すのですけれども、興奮状態にあるものですから、ストライキ一辺倒でしょう。「これは、とても容易な世界ではないな」と思ったのが、一つです。もう一つは、「勉強して資格を取るのも、容易ではないな」と思っていたことも、事実なのです。

伊藤（隆）　何の先生ですか。

伊藤（圭）　英語と社会科を教えていました。「なかなか大変だな」という気持ちもあったところに、そういうことがあったものですから、学校の先生を辞めようと思ったのです。ところが、ああいう田舎で学校の先生を辞めても、今度は職がないわけです。東京に行けば何か就職口があると思ったのですが、今度は東京に入れないのです。昭和二十四年頃というのは、東京は疎開した者以外は帰って来られないのです。ちょうど、第一回の国家公務員試験の募集が二十四年にあったので「役人になったら行けるかな」と思って、これを受けようと思ったのです。そして、仙台の東北大学で試験を受けましたら、偶然だったのでしょうね、合格しました。

伊藤（隆）　上級試験ですか。

伊藤（圭）　上級試験です。第一回の国家公務員試験。そうしたら、あれは三月の試験なものですから、各省は大体採用が終わっていたのです。だから、なかなか呼び出しが来ないわけです。どうしようかなと思っていましたら、秋頃になって、国会の事務局とか会計検査院とか、それから人事院から募集がありました。

伊藤（隆）　あれは、一年間有効なのですか。

伊藤（圭）　一年間有効なのです。しかし、そうこうしているうちに秋になって、間もなく駄目になりますからね。「会計検査院と言っても、私は計算がとても下手だからな」と思って、人事院に行ったら採用になりました。

伊藤（隆）　そうすると、東京に入れるわけですね。

伊藤（圭）　役人になったので、入れるわけです。それで、一九四九年の十月に、人事院に入るわけです。だから、人事院の採用としては第四期になるわけです。そして、一九五四年、昭和二十九年まで人事院の職階課というところにいました。職階というのは、当時のアメリカの人事制度を真似したのでしょうが、「イコール・ペイ・フォー・イコール・ワーク」(equal pay for equal work)という考え方で、「職階制」の実施を検討していました。その職階課に五年いまして、大蔵省とか文部省とか労働省とかを担当しまして、「現場で、どういう職務をやっているか」なんていうことの定義を書いたりしておりました。

昭和二十九年、一九五四年頃になると、占領が終わったものですから、各省がアメリカから押し付けられた制度というものに対して反撥するわけです。「人事院によって、人事管理を一元的にやられるのは敵わん」ということで、各省が抵抗するわけです。したが

って、人事院が縮小されていくのです。独立が昭和二十七年ですから、その後、人事院の縮小にともなって、職員も各省に散っていくのです。

そのときに、最初私は行政管理庁に話がありまして、行くつもりでいたところが、人事課長が来て、「保安庁からも話が来ているのだけれども、行くか？」と言うので、「どっちでもいいです」と答えたら、たまたま保安庁に行くことになったのです。保安庁に行ったのが、二十九年六月十五日です。そして、七月一日には防衛庁になるわけです。だから、ある意味では、自衛隊発足の最初のときにおったということです。

この頃は、海原さんが課長でおりましたが、私は海原さんの課ではなかったのです。隣の教養課というところにおりました。海原さんは（昭和二十七年八月に国家地方警察警視正から）保安局の保安課長で、私は教養課の部員で行ったわけです。そして、教育関係を、ずっとやりました。「陸」「海」「空」の学校をつくる仕事なんかをやらされておったのです。

伊藤（隆） まだ、そのとき学校は……。その元になるものはあったのですか。

佐道 保安大学校は、もうありますよね。

伊藤（圭） あれだけはありました。今の防衛大学校はありました。私は防衛大学校なんかも担当していましたので、ちょうど今の小原台に移転するときなどが、私が担当していた頃なのです。そのあと、私は「陸」を担当しました。「陸」に十三の学校を作るわけです。例えば、武器学校とか需品学校とか衛生学校とか、ずっといろんな職種ごとに学校を作りましたが、その学校の規則みたいなものを作ったりしました。そして、一九五八年だから、入って四年後に防衛局第一課に行ったのです。

佐道 一九五八年（昭和三十三年）に第一課ですか。

伊藤（隆） 教育課に行かれたのは？

伊藤（圭） 教育課に行ったのは、一九五四年ですね。

伊藤（隆） 保安庁に入られて、すぐ防衛庁になって、その最初が教育課なのですね。

伊藤（圭） 一九五四年から一九五八年までは、教育課です。一九五八年四月に防衛一課に行くのです。その後、一九六一年七月から一九六二年の七月まで、長官（藤枝泉介防衛庁長官）の秘書官をやるわけです。

■ボヘミアンのように―満州・熊本・横手

伊藤（隆） あまり先を急がないでください。学校の先生をやって、突然お役人になるというのは、どんな感じでございましたか。

伊藤（圭） これは、全く「でも・しか役人」で、とにかく田舎にいたのでは再就職できない。その間に、母と弟が帰って来ました。昭和二十二年に引き揚げて参りまして、昭和二十四年まで一緒にいたのです。

佐道 弟さんとは、幾つ違っていらっしゃいますか。

伊藤（圭） 弟とは四つ違います。その弟が、大連の南満高専という、いわゆる専門学校に行っていたのです。引き揚げて来まして、仙台の高専に――まだ学制改革の前ですから――転校できるというので、そこにやったのです。それが、どうも失敗だったのです。本人が「行きたい」と言うものですから、行かせたのですが、そこで結核を患って帰って来たのです。そこに行かせるについても、私は学校の先生ですから、とても学費なんか出せないわけです。ところが、彼は土木を専攻していたものですから、横手の土建屋さんが「学費を出してやるから」と言うので、それをもらって行ったのです。しかし、結核で帰って来るわけです。結核で、昭和二十四年の夏に帰って来て、十月に私が東京に出るわけです。そして、十二月に弟は

亡くなりました。

伊藤(隆)　まだペニシリンは……。

伊藤(圭)　いや、ペニシリンもストレプトマイシンもあったのですけれども、一本八百円ぐらいするのです。私の給料が二千円ぐらいのときでしょう。とても買えないわけです。ですから、可哀想だったのですけれども、亡くなりました。それが、昭和二十四年十二月です。

伊藤(隆)　東京には、お母さんも連れていらっしゃいましたか。

伊藤(圭)　そのときはまだ、連れて来ても住むところもないでしょう。だから、母は向こうに置いておいたのです。田舎の学校の先生〔という職業〕が有難いと思うのは、あの当時は父兄が非常によく面倒を見てくれました。小さな家なんかも、ほとんどタダみたいに貸してくれて、そこに住んでいました。東京に出て来ても、ろくに金も送れなかったのですけれども、何とか過ごしておったのです。そして、弟が死んで、二十五年になってから母を連れて来るわけです。だから、横手時代というのは、本当に貧しかったけれども、周りの人に助けられて、生活していたようなものです。

私が、「学校の先生をやっておって良かった」と思うのは、未だに田舎に行くと、私の教え子が集まって来て、一緒にご飯を食べるのです。教え子といっても、七十歳ですからね。もう、お婆さんですよね。七十のお婆さんになると、時間はあるし、小銭は持っているものだから、喜んじゃって、私が行くと、一緒にご飯を食べています。これは、非常に有難いと思いますね。

伊藤(隆)　石坂洋次郎の世界ですね。

伊藤(圭)　たまたま、私は石坂洋次郎の女学校の先生だったのです。

伊藤(隆)　そうなんですか。

伊藤(圭)　石坂洋次郎が、その女学校で教えていました。そして、中学に変わるのです。中学校に変わったところで、例の、『若い人』を書くわけです。あれで芥川賞を取って、東京へ出る。その中学校を辞めて行くわけです。その石坂洋次郎の後任として、岩手県の水沢から中学校に来た国語の先生が、私が女学校に入って半年ぐらい経ったときに、今度は校長として女学校に来るのです。もう亡くなりましたけれども、不思議な縁があるものだと思いますね。

伊藤(隆)　横手の高等女学校は、その後、城南高校になるわけですか。

伊藤(圭)　城南高校になります。

伊藤(隆)　なぜ、城南なのですか。

伊藤(圭)　あそこに山城があったのです。そのお城の南というような意味ですよね。

伊藤(隆)　横手は、男子校のほうは……。

伊藤(圭)　今は横手高校と言いますが、そのころは「み美いりの入野」と言っていました。

伊藤(隆)　横手が付かないで、「美入野」だけなのですか。横手美入野高校？

伊藤(圭)　「美入野」と言っていました。「横手中学」と言っていたのですが、それが高等学校になるときに、美入野高等学校になって、「横手高女」のほうが城南高校になりました。

佐道　「美入野」というのは、優雅なというか、きれいな名前ですね。ところで、五高から九大へいらっしゃいますね。そういう学校のときの仲間というのは、戦争が終わったあとに、連絡を取られたりされましたか。

伊藤(圭)　今でも……。さっき内田君の話をしましたけれども、私のクラスが四十人いるのです。

伊藤(隆)　それは高等学校ですか。

伊藤(圭)　ええ、高校のときの同じクラスですよ。ほかにもクラスはありますが、その四十人のうち、今までに亡くなっているのが十六人なのです。二十六人が生きていまして、十八人が東京にいるの

です。だから、年に二回、東京でクラス会をやりますと、大体十五、六人集まります。今度も、来週の火曜日、十一月十三日に、またクラス会をやるのですけれども……。

伊藤(隆)　いろんな場面はあると思いますが、高等学校のときの友達というのは、やはり一番印象がありますか。

伊藤(圭)　そうです。そのほか小学校の同窓会というのがあるのです。これは、大連です。もう既に、五十五年前になくなっている小学校でしょう。その同窓会というのが、二年に一回あるのです。今年も熱海だったのですが、集まったのが百八十人です。ところが、四年前に熱海でやったときは、三百人集まりました。一番若い者でも六十五歳ぐらいですからね。しかも、引き揚げて来ていますから、全国に散らばっているでしょう。ただ、だんだん年とともに、生きてはいるけれども、参加できないという者が出て来ました。

今年十月、熊本で、私たちが卒業した十七年の九月の同期会というのがありました。どうして、こんなことをやったかと言いますと、五高に入学してから、今年でちょうど六十年なのです。六十年だから、節目の年だし、「もう、なかなか集まれないから、みんなで集まろう」と言って、集まったのが六十人でした。このときは私たち四十人のクラスのうち、十二人が集まりました。

だから、五高のときと、小学校のときと、それから中学も同期会というのがあるのです。

伊藤(隆)　それも旅順でしょう？

伊藤(圭)　いや、大連一中です。これもご参考までに申し上げますが、小学校のときの有名人というと、遠藤周作が同期生です。彼は、五年生のときに神戸に引き揚げて行くわけです。両親が離婚したので、お母さんと一緒に行ったのです。

遠藤周作が面白いのは、「自分は小学校の頃から、いろいろと駄目な男だった」ということを宣伝していましたが、文章は物凄くうまかったのです。優秀な綴り方を集めた小学校の文集があるのですけれども、運動会でビリになったときの嘆きを書いてあるのです。「夕べ、あんなに神様仏様に祈ったのに、どうして俺はビリなんだろう」と。ところが、そこにキリストは出て来ないのです。というのは、小学校の頃の彼は、クリスチャンでも何でもないのです。引き揚げて来て、お母さんに言われてクリスチャンになっているわけです。

中学は、毎年クラスが替わったので、同じクラスのときもありましたが、同期生の中で有名なのは清岡卓行です。これも、『アカシヤの大連』で、芥川賞を取った男です。そんな者がいるのです。中学では、これは八年ぐらい後輩ですけれども、『寅さん』の監督の山田洋次がいるんです。いろいろ変わった者がいまして、みんなよく知っていますけれども……。

佐道　中学校は、一学年は大体、どのくらいいらっしゃるのですか。

伊藤(圭)　中学は二百五十人いました。小学校の頃は二百人です。

佐道　今は大連も、とても開けた町になっていますけれども、その後、いらっしゃいましたか。

伊藤(圭)　三度行きました。最初は十数年前ですけれども、このときは七割が昔のままでしたね。三割が新しかった。その次に行ったときは十年ぐらい前ですが、五分五分くらいだったでしょうか。三年か四年前に行ったときは、とにかく七割が新しくなっていて、香港みたいでしたね。全く変わってしまっていました。

私がつくづく思いますのは、大連で、中学を出るまで育っているのですけれども、故郷というのは何だろうか、と。確かに、山や川は懐かしいのです。だけど、知っている人は、全然いないわけでしょう。そうすると、何となしに、「もう行っても、しょうがないな」という感じがするわけです。熊本も、今は、もう知っている人がほとんどいないわけです。ただ、わずかに知っているというのは、横手なのです。教え子が今でもいるものですから。だから、「こういう

のを、やはり故郷と言うのかな」と思ったりするのです。ある意味では、私なんかはボヘミアンで、あちこちウロウロした者なのですけれども……。

伊藤(隆)　横手は、原籍でもあるわけですから……。

伊藤(圭)　まあ、そういうことですね。

佐道　なぜ五高に行かれたのですか。

伊藤(圭)　大連一中というのは、割合に九州の高等学校に行った者が多いのです。七高とか五高とか福高とか……。船で近いからでしょうね。最も優秀な者は、一高や三高を受けるのですけれども、その次は大体、五高を受けるのが多かったです。

佐道　五高時代は、だいぶ戦争も近くなっていましたが、学生生活はどんな感じですか。

伊藤(圭)　田舎ですから、非常に自由でした。割合のんびりしました。それから、食べ物もあったのです。私は、五高のときには、「どうせ、これは戦争になる」と思って、あんまり勉強をしないで、小説を読んだり、映画を観たり、芝居を観たり、もっぱら楽しんだのです。これが後になって役立ったのが、防衛庁の広報課長になってからです。非常に役に立ちました。映画の話をしても、東宝とか東映とか松竹の制作部長よりも、遥かに私のほうが映画を観ていましたから、絶対に話に負けないわけです。

佐道　よほど、ご覧になっていたのですね。

伊藤(圭)　広報課長の頃、東和商事（後に東宝東和）の四十年史の記念アルバムができて、私ももらったのです。驚いたことに、東和商事という映画会社が一これは川喜多長政と、かしこ夫人の会社で一輸入した映画の九割ぐらいを観ていますもの。

佐道　凄いですね。

伊藤(圭)　芝居も、ずいぶん観たのです。芝居は、皆さんは歴史でしかご存知ないでしょうけれども、築地小劇場なんかにも行っているのです。これは、高等学校のときに、東京に出て来て行ってみたのです。当時、杉村春子が出ていました。歌舞伎は、たまたま六代目の菊五郎が熊本へ来たときに観たのです。全然、分からないのですね。これはいかんと思って、それから歌舞伎の、いろんな脚本を読みまして、そして歌舞伎座に行って観たら、本当にいいのですね。歌舞伎が好きになりました。その後、学徒動員で行くときの、最後の舞台というのが『勧進帳』なのです。これは、今でも非常に鮮明に覚えていますけれども、七代目の幸四郎、十五代目の羽佐衛門、それから六代目の菊五郎が義経ですけれども、この舞台を観ていて、「ああ、これが最後だなあ……」なんて思った記憶があります。

そんな経験は、広報課長のときだけではなくて、学校の先生をやっているときにも役に立ったのです。戦後、自由になったものだから、芸能祭や学園祭みたいなものが盛んになったでしょう。私は三年間、学校にいる間に、芝居を四つ教えたのです。一番最初にやったのは『修禅寺物語』、その次が『寺子屋』です。『寺子屋』は、たまたま校長が国語の先生だったものですから、（校長の）家に行って本棚を見ていたら、五代目の団十郎が使った『寺子屋』の脚本があったのです。それを多少略して、やりました。

横手には踊りの先生がいて、松王丸の衣装なんかを持って来てくれるのです。それを借りてやって……。ああいう時代なものですから、今度は村々を回って興行したりして……（笑）。それから、九条武子の『洛北の秋』というのをやりました。最後にやったのは、歌舞伎の『弁慶上使』です。それをやって、東京に出て来たのです。

伊藤(隆)　楽しいところもあったのですね。

伊藤(圭)　ええ、物凄く楽しみました。

佐道　ずいぶんと、そっちの方向にご関心がおありだったのですね。

伊藤(圭)　そうですね。そんなのが役に立ったというのは、広報課長になってからです。作家の人たちにも、非常に親しくしていただ

きました。例えば、曽野綾子さんとか三島由紀夫さんとか、非常に親しくしていただきました。

佐道 しかし、五高の頃は、そういう時代ですから、そういうところに出入りするのは怪しからんとか、そういうことはなかったのですか。

伊藤(圭) それは、全くなかったです。私は今でも覚えているのですけれども、保証人の先生というのがいるのです。私が学校をさぼって、『舞踏会の手帳』という映画を観に行っていたら、後ろにその先生がおって……(笑)。別に、怒られはしませんでしたけれども。

伊藤(隆) 当時の話になると、よく軍事教練の話が出ますけれども、それは如何でしょうか。

伊藤(圭) 軍事教練は、中学までは、かなり厳しかったです。高等学校の軍事教練は、これは楽だったですね。大体、靴なんか履かないでしょう。下駄を履いているでしょう。だから、軍事教練をやるときには、裸足にゲートルを巻いて、それでも怒られなかったです。熊本の五高というのは、草が生えている運動場ですから、裸足でやっても別にどうってことはなかったのです。

伊藤(隆) 大体、熊本というのは武張ったところですから、かなり大変だったのかなと思ったのですけれども……。

伊藤(圭) それは、とても楽だったです。まあ、配属将校が良かったせいもあるのでしょうね。

伊藤(隆) それは、将校によりますね。

佐道 横須賀の海軍基地にいらっしゃったときに、「海の近くだから、寒かった」と言われましたけれども、冬の大連は相当寒いのではありませんか。

伊藤(圭) 大連は、最初から寒いということを覚悟しているから、それなりに物を着たりなんかするでしょう。ところが、二等水兵というのは、もらった物しか着られないでしょう。私物というのはないわけですから、これは相当寒かったです。とにかく、暖房というのは全くありませんから、寒いときには体を動かして暖を取る以外にないわけです。

これは、もう時効になっているでしょうが、私は海軍にいるときに相当、海軍を舐めておったのです。鹿島の航空隊にいるときに、母と弟が大連から面会に来たのです。そうしたら、私の分隊長が面会を許してくれないのです。これは、どう考えても海軍が間違っていると思ったものですから、普通のように制服を着て、玄関を出て、バスに乗って、土浦まで会いに行ったのです。一時間ぐらい掛かったのですけれども……。予備学生の制服というのは士官と同じですから、衛兵に敬礼すれば良かったわけです。一日行っていましたが、バレないで済みました。バレたら、軍法会議だと思ったのですが、軍法会議に回されたら、「海軍のほうが悪い」と言おうと思いました。

佐道 凄いですね。昭和十四年に、お父様がお亡くなりになられて、お母様と弟さんだけが残っておられたわけですね。身寄りの方は?生活とかは……。

伊藤(圭) 私は、満鉄から奨学金をもらって、高等学校と大学に行きました。満鉄の奨学金というのは、良かったんですよ。なぜか知らないけれども、「返す必要がない」と言うのです。それから、「満鉄に勤める必要もない」と。それで、それをもらっていました。

伊藤(隆) ずいぶん鷹揚な奨学金ですね。

伊藤(圭) ちょうど、それがもらえたものですから。私の親父は満鉄にいましたが、死んだときには満鉄の子会社みたいなところにいたのです。満鉄の商事部が独立して、日満商事という会社になりまして、そこにいたものですから、直接の満鉄社員ではなかったのですけれども……。

伊藤(隆) 年金とか、そういうものはあったのですか。

伊藤(圭) 年金はなかったのですけれども、[死亡]退職金は、まあ幾らかもらったのでしょうね。それから、死ぬ一ヵ月前に、生命

保険に入っているのです。その保険金が、当時で一万円だったのです。当時の一万円というのは、かなり大変なものなんです。総理大臣の年俸が六千円とか八千円という頃ですから、かなりの額だったのです。そんなこともあって、何となく過ごしていました。

佐道　亡くなる直前に、よくそんな保険に……。

伊藤(圭)　どういうことなのでしょうね。元々、喘息だったのです。強い薬で止めておったのですが、それが結果的に心臓を弱めておったのでしょう。だから、本当に突然、死にました。もちろん、死に目にも会えませんでした。

佐道　お父様のほうに、ご兄弟はいらっしゃったのですか。

伊藤(圭)　男の兄弟はおりません。女の兄弟はいました。妹は、当時、大分におりました。姉は大連におって、姉の亭主が、満州化学工業の理事長をやっていました。

　親父が死んだときに、祖父母が生きておったのです。祖父母が生きていまして、僕も困ってしまったのですけれども、祖父母の甥に当たる落合という人が大阪にいたのです。祖父母は「そこに行く」と言うものですから、どのくらいお金を持たせたのか知りませんけれども、今の豊中に家を借りて、そこに住んでいたわけです。しかし、昭和十七年に祖母が亡くなり、十八年の初めには祖父も大分の叔母のところで亡くなりました。相次いで死んだのです。

■アメリカナイズされていた人事院

伊藤(隆)　さて、人事院に初登庁なさって、どんな感じでございましたか。全く違う世界ですね。

伊藤(圭)　全く違う世界です。よく分からなかったのですが、ただ人事院はアメリカナイズされておったというのでしょうか、非常に先輩たちが親切だったという印象はあります。懇切丁寧に、いろいろ教えてくれたという記憶があります。

佐道　そのとき人事院は、どのくらいの人数がいらっしゃる、どういう場所だったのですか。

伊藤(圭)　いや、はっきり記憶していないのです。この十二月四日に、その同窓会みたいなものがあるから、久しぶりに行ってみようかと思うのですが……。

佐道　それでは、次回に、またお話を伺いましょう。

伊藤(圭)　秦郁彦(現・日大教授)という人がいるでしょう。彼から、この間電話が掛かって来て、「人事院に入ったのは、何人ぐらいだ」と言われて、「ちょっと記憶にないから、今度訊いておく」と言ったのですけれども……。私の記憶では、確か研修を受けたのは百人近い人だったのではないかと思うのです。

伊藤(隆)　それは、人事院だけですか。

伊藤(圭)　人事院だけだったと思うのですが、よく分からないのです。そこのところは、あまり記憶にありません。かなりの人数だったことは、間違いありません。

佐道　まず、研修があって?

伊藤(圭)　はい、二ヵ月やりました。

伊藤(隆)　どこかで合宿ですか。

伊藤(圭)　いま建て替えている人事院ビルの講堂で、毎日やりました。私どもの前の人たちは、日光の公務員研修所辺りに詰めてやったという話を聞きましたけれども、私のときは、あそこでやりました。

伊藤(隆)　通いで?

伊藤(圭)　はい。

伊藤(隆)　それで、二ヵ月ほど経ったところで、どこかの部署に配置になるわけですか。

伊藤(圭)　そうです。終わったところでね。

伊藤(隆)　先生は、どういうところに配置になったのですか。

伊藤(圭) それは、職階課というところです。その頃、アメリカ式に「イコール・ペイ・フォー・イコール・ワーク」という思想で、職務に見合った給与を与えるべきだということで、全部の公務員の職務を洗い出すという仕事があったのです。先ほど申し上げましたけれども、私は労働省とか大蔵省とか文部省とかを担当しました。

伊藤(隆) 文部省もですか。

伊藤(圭) 文部省は、実は面白かったのです。文部省では、いろいろなところを見せてもらいました。私は今でも覚えていますが、東京芸術大学なんかに行ったのです。芸術大学にはいろいろな仕事があると言うので、「ぜひ行ってくれ」と言われて行きました。芸術大学では、あの頃は「人事院から調査に来る」なんて言うと、緊張しておったのでしょうね。卒業生がバイオリンを弾いてくれたり、横山大観の卒業制作の絵を見せてくれたり、いろいろなことを経験しました。

法務省を担当している頃は、少年刑務所や少年院、少年鑑別所なんかを見たりして、これもまたちょっと面白かったです。それから、大蔵省を担当しているときは、税関なんかも見せてもらいました。それこそ、押収したポルノ映画なんかを観せてもらったり……(笑)。

伊藤(隆) その課は何人ぐらいですか。

伊藤(圭) 課は、四、五十人いたのではないでしょうか。

伊藤(隆) そんなに大きい課なのですか。

伊藤(圭) 物凄く大きかったです。〔担当者が〕各省ごとに七、八人ほどいましたから。結局、それがだんだん駄目になっていくので、二十八年頃から各省に職員が散っていくわけです。

伊藤(隆) ずっと同じ課におられたのですか。

伊藤(圭) そうです。私はずっと、そこにいました。

伊藤(隆) そうすると、やはり課の下に係があるということですか。

伊藤(圭) そうです。「ちょっと、各省とは違うな」という感じがしたのは、とにかく百人ぐらい一緒に〔人事院に〕入るわけですから、同じ上級職でも、各省のように「特急券」を持った人ではないのです。みんな競争するわけです。だから、同じ中から係長に選ばれたりするのです。私も係長になって、防衛庁に行くわけです。

伊藤(隆) 何年かで係長になったのですか。

伊藤(圭) 私は割に恵まれておって、翌年かに係長になっているのです。

佐道 やはり、よほど仕事をされたのでしょうね。

伊藤(圭) そういうわけではないのですけれども……。

伊藤(隆) 公務員試験の成績が良かったのでしょう。

佐道 因みに、九大は法科ですか。

伊藤(圭) 法文学部の法科です。だけど、ほとんど授業に出ていません。僕が、まず思ったのは、大学は三年でしょう。三年だから、一年間は教練をさぼろうと思ったのです。だから、一年間で一回も教練に出ないうちに軍隊に行ったでしょう。そこで、「これは、とても陸軍に行ってはいかんな」というのが頭にありましたね。だから、大学の教練というのは、一回も受けたことがないのです。

佐道 大学を出ると、海軍の場合には「短現」というのがございますね。これは、中退ではできないのですか。

伊藤(圭) できないです。「短現」(短期現役士官)は、僕らの前の年までで、根こそぎ持って行っちゃったから、「短現」なんかないんですよ。

佐道 そうなんですか。

伊藤(隆) あと、予備学生というのですね。

伊藤(圭) 予備学生です。横須賀には二等水兵で入ったのですよ。そして、横須賀で試験を受けて、予備学生になって、飛行専修ということで、土浦に入るわけです。

佐道　海軍に入られて、「生死を共に」という世界で親しくなられて、今もお付合いをされている方はいらっしゃいますか。

伊藤(圭)　一番長くいたのが、鹿島の航空隊です。私の二年足らずの海軍生活のうち、一年はそこにいたのです。だから、そのときの仲間は仲がいいのです。これが、やはり毎年、忘年会をやるのです。今年は十一月二十五日にやるのですが、だんだん少なくなりましてね。一昨年ぐらいまでは五十人ぐらい来ていたのが、去年は二十人ぐらいになりましたから、今年はどのぐらい来るか分かりません。牧野伸顕の孫なんかが一緒にいましたが、これも去年亡くなりました。この十四日が一周忌で、奥さんが僕らに御馳走してくれると言っていましたが……。

伊藤(隆)　牧野伸顕の直系の孫ですか。

伊藤(圭)　TBSテレビにいたことがあって、名前は何て言ったかな。

伊藤(隆)　僕が知っているのは、伸和さん。

伊藤(圭)　背の高い男ですよ。

伊藤(隆)　はい、背の高い……。

伊藤(圭)　去年、死んだのですよ。

伊藤(隆)　ええ、去年亡くなりました。

伊藤(圭)　じゃあ、そうです。彼とは、鹿島空で一緒です。

佐道　人事院にたくさん入られて、いずれ散って行くわけですね。そこで親しくされていた方とか、同期の方とかは……。

伊藤(圭)　人事院には五年間いましたけれども、年賀状のやり取りをしている人はいても、しょっちゅう会うという人はいないですね。

　ただ、私が非常に不思議な感じがしておりますのは、役人を辞めてから三菱電機に十五年いたのです。ところが、三菱電機の顧問を辞めたときには、全く自由になったという楽しみのほうが強くて、愛着というのがなかったです。これはやはり、本当の苦労をしていないから……。毎日の仕事というのは、ないわけです。一緒に仕事をしたという人も、あまりいないものですから、愛着がないですね。そういう意味では、防衛庁の頃に部下だった連中なんかのほうが親しみあります。

　防衛庁の上のほうの連中というのは、割合に印象が薄いのです。けれども、強い印象を持っているのは海原さんで、海原さんとは長かったということですね。それから、久保卓也(昭和五十年七月～五十一年七月事務次官)という人です。あの人は死んでしまったのですけれども、非常に可愛がってくれたものですから。もう一人、早くに亡くなったのですけれども、小幡(久男、昭和四十二年十二月～四十五年十一月事務次官)さんという、運輸省から来ておった人ですね。こういう人なんかは思い出があるのですけれども、あとはあんまり、上の人というのは……。というのは、各省から来ていましたから、親しみがないのですね。

伊藤(隆)　人事院の人が、いろいろなところに移るわけですよね。あとで防衛庁に移られてから、いろいろなことをおやりになったときに、仕事上の接点のある人は、いなかったのですか。

伊藤(圭)　あまり、いなかったですね。

佐道　人事院から防衛庁に行かれたのは、伊藤先生ぐらいですか。

伊藤(圭)　いやいや、いるんですよ。かなりいました。「制服」のほうに行った人もいますし、例えば海兵なんかを出て人事院に入っていた人なんかは「制服」になって行きましたね。

佐道　「制服」をほとんど着たことがない方が「制服」の要職になったりしたのですから、確かにそういう時期ですよね。

伊藤(圭)　私自身は、軍隊というところはあまり好きではなかったのです。というのは、中学のころに兵学校とか士官学校に行こうと思ったことは一度もありませんからね。防衛庁も、「そういう口があるのなら、行こうか。人事院が小さくなるから……」ということで行ったのです。行っているうちに愛着が出て来たというか、と

にかく自衛隊が発足した頃というのは、「制服」の人たちが本当に可哀想だったのです。「税金泥棒」と言われたりして……。当時、防衛大学校を担当していましたけれども、一期生なんていうのは、制服を着て町にも出られなかったですよ。そういう状況だったものですから、「この人たちと苦労を共にしてもいいな」という気持ちが内心ありました。それで、結局二十五年いることになったのですけれども……。

伊藤(隆) ちょうど在職二十五年でございますか。

伊藤(圭) 二十五年だと思います。昭和五十三年に国防会議に行っておりますから。

佐道 人事院から防衛庁に移られたとき、「また、どこかに行くかも知れない」というようなことは、お思いになるわけですか。

伊藤(圭) 最初は、こういうことだったのです。「防衛庁に行って、また帰って来て、また他所に出る」とか、そんなような話もありました。だけど、「いずれにしても人事院というのは、だんだん小さくなる」ということは言われました。

伊藤(隆) そういうときは、原簿は人事院にあったのですか。それとも、もう防衛庁に移ってしまっているわけですか。

伊藤(圭) どうなのでしょうか……。

伊藤(隆) お役人の場合には原籍と言いますか、原簿と言いますか……。

伊藤(圭) そこは、よく分からないです。

伊藤(隆) 実際に、保安庁―防衛庁に移られてからは、全く人事院から何だかんだということはなかったのですか。

伊藤(圭) ありません。そういう意味では、気分的には非常に楽なところがありました。役所が新しいせいもあって……。

ところが、内務省から来た人たちを見ていると、昇任したりすると、奥さんと一緒に上司のところに挨拶に行ったり、正月は年賀の挨拶に行ったりなんかしているでしょう。警察なんかを見ていると、例えば地方に赴任すると、本部長のところに奥さんと一緒に挨拶に行く。そういう煩わしさというのは、一切、私たちはなかったですからね。海原さんの家にも、女房を連れて行ったことはありません。その点は、気楽だったのです。海原さんも、その点は割合にあっさりした人でした。町なんかで会うと、声を掛けてくれたのですけれども……。

■妻・母・祖父

佐道 当時は、東京に出て来られて、官舎にお住まいですか。

伊藤(圭) 最初は、間借りです。私は昭和二十五年に結婚しましたから、間借りしていました。二十九年までは、中野で間借り生活ですね。二十九年に、住宅公社のアパートが当たりました。これもツイていたのですね、五十人に一人ぐらいの倍率でしたが、当たったのです。豪徳寺(世田谷区)で、四畳半と六畳でした。そこで、母親と一緒に暮らすことにしたのですけれども、それまで母親は別に住んでいました。

佐道 東京にはお呼びになっていたのですか。

伊藤(圭) 東京には来ていました。

伊藤(隆) ご結婚は、どういうきっかけですか。

伊藤(圭) 私は、東京に出て来てから、横手の女学校にいた先生と結婚したのです。今年は、金婚式だったのです。結婚五十年でしょう。家内が、ちょっと体が弱いもので、今日も入院しておるのですけれども……。一つ、良かったなと思うのは、(夫婦で)共通の話題があるのです。それは女学校の生徒たちの話で、それは良かったなと思って……。

佐道 お相手は生徒さんではなくて、先生のほうですか。

伊藤(圭) それは、よく言われるのです。海原さんにも、「生徒だ

ろう？」と言われるのですけれども……。生徒というのは、七十歳になっても、やはり教え子ですね。だから、結婚する対象という感覚にはならないのです。よく教え子と結婚している人がいますけれども、その感覚は、私にはちょっと分からないですね。

佐道　奥様は、何を教えていらっしゃったのですか。

伊藤(圭)　家庭科ですから、料理か何かです。

伊藤(隆)　元々、横手の方ですか。

伊藤(圭)　横手ですけれども、私が女学校で一緒にいたのは一年足らずなのです。というのは、彼女の親父が、やはり学校の先生をしておって、長く米沢の女学校の校長をしておったのです。ですから、横手には長くはいなくて、私が横手にいた頃は、彼女は増田という町の女学校の先生をしておったみたいです。私が女学校を辞める一年ぐらい前に、転勤になって来たのです。

伊藤(隆)　恋愛結婚だったのですね。

佐道　映画を地で行くような……(笑)。

伊藤(隆)　やはり、奥様の関係もあるから、横手というのは郷里としては一番感じがありますね。

伊藤(圭)　そうですね。一緒に横手に行くのが非常に楽しかったのですが、去年から家内の具合が悪くなって行けなくて……。今年も同窓会に呼ばれたけれども、私独りで行ったのです。

佐道　ご親戚は、やはりまだ向こうにいらっしゃるのですか。

伊藤(圭)　親戚も、いるにはいるのですけれども、代が替わってしまいましたから、行ったら顔は出しますが……。それよりは、昔の同僚の先生のところとか、教え子のところに顔を出すほうが多いです。

佐道　お母様は、どちらのご出身ですか。

伊藤(圭)　うちの母は、茨城県の笠間というところです。うちの母も、育っているのは満州なのです。旅順の女学校を卒業しないうちに、親父が仕事を辞めて引き揚げて来るものですから、卒業はしていないのですけれども……。この親父というのが、また面白いのです。母親の親父ですから、私の祖父になるのですが、鉄道におったのです。大宮の駅なんかにおって、盛岡の駅長とか、新宿の駅長なんかをやっているのです。

伊藤(隆)　それは凄いですね。

伊藤(圭)　いやいや、凄くない。そのころの新宿なんていうのは、本当に田舎ですよ。今の新宿を思うから、皆さん、そう言われますが……(笑)。

伊藤(隆)　今の新宿の駅長というのは、ずいぶん輝かしいですよね。

伊藤(圭)　それで、最後は満鉄の遼陽の駅長で辞めるのです。辞めて引き揚げて来て、栃木県の西那須野で死ぬのです。これは、どういう訳か知りませんけれども、乃木(希典)さんも西那須野におったでしょう。彼は、乃木さんの手紙を持っていました。私も見ましたが、これがちょっと珍しいのです。乃木さんと静子夫人と、勝典の三人の手紙がありまして、はっきり内容を記憶していないのですが、保典のほうが金州で先に死ぬのですかね。それで、勝典からお母さんに宛てた手紙で、「兄さんが早く戦死したのに、自分は生き残っている」と。その後、彼は爾靈山(二〇三高地)で死ぬわけです。今でも、爾靈山に行くと、勝典の墓というのがあります。

　そんな関係があって、私の母は、六年前に九十三歳で亡くなったのです。最後は鹿島神宮のそばの老人ホームにいましたが、九十のときに転んで足の骨を折りまして、不自由になっていたのです。こっちも、年を取っているでしょう。だから、介護も容易ではなかったのです。「どこかに老人ホームがあったら……」と思って、区役所に相談に行ったら、「都内の老人ホームというのは、二年待たないといかん」と言うのです。二年待っても、必ずしも入れるとは決まっていない。「どこか有料の老人ホームを探しなさい」と教えてくれて、当たっているうちに、鹿島神宮のそばにある老人ホームが受

け入れてくれる、と。同じ茨城県なので、母も気が動いたのだろうと思います。そこに三年いて、亡くなりました。

伊藤(隆) でも、笠間とは、だいぶ離れていますね。

伊藤(圭) 話は別ですが、この頃は田舎に帰る度に、香典を包むようになりました。大体、昔の仲間が死んでいくでしょう。行く度に、香典を包んでいます。

伊藤(隆) やはり同年齢の人が亡くなっていくのが、老人としては一番寂しいと言いますね。

伊藤(圭) 「寂しい」と言うより、私なんかは、「もう十分生きたな」という感じがあるものですから、「そろそろ順番が来てもいいのではないかな」ということも、ちょっと思うのです。というのは、この間、『朝雲新聞』のコラムにも書いたのですけれども、私が高等学校に入ったのが、六十年前でしょう。それで、六十年前の同期会があったでしょう。それから、今年、自衛隊は予備隊ができてから五十年になるのです。そうすると、六十年と五十年の、わずか十年の間に日本は戦争を始めて、負けて、そして苦しんで、独立して、また軍隊が生まれるわけですよね。戦争が終わったときに、最初に受けた命令というのが、陸海軍の解体なのです。だから、「激動の十年というのを生きたのだなあ……」という気持ちがあるわけです。

生き残って、何が良かったかということを、いま考えてみますと、まず一番良かったのは、「生きるということに、あまりあくせくしなくなった」ということです。人を押しのけても偉くなりたいとか、金を儲けたいとか、そういう気持ちは、全くなくなりました。「これは、非常にラッキーな人生だったのだな」という気がします。何か知らないけれど、第一回目の国家公務員試験ではありませんが、何となしに通ってしまって、防衛庁に行っても、何となく厚遇されて、「ああ、良かったなあ」という感じがあります。だから、「もう、いつ死んでもいいな」という気持ちはあります。

佐道 特攻部隊におられて、「終戦だ！」と聞かされたときは、どういうお気持ちでしたか。

伊藤(圭) それについては、アメリカ人にもずいぶん訊かれて、話をしたのですけれども、やはり、「死に損なった」というのが最初の印象でした。

伊藤(隆) 死ぬべきものを……。

伊藤(圭) そうそう。「申し訳ない」という気持ちです。「どうして、俺も死ななかったのか」というのが、最初の印象です。特に、飛んで行った者の写真を見ると、「俺なんかが生き残って、悪かったな」というのが、最初の印象です。よく、戦争が終わったときに、「生きていて良かった」ということを言う人がいますが、私なんかの感じでは、「生きていて良かった」という気持ちになったのは、それから数年経ってからですね。「死に損なった」という気持ちと、その後の生活苦を考えると、「生きていて良かった」という余裕なんていうのは、あのときは全くありませんでした。「済まなかったな」という気持ちが、どうしてもありました。

伊藤(隆) ある意味で言うと、そこからの人生というのは、余生みたいなものですね。

伊藤(圭) そうなんです。だから、非常に気が楽だったです。正に余生ですよね。よく海原さんと話したのですが、「生きて、二一世紀が迎えられるなんて思わなかった」と。正に、その通りだと思うんですよね。

佐道 終戦のときは、二十三、四ですか。

伊藤(圭) 終戦のときが、数えで二十五歳です。だから、二十四でしょうね。軍隊に入ったのが、二十二ですから。だから、「人生二十五」というのが、当時の我々の合言葉のようなものでした。二十五歳までに死ぬ、と。

伊藤(隆) 私も、終戦のときが中学一年でしたから、「二十歳までは生きられないだろうな」と思っておりました。

伊藤(圭) なるほどね。ああいうのも、おかしなものですけれども、

「死ぬ」と思っていたものですから、軍隊に行くときに、祖父さんが書いた自分史のようなものなど全部焼いて行ったのです。それから、価値があるのかどうか分からないのですけれども、家にあったいろんな仏像や何かも、全部焼いたのです。

伊藤(隆) 何でも捨てられる方だなあ(笑)。

■防衛大学校をつくる——防衛庁教育局教育課

佐道 話が戻りますが、人事院はどこにあったのですか。

伊藤(圭) 今の警視庁の隣です。昔の内務省の建物で、警察庁なんかがあったところです。あれを、当時は「人事院ビル」と言っていました。

伊藤(隆) 今、建て替えているところですね。それで、防衛庁は?

伊藤(圭) 防衛庁は、最初の頃は越中島です。あの頃、とにかく豪勢だったと思うのは、朝の通勤には東京駅から防衛庁専用の、タダのバスが走っていました。

伊藤(隆) さすが軍隊ですね。

佐道 教育課というのは、人事局ですか。

伊藤(圭) そこのところを、ちょっと申し上げます。

伊藤(隆) 教育課というのは、防衛庁教育課ではないですね。

伊藤(圭) 防衛庁教育局教育課。海原さんがいたのは、防衛庁防衛局防衛第一課なのです。あとで、私が行くところなのですが……。

伊藤(隆) 教育課にいる頃は、ほとんど海原さんとの連絡はないですね。

伊藤(圭) そうですね、直接は上司ではありませんし……。

伊藤(隆) 直接の上司でなければ、あまり話すこともない?

伊藤(圭) あまり、なかったです。

伊藤(隆) 認識は、どうですか。

伊藤(圭) 「物凄い人がいるな」という認識はありました。

伊藤(隆) そうですか(笑)。

佐道 どういう意味で、物凄いのですか。

伊藤(圭) とにかく、みんな脅えていましたから。いや、物凄く切れる人だったですね。

佐道 海原さんについて伺うのは、ずっとあとになりますけれども、とにかく、いろんな人に文句を言う方ですよね。

伊藤(圭) それは物凄いですよ。しかも、おっかない顔をして、文句を言うのです。私が、「あなたは、その怒鳴っている自分の顔を鏡で見てください。如何に恐ろしい顔をしているかというのが、分かる」と言ったら、「それを、女房が時々言う」と。そんなことを言っていました。

河野 それは、やはり海原さんのパーソナリティーで、内務省的ということではなくて、海原さんという方が非常に厳しさを持っていらっしゃったということでしょうか。

伊藤(圭) 一般的に言うと、内務省の官僚というのは、国家を背負っているというような気負いがありますね。後藤田さんだって、ありますでしょう。そういったものが、そういう形になって現れるのでしょうけれども……。あの人は、性格的に誤魔化しなんていうことが嫌いな人ですから、非常に厳しいわけです。だから、ちょっと手を抜いた仕事なんかをすると、物凄く怒るわけです。

佐道 海原さんについては、いっぱいお話があるでしょうから、追い追いと……。

伊藤先生の経歴を、ざっと拝見しますと、海原局長—久保課長というところで、ずっと一緒にやっておられて、本当にお二人とは長いですね。

伊藤(圭) その意味では、非常に不幸だと思っているのです。私たちの同期生というのは——二十四年の採用で防衛庁にいる者は、大体、警察に行ったり、大蔵省の財務局に行ったりしているわけで

す。私は、とにかく二十五年間、六本木から一歩も動かなかったのです。それで、海原さんも相当いい加減なところがあると思うのですが、私が施設庁に行ったときの話があるんです。

佐道 施設庁に施設企画課長で行かれたのは、何年ですか。

伊藤(圭) 施設企画課長は、一九六四年、昭和三十九年です。一九六四年十二月に、施設部企画課長に行くわけです。そして、翌年の十月に、今度は広報課長に帰って来るわけです。私が企画課長で出るときに、海原さんが、「お前、二年ぐらいゆっくりして来い」と言うので行ったのです。

この企画課というのは大きな課で、課員が五十人ぐらいいて、課長補佐が四人いました。課長なんか、何もすることがないのです。「これはいいところへ来たな」と思ったら、十ヵ月で「帰って来い」と言われて……。それで、私は海原さんに文句を言ったのです。「あなたが二年ぐらいゆっくりして来いと言うから、楽な気持ちでおったのに……」と言ったら、「いや、俺が呼んだのではない。次官が呼び寄せたんだ」と言うのです。本当かどうか知りませんけれども、そんなことがありました。そして、今度は広報課長を五年やるわけですから、長いですよ。広報課長を五年というのはねえ……。まあ、「あっ」という間に過ぎたようなものですけれども……。

佐道 これも後の話ですけれども、海原さんからお話を伺っていたら、「広報課長は、どなたがいいですか」と言ったら、「いや、これはもう彼しかいない」とか言って、指名したという話がありましたが……。

伊藤(圭) それで、私が文句を言ったら、「いや、俺ではなくて、次官が言ったんだ」と(笑)。

佐道 また戻りますけれども、教育局の直接の課長さんは何という方でしたか。

伊藤(圭) 栃内一彦さんという、運輸省から来た人でした。

佐道 どういう方ですか。

伊藤(圭) この人は、最後は運輸省に帰って、海上保安庁の長官(昭和四十年六月~四十一年七月)をやりました。退官後は、日航の子会社の社長をやった人です。まだ、ご存命かと思いますけれども、確か親父さんが海軍中将か何かですよ。

伊藤(隆) たぶん、そうだろうと思いますね。

佐道 教育課は、何人ぐらいいらっしゃったのですか。

伊藤(圭) 教育課は十五人ぐらいです。

伊藤(隆) 各種の学校を設立していく場合のことですが、今まで防衛の内容ということは、あまりご経験がないわけでしょう。飛行機は分かるとしても……。

伊藤(圭) そうですね。ただ、これは海原さんともよく話したのですけれども、我々は非常に幸せなことに、中学時代に、まず軍事教練というのをやったでしょう。軍隊というのは、大体どんなものかというのが、概略は分かるわけです。まあ、高等学校時代は適当にやっていましたが、中学まではやっていますから。それから、私はたまたま海軍にいて航空隊におったものだから、一応、船のことも飛行機のことも分かります。海原さんは、ずっと陸軍の経験があるわけでしょう。我々は、ある意味では経験しているけれども、今の若い人というのは、内局の者は全く知らないわけです。「その意味では、今の若い人たちは気の毒だ」ということを話したことがあります。やはり、体で経験するのと、知識で覚えるのとは、全く違いますから。

伊藤(隆) ずいぶん勉強されたわけでしょう。

伊藤(圭) 勉強はさせられました。また、海原さんというのが物凄く勉強したものですから、これに抵抗するのは大変でしたよ。

佐道 抵抗ですか(笑)。それで、現地視察というのも、ずいぶんされるわけですか。

伊藤(圭) 現地視察というのは、そんなにはできないのです。デスクワークです。いろいろな計画というのは、幕僚監部の「制服」の

人たちが作って持って来るわけです。ところが、そこの問題点を指摘する能力がないと、いかんわけでしょう。その点は、海原さんというのは凄かったです。計画が出て来ると、自分で全部勉強して、「ここが、おかしいじゃないか」ということを、非常に的確に指摘するわけです。僕らが、何となしに判を捺していると、すぐ呼ばれて怒鳴られるわけですよ。だから、海原防衛局長（昭和三十五年十二月～四十年六月）のときは、やはり慎重にやりました。

佐道　やはり、人が替わると、ずいぶん違いますか。

伊藤（圭）　そうでしょうね。私は、防衛局長というのは海原さんしか仕えたことがないから……。

伊藤（隆）　では、教育課にいた頃は、そんなに追いまくられるほどということではない？

伊藤（圭）　そうですね。あの頃は、とにかくできたばかりなものですから、「どうやっていいか分からん」という状況ですから。

私は、防衛大学校を、最初に担当しています。そのときの考え方は、「兵学校と士官学校の卒業者のコンプレックスは、やはり大学の教育を受けていないことにある」、そこで、カリキュラムは全部理工系の大学と同じにしようということを、目指したわけです。そして、そのカリキュラムをやった上で、いわゆる防衛学とか訓練がある。したがって、休暇が、ほかの大学に比べると半分ぐらいしかないわけです。夏でも、せいぜい一ヵ月ぐらいだったのです。それから、共同生活をしているものですから、時間は取れるわけです。そんなようなことで、大学ではなくて大学校だけれども、内容的には大学程度にしよう、と。

私が教育課にいる頃には実現できなかったのですが、教育課にいる頃から、防衛大学校を出たら、各大学の大学院に行ける資格を取ろうということをやりました。あれは、何年ごろだったか知りませんけれども、それが実現するわけです。それで、卒業生が大学院に行くようになるのですけれども、なかなか入れてくれないわけです。特に、東大なんかは入れてくれない。京大には行きましたけれども……。大阪の大学の大学院からは、「受けさせないようにしてくれないか」と言われましたので、「それは無理ですよ」と言ったことがありました。

佐道　これは、ずいぶん文部省のほうとも……。

伊藤（圭）　文部省のほうとは、当時は割合仲良くしていました。いろいろ協力はしてくれました。

伊藤（隆）　教育スタッフなどを集めるような仕事には、直接には関わらないわけですか。

伊藤（圭）　これは、関わりません。というのは、これはもう大学ですからね。主として、慶応大学の系統とか、東大とか東北大から先生が来ておられたのはないでしょうか。先生の系列で来ておったみたいです。教授会やなんかも、普通通りあるのです。だから、学校の運営に、直接関わることはありませんでした。

伊藤（隆）　立ち上げる、制度を作るまで……。

伊藤（圭）　そうそう、制度を作って、あとはもう全部やってもらって……。予算を取るとかの、いわゆる管理的な仕事です。どういうことをしたいから、こういう予算が要る。それから、教授一人に対して職員が何人ぐらい要るとか、そんな仕事でした。

佐道　確かに、昔の防衛大学校の紀要を見ますと、こういう専門の方がいらっしゃったのか、と。平安朝文学の研究者とか、いろんな方がいらっしゃいますね。

伊藤（圭）　そうですね。防衛大学校で良かったのは、槇（智雄）さんという人が校長（昭和二十九年七月～四十年一月）だったということですね。吉田（茂）さんに防衛大学校の校長の推薦をしてもらうに当たって、小泉（信三）さんをお願いしたらしいのです。しかし、小泉さんが当時、皇太子の扶育係で駄目なので、その代わりの人というので推薦されたのが槇さんなのです。あの人はオックスフォードか何かを出ていて、いわゆる〝ジェントルマン教育〟と

いうのをやったわけです。

私が非常に面白いと思ったのは、担当している頃のことですが、久留米に「陸」の幹部候補生学校というのがあったのです。そこに、当時の陸上自衛隊の幕僚監部の教育部長だった竹下という方と、一緒に行ったのです。この竹下というのは、阿南（惟幾）さんが切腹したときに、そばにおった人なのです。

伊藤（隆） 竹下正彦ですね。

伊藤（圭） ええ。彼と一緒に行ったわけです。そうしたら、彼が怒るんです……。登山競争を普通の日にやっていたのを、「おかしい。これは昔のように陸軍記念日か何かにやるべきだ」とかなんとか言って、息巻いていました。「大体、防衛大学校に文官の校長がいるのは怪しからん」なんて言って、怒っていました。ところが、この人があとで、防衛大学校の監事になるのです。そうしたら、一遍に槇さんのファンになってしまいまして、槇さんというのは、そういう点では偉い人だなあ……と思いました。あんなに罵っておった人が、「槇さんは偉い」というようなことを言い出したものですからね。

■「制服組」との交流

佐道 いろんな学校をたくさん作られたということを、お話しされましたけれども、そもそも専門的な学校ですね。

伊藤（圭） そうです。職種学校と言います。

佐道 それは、自衛隊のほうの要望とか、こういう学校が必要だとかということを聞いた上で、制度を作っていかれるわけですね。

伊藤（圭） そうです。それから、もう一つ面白かったのが、教育課で、私が海上自衛隊を担当している頃のことです。幹部候補生学校というのを、「陸」と「空」が作るわけです。これは、防衛大学校というところでは、軍事教育は十分にはできないから、それを補完するということで、大体一年の過程の学校を作るわけです。ところが、「海」だけは作らんわけです。「海」は、そんなものは要らない。それぞれの専門の術科学校でいいということで、最初は作らなかったのです。ところが、一年ぐらい経ったら、「どうしても作りたい」と言い出したのです。

そうしたら、年度の計画で出すと、真っ先に反対するのが海原さんなんです。それで、私も困ってしまいました。いわゆる海軍士官というのは、昔の伝統があって、「艦長というのは、全てのことを知っていなければいかん」ということで、早く術科教育をして、一人前の士官にするということだったのです。けれども、ほかのところに候補生学校があるので、自分のところも作りたくなったのです。最初の年は、これは昭和三十二年だったと思いますけれども、とにかく大蔵省に頼んで、「予算はゼロでいいから、看板だけ掛けさせてくれ」ということから始まったのです。それで、今、江田島にできているのです。

佐道 江田島というのは、すんなり決まったのですか。

伊藤（圭） 江田島というのは、たまたまイギリス軍が占領していたものが返ってきたものだから、すぐ「海」は手を挙げました。

佐道 すぐに、海原さんが反対されたとおっしゃいましたけれども、しかし、海原さんは防衛一課長（昭和二十九年七月～三十二年十一月）ですよね。

伊藤（圭） 防衛局第一課というところは、年度の業務計画をまとめる課ですから、「今年、どういう事業をやるか」というのを総括的に決めるのです。それが防衛一課の仕事ですから、教育課から要求が出たことに対しても、すぐ反対するのです。

佐道 まあ、ありとあらゆることに、関係している、と。

伊藤（圭） それは、ある意味では防衛庁の一つの特色だったと思うのですけれども、防衛庁と、三つの自衛隊がどういうふうに動く

かという方向を決めるのが、防衛一課の年度の業務計画であるわけです。

伊藤(隆)　本当に、中枢中の中枢なんですね。

伊藤(圭)　だから、いろんなことを、全部訊くわけです。そして、今度はそれに基づいて予算を作って、大蔵省に要求する。だから、大蔵省の予算折衝も、防衛課の、それぞれの担当者が「制服」の者と一緒に行って説明していました。

伊藤(隆)　防衛大学校というのは文官の先生もいますが、術科学校になりますと、自衛官自体が教師になっているわけですか。

伊藤(圭)　だけど、文官の人もいますよ。例えば、英語の先生とか数学の先生とか。だから、全部が全部、自衛官ではないのです。

佐道　専属の、そういう先生がいるわけですか。

伊藤(圭)　はい、そうです。そういう意味では、江田島だと、いい先生がなかなか集まらないという問題はあったようです。

佐道　そうですよね。

伊藤(隆)　ちょっと辺鄙なところだから。

伊藤(圭)　元々、防衛大学校も、最初は江田島に創るという案もあったのです。だけど、江田島だと、いい教授が呼べないということで、横須賀に決めたみたいです。

伊藤(隆)　横須賀だって、遠いと言えば、遠いですけれどもね。

佐道　今でこそ、多少交通の便が良くなりましたが、昔は本当に……。では、「制服」の方々とも、かなり頻繁に交流があったわけですね。そういう要望を聞くとか……。

伊藤(圭)　それは、しょっちゅうやっています。「制服」の人たちは、大体、僕らより年上だったでしょう。今、みんな亡くなるわけです。だから、よくお葬式に行っていますよ。この間も、鮫島(博一、元統合幕僚会議議長、元海将)さんが亡くなられて、彼なんかはよく知っていましたからね。それから、田中耕二という航空自衛隊にいた人とか、陸上では、さっきの竹下さんではないですけれども、交流はありました。

伊藤(隆)　やはり、内局の人たちと自衛官の人たちとは、気風が違いますか。

伊藤(圭)　気風と言うのかなあ……。変な言い方をしますと、戦後すぐには再軍備という格好にならなかったでしょう。自衛隊という形になったでしょう。この考え方というのは、ある意味では日本人の知恵だったのかなという気がしないわけでもないのです。というのは、自衛隊ができた頃の「制服」のトップにいたのが、全部旧軍の人たちでしょう。そうすると、その周りには旧軍の応援団がたくさんいたわけです。あのときに、本当に再軍備になったら、昔の旧軍の人がみんな勢いを得て、生き返ってきたと思うのです。それが、なかなかできなかったというところで、今のような形の自衛隊になって、可哀想だったけれども、良かったのかなという感じはするのです。というのは、やはり陸海軍のエリートのプライドというのは凄いものでしたね。「あんたたちが負けたんじゃないか」と言っても、「自分が負けた」とは思っていないですね。

佐道　実際に、凄く印象に残るようなことはございますか。旧軍の偉い方、例えば「陸」で言えば服部(卓四郎)さんのグループとか、「海」で言えば野村(吉三郎)さんとか、保科(善四郎)さんとかという方々が、戦後の再軍備の過程でいろいろ動かれたという話があるのですけれども……。

伊藤(圭)　そこら辺のことは、私はよく知らないのです。海原さんのほうが、よく知っていると思います。ただ、私が秘書官をやっている頃に、こういう話がありました。シンガポール作戦のときの幕僚だった杉田一次さんが陸上幕僚長(昭和三十五年三月～三十七年一月)を辞めるに当たって、「陸士」の後輩を幕僚長にしたかったのです。当時、私は藤枝泉介さんの秘書官をやっていたのですが、〔杉田さんは〕「あれを幕僚長にしてくれ」と池田総理に直訴しているのです。〔しかし〕池田さんは、それを取り上げなかった。私は、

藤枝さんが池田さんと話しているのを、そばで聞いていたのですけれども、「幕僚長を、こういうふうに決めます」と言ったら、「全部君に任したから」と言って、池田さんはその人を採らなかったです。それが良かったかどうかは、別ですよ。しかし、幕僚長が総理に直訴しても通らなかったです。ただ、それぐらい、彼らの陸軍の伝統というものがあったのかなという気はいたします。

佐道　「陸」「海」「空」、それぞれの気風みたいなものは？

伊藤(圭)　「空」なんていうのは気風も何もないです。あれは、戦前はなかったですからね。「陸」は、物凄く事務能力に優れていました。だから、内局に対する説明とは別の、自分たちの好きなことをやっているという感じはしました。「海」というのは、これは全然融通が利かないという感じです。「海」には、「海軍は何も悪くなかった」という気持ちがありますからね。だから、彼らは常に、「海上自衛隊は、海軍の良いところはそのまま受け継ぐ。悪いところは改める」と言うのだけれども、「じゃあ、悪いところはどこだ？」と訊いても、誰も言わないのです。「みんな、いい」と思っているわけですよ。そういう頑固なところはありました。

伊藤(隆)　「今度の戦争は、海軍が負けたのではない」と思っている……。

佐道　そうでしょうね。

伊藤(隆)　本当は、海軍が負けたんだよなあ……。

佐道　一番戦ったのは、海軍ですからね。

伊藤(圭)　私も、最近、会社を辞めてから、少しずついろんな本を読んでいるのです。例えば、文藝春秋が出した『完本　太平洋戦争』を時系列的に読んでみて、「ああ、こうだったのか」と思うのは、三年八ヵ月の戦争のうちで、日本が勝っていたのは最初の七ヵ月ぐらいですね。ミッドウェー海戦（昭和十七年六月）からは、全部負け戦。いわゆる戦闘では勝っても、戦争そのものとしては、どんどん負けているのですね。「よくまあ、若い我々の命で、ここまで持ったな」という感じですね。ただ、そのときの感じとしては、「死んでもしょうがない」という気持ちはありました。

伊藤(隆)　いま考えてみたら、本当に、よくあれだけの期間持ったものですね。

伊藤(圭)　私どもは、「これだけの劣勢を支えるのは、とにかく若い命以外に何もない」と思ったのです。だからもう、「こうやって命を注ぎ込んでいくのは、しょうがないな」という気持ちがありました。その頃――航空隊で神ノ池に行ってから、よく話し合ったのですけれども、「将来の戦争というのは、本当にドンパチはなくなるかも知れない。兵器が進歩すると、トランプのポーカーみたいに、いよいよ切迫したときには、両方で手の内を見せ合って、〝負けた〟と言ったほうが、止めるのではないか」と核兵器が出てから、だんだんそうなってくるのかなという感じもするのです。

佐道　時間が来ましたので、次回は防衛庁の教育課時代の続きの話から、主に伺っていきたいと思います。

伊藤(隆)　教育の体系が、どういうふうになっているのかということを教えていただきたいと思います。

佐道　差し支えなければ、お持ちの資料のコピーを取らせていただければ……。

伊藤(圭)　コピーを取ると言えば、僕は〔ロッキード事件に関して〕検察庁に三日ほど喚ばれたことがあるのです（第十三回インタビュー参照）。例の、Ｐ３Ｃ（対潜哨戒機）の白紙還元の頃――あの白紙還元の頃は、毎日徹夜でしょう。だから、日付が分からなくなるものですから、メモを書いて行ったのです。何月何日、何時から何時まで、どういう主題で、どういう人が集まって会議をやったかというメモを作ったのです。それで、検察庁に喚ばれて話をしているときに、「こういうふうにやったのだ」と言ったら、「それをくれ」と言うのです。「証拠だ」と言うのですよ。「ちょっと待ってくれ。それは、私も必要だから」と言ったら、それを取り上げて、コピー

のほうをくれたんですよ(笑)。皆さんは、検察庁に喚ばれたことはないでしょうけれども、これも容易ではないですよ。

佐道 そのお話は、またじっくりと聞かせていただきたいと思います。

伊藤(圭) 教育の体系については、表でも作って持って来ます。今とは、多少変わっているかも知れませんが……。

伊藤(隆) 当時のほうがいいと思います。

伊藤(圭) 当時のものがあるかな。

伊藤(隆) 自衛隊の中の、それぞれのレベルでの教育ですね。

伊藤(圭) 私は、それは大事なことだと思うのです。というのは、自衛隊で生涯を送るうちの、半分は教育を受けているのです。学校へ行っているのです。実際に前線で勤務しているというのは、半分しかないのです。だから、教育というのは、非常に大事だという感じはします。

伊藤(隆) それは、戦前の陸海軍もそうですね。

伊藤(圭) そうなんですよね。もっとも、私なんかは速成ですから、すぐ飛行機に乗せられましたけれども……。

伊藤(隆) 前に総評の事務局長をやった宝樹(文彦)さんの話を伺ったら、「総評の教育はなっとらん。旧陸海軍の教育体系は、実に立派なものだった。一兵卒になる連中でも、将官になる連中でも、同じように教育を受けている」と。例えば、下士官の養成があり、中級の指揮官の教育があり、高級な指揮官のそれと、それぞれに……。しかも、術科へ行ったり、いろいろ動いている。

伊藤(圭) 今の自衛隊もそうですけれども、ただ一つの問題は、閉鎖社会だということです。だから、幼年学校からずっと来た人の常識なんていうのは、普通の人間生活の半分です。今の陸上自衛隊でも怖いのは、やはりエリートというのが全くそうなってしまうので、師団長なんかになると、「殿様」になってしまうわけです。そうすると、記者に会うにしても、まず副官が「どういう質問ですか」ということを訊いたりするのです。そうすると、新聞記者は怒ってしまうわけです。「そんなものは、勝手にしゃべらせればいいのに……」と思うんです。そういう閉鎖社会の弊害というのもあるのです。同時にまた、閉鎖社会だけに肩を寄せ合うという、同志的なところも出てくるのですね。

伊藤(隆) それを悪くすれば、馴れ合いになるわけですね。これは、やはりどの社会でも同じ問題で、非常にやっかいな問題ですね。

伊藤(圭) それから、どうしても組織防衛という気持ちが、どこでも働くでしょう。

伊藤(隆) それは別段、自衛隊に限ったことではなく、警察だって、そうですしね。

伊藤(圭) おそらく共産党も、そうなんですよね。『赤旗』の記者が来て、「調査隊について聞きたい」と言うから、「これは、組織防衛のための組織だ。おたくだってあるだろう」と言ったら、「あります」と言うんですよね。

佐道 今後も、こういった調子でお伺いしていきますので、どうぞよろしくお願いします。今日は、有難うございました。

〈以上〉

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第2回

開 催 日：2000年12月12日（火）
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時00分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■防衛大の定員を決める

伊藤(圭) 前回の速記録を読みまして、私の記憶というのも不確実なものだなと思いました。私が保安庁に参りましたのが、昭和二十九年の六月十五日なのです。そのときは、まだ保安庁でした。保安庁のときは、教育課という課はなくて、教養課なのです。保安局の中に保安課と調査課と、教養課があったのです。その教養課に行ったのですね。そして、二週間後に防衛庁になりまして、教育局になるのです。やはり、二週間ぐらいの記憶というのは、ないですね。

伊藤(隆) そうですね。でも、よく記憶なさっています。

伊藤(圭) いやいや、とんでもないです。

今日は、組織図を持って参りました【資料1】。この中で、最初の自衛官が入るのが、例えば「海」なんかだと、総監部のあるところに教育隊というのがあって、新兵教育をやるわけです。「陸」は教育団というのがありまして、新兵教育だけをやっています。「空」は熊谷で教育して、すぐまた学校に入れる。それは、学校に教育隊がなかったものですから……。

佐道 ちょっと待ってください。前回、非常に丁寧な略歴表をいただいたので、それを打ち直してみました。

伊藤(隆) これだと、保安庁に行かれたのが六月一日で、七月一日まで、ひと月ありますね。

伊藤(圭) ああ、そうか。この頃は割にのんびりしておったから、〔辞令が〕六月一日といっても、着任したのが十五日ぐらいだったと思います(笑)。

佐道 しかし、実際は保安庁時代はほとんどなく、そのまま防衛庁に移行したという感じですね。

伊藤(圭) そうですね、だから、あんまり記憶がないのです。ただ、保安局のなかで、保安課長が海原(治)さんで、教養課長が栃内(一彦)さんという、運輸省から来た人でした。それから、調査課長が人事院の総裁(昭和五十九年二月~平成二年四月)をやった内海(倫)さんですね。この三人がおりました。その上の保安局長というのは、山田誠(昭和二十七年八月~二十九年六月)さんという警察出身の方でした。海原さんの先輩です。

佐道 防衛庁では、最初に教育局教育課というところに行かれて、前回のお話では、いろんな学校を作るのを担当されたということですね。確かに、いろんな学校というか、三自衛隊それぞれに、いろんな学校があったり、教育の体系があると思うのですけれども、そういう学校の中で、特に印象に残っているものはありますか。

伊藤(圭) たまたま、私が一番最初に担当したのが防衛大学校です。防衛大学校の規則というものを作るわけです。この間もお話ししましたように、まずカリキュラムは、一般大学の科目は全部やる。それにプラス防衛学のカリキュラムを作るわけです。

しかし、大学では教授会というのが絶対の権限を持っているわけでしょう。私は、人事院にいるときに文部省も担当していて、話を聞いたことがあるのですけれども、文部大臣は教授会で推薦してきた者を拒めないのですね。例えば、学長の人事なんか……。ところが、それだと、あまりにも統制が取れないというので、〔防衛大学校では〕どういふうに、そこのところの調和を保つかということが、当時非常に議論されました。一応、教授会で決めるのだけれども、それに対する任命権というか、拒否権みたいなものは残しておいたほうがいいのではないか、と。これについて、当時の教授会と内局との間で、いろいろと議論があったように記憶しています。そこで、学問に関しては自由に研究はしてもらうけれども、〔人事等で〕あまり逸脱してはいかん、というような規則ができていると思うのです。そこら辺が、一つの問題としてありました。

もう一つは、戦前の陸海軍の仲が悪いのは、教育が全く別だったからだということで、カナダに倣って一緒にやろう、と。「陸」「海」

「空」の学生を一緒に教育するのです。この二つの方針がありました。私が行ったときは、まだ保安大学校でしたから、「空」はなかったのです。その後、「空」ができるわけです。

もう一つ、一学年が五百三十人の定員なのです。この五百三十人という定員を決めるに当たって、問題があったのです。「陸」「海」「空」が、将来どのぐらいの規模になるだろうかという前提がないと、採用人数が決まらないわけです。

それから、昔は海軍なんていうと、ほとんど兵学校出が中枢にお ったわけです。「陸」でも、やはり幼年学校からずっと来た者が中枢におって、一般の大学を出た者は、いわゆる予備士官というか、予備役だったわけです。だけれども、そういう制度ではなくて、少なくとも半分ぐらいは、一般の大学を出た人も入れて、一緒に競わせたほうが健全な、いわゆる閉鎖社会〔育ち〕ではない者ができるのではないかということで出発したのです。

出発するに当たって、人数を考えるときに、当時は三・三・三という思想があったのです。これは、陸上自衛隊が三十万人、海上自衛隊が三十万トン、航空自衛隊が三千機――そういう考え方だったのです。このぐらいは要るのではないかということで、それに基づいて弾き出したのが、五百三十人だったと思います。

ところが、現実の問題としては、ご存知のように、「陸」は定員が十八万人になったのが最後で、しかも十八万が一度も充足されることなく減っていって、今度は定員が減ってくるわけですね。海上自衛隊は、二十万トンぐらいまでいったのでしょうか。まあ、そんなところだと思います。航空自衛隊にいたっては、一番多いときで、確か千三百機なのです。今は、八百八十機ぐらいでしょうか。そんなものだったのです。

昔の、平時における陸軍の勢力というのが、確か二十四万人ぐらいです。海軍は、物凄く多いですね。百五十万トンぐらいあったのかな。まあ、その当時は、空軍が陸海軍に入っていましたからね。そんなことがあったものですから、三・三・三を考えてやったのだと思います。結果的には、「陸」が十八万人ということで落ち着いてしまうわけです。

実は、その〔出発時の定員の〕三十万の根拠となるのが、米軍が言って来ていた三十二万五千という数字なんです。確か、十個単位と言っていました。ところが、それを十八万に削らなければならない。米陸軍の一個師団の編成というのは、外地に行って作戦する人数なわけです。しかし、自衛隊は外に行くことがないから、補給関係の定員を削れるじゃないかというようなことで、十八万に減らしたと聞いた記憶があるのです。

ただ、これは、私が当時防衛局で防衛力整備を担当している頃に、いろんな人に聞いた話で、これという根拠はないのです。だから結局、予算の問題で、最初からそんなことになったのかなという感じがするのです。あんまり根拠はないのです。それから、航空自衛隊は、三千機なんて言っていましたが、アメリカからもらって、一番多かったときで千三百機なのです。「海」は、十二万トンぐらいから始まったのかな。一番最初にもらったのは、フリゲート艦が十八隻と、三百五十トンの警備艇が五十隻です。だから、十八隻と五十隻で始まりました。だから、最初は十二万トン、一番多いときでも二十万トンそこそこではないでしょうか。そんなようなことだったのです。

防衛大学校も毎年五百三十人採用していたのが、現在では、五百人を切っています。〔全体の〕人数が減って、防衛大生の採用数も減らすのですけれども、幹部の構成も変わってきてしまうのです。最初は防大卒と一般大学卒の幹部数をフィフティー・フィフティーと考えたのが、ほとんど九割ぐらいが防大出になってしまうわけです。結局、最近の趨勢としては、防大出が実権を握るようになりました。ですから、これからは防大の教育を通じて、閉鎖社会を開放するということが、一番大事になってくるのではないかなと思

います。

佐道　さっき、かつては陸海軍別々に教育していたから、カナダなどに倣って…とおっしゃいましたが、この新しい教育の体系を考えるときに、どこか参考にされたところはありますか。

伊藤(圭)　私が来たときは、既に保安大学校というのができていましたから、何か手本にしたところがあるのかと言うと、はっきり分からないのです。ただ、いわゆる陸海軍のエリートをトップに就けないという方針だけを、吉田（茂）さんが言っていたみたいです。それで、槇（智雄）さんが〔防大の校長として〕選ばれてくるわけです。

佐道　学校側の意見というのは、槇校長を中心にということになるわけですか。

伊藤(圭)　槇先生は、いわゆるジェントルマン教育というのを、非常に重視しておったみたいです。

佐道　今の三・三・三の思想というのは大変面白いのですけれども、それは、こういう教育とかにも、非常に影響力を持つような旧軍関係の方がいらっしゃったのですか。

伊藤(圭)　それは、あまりいないのですけれども……。「陸」で言うと、服部卓四郎あたりが中心になった集団がいて、「旧軍に倣って、かなり強力なものにしろ」というようなことはあったと思います。しかし、三・三・三というのは非常に抽象的な言い方ですけれども、では、そういう〔三十万人という〕数字はどこにあったかと言うと、結局、昭和初期の陸軍の数なんですね。そういうものを参考にしながら、当時は保安局というのがありましたから、その保安局で、「毎年毎年の予算で行き当たりばったりではいかん」ということで、「とにかくアメリカに倣って長期計画を立てよう」、と。そういうのが海原さんたちの考え方で、そのために制度調査委員会というのがあったのです。私は読んだ記憶があるのですけれども、その制度調査委員会で検討している中に、そういう数字がありました。

佐道　その制度調査委員会の記録というのは、あとでお読みになったわけですか。

伊藤(圭)　そうです。記録の中でも、決まった数字ではないですよ。いろいろ検討している段階の、過程の一つにあったような気がします。

佐道　その制度調査委員会の運営というのは、防衛局に行かれたあとですか。

伊藤(圭)　そうです。

佐道　昭和二十年代の後半にできた制度調査委員会については、いろんな見方があるのですけれども、これは先ほどお名前が出ました調査課長の内海さんがおやりになっていたのですか。

伊藤(圭)　いや、私が行った当時は、海原さんが保安課長で、その下にいた久保（卓也）さんが制度調査委員会の主査みたいなことでやっていました。それで、「陸」「海」「空」から「制服」の人が参加してやっていました。

佐道　そこへ来られていた「制服」の方というのは、どういう方々ですか。

伊藤(圭)　私は、そこはよく分からないのです。というのは、当時は教養課だったものですから。

佐道　その委員会は、昭和三十年代の初めにはなくなるという形ですか。

伊藤(圭)　制度調査委員会はなくなりましたが、久保さんのあと、いま拓大の総長をやっている小田村（四郎）さんです。二次防の頃は、計画官と言っていましたかね。防衛一課に、長期計画を作る担当者がいました。

伊藤(隆)　小田村さんも、あそこにいらっしゃったのですか。

伊藤(圭)　そうです。小田村さんは、二年ぐらい防衛庁に来ていました。その後、経理局長（昭和四十六年六月～四十九年六月）になって来ました。

■術科学校・調査学校・幹部学校

伊藤(隆)　教育体系ですが、この前のお話だと、いろいろな術科学校も創られたということですね。術科学校は、「陸」「海」「空」それぞれにあるわけですか。

伊藤(圭)　あるのです。しかし、私の頃に比べると、物凄く多くなっているのです。だから、ちょっと分からないのですが……。

伊藤(隆)　非常に専門的になっているわけですか。

伊藤(圭)　そうです。今は「陸」「海」「空」とも、大体専門別に分かれているのです。一番最初は、海上自衛隊は「江田島の術科学校一つでいい」と言うのです。航空自衛隊は、創設時からあちこちに作りました。

伊藤(隆)　それは、内容が同じものを各地に作るということですか。

伊藤(圭)　いやいや、違うのです。

伊藤(隆)　それぞれの専門のものですね。

伊藤(圭)　専門のものです。通信は浜松とか、整備に関してはどことか、そんなような格好でした。それから、パイロットの養成はどことか、というようなことです。

伊藤(隆)　「陸」だと、兵器ごとですか。

伊藤(圭)　兵器ごとと言うよりは、職種ごとと言ったほうがいいのでしょうか。例えば、飛行機乗りの教育とか。

伊藤(隆)　それは、陸上自衛隊もあるのですか。

伊藤(圭)　陸上自衛隊も飛行機があるのです。航空自衛隊ができたときには、地上を離れるものは全部航空自衛隊に集めようという話があったのです。これに抵抗するのが、やはり「陸」「海」なのです。陸上の戦闘、あるいは海上の戦闘に直接関係のあるものは、俺たちのところで持っていないと、地上と空との連係が取れないと言って、がんばってしまうのです。それで、航空自衛隊は防空だけなんです。例えば、対潜哨戒の場合には、「海」は対潜哨戒機を持つ、と。

伊藤(隆)　それは「海」が持つわけですか。

伊藤(圭)　そうです。そういうことで分かれていくわけですね。これ(教育組織図、【資料1】参照)を見ますと、例えば一番左の、陸上自衛隊の学校が幹部学校から、ずっとありますね。これを見ると、十六になっているのですけれども、私が教育局のときは十三しかないのです。よく分からないのですけれども、一番最初は、おそらく幹部学校はなかったのではないかと思うのです。富士学校はありました。それから、航空学校、施設学校、通信、武器、需品、輸送、業務、調査学校あたりの中のいくつかがなかったのかなという感じがします。それから、化学学校、少年工科学校で、この辺もなかったような感じがするのです。いずれにしても、十三でした。その十三の学校の規則、校則を「陸」で作ってきたのを、チェックした記憶はあるのです。

　海上自衛隊については、これは全く単純で、第一術科学校というのがありますでしょう。これが、一も二も三も四もなくて、ただ術科学校だけが、ぽつんと江田島にありまして、あとは練習艦隊ですね。幹部候補生学校も、幹部学校も、このときはありませんでした。

　航空自衛隊につきましては、その頃、術科学校は第一と第二の浜松だけだったと思います。あとで、パイロットの教育で芦屋なんかができてくるのです。航空自衛隊は、とにかく、その頃はやっとできたばかりだったから、学校なんて、ほとんどなかったというのが実態でしょうね。航空自衛隊は、「陸」が乗っていたL19というセスナ機をもらって、発足するわけです。だから、その受け取りで、一所懸命だったのではないでしょうか。

　防衛庁になったときは、教育局ができて教育局長は外務省から来た都村新次郎氏(昭和二十九年十月～三十二年四月)がなりまし

た。この人と一緒に、九州のついき築城に行ったことがあるのです。そこで、初めてのジェット・パイロットというのが、十何人か、米軍から教育を受けていました。とにかく、ジェット機なんていうのは、僕らも初めて見るものですから、びっくりしてしまったのです。ところが、ジェット機は、割合早くから航空自衛隊は国産する努力を始めているのです。だから、二十九年に発足して、確か三十二年頃は、もうジェット機をもらって、乗りこなすような人が出て来たのではないでしょうか。最初は、アメリカに連れて行って教育して、それから築城で、また教育をやるというようなことで……。

佐道　築城が、ジェット機の専門ですか。

伊藤(圭)　そうでしたね。T33という一番最初の練習機です。

佐道　調査学校というのは、何について調査をするのですか。

伊藤(圭)　調査学校というのは、主として語学なのです。よく「スパイ教育だ」とかと言われるのですけれども、そうではなくて、主として調査学校で語学を学び、アタッシェ（駐在武官）として外国に行ったりしていました。

伊藤(隆)　広い意味では、インテリジェンスと考えていいわけですね。こういう学校というのは、どのレベルの人が入るのでしょうか。例えば、富士学校とかは……。

伊藤(圭)　これは、やはりいろいろ段階がありまして、最初の尉官の頃に入る人、佐官になってから入る人……と、課程がいろいろあります。

伊藤(隆)　これは、必ずしも幹部だけの学校ではないのでしょう。

伊藤(圭)　そうです。下士官の課程もあります。幹部については、まず初任幹部の教育をやって、それから部隊に行って、帰って来て中隊長か何かになる教育をやる。そして、幹部学校にある、昔の陸海軍の大学の予科みたいな課程を受けて入校し、それから本科に相当する課程もありました。最後が防衛研修所ですか、いま研究所になっていますが、あそこに行って、そこを出た人がジェネラルとかアドミラルになるようです。

伊藤(隆)　幹部学校よりも、さらに上のコースになるわけですね。

伊藤(圭)　なっています。ただ、陸軍大学は、いわゆる幕僚のトップを教育する学校でございましたでしょう。防衛研修所はそうではなくて、国際知識とか各国の防衛、軍事情勢を勉強する場所です。

佐道　組織図を見ますと、統合幕僚会議の下に統合幕僚学校がありますけれども、これは？

伊藤(圭)　これは、いわゆる尉官クラスの人が、各幕（陸上・海上・航空各自衛隊の幕僚監部）から派遣されて行くわけです。結局、「陸」「海」「空」が統合運用をする場合に、いろいろ「陸」「海」「空」とも、やり方が違うでしょう。それを、お互いに認識し合う。統合教育をしておいて、いざというときに迷わないようにというか、慣らせておくということなのです。

伊藤(隆)　尉官ですか。

伊藤(圭)　尉官です。だから、それは、いわゆる最高の教育機関ではないのです。それが、いいのか悪いのかという問題があります。当時、内局としては高い権威を与えたいと思ったのですけれども、各幕が、あんまり出したがらなかったですね。それで結局、尉官クラスになったのです。

佐道　ここには、何人ぐらいが？

伊藤(圭)　数は少ないです。一期生が三、四十人ぐらいではないでしょうか。

佐道　でも、毎期あるわけですね。

伊藤(圭)　あります。

伊藤(隆)　統合幕僚学校は、場所は研修所と同じところですか。

伊藤(圭)　ずっと市ヶ谷にありましたけれども、今はどうなったのでしょうか。市ヶ谷の、例の三島（由紀夫）さんが自殺した建物の中に、東部方面総監部と、「陸」「海」「空」の幹部学校と、統幕学校

がありました。

伊藤(隆)　今は、「陸」「海」「空」の幹部学校は目黒に移りましたね。

伊藤(圭)　目黒に行きましたね。「陸」はどこへ行ったのですか。

伊藤(隆)　「陸」も、あそこだと思います。

伊藤(圭)　あそこですか。じゃあ、みんな目黒に移ったのですね。

伊藤(隆)　どうも、全体の体系というのがよく分からない。新兵で入って、将来下士官になり、場合によっては将校になるという人たちは、一体どういうふうに教育を受けていくのかな、と。そういう設計もなさったわけでしょう。

伊藤(圭)　それは、私たちはあまりやらないうちに、私は防衛課に移りましたから。もちろん、防衛課で年度の業務計画をまとめるときには、全部話を聞くのですけれども、これがまた多岐にわたるものですから、詳しくは記憶していないのです。

「陸」の場合には、とにかく、まず新隊員教育隊というのに入れるわけです。半年ぐらい、そこで教育するわけです。今の高校卒とか中学卒というのは、歩調を取ると言うのですか、足を合わせることもできないのです。だから、そういう教育から始めて、半年ぐらいそこでやって、それから次に、それぞれの職種に見合うところに行くわけです。そして、その部隊で教育を受ける。

「空」の場合には、熊谷に新隊員教育隊というのがあって、これは最初の六ヵ月ぐらい自衛隊員としての教育をやって、その後は浜松とか防府とか、各地の術科学校に入るのです。それで整備をやったり、通信をやったり、技術を身に付けるわけです。

海上自衛隊は、舞鶴とか大湊とか、ああいうところで新隊員の教育を、やはり半年ぐらいやって、あとはそれぞれ術科学校に行くわけです。それで、一般の隊員にするわけです。ところが、パイロットだけは別なのです。パイロットは、パイロットの要員というのを募集しまして……。

伊藤(隆)　別に、ですか。

伊藤(圭)　別になるのです。いわゆる航空学生と言うのですね。これは、「陸」「海」「空」ともやっていると思います。少なくとも「海」「空」はやっていて、それはパイロットの教育を初めからやるわけです。

伊藤(隆)　それぞれに、やるわけですか。

伊藤(圭)　それぞれに、やる。「空」の場合には、一人前のパイロットになるのに四年掛かるのです。最初の二年ぐらいは、基礎教育をやって、今度は飛行機に乗せていくわけです。この間も、ちょっと申し上げましたけれども、最初、「パイロットの基礎教育なんていうのは、陸海空一緒でいいじゃないか」と、我々は言ったのです。だいぶ嫌がったのを無理矢理にやらせまして、これは私もはっきり覚えているのですけれども、宇都宮の富士重工のあるところにあった「海」の航空隊に「空」の要員も入れたのです。そうしたら「どうしても駄目だ」と言うので、二、三年で分かれてしまうのです。それで、「海」は最初の教育は、下関の近くでやるのです。

伊藤(隆)　防府かな。

伊藤(圭)　防府は航空自衛隊です。防府ではなくて、小月です。

伊藤(隆)　そうですか。なかなか難しいものですね。やはり教育の仕方が違うのでしょうか。

伊藤(圭)　これは、私も自分で飛行機に乗ったから分かるのですけれども、いろいろ理屈を付けるわけです。例えば、飛行場に降りて来ますね。こう回って(旋回して)、離着陸の訓練をするわけです。「海」は、こっち回りなのだけど、「空」はこっち回りだとか、何とかかんとか言うのです。これは、アメリカの海空軍が違うのですかね。こんな、何かいろんな理屈を付けて「嫌だ」と言うのです。これは一つの例ですが、そんなことで、「ずいぶん、おかしなことを言うな」と思った記憶があります。

佐道　それは、アメリカのやり方に倣うということになるわけで

すか。

伊藤(圭) というのと同時に、例えば「海」と「陸」の飛行機というのは、単独で行動するのではないのです。「海」の対潜哨戒機が飛んで行くと、どこに潜水艦がいるかということで、今度は船が追い掛けて行ってやるというような仕組みでしょう。どうしても「空」と「海」との協力関係が必要だというのです。それは、やはり同じ制服を着た者でないと、緊密な連絡が取れない、と。まあ、理屈ですね。そんなことから、「海」と「陸」が嫌いました。「陸」にしてみれば、鉄砲を持って歩き回るだけでは、ちょっと冴えないというような感じもあったのでしょうなあ。それで「陸」は、最初にヘリコプターを入れるのです。

佐道 海上自衛隊は、確かに対潜哨戒機で海をカバーしますから、陸上とは違う感じがしますけれども、「陸」はヘリコプターと輸送機ぐらいが基本だと思うのですけれども……。そうすると、「空」と一緒にしてもいいような気もしますね。

伊藤(圭) いいのですけれども、セスナとかヘリコプターの任務は何かと言うと大砲の弾着地点を教えることだと言うのです。これは、やはり「陸」の人じゃないと駄目だと言うのです。今なら、そんなことはあり得ないと思うのです。

伊藤(隆) 実際に、「陸」は飛行機を持つわけですか。

伊藤(圭) 飛行機を持ちます。

伊藤(隆) では、陸軍の飛行場もあるということですか。

伊藤(圭) あります。現に、この東京周辺では木更津にヘリコプターの部隊があります。

佐道 共用しているところはありませんか。

伊藤(圭) いや、それがね、共用しておって、また分かれたのです。昭和四十七、八年頃でしょうか、八戸の基地がアメリカから返還になるのです。そこに、海上自衛隊と航空自衛隊を一緒に置いたのです。「どうしても嫌だ」と言うので、「空」が三沢に行ってしまうのです。米軍に交渉して返してもらって……。やはり、五十年経っても「陸」「海」の対立というのは、いろんな意味であるのですね。

伊藤(隆) これは、各国ともあるみたいですね。アメリカも、そうみたいですし……。

伊藤(圭) ええ、もうアメリカなんか酷いですね。ですから、アメリカの初代の国防長官のフォレスタルが自殺するでしょう。あれは、海軍長官だったので、「陸」と「空」に責められて自殺してしまうのですね。

佐道 難しいですね。例えば「陸」だと、いま十幾つの学校がありますが、入って来る生徒の対象が違うということになると、教える教官のほうも、ランクがいろいろ変わってくるのですか。

伊藤(圭) ……と、言いますのは？

佐道 例えば、富士学校なんかの場合には……。

伊藤(圭) 課程ごとによって、教官は違います。その学校を出て、ある専門家になるわけですね。ですから、その職種で、ずっと行くわけです。例えば戦車だと、戦車でずっと行くとか。確か、その関係がなくなるのが……。一佐までは、職種があるのです。ジェネラルになると、それがなくなったと思います。

伊藤(隆) 昔で言う、兵科ですね。

伊藤(圭) はい、兵科です。

佐道 どこの学校に行くかで、それが決まってくるということになるのですか。それは、本人の希望が第一なのですか。

伊藤(圭) 本人の希望が、やはり多いです。

伊藤(隆) でも、適性という問題もあるでしょう。

伊藤(圭) それは当然あります。

伊藤(隆) 新兵で入った、エリート教育ではないほうの人たちは、どこまで昇進できるのですか。

伊藤(圭) 非常に極端なことを言うと、「陸自」なら陸将――将まで行けるのです。だけど、今までの例からいくと、一佐ぐらいまで

ではないでしょうか。

伊藤(隆)　一佐まで行けば、大したものですね。戦前だって、一兵卒から大佐になったというわけだから……。

伊藤(圭)　一佐というのは非常に珍しい場合で、私の知っている限りでは、最初に女性の自衛官になった人が一佐になりました。「陸」で、下から上がって行って……。だから、一佐になったという人もいますね。だけど、これからはもう、なかなかいないでしょう。

伊藤(隆)　それは、相当優秀な人なのでしょうね。

伊藤(圭)　そうでしょうね。

伊藤(隆)　それはやはり、術科学校とか、いろいろな学校で優秀な成績を修めて、昇進して行くということですか。

伊藤(圭)　そういうことでしょうね。

伊藤(隆)　部隊にいて、学校に行って、部隊に戻って、これを何回も繰り返すわけですね。

伊藤(圭)　それを、何回も繰り返すわけです。昔はよく、陸海軍では下士官というのが本当に強い、と。上に来るのは、教育を受けた成り立ての、ホヤホヤの少尉とか中尉だと言うのですけれども、自衛隊の場合は、そこに行くまでに時間が掛かるのではないでしょうか。最初の頃は、昔の陸海軍の下士官が入って来ましたけれども、その人たちが定年になって、早くに辞めるでしょう。あと、育つのがなかなか大変だったのではないかと思います。

■情報の聴取・解析・連絡

伊藤(隆)　実際のところは、下士官が支える部分というのは大きいわけでしょう。

伊藤(圭)　はい。ただ、今は昔の軍隊と違って、物凄いハイテクの時代でしょう。だから、これはなかなか容易ではないと思うのです。幹部の人たちだって、なかなか追い付けないと思うのです。そこのところが、どういうふうになっていくのかなと思うのですけれども……。

伊藤(隆)　ある部分が、専門家として非常に突出すれば、そう簡単に外からは分からないですよね。

伊藤(圭)　そうなんですよ。それから、ほかの配置に付けないでしょう。そうすると、高いポストの、ある職種に入った者は出世するけれども――端的に言うと、情報関係なんていうのは、上が詰まってしまって偉くなれないというような、そういう問題があります。昔の陸海軍の伝統でしょうけれども、オペーレーションを扱うのが主流ですね。戦車をやったり、何とかをやったりというものです。情報というのは、やはり傍系なのですね。そんなような差別がある。私も航空隊だったけれど、パイロットが主流で、「整備というのは、パイロットの言うことを聞いていればいいのだ」というような伝統がありました。そういうのが、やはり残っているのですね。

佐道　補給なんかも、そうですか。

伊藤(圭)　そうです。ところが、今の飛行機は、昔の我々の時代とは違って、全部、下でコントロールされているのです。だから本当は、パイロットが偉いのか、コントロールしている者が偉いのか分からないのですけれどもね。

佐道　それは、管制をする人たちということですか。

伊藤(圭)　攻撃機が来た場合に、その飛行機を自分のレーダーで捉まえるところまでは、下の、管制をする人たちの指示で飛ぶのです。上のほう〔要撃機〕は、〔相手の航空機が〕どこにいるのか、全く分からないわけです。だから、下の指示に従って飛んで行って近付くと、レーダーの中に相手が見えるわけです。それから、自分の戦闘になるわけですから。

伊藤(隆)　はあ……。そうですか。

佐道　そういう管制官も、民間の航空会社がやっている管制官と

は、また違う、独自に養成をしているわけですか。

伊藤(圭) そうです。これも航空自衛隊は非常に早かったのですが、「BADGEシステム」(base air defense ground environment system、自動警戒管制組織)というのを、昭和四十一年に導入しました。あのときは世界でも一番先ぐらいで、あのあとにヨーロッパが入れるのです。アメリカにあったのは、「BADGEシステム」ほどのオートマティックではなくて、セミ・オートマティックだったのです。ですから日本の導入は非常に早かったのです。だから、「BADGEシステム」なんて言っても、実際にそれが分かる人はほとんどいませんでした。航空自衛隊も、誰も分からないですよ。だけど、これがないと、これからの戦争はできないと言うので入れるわけです。それで、アメリカが半分の金を持ってくれるわけです。

我々の時代の戦争とは、今はもう全く変わってしまっているのです。さらに進んで行くと――偵察衛星がさらに進歩すると、対潜哨戒機なんか要らなくなってしまうと思うのです。空からの偵察で、全部分かってしまうでしょう。ところが、これは不思議なことなのですけれども、光は、あらゆるものを空中から捉えられるのですけれども、海の中のものは掴めないのです。今でも潜水艦を探すのは光ではなくて、音なのです。潜水艦の音を聞いて、それを電波に変えて位置を探すのです。ああいうのが解決したら、偵察衛星で、全部できますね。

伊藤(隆) でも、地下のものなんかは駄目でしょう。

伊藤(圭) 地下も駄目でしょうね。最近は、衛星で地質なんかも分かるのではないですか。そうではないでしょうか。

伊藤(隆) 例えば、地下に基地がありますね。

伊藤(圭) ああ、それはなかなか分からない。例えば、ミサイルなんかでも、外で訓練しているのは、すぐ分かります。これは、私もアメリカで見せてもらって、びっくりしたのですけれども……。ミサイルが置いてある場所から、配置している人の数まで、全部分かります。

伊藤(隆) 衛星で、ですか。

伊藤(圭) はい。ただ、見せてくれたときに、「どこだ」ということは教えてくれませんでした。だけど、凄い写真があるなと思いました。これが、二十年ぐらい前です。だから、今なんか、もっと凄いでしょうね。

佐道 日本の自衛隊の配置も、全部分かる。

伊藤(圭) それは、全部分かっています。そういう意味で、私はアメリカとソ連との間には、非常にギャップがあったのではないかと思います。

二十数年前に、私がアメリカに行ったときに、CIAで面白い話を聞いたのです。最近、ソ連――当時はソ連です――の政府から、「今年の我が国の麦の生長状況は、どうなっているか」と訊いてくると言うのです。それで、それを教えてやると言うのです。やはりソ連の技術では、そこまでは分からないのです。あんまり広過ぎるから、下で何をやったって、なかなか分からない。アメリカは、それを全部教えてやると言っていました。アメリカは、それを見て、「今年はソ連の麦の生育があまり良くないから、どれぐらい輸出しなきゃな」と、計算するのだと言っていました。これが、二十年前ですからね。

佐道 情報に関して、大韓航空機撃墜事件のときに有名になった「調査課別室」というのがございますね。電波を傍受して……という仕事ですね。あれは、特別な訓練をした人じゃないとできないと思いますが、陸上自衛隊の中に、そういう学校があるのですか。

伊藤(圭) 特に学校は……。通信学校とか、ああいうところで、もちろん調査学校でもやっていると思うのですけれども……。全体で言うと、千三百人か四百人。どこに、施設があるのだろうな。私が実際に見たのでは、三保にあります。それから、沖縄にあると思

います。それから、北海道にあると思います。そこで、通信を傍受しているわけです。

自衛隊の暗号の解読能力は、かなり高いのではないかと思います。これは、私が自分で判断できることではないのですけれども、防衛局長のときにアメリカに行ったことがあるんです。このとき、インマンという海軍中将が、そういう通信情報を聴取して解析する部門の部長だったのです。私を招待してくれて、ご馳走してくれました。それは、ヘリコプターで連れて行くのです。どこへ連れて行かれたのか分かりませんけれども、その本部に行って、ご馳走してくれて、「いろいろお世話になっています」というようなことを言うんですね。というのは、中国から朝鮮、それから沿海州の交信を、自衛隊が聴取していますでしょう。それを情報として、アメリカにやっているわけですけれども、それを高く評価しているのだなという感じがしました。先ほどの衛星なんかで、ちゃんと監視していますけれども、それを確認する意味で、そういったものも活用しているなという感じがありました。

佐道　そういう情報関係は、例えば内閣調査室とか外務省とか、そういうところとの連絡というのは……。

伊藤(圭)　そういう通信情報は、内閣調査室と、どこか三、四ヵ所には自動的に渡すようなシステムができています。警察も、そうだったかな。

伊藤(隆)　自衛隊におられる頃に、そういう通信技術や何かがどんどん発達していくということですか。

伊藤(圭)　そうですね。

伊藤(隆)　当初の頃は、そんな大したことはないわけでしょう。

伊藤(圭)　ないでしょうね。それに接触できるのは、調査課の者ですけれども、まあ、その頃は何もなかったと思うのです。防衛局になりましてから、調査一課、二課になって、通信情報をやっているのが二課のほうだったと思うのです。調査一課のほうはアタッシェを担当したり、あるいは公刊の資料を分析する。

主として調査二課のほうがやっていたものですから、そういった秘密情報が解読できるようになるのは、たぶん六本木時代の、おそらく四十年代に入ってからではないでしょうか。確か、その関係の米軍からの移譲というのは、かなり遅かったのではないかな。というのは、「ゾウの檻」みたいなものを、三沢に持っていますね。あれは、米軍が今でも持っているわけですけれども、あれと同じようなものが沖縄と三保にあって、それを受け継いだような格好だったと思います。ご存知のように、レーダーサイトは米軍が造って、航空自衛隊にそっくり残したのですから、それと同じような形だったと思います。

伊藤(隆)　日本の自衛隊というのは、アメリカに負うところが非常に大きいわけですね。

伊藤(圭)　それは大きいですね。アメリカに負うところが大きいというか、技術的には、ほとんどアメリカのお世話になっているのではないでしょうか。

伊藤(隆)　こちらから出すものは、あまりない。

伊藤(圭)　ところが、情報というのは、やはりギブ・アンド・テイクなのですね。物凄く評価されたのが、例のミグ事件のときなのです。ミグ25の資料は、二トンぐらいあったのかな。それは、物凄く向こうも喜んだ。航空自衛隊はその資料をずいぶん利用しているはずです。

伊藤(隆)　そうですか、やはりギブ・アンド・テイクですか。この間の北朝鮮の不審船の情報も、ちゃんと掴んでいて……(笑)。あの浮遊物とかいうのも……。

佐道　「陸」が「調別」(調査課別室)とかを持っていたり、航空自衛隊もいろんなことをやっていたり、各自衛隊が行っている活動は、当然、内局のほうに上がってくるわけですか。まとまって上がってくるのですか。

伊藤(圭) いや、別個に上がっていますね。

佐道 必ず、上がってくるわけですか。

伊藤(圭) 必ず、上がってくるという原則ですけれども、全部上がってきているかどうかは分からないです。ただ、ご存知のように、情報関係というのは、非常に隠したがるわけです。自分のところで持っていたがるわけです。中曽根(康弘)さんが長官のときに、情報本部を創ろうと思ったのですが、実現できませんでした。それは結局、各幕が持っている情報を出したがらないからです。情報の問題というのは、また、日を改めていろいろお話ししようと思うのですが、「陸」「海」「空」が勝手な情報を持ってくるものだから、防衛計画を作るときに混乱してしまうわけです。

佐道 それは、また改めて伺いたいと思います。

ちょっと前に話を戻しまして、防衛大学校のことですけれども、日本で唯一、防衛学というのを教えなければならないわけですよね。ほかの国にはきちんとあるでしょうけれども、戦後、日本には防衛学という体系的なものはなくて、教えられる人も限られてくると思うのですが、そういう防衛大学校の教官の選定というのは、基本的には学校側に任せているのですか。

伊藤(圭) そうですね、ほとんど学校です。学校長に一任しているような格好です。

佐道 槇さんに、ということですか。

伊藤(圭) 防衛学になると、文官の人ですから、こちらには分からない。おそらく、防大には監事というのがいますから……。これは、将官クラスが監事で行くのです。

佐道 交代で、ですか。

伊藤(圭) ……だと思います。私が防大を担当していた頃は「陸」だったのですが、その後、代わったと思うのですけれどもね。

佐道 その監事の方が?

伊藤(圭) そう思います。それで大体、決まるのではないかと思います。防衛学については、ほかの人はちょっと分からないでしょうから。文官のほうは、先生が自分のいた学校から連れて来たり……。だから、槇先生が慶応だから慶応大学、それから東大、東北大あたりが多かったみたいです。

佐道 防衛学の関係では、創設の頃はどういう方ですか。

伊藤(圭) これは、旧軍の人です。何をやっていたかというと、大体が戦史です。

伊藤(隆) でも、いま聞いたら、戦史教官というのは、本当にいないそうですね。

伊藤(圭) ああ、そうでしょうね。

伊藤(隆) つまり、戦史をやる人を養成してこなかったのでしょう。

伊藤(圭) 実際は、戦史室というところに資料があるのですよ。だから、あれなんかを体系的に研究すると、いろいろ面白いと思います。

伊藤(隆) あれで、『大東亜戦争・戦史叢書』を作ったわけですからね。作った人たちは、ほとんどリタイアですからね。

佐道 戦史室は、最初は陸上自衛隊の下にあったのですけれども、それが研修所のほうに移るわけですね。

伊藤(圭) 防衛庁が発足したときには、もう戦史室というのは研修所にありました。だから、私が教育課のときに、研修所の担当の部員というのがいて、これは警察から来た方でした。戦史室が「陸」にあったというのは、おそらく本当の初期ではないですか。越中島時代から、もう研修所に付いていました。

伊藤(隆) 術科学校の教官は、術科学校で学んで、実地を経験した人が、やがて、今度は教官になって来るという形ですか。

伊藤(圭) そういう形です。ただ、今は日進月歩ですから、なかなか大変だと思います。

伊藤(隆) 本当に、そうだと思います。

伊藤(圭)　私が見ていますと、とにかく軍事技術の進歩というのは物凄いですね。我々は、海軍におったのですけれども、ジェット機なんていうのは全く知らないわけですから。それが最初からジェット機が始まるわけですから、大変だったと思います。

佐道　最初の教官というのは、自衛隊ができたときに入ってこられた旧軍関係の方が中心ですか。

伊藤(圭)　そうですね、多いです。あの頃は、まだ学校と言っても素朴なものでしたからね。例えば、戦車の教育とか、歩兵(普通科)ですね。それから、飛行機。飛行機と言っても、セスナぐらいですから。だけど、ヘリコプターになると、大変でした。

佐道　アメリカに教育を頼むとか……。

伊藤(圭)　その頃は、留学が物凄く多かったです。昭和三十年代の初め頃というのは、私も記憶があるのですけれども、日航に払う旅費が年間一億円ぐらいありました。だから、いいお客さんだったのです。三十年代の一億ですよ。日航は喜んでいました。

佐道　年表を繰っていましたら、防衛庁ができた年、昭和二十九年の十一月に、海上自衛隊が米国留学生を派遣するというのが載っていました。

伊藤(圭)　そうですね。

佐道　「陸」「海」「空」で、どこが一番盛んだったのですか。

伊藤(圭)　でき上がったときは、最初は特に航空自衛隊だったと思います。もう、何をやっていいか分からないわけですから、「航空」はとにかく、そっくりアメリカの空軍を真似しました。組織から、教育の仕方から、全部真似していましたから。

伊藤(隆)　洋服まで……(笑)。

伊藤(圭)　いまお話にありましたけれども、海上自衛隊というのが、海軍の伝統を守って、一番保守的でした。

佐道　どういう意味で、保守的だったのですか。

伊藤(圭)　「俺たちがやったことは間違いない」という自信があるものですから、教育なんかも海軍のやり方でやるのだというようなことでした。ただ、分からないことはアメリカに倣うけれども……というような姿勢でした。

佐道　昔の、海軍兵学校以来の伝統的な教育を、と。

伊藤(圭)　そうです。それで、結局、困ってしまうわけです。「江田島に全部あった術科学校も、分けなければいかん」と言うので、機関科を横須賀に持って来たり、航空関係を松戸に持って行ったりなんかするわけです。

伊藤(隆)　まだ先生の頃は、お医者さんのほうは学校を別に作っていなかったですか。

佐道　防衛医大。

伊藤(圭)　これは、私が防衛課長のときですから、四十八年です。あの頃は、医者が非常に足りなかったものだから、とにかく作ろう、と。

伊藤(隆)　自前で作る、と。

伊藤(圭)　これは、中曽根さんの構想なのです。「陸」「海」「空」は、物凄く反対したのです。というのは、あれを作りますと、施設のための金を全部……。それは、防衛費のプラスになるわけではなくて、その中で負担しなければならない。それで、「陸」「海」「空」は物凄く抵抗したのです。それを、中曽根さんがやった。ところが、今はもう、お医者さんはほとんど満杯になってしまったみたいです。

佐道　本当に、時が経つと、いろいろと……。

伊藤(圭)　それから、四十何年か、私が防衛課にいた頃に一番苦労したのは人集めです。街頭に出て、誘ったりなんかした時代があるのですが、今はもう、なかなか辞めないものだから、充足率は十分だと言うのです。

伊藤(隆)　若い人も入ってくるということですか。

伊藤(圭)　入ってくるのでしょうね、就職の問題があるから。大体、応募が五倍あると、非常に優秀な人が採れると言うのですが、いま

四・五から五の間ぐらいですからね。

伊藤(隆) じゃあ、かなりいいのですね。

伊藤(圭) はい、いいんです。防大なんていうのは、〔競争率が〕三十倍とか四十倍になっています。防衛医大なんていうのは、六十何倍とか……。

伊藤(隆) 凄いですね。

■女性自衛官の採用をめぐって

佐道 自衛隊に入って、いろんな訓練を受けると、資格が取れるということがありますね。あとで、次の就職に有利なように……。それは、最初からそういうことも考えたのですか。

伊藤(圭) そういうことを考えた時期はありました。あんまり人が来ないので……。だけど、今は、もう資格を取るのが普通になってしまいました。例えば、車の運転なんていうのは、ほとんどできるようになるのではないですか。それから、飛行機なんかでも、我々の頃は、民間のパイロットの資格がなくても飛べたのです。今は、民間のパイロットの資格を取らせているみたいです。そうすると、辞めたあとも使えるものですから。もっとも、取らなくても自衛隊機には乗れるのですけれども、みんな資格を取るようにすすめているみたいです。

佐道 民間に、別に資格があるのですか。

伊藤(圭) 民間の資格があるのです。それから、施設科というのがありますでしょう。あそこへ行くと、ブルドーザとか、ああいうのも全部取れるわけです。

佐道 特殊免許ですね。

伊藤(圭) 就職には有利なんでしょうね。

伊藤(隆) あと、爆発物処理とか……。

佐道 日本では、そういうことを教えてくれるところが限られていますからね。総合火力演習をやっているのは、富士なんとか教育隊……。

伊藤(圭) 富士学校です。それから、教導団というのがあると思います。

佐道 あそこには、陸上自衛隊の人はみんな、ローテーション的に行くわけですか。

伊藤(圭) 歩兵と戦車と砲兵かな。それは、必ず行きます。おかしな話ですが、看護婦ではなくて、男の看護士がいますね。それなんかは、衛生学校で教育を受けています。それから、婦人自衛官の看護婦さんは、看護学院というのがありますから、そこに入って……。

伊藤(隆) 女性を採るのは、始めはいつ頃ですか。

伊藤(圭) これは話すと大変長いのですけれども、昭和四十三年に、海原さんが「陸上自衛隊で女性を採る」ということを決心してやるのです。それが決まるのですけれども、猛反対でした。

伊藤(隆) どこが、反対ですか。

伊藤(圭) 陸上自衛隊が……。とにかく、国防というのは男の仕事だという伝統があるでしょう。昭和四十年代ですから、まだそういう伝統があって、絶対反対だった。それを、彼の押しの強さでやるわけです。あの当時、外国は、みんな女性兵士がいましたから。

私は、四十八年に、防衛課長のときに「海」と「空」で女性の採用をやったわけです。これは、物凄い反対でした。今になってみると、「陸」が三千五百人かなんかでしょう。「海」「空」だって千五百人ぐらいずついるわけですから、大変な数になってきたわけです。

伊藤(隆) 昭和二十年代、三十年代という頃には？

伊藤(圭) 全然いないです。私が広報課長の頃、四十三年頃に、婦人自衛官教育隊というのが、今の朝霞（埼玉県）にできたのです。今でも、それはあるのではないかな。朝霞にできて、私なんかも話

しに行ったりしたことはありました。今はもう、「海」も「空」も、ちゃんと婦人自衛官の教育がありますけれどもね。

ただ、女性の場合、問題点としては、高くつくのです。施設なんかも、もちろん別に造らないといかんのですが、別に造るにしても、男の場合には部屋の中に五十人ぐらい入れておいても、問題はありません。ところが、女の人は五十人も一緒にいると、精神的におかしくなってしまうらしいです。だから、どんなに多くても十人ぐらいの部屋を造らないといかん。だから、大蔵省は金が掛かると言って、だいぶ嫌がったのです。そんなことがありました。

佐道　造ろうと決心されたのは、世界を見渡して、「やっぱり」という……。

伊藤(圭)　いや、これは海原さんも言っていたのですけれども、戦前は、日本人は全て国防に関心を持たざるを得なかったと言うのです。なぜかと言うと、徴兵があるでしょう。誰かが行くわけです。そうすると、親、子ども、妻、みんな関心を持つわけです。ところが、今は募集の時代だから、全然関心を持たなくなるでしょう。そういう中で、女性が国防というものを理解するためには、実際に入ってみる。そうすれば、子どもにだって話ができるじゃないか、と。そういうことが、どうも最初のきっかけだったみたいです。それから、外国だって、みんなやっているじゃないかというようなことで……。

佐道　女性の海上自衛隊は「WAVE」とか、いろいろ略称ができたりして、なかなか格好いいんですよね。テレビのニュースで見ました。

伊藤(圭)　それと、私が防衛庁にいる頃に思ったのですけれども、あの人たちは隠れた高額所得者なんですよ。というのは、とにかく衣食住を保証されているわけでしょう。そうすると、給料として十数万円もらうわけですけれども、これが全くの小遣いなのです。十数万円が小遣いというのは、我々の生活では容易じゃないでしょう。

佐道　本当ですよね、羨ましいです。

伊藤(圭)　四年いると、確か四百万円ほどの退職金をもらうのです。

伊藤(隆)　当初から、音楽隊はございましたか。

伊藤(圭)　これは、なかったです。できたのは、自衛隊になってからではないでしょうか。保安隊の頃はなかったと思います。これがまた面白いのは、最初、海原さんが反対しまして……。

伊藤(隆)　音楽隊に、ですか。

伊藤(圭)　それでゴタゴタしたのですけれども、とにかく定員なしでやるというようなことで……。

伊藤(隆)　定員なしということは、つまり現在いる隊員の中で音楽隊をつくる、と。

伊藤(圭)　そうそう、同好会みたいな格好でやろうというようなことを……。まあ、それがだんだん組織化されたのでしょう。

伊藤(隆)　今は、そうではないでしょう?

伊藤(圭)　今は、そうではないですね。ちゃんと施設を持っていまして、朝から晩まで音楽をやっています。

伊藤(隆)　僕は、数年前に音楽祭に招待されて行って、「凄いもんだな」と思って、びっくりしました。

伊藤(圭)　あの音楽祭を初めてやったのが、私と海原さんなのです。

伊藤(隆)　海原さんは反対していても、やはり、それはやる、と。

伊藤(圭)　海原さんは、ああいう音楽祭というのには積極的なのです。むしろ次官――三輪(良雄、昭和三十九年十一月～四十二年十二月事務次官)さんのほうが、反対しました。「ああいう軟弱なことをするな」と言うのです。海原さんは、「大いにやれ」と言うので、広報課長の僕も弱っちゃって……。しかし、やったら、人気を呼んで、今はもう大変な騒ぎです。

伊藤(隆) 大変ですね。

佐道 大変優秀なんですよね。

伊藤(隆) 優秀ですよ。演出なんかも、非常に上手だし……。

伊藤(圭) ああいった、旗を使ったり、動きのある音楽をやるというのが、あの頃はなかったものですから、非常に注目されました。鼓笛隊なんていうのは、女の人がやるでしょう。あれなんか、日劇の舞台に出たことがあるのです。日劇ダンシングチームと一緒にね。

佐道 さっきの富士の話ですが、毎年、総合火力演習というのが九月ぐらいにありますね。ああいった演習を、一般に広く公開してやるというのは、あれはいつぐらいからですか。

伊藤(圭) いつ頃でしょうね。私が広報課長の頃、割合に自衛隊の実態を公開しましたから、総合的なものも、あの頃から始めたのかな。その前に、四十年代の初めですが、各地で展覧会とか博覧会があるわけです。そうすると、「自衛隊も出してくれ」という依頼がありました。というのは、向こうも、なかなか考えているわけです。自衛隊が展示すると、場所を取って、金が掛からないでしょう。だから、「出してくれ」と言うのです。それで、よく各地の博覧会に出したのです。戦車を出したり、飛行機の模型を出したり、小規模の展示演習なんかもやったり、そんなこともやりました。これは、おそらく先生方はご存知ないと思うのですけれども、三越本店の上にF104を展示したことがあるのです。屋上に……。

佐道 えっ、どうやって?

伊藤(圭) クレーンで吊り上げてね。あれは、何年頃だったかな。僕が広報課長ですから、四十一、二年頃ですね。

佐道 だって、二、三十トンあるのではないですか。

伊藤(圭) でしょうなあ。もっとも、これは事故で廃物になった飛行機で、それを外側だけきれいに修復したので、それほどの重さはなかったと思います。

伊藤(隆) 中身はない、ということですね。

■概算要求の基礎をつくる——防衛局第一課時代

伊藤(隆) ちょっとお話が先に進み過ぎたかな。防衛局の第一課の話をしていただきましょう。防衛局第一課というのは、何をしていたのかということですね。

佐道 教育局に三年ぐらい、いらっしゃったわけですね。それから、防衛一課という防衛行政の中枢に移られるわけですが、雰囲気的な違いというのはございましたか。

伊藤(圭) 私が教育課にいる頃、毎年の業務計画というのを作るわけです。一年間、どういうことをやるかということです。それについては、教育関係は各幕僚監部の教育担当の部局の者と調整して、業務計画の場で説明するわけです。そして、それを取りまとめる防衛一課の部員が、「来年の教育関係は、こういうふうにしていこう」と決めて、それが庁議で決まるわけです。従って、防衛課というのは、いろんな意味で、全体の総合調整をやる課だという感じはありました。

実際に行ってみて、自分がそれを担当することになりました。私は、最初に防衛一課に行ったときには「海」の担当だったのです。「海」の担当で有難かったのは、自分が海軍にいたものですから、その頃の海上自衛隊の話というのは、大体分かるのです。それで、全体を見ながらやっていました。ただ、非常にいろんなことを勉強しなきゃならんなという感じはありました。その頃は、亡くなった高橋幹夫さん——警察庁の長官(昭和四十七年六月~四十九年十月)をやった——が一課長で、海原さんは日本大使館参事官(昭和三十二年十一月~三十五年二月)で、アメリカに行っていました。

佐道 最初に移られたときには、重ならなかったわけですか。

伊藤(圭)　重ならないです。それで、彼が帰って来て、考査官というのを七ヵ月くらいやって、その次に防衛局の審議官というのになるのです。次長みたいなものね。そのときに、私は防衛一課において、「これは、うるさいのが来た」なんていうようなことを、どうも本人に言ったらしいのです。あとでよく、「おまえに言われた」というようなことを言うのですけれどもね。彼が来てから、やはり非常に厳しくなりました。それまでは、加藤陽三さんが防衛局長(昭和三十二年八月～三十五年十二月)で、割合にのんびりしていました。

佐道　加藤さんは、どういう印象ですか。

伊藤(圭)　加藤さんというのは、とにかく真面目な人という印象があります。びっくりしたのは、私が防衛一課の部員のときに、彼と一緒に出張したのです。岐阜まで海上自衛隊の飛行機で行って、岐阜の飛行場から部隊に行くときかな。何か車に一緒に乗っていて、田舎の道を走っておって、「伊藤君、僕は、この田舎を見ると郷愁を感ずるのです」と。それが、初めての言葉です。「ああ、凄い人だなあ」と思って……。それまで、飛行機の中でも、何も言わないですからね。非常に真面目な人だという感じです。

　私なんかから見ると、「あの人は、最も政治家にはふさわしくない人だ」と思った人が政治家になったので、びっくりしたのですけれども……。

佐道　そうですよね。事務次官(昭和三十八年八月～三十九年十一月)をやられて、そのあと政務次官(昭和五十年十二月～五十一年九月)をやられた。

伊藤(圭)　結局、あの人も早く議員を辞めてしまいましたね。三期ぐらいで……。向かなかったのでしょうね。

伊藤(隆)　防衛一課で、海上自衛隊担当ということですけれども、一課はどういうふうに構成されていたのですか。

伊藤(圭)　一課は、部員が七、八人いたのかな。「陸」「海」「空」の担当を二人ずつ、ダブルでやっているのです。私が「海」を最初に担当したときは、真島(健)という、後にJASの社長をやった、運輸省から来た人と一緒にやりました。そのあと、私が主になって、サブになったのが角田(達郎)という、あとで海上保安庁の長官(昭和五十九年七月～六十年六月)をやった人です。

　それから、私は長官の秘書官になって、帰って来て、しばらくブラブラしていて、そして、いわゆる総括の部員というのになったのですかね。

伊藤(隆)　総括の部員というのが、上にいて……。

伊藤(圭)　そうです。そして、「陸」「海」「空」が二人ぐらいずついる。そのほかに、例えば研究開発なんかを担当している人もいました。

佐道　一課の中にですか。

伊藤(圭)　ええ。私も、あとで研究開発を兼務した記憶があるのです。まあ、大したことはやらなかったですけれども……。

佐道　総括というのは、いわゆる主席事務官になるわけですか。

伊藤(圭)　主席部員というのですかね。

伊藤(隆)　「陸」「海」「空」、それぞれの来年度の業務計画を受けているわけですか。

伊藤(圭)　業務計画が来るのは、その担当のところに来るわけです。

伊藤(隆)　そこで、やはりやり合うわけですか。

伊藤(圭)　物凄く、やり合うわけです。だから、「内局、怪しからん」とか何とかいうことは、そういうところから来るわけです。「経験のない奴が……」というようなことを、よく言われました。ただ、あの頃は、私の記憶によると、いろいろ言い合ってはいましたけれども、とにかく何とか自衛隊を作っていこうという気持ちはお互いにありました。だから、いろんなことを言い合っても、他所から見るほど仲が悪かったということではないと思うのです。

伊藤(隆) 「陸」「海」「空」の調整をするのは、首席事務官ですか。

伊藤(圭) 大体は課長ですね。

佐道 首席は、どなたですか。

伊藤(圭) 私のときは、高瀬(忠雄、のち人事教育局長)という人でした。

佐道 そのとき、久保さんは？

伊藤(圭) 久保さんは、まだ課長になっていなかったな。部員で、首席だったかな、首席じゃなかったかな？ その制度調査委員会みたいなことを、主にやっていました。同じ部員なのですが、いわゆる制度調査委員会で何をやったかと言うと、長期計画のほうです。

佐道 長期計画というのは、いわゆる「年次防(年次防衛力整備計画)」というふうになっていくものですか。

伊藤(圭) そうです。私は、ちょうど「一次防」が終わって、「二次防」をやっている頃に行ったのかな。

伊藤(隆) 「二次防」の準備をしているということですか。

伊藤(圭) そうですね。

佐道 海原さんは、「自分が潰した」と、よくおっしゃるのです。例えば、「赤城構想」というのがありましたが、あれなどは……。

伊藤(圭) 久保さんは、もう終わっていました。久保さんは、一度警察に帰るのです。そして、神戸の警務部長かなんかをやっている頃です。「赤城構想」をやっていたのは、小田村(四郎)さんです。

佐道 そうなんですか。

伊藤(隆) じゃあ、小田村さんに話を聞かないと駄目だな。

佐道 「赤城構想」の中に、ヘリ空母とかいろいろなものが入っていて、「こんなものは現実的ではない」ということで、海原さんが「潰した」ということになるんですね。しかし、これは「統幕」や「制服」の意見もかなり取り入れて作ったというふうに、「赤城構想」自体の中に書いてあるのです。それは、そういうことだったのですか。

伊藤(圭) そうだと思います。海原さんは、「陸」「海」「空」の意見を取り入れるにしても、物凄く議論した上でやるわけです。けれども、その点で、やはり小田村さんという人は、人柄も穏やかですから、なるべく「各幕」の言うことを聞いたのだと思います。そこで、海原さんは不満だったのだと思うのです。彼が、「二次防」が決まる直前に防衛局長になって、全部、御破算にするわけです。そのときに、計画官に連れて来たのが村上信二郎さんです。今の村上誠一郎代議士のお父さんです。村上さんに担当させて、二、三ヵ月で作り直させたのではないですかね。そのとき、私は防衛一課にいて、いろいろ意見を述べたりなんかはしました。

佐道 海上自衛隊の担当になられて、ヘリ空母の話などは、やはりお聞きになりましたか。

伊藤(圭) それは長期計画のほうで、まだ年度の計画には出てきませんから、直接、具体的な説明は聞いていないのです。ただ、そういうことを小田村さんのところでやっていましたから、話には聞いていました。一万トンの空母で十六機積めるでしょう。

佐道 年度計画では、一番何が問題ですか。

伊藤(圭) その年に、例えば定員をどのぐらい増やすとか、教育はどういうものをやるとか、飛行機を何機買うとか、「海」の場合には船を何隻造るとか、そういうことが中心でした。私は三十六年に秘書官になるのですけれども、その最後にやった業務計画で――これは、今では考えられないのですが――一年目にKM2という新しい練習機の予算を取ったのです。

伊藤(隆) これは、概算要求になっていくわけですか。

伊藤(圭) 概算要求の基礎になるわけです。それに基づいて、概算要求を請求する。

伊藤(隆) その段階では、こういう飛行機が幾ら幾ら……という形で出てくるわけですか。

伊藤(圭)　そうですね。大体、「こういう練習機で、一機幾らぐらい欲しい」と言う。そういう詰めた話は、概算要求の説明のときに経理局にするわけです。防衛局の場合には、全体で何機ぐらい造って、どれぐらいの人員を養成するかというようなことを議論するわけです。よく私が海原さんに言われたのは、防衛局の議論というのは理屈で議論しなきゃいかん、と。経理局の場合には、「金が無い」と言えば、それでいいけれども、それでは相手が納得しないから、十分勉強して、相手を納得させるだけの議論をしなければいかんということを言われました。

伊藤(隆)　「海上」の場合ですと、アメリカからもらった船の艦齢が超過しますよね。代艦を造っていかなければならない。それは、かなり予算的には大きいのではないでしょうか。

伊藤(圭)　これは大きいです。結局、私が担当している頃は、アメリカが金を払って、日本で造って、日本に貸与する、そんな方法も採りました。

伊藤(隆)　武器貸与というものですか。

伊藤(圭)　最初の頃の「てるづき」(護衛艦、平成五年九月に除籍)もなくなっちゃった。

伊藤(隆)　それは、アメリカの所有ですか。

伊藤(圭)　いや、アメリカが金を出して、日本で造って、日本に供与するのです。だから、日本のものになるのです。先ほどお話ししました「ＢＡＤＧＥ」なんかも、百何十億円かの四分の一かな、アメリカが出すのです。それで、日本のものになるのです。それから、ナイキやホークもそうなのです。あれも、アメリカが四分の一かなんか出して、その代わりに日本が義務を負うわけです。「二十四時間待機をやれ」と言ったり、そんなことがありました。

佐道　三十五、六年ぐらいまでは、アメリカが幾ら金を出してくれるかということが、一つの予算になりましたね。

伊藤(圭)　それは、ありました。

伊藤(隆)　各幕僚部は、直接に、向こうといろいろやって？

伊藤(圭)　そうやるみたいでした。

伊藤(隆)　その結果が出てくるという形になりますか。

伊藤(圭)　そうですね。

伊藤(隆)　相当戦わないと……。

佐道　それは、海上幕僚監部とやりあうわけですか。

伊藤(圭)　そうです。

佐道　当時、伊藤先生のカウンターパートになった海上幕僚監部の方というのは？

伊藤(圭)　今、課長の頃の人は生きていますけれども、部員の頃の人は、この間、鮫島(博一)さんが亡くなりましたから……。

佐道　鮫島さんだったのですか。

伊藤(隆)　しまったな、鮫島さんも聞けば良かったな。

伊藤(圭)　それから、飛行機の関係では、矢板康二さんが今でも生きています。彼は海将になりました。

佐道　ヘリ空母に関して、昔の資料を見ていましたら、海上自衛隊がアメリカ海軍といろいろ協力して、「アメリカ海軍から、いろいろな援助をしてもらうという約束ができているのだ。だから、認めてくれ」というような話が出てくるのですが、そういう話はあったのですか。

伊藤(圭)　よくありました。

伊藤(隆)　かなり一般的なのですか。

伊藤(圭)　そうですね。一九六〇年頃というのは、ご存知のように日米のＧＤＰは――当時はＧＮＰと言いましたが、十対一とか九対一ぐらいでしょう。非常に日本が貧しかったから、アメリカが何でも出してやるというようなスタンスでしたからね。

伊藤(隆)　その頃になると、日本は高度成長期に入りますからね。

佐道　そのあとの成長があまりにも凄いものですから、当時の姿が何かこう……。

伊藤(圭) それは全くそうです。だから、おかしな話ですけれども、自主防衛ということを最初に言ったのは池田(勇人)さんなのです。しかも、池田さんが自主防衛と言ったのは、何でもないのです。アメリカのギル・パトリック国防次官補が来て、「これからは無償供与をやめて、全部有償供与にする」と言ったら、池田さんが、「そんなことはいいよ。金は払う。それが自主防衛だ」と言った。それが、一番最初の言葉です。だから、「自分の力で、自分の国を守る」なんていう話でも何でもない。「今までもらっていたものに、金を払います」と言っただけなのです。それが、自主防衛なのです。

佐道 一九六〇年代というのは、自主防衛という話と「防衛整備国産化」の話とが対になって出てくることが、結構あるような気がするのですが、国産化という話は?

伊藤(圭) 「二次防」が具体的に始まる頃ですね。私が秘書官をやっておったのが三十六年から七年ですが、その頃に「『二次防』で、国産化に力を入れよう」ということになったのです。いわゆる防衛産業育成というところから……。

佐道 池田さんの頃ですか。

伊藤(圭) そう、そう。だから結局、戦車とか装甲車とか、ああいうものは、何年間で何台造るということで計画的に造ってしまうのです。そういう時期でした。船というのは、技術があったから、二十八年から始まっています。三十一年頃は、潜水艦の建造を始めます。

国産化に遅れてしまって、一番〔国産に〕努力したのが「空」でしょうね。ジェット機なんて、なかったですから。F86の国産は三十一年頃に決まりますが、最初のうちは、ずっとノックダウン(現地組立方式)でした。それでも、早いほうではないでしょうか。三十三年か三十四年頃は、もうやっていましたから。とにかく、私が秘書官をやっておった三十七年の四月一日に、〔ロッキード社製の〕F104がアメリカから渡されまして、最初のフライトを長官と一緒に見に行きましたもの……。

佐道 岸(信介)さんの時代――昭和三十三年ぐらいに、統合幕僚会議の強化問題とか、組織変更のこととか、いろいろ話があったと思うのですが、そういうことはお耳に入ってきましたか。

伊藤(圭) それは直接、私は関係していないので分かりませんが、統幕会議を強化したいという話は、ずっとありました。というのは、アメリカの統合参謀本部のような機能を、統幕会議に持たせたいという気持ちがあった。やはり、「陸」「海」「空」を統合運用するという思想がずっとあったものですから。ところが、統幕会議を強化すると言うと、必ず「陸」「海」「空」が反対するのです。いつも内局が反対したみたいですけれども、必ずしもそうではなかったのです。

伊藤(隆) やはり、総論賛成で、各論反対という……。

伊藤(圭) そういうことになってきますね。先ほども申し上げたのですけれども、情報なんていうのも、自分のところで抱えていて、なかなかほかにはやらない。だから、中曽根さんのときに情報本部を創ろうとして、失敗してしまうのです。

佐道 大変面白いお話なので、改めて時間を取って……。

伊藤(隆) 日本のCIAの失敗ですか(笑)。

佐道 ちょうど、岸さんの頃に、防衛庁の「省」昇格問題というのがずいぶん議論されているようですけれども……。

伊藤(圭) そうですか。私は、それはあんまり記憶にないです。

伊藤(隆) あれは、外側の話なんじゃないかな。

■国防会議の設置

佐道 防衛局に移られる前ですけれども、先生が最後に行かれる国防会議というのが、すったもんだの末に決まりますね。

伊藤(圭)　そうですね、三十一年に決まって……。

佐道　国防会議の事務局を大きくして、いわゆる旧軍の人が入ろうとしたとか、いろいろなことが言われていますけれども、そういう経緯については、何かお聞きになっていますか。

伊藤(圭)　それは、直接聞いたことはありません。ただ、そういう話があったということは、あとで聞きました。やはり、国防会議というのも、アメリカの安全保障会議みたいなものが頭にあったようですね。ところが、全然違うのは、アメリカの安全保障会議というのは、事務局に九十人か百人ぐらいいるのですが、国防会議はせいぜい二十人ぐらいでしょう。だから、なかなか、そうはいかなかったみたいです。それと、国防会議は、出発が不幸だったと思うのです。例のグラマン・ロッキードの問題があったでしょう。あれに、国防会議の事務局が絡んでしまったのですね。だから、事務局も捜索されたみたいです。あのとき、大蔵省から来ていた参事官が一人辞めるでしょう。ああいう問題があったので、かえって「国防会議というものは、強化するといかんのではないか」という雰囲気が出て来たのかも知れませんね。グラマン・ロッキード問題のときに、「機種選定の最終の決定権は、国防会議が持っているのだ」というような感じがありましたからね。そうなってくると、防衛庁も警戒するし、大蔵省も警戒するしね。そんなことで、だんだん強化論は沈静化していったのではないでしょうか。

佐道　防衛庁の中にいらっしゃったときに、国防会議というのは、どういう存在だったというふうに見ておられたのでしょうか。

伊藤(圭)　私が防衛課長のときは、海原さんが事務局長(昭和四十二年七月～四十七年十二月)だったでしょう。これは、やはり凄かったですよ。「四次防」をやるに当たっては、国防会議の事務局を通らないと、全く案になって行かなかったのですから。だから、国防会議というのは、事務局長の能力によってずいぶん違うな、という感じがしました。海原さんのあとに来た内海(倫、昭和四十七年十二月～五十一年十二月)さんの頃は、ほとんど防衛庁の言いなりでしたから。だから、亡くなった西広(整輝)君あたりが向こうの参事官と話し合ってやったものが、大綱になったのです。それから、私の前の久保卓也(昭和五十一年十二月～五十三年十一月)さんは、一つの理論を持っていましたから、「何か理論づけしたいな」というような感じがありました。けれども、早く亡くなられたものですから……。

佐道　海原さんによれば、「赤城構想」を潰す前に、国防会議のところで差し止めになっていたと、おっしゃっていました。

伊藤(圭)　ああ、そうですか。僕は、その辺は知りません。まだ下っ端だったですから。ただ、最初の「中曽根構想」を潰したのは、海原さんが国防会議の事務局長のときですからね。

伊藤(隆)　まあ、何でも潰しますね。

　さて、防衛局の第一課で、「海」の担当でいらっしゃった。そうすると、年度計画の段階は大変お忙しいだろうと思いますが、それ以外の時期の日常業務としては、どういうことを……。

伊藤(圭)　日常業務としては、それほど忙しくないのですけれども、—これはまた海原さんの方針でもあるのですが、「その業務計画が、どういうふうに実行されているかチェックしろ」と、盛んに言われました。四半期に一回、その実施状況というのが報告になって上がってくるのです。そういうものを検討して、「なぜ、これができなかったのかということの原因を追究しろ」と、よく言われました。そういう意味では、忙しくはなかったけれども、緊張感はありましたね。

伊藤(隆)　やはり現地に行って、調査するということもやるわけですか。

伊藤(圭)　これは、あんまり予算がないものですから、年にせいぜい二回ぐらいでした。

佐道　出張旅費がないということですか。

伊藤(圭) そうそう。ただ、こういうことはありました。海上自衛隊の定員を増やしたいというときに、海原さんから「いかん」と言われて、それで僕も癪に障って、一人で大湊に行きました。これは出張旅費でも何でもなく、自分で行って、全部調べて来たことがありました。やはり、実際を知っていないと、抵抗できないと思ったから……。

佐道 いろいろ話を聞いても、実態をよく見ていないと、対応できないのではないかなと思ったのですが……。

伊藤(圭) そうですね。まあ、実態を知る努力はしたのですけれども……。結局、四半期ごとの報告というのも、こんなに厚いものですから、それを調べると、かなりいろいろな実態が分かるわけです。ただ、日本人の悪い癖で、一度やってしまうと、あとは見ないでしょう。予算でも、そうです。だから、実態を調べていけば、ある程度分かるのです。それで、おかしなところを、「これは、どうなっているんだ」と訊けば、いろいろ回答が来ました。

佐道 報告というのは、各部署が作ってあげてくるわけですか。

伊藤(圭) 「陸」「海」「空」別に作って持ってくるのです。あれはなんていう名前だったかな、四半期に一回ずつあがってくる業務報告。

佐道 幕僚監部がとりまとめて。

伊藤(圭) そうそう。

伊藤(隆) 幕僚監部にはそれぞれのセクションから出すわけでしょうね。

伊藤(圭) そうです、来るわけです。

伊藤(隆) 四半期ごとの業務報告だったらいいですね。それはだいぶ分かりますよね。

伊藤(圭) それはもう、本当に分かるのです。

佐道 防衛庁自体が、新しい役所で、いろいろなところからの寄せ集めみたいなところが最初にあったと思うのですけれども、防衛一課というのはやはりいろいろなところから来られたのですか。

伊藤(圭) そうですね。防衛一課は、運輸省、警察、それから我々みたいに人事院から行った者もいました。そんなところだったかな。

佐道 大蔵は？

伊藤(圭) 大蔵も来ていました。小田村さんなんかが大蔵です。あ、それから外務省もありました。

佐道 やはりそれは定ポストになってくるわけですか。必ず大蔵から一人来るとか。

伊藤(圭) というより、例えば防衛課長あたりが、外務省の人が帰るときに、後をくれないかということで話をしてもらっていたみたいですけれども、必ずしも定位置ということはなかったです。ただ、例えば経理局長とか装備局長。装備局長は通産の定位置、経理局長は大蔵、これはありました。それから、例えば防衛局長というのは大体警察の人でした。あとは、例えば装備局の管理課長は通産から来ていました。それから、経理局の会計課長は大蔵から来ておった。そういうのはありました。海原さんが防衛局長、官房長の頃は、だんだんそういうのを排除しようという方向に進んでいきましたね。

佐道 今も経理局長は大蔵の。

伊藤(圭) 今は防衛庁の人ですよ。大蔵から来ているのは次官だけではないかな。

佐道 一時、旧内務省というか警察関係の方が次官になられるのが続いて、それが、大蔵と警察関係の方が交互になったりして、ということがあったのですが。

伊藤(圭) 私の記憶では、大体海原さんがいる間というのは、次官になったのはほとんど警察関係でした。海原さんがいなくなってから、大蔵の人がなるようになりました。

佐道 それは、そういう時点で大蔵の力が強くなったのでしょう

か。

伊藤(圭)　なったのでしょうね。というのは、大蔵の人で最初に次官になったのは田代(一正)さんではなかったかな。昭和十八年入省の田代さんがやってから、今度は久保さんが同じ十八年組でなるわけです。そのあとが、二十二年入省の亘理さんがなったのかな。

佐道　防衛一課は海原さんのあと、高橋課長ですね。このときは、だいぶ仕事の仕方とかは違ってきましたか。

伊藤(圭)　そうですね、割合に高橋さんという人は親分肌で、任せるというような感じだったものですから。その下で小田村さんなんかもやっておられましたからね。

佐道　課は、全部で七、八名ですか。

伊藤(圭)　いや、全部でやはり十人ぐらいいたかも知れませんね。二人、二人、二人、それから先任がおって。あとは、あれは計画官室といったのかな。小田村さんのところで、「陸」「海」「空」担当が一人ずつおって、それで長期の〔計画〕をやっていましたから。

佐道　それは別の部屋になっているのですか。

伊藤(圭)　隣の部屋だったと思います。

佐道　でも、一応一課のなかにはなるわけですか。でも、一応独立してやっていると。

伊藤(圭)　はい、「赤城構想」なんかをやっているところです。

佐道　課内の定期的な会議とか、そういうのはありましたか。

伊藤(圭)　例えば業務計画の「陸」「海」「空」の案を作るときなんかは全部でやりました。

佐道　べつに定期的というわけではなかったのですか。

伊藤(圭)　それはなかったです。

佐道　「陸」の担当の方とか、「空」の担当の方とか、そっちのほうはどうなっているかとか、そういう情報交換は。

伊藤(圭)　それは、同じところにいますからいろいろ話し合いましたけれども、ほかの人がやっているのはどうなっているというようなことはあまりやりませんでした。

佐道　防衛一課というのは、新聞記者の人はよく出入りするのですか。

伊藤(圭)　出入りしていました。

佐道　やはり有名な堂場(肇)さんとか、ああいう人たちが。

伊藤(圭)　堂場、篠原(宏)ね。これは長かったですからね。

佐道　よく話をされることが。

伊藤(圭)　いや、ほとんど課長が会っていました。我々はなかなか、話す相手にもしてもらえなかったですから。

伊藤(隆)　そうですか、それはやはり課長が対応するのですか。

伊藤(圭)　広報課でも大体課長が対応していました。

伊藤(隆)　それは記者会見ですか。

伊藤(圭)　記者会見ではなくて、取材に来ても、大体課長のところに来ていました。

伊藤(隆)　部屋に来るのですか。

伊藤(圭)　部屋に来るのですよ。

伊藤(隆)　いろんな仕事をしているところに来るわけですか。

伊藤(圭)　そうです。

伊藤(隆)　見えるじゃないですか。

佐道　防衛機密がいろいろ覗き見されるのではないですか。

伊藤(圭)　機密というのですかね、その頃はあんまりそういう感じはありませんでしたけれども。

佐道　では、平気で部屋にサーッと来られて、課長の隣でいろいろ話をしたり。

伊藤(圭)　そうそうそう、話していました。

佐道　意外とオープンなんですね。

伊藤(圭)　オープンでしたね。

伊藤(隆)　そういう大記者ではなくて、新米の記者も来るわけで

すか。

伊藤(圭) ええ、来て、いろいろ質問なんかはしていました。大体新聞記者というのは二年ぐらいいますでしょう。最初の半年というのは、問題をどこに取材に行っていいか分からないのですよね。「陸」「海」「空」なんていうのは複雑ですから。半年ぐらいたって大体分かって、一年ぐらいいろいろ取材をして、最後の半年が仕上げみたいな、そんなようなローテーションだったようです。

伊藤(隆) やはり、最初は広報が対処するわけですか。

伊藤(圭) もちろんそうです。それで、広報課の紹介で来たりなんかしていました。でもまぁ、だんだん親しくなれば自由に。

伊藤(隆) 朝晩自宅で取材を受ける、なんていうのはだいぶ上のほうのポストの人ですか。

伊藤(圭) そうですね。私なんかは、局長のときに、計画を決める頃には来られて、参ったことがありました。それから、課長のときは、四次防で最後に金額のことなんかでしつこく追いまわされた記憶があります。

伊藤(隆) これはやはり朝晩。

伊藤(圭) そうですね。

伊藤(隆) 新聞記者の側からいろいろ情報をとることもあるわけですか。

伊藤(圭) そうですね、それはあったと思います。例えば当時だと、社会党とかああいうところの考え方なんかを聞いたり。

佐道 政治家と直接接触をされる機会はあったのですか。

伊藤(圭) これは局長になってからでした。課長のころは、もちろん接触はあるのですけれども、「説明に来い」なんて言うので説明に行ったりする程度で。局長のときはむしろ、これも海原さんに言われまして、「反対している野党の先生と付き合え」ということで、よく一緒に話し合ったり、説明に行ったついでにいろいろ議論したりしました。

伊藤(隆) その話は海原さんもされていましたね。

佐道 そうですね。まだお若い時代ではありますが、赤城(宗徳)さんとか、防衛庁になってからもう何代も防衛庁長官というのは代わられるのですけれども、赤城さんぐらいまでの間で特に印象に残っておられる方はいらっしゃいますか。

伊藤(圭) いやあ、その頃までで印象に残っているというのはね……。とにかく遠くから眺めておったので、あんまり印象がないのです。だから、船田(中)長官とか、最初の木村(篤太郎)長官とか、あの辺は多少記憶がありますけれども、小滝(彬)さんなんてなるとあんまり記憶にありません。それから、今の小泉さんのお父さん(小泉純也)なんか、あんまり記憶にないですね。

佐道 船田さんはやはり印象はあるのですか。

伊藤(圭) 印象があったというか、答弁がモタモタしているのね。……そんな感じですよね。

伊藤(隆) 大臣の訓示とか。

伊藤(圭) それはほとんどないですね。幹部会同なんて言ったって、我々下っ端は出ませんから。それから正月あたりでも、まあ、出れば出たのでしょうけれども、私たちはサボっていたのではないかと思うのです。だから、やはり私が長官というものを身近に感じはじめたのは秘書官になってからです。それからの人というのはわりあい覚えているのです。

伊藤(隆) その秘書官の話を伺いたいけど、時間はどうですかね。

佐道 それはまた次回にしたほうがいいと思うのですけれども。

伊藤(圭) 秘書官のときの話で言いますと、いま問題になっているのは、基地問題なんかが当時はいろいろうるさかった時代ですね。

佐道 基地問題は大きい問題なので、それはぜひ次回にと思います。ちょうど一九六〇年ぐらいにかかるのですが、こういう防衛計画の問題をやっておられて。

伊藤(圭)　いや、私は一九六〇年の頃はやっていないのですよ。

佐道　防衛局一課……。

伊藤(圭)　一課なのですけれども、長期計画はいわゆる計画官室がやっていましたから。

佐道　はい、年度の業務計画なんかをやっておられて、世間的には、いわゆる安保騒動という大騒動がありましたが、ああいうのはどういうふうにごらんになっていたのですか。

伊藤(圭)　私は、安保騒動というのも、その中におったものですから、あんまり外の様子というのは分からないのです。ただ、安保騒動のときに今でも印象に残っているのは、何かのときに……確か局長について国会に行ったときだと思うのですが、自民党の先生から、「君、今度の安全保障条約というのはどういうふうに変わるのだ」と訊かれたことがあって、与党の自民党の先生がこんなことも知らないのかと思って、がっかりしたことがあります。

佐道　その安保改定という問題については、防衛庁にいらっしゃってどういうふうに見ておられますか。

伊藤(圭)　やはり、前の安全保障条約というのは、まったくアメリカの五十一州か何かみたいな感じですよね。とにかく治安から何から全部アメリカが見てやります、部隊を出すにしたって全部やります、と。しかし、それに対して多少日本の自己主張ができるようなふうに変わっていくのではないかな、という程度の認識でした。

佐道　局内とか課内で安保改定の問題について議論をされたとか、話をしたというご経験は。

伊藤(圭)　特に記憶ないですね。あれはやはり、課長以上ぐらいのところでやっていたのではないでしょうか。

佐道　ああいうデモとかで、防衛庁の中から、デモに参加しようとか、そういった動きは。

伊藤(圭)　それはなかったと思います。だから、安保騒動のときに私が一番印象に残っているのは、アイゼンハワーが来るというので、岸さんが「治安出動をやれ」と言うのです。それを赤城さんが断るわけですね。赤城さんが断るにあたっては、これは直接聞いたわけではありませんけれども、「陸」「海」「空」の幕僚長が反対したという話を後で聞きました。というのは、日本人同士が敵対するのはよくないというので。そして、警察官がやるべきだと。ただ、私があのときに思いましたのは、とにかく日本の新聞が安全保障問題というものに対してまったく勉強していなかったという事実は感じました。あとで七〇年安保のときに私が広報課長になってみて思ったのは、格段の違いでした。各新聞社が勉強していました。安全保障研究会とかなんとかいうのをみんな作ってやっていました。あのときに、例の治安出動訓練なんかも見せたのですけれども、ぜんぜん反響は悪くなかったですもの。全学連が暴れている時期でしたものですから。

佐道　いわゆる防衛担当記者、堂場さんとか篠原さんとかの大ベテラン記者がいらっしゃる一方で、安全保障問題について新聞はぜんぜん取り上げない。

伊藤(圭)　結局、主流はまったくそういうものは関心がなかったということでしょうね。防衛庁の記者クラブの連中は、当時の話を訊きますと、いろいろ防衛関係の記事を上げても、デスククラスがみんなそれを削ってしまうのだ、だから記事にならないと言っていました。そういう時代だったみたいです。六〇年安保で大騒動になってから、これはいかんということで各新聞社が体制を整えたということみたいです。

佐道　防衛庁職員組合というのは。

伊藤(圭)　これはないのです。警察と自衛隊は組合がないのです。だから、防衛庁のなかで〔組合結成の可能性が〕唯一あるのは、施設庁の労務部門。あれは一般職ですから、組合を作ろうと思えばできるのですよね。だけどまぁ、組合はないと思います。あとはみんな特別職ですから作れないのです。

佐道　ぜんぜん話が違うのですけれども、防衛庁の場合は、白書というのがずいぶん後になってから出てきますけれども、いわゆる『防衛年鑑』というのはずいぶん前から出ているわけですね。執筆者を見ますと、防衛庁の中にいらっしゃる方が結構執筆メンバーになっていらっしゃいますけれども。

伊藤(圭)　これは、伊藤（斌）さんという方が独りでやっておられて、我々担当部員のところに来て、これについて書いてくれとかなんとか言って、あれはほとんど謝礼も何もなしに書いていたようなものです。そういうのを元にして作っていたものみたいですね。

佐道　でも、頼まれた以上、皆さん一所懸命おやりになるわけですよね。

伊藤(圭)　そうです。

佐道　けっこう錚錚たる方々が執筆メンバーのなかに。

伊藤(圭)　そういう名前が出ているような人は原稿料か何かをもらっているのでしょうけれども、そうではなくていろいろな資料みたいなのを作るのには、我々もずいぶん手伝わされました。だけど、そういうのには何もなかったです。

佐道　今からすれば大変貴重な資料なのですけれども。それはどういう関係の方なのですか。

伊藤(圭)　いや、どうか分かりませんけれども、伊藤さんという方が各課にまわってきて、「こういうのを教えてくれ」なんてやっていました。その『防衛年鑑』の関係というのは、その後を引き継いだのは今の朝雲新聞社なのです。だから、朝雲新聞社で、どういうような経緯でこうなったのか聞いてあげてもよろしゅうございますけれども。

佐道　朝雲新聞社は、『朝雲新聞』の古いやつとかを保管してありますか。

伊藤(圭)　全部あるはずです。

佐道　一度、ご紹介いただけませんか。

伊藤(圭)　はいはい、いいですよ。

伊藤(隆)　あれはコピーしたいね。

佐道　内部的な記事がたくさん載っていると思うので。あともう一つだけ。海上自衛隊のことを担当しておられたということなのですけれども、「海空技術調査会」というのがありますね。

伊藤(圭)　名前は聞いたことがあります。だけど、あまり実態は知りません。

佐道　そうですか。海上安全保障とかそういうのについては必ず出てきて、それこそ海原さんと論戦を繰り広げたりしていますが、あまり直接の関係は……。

伊藤(圭)　直接はないですね。

佐道　そうですか。どなたに訊いても、よく分からないと言う。

伊藤(圭)　そうですね。

伊藤(隆)　では、次回は秘書官の。

佐道　そうですね、秘書官になられたあたりから。

伊藤(隆)　これは面白いと思います。大臣直接だから。

伊藤(圭)　僕は、秘書官になって最初から基地問題が始まってしまいまして、とてもじゃないけど務まらないと思ったことがありました。とにかく、秘書官になってから最初の一週間ぐらい、毎晩徹夜みたいな感じなのです。北富士の連中が来て、座り込んで動かないのですから、参ってしまって。

伊藤(隆)　防衛庁にですか。

伊藤(圭)　防衛庁の大臣室の前に。

佐道　それでは、次回の日取りを決めさせていただきたいのですが。

〈以上〉

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第3回

開催日：2001年1月16日（火）
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時05分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

河野康子（法政大学教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■大臣秘書官時代――二次防の発足

伊藤(圭)　この前伺いましたら、秘書官時代の話をしろというお話だったものですから、その頃を中心にお話ししようかと思っております。

伊藤(隆)　はい、お願いいたします。大体この質問要綱のようなものを。

河野　急遽作りましたもので、必ずしもこれに沿っていただかなくてもいいのですけれども、参考のために。

伊藤(圭)　秘書官時代にどんなことがあったか、これをお話しするつもりで書いてきたのですけれども、もしよかったらコピーをしていただいて構いません。

伊藤(隆)　最初のところで、前回の安保国会の話で何か補足していただくことがございましたら…。

伊藤(圭)　この安保国会のときというのは、実は私はあまり興味ないのです。というのは、当時は一課員だったものですから、直接国会に行くチャンスはほとんどなかったのです。ですから、安保国会そのものはあまり知りません。あれは安保国会のときになるのでしょうか、非常に印象的だったのは、岸首相が、アイゼンハワー米大統領の来日について、自衛隊の治安出動をやれということを言ったのです。それに対して非常に抵抗しまして、そして、当時の〔防衛庁長官の〕赤城(宗徳)さんがそれを断ったということは上のほうから聞いたのですけれども、私自身が直接はタッチしていないのです。

　そのときに、この間もちょっと申し上げましたが、シビリアン・コントロールというのが必ずしも常に正しいとは限らないという感じなのです。政治家というのはああいう場面になると勇ましくなって、冷静さを失ってしまうのです。同じようなことがこれからも起こる危険性はあると思うのです。例えば、日本で〔国民の〕気持ちが異常に高揚したのは、この間のテポドンがあったときですね(九八年八月三十一日発射)。「大変だ」ということになりましたでしょう。ところが、テポドンなんかが発射されてきて、じゃあ、何ができるかといったら、何もできないのです。だから、慌ててもしようがないことなのですけれども、ああなるともう日本人はすぐかっとなってしまう。同じようなことが安保騒動のときにあったような気がします。

　安保騒動のときには、基本的にマスコミが安全保障問題というものをまったく考えていなかったということです。どこに問題があるかということを。したがって、マスコミがリードする面というものがまったくなくなってしまったわけです。だから、なんとなしに安保反対という高まりが、いわゆる左翼の動きによって国全体がそれに巻き込まれていったというところがありました。歯止めというものがなくなっちゃったようなありさまでした。

　ご存じだと思いますが、宮城まり子という女優がいますね。安保騒動の後になって私は知り合うのですけれども、安保騒動のときの記憶というのは、なんでああいうことになっているのかまったく分からなかったと言うのです。ただ、国会の周りであの騒ぎを見ているとなんとなく怖かったという、ただそれだけなのです。それが一般的な感じだと思うのです。もちろん樺(美智子)さんが亡くなったなんていうニュースはすぐ防衛庁のほうには入ってきましたけれども、あのときは防衛庁は直接タッチしておりませんでした。あれは警官隊が出たわけですから。だから、安保国会というのは、私はあまり申し上げることはないのです。

伊藤(隆)　防衛庁に直接デモが来るなんていうことはなかったのですか。

伊藤(圭)　ありませんでした。あのときはまったくなかったのです。むしろ、防衛庁にデモが来たのは、私が広報課長をやっていた

時代ですから、七〇年安保に向けて全学連が騒いだ頃、いわゆる「反戦デー」か何かのときに盛んに来ました。だけど、あのときだって外を警備しておったのは警官ですから、直接ということはなかったです。

私が秘書官になったときは、池田さんが総理になって安保騒動を鎮静化するという時代だったのです。ご存じのように、第一次の池田内閣は岸さんのときを引き継いだような格好でございましたでしょう。私がなったのは昭和三十六年から一年間。だから、いわゆる第二次池田内閣。

河野　そうですね、改造の頃ですね。

伊藤(圭)　その池田内閣の第二次内閣というのは、いわゆる大物内閣だったのです。池田さんが総理で、通産大臣が佐藤(栄作)さん、経企庁長官が三木(武夫)さん、農林大臣が河野一郎さん、行政管理庁長官が川島正次郎、そんなところだったかな。とにかく大物はみんな入っていました。藤枝(泉介)さんというのは、初めて大臣になったのですよね。

伊藤(隆)　初めての大臣が防衛庁長官。

伊藤(圭)　そうです。藤枝さんは、その前に総務長官をやっているのですけれども、総務長官と官房長官はそのころ大臣ではなかったのです。ですから、大臣になって初めて来たわけなのです。それが着任されたのは、ここに書いてありますように七月十八日なのです。これはまさに、いわゆる二次防が閣議決定された日なのです。第二次防衛力整備計画が閣議決定されたのが七月十八日なのです。その日に内閣改造があって、新しい大臣が着任するのですが、それからちょうど一年間やるわけです。藤枝泉介さんに私が秘書官として仕えたわけですね。

二次防は、一次防に比べてやや、お金の全体の予算像が出てくるのです。一次防のときは幾らかかるなんていうことはほとんど計算されていないのです。ほとんどアメリカからもらったもので運営していたものですから。二次防は、ご存じのように、三十六年の予算を基礎に、三十七年から、プラス百九十五億から二百十五億の間の範囲で毎年増やしていきましょうということになっているわけです。ですから、全体像はないのですけれども、それを足していくと、平均すると大体一兆二千億ぐらいの規模というのが二次防なのです。そのなかでアメリカの援助を期待しておったものが六百億円ぐらいあったと思うのです。それが、池田さんが途中で、いわゆる自主防衛ということで、全部無償援助をやめて有償に切り替えますということを言うのですが、そんなような時代でした。

二次防が決定して発足するのですが、そのときに、いわゆる国産化というような動きがあるわけです。これも二次防が最初で最後になってしまったのですけれども、戦車なんかも、ちょっと車両の数は忘れたのですけれども、三十七年度中に五年分一括で発注してしまうのです。それを毎年分割して取得するようなことをやりました。それまで、一括して購入するのは戦闘機だけだったのです。それが、いわゆる国産化を進めるというので、戦車、装甲車、確か機関銃とかああいうものまでずっと五年間契約しているのです。それが一つありました。

それから、三十五年に「陸」「海」「空」の組織改変をやろうということになって、それが実際に動き出すのが三十六年からなのです。陸上自衛隊が、六方面隊と四混成団という組織なのですが、それが十三師団になるわけです。「師団」という言葉が初めて出てくる。それから、五方面総監部というのが「陸」にできますね。あれが三十五年の改正の結果で三十六年にできるわけです。

伊藤(隆)　方面隊というのはどういうものですか。

伊藤(圭)　方面隊というのは、例えば北海道ですと、五師団と七師団と二師団かな、三つぐらい師団があるのです。それを統括するというのか、そういう意味の中間司令部は北部方面総監部。東北方面総監部というのは、九師団が弘前にあって、六師団が山形にありま

すが、それを統括する。そういうふうに五つの方面に分けて。結局、中間司令部を設置した師団群で、何をやったかというと、いわゆる戦闘という意味より、むしろ補給という関係が中心だったと思うのです。そういうので方面隊というのを作ったわけです。

伊藤(隆)　方面隊の司令部が置かれたのはどこですか。

伊藤(圭)　札幌、仙台、東京、大阪、熊本、そんなところにできたわけです。

海上自衛隊は、三十五年の改変で自衛艦隊というのができるのです。それまではそういうまとまったのはなくて、地方総監部というのがありまして、昔の鎮守府ですね。横須賀、舞鶴、呉、佐世保、それと大湊、五つあったと思います。

「空」に「ウイング」という航空団がありまして、その上に、これも方面隊で、北部方面隊が三沢、中部方面隊は東京、西部方面隊は福岡ですね。これは、幾つかの航空団、「ウイング」を指揮する。そういうふうな編成ができあがったのが三十五年の改変で、三十六年に実施されるわけです。

ここにも書いてありますけれども、三十六年の十二月に、例の「三無事件」というのがあったわけです。「三無事件」というのは、右翼の者が自衛隊に働きかけて、いわゆるテロですね。〔池田〕総理以下を殺すということで動いたといって、これは事前に捕まってしまうのですけれども。十二月の何週か忘れましたけれども、ちょうど閣議をやっていまして、私どもが秘書官室で閣議が終わる間待っていましたら、新聞記者が入ってきまして、「おい、大変だぞ。おまえたちも死んどったかも知らんぞ」と言うのですね。こういう事件があったというのを聞いてびっくりしたことがあったのですけれども、それが「三無事件」と言われました。これは、私の記憶では、結果的には自衛隊が動いたという事実はないみたいです。右翼の者がそういったことをしたということでした。ただ、それほど大きな事件にはならなかったと思います。

そんなことで三十六年が終わるわけですけれども、三十七年の初めからずっと見ますと、ここに「大森陸幕長」と書いてありますでしょう。陸上幕僚長が交代するのです。このときに、私はいわゆる人事というものを長官の側で見ておったのですけれども、いろんな自薦、他薦が来るのです。その頃は、昔の陸軍士官学校を出た人が推薦してくるのです。それから、それに反対する人も言ってくる。それで、非常に長官も迷っていました。その大森(寛)というのは昔の内務官僚なのです。結局、大森氏を選ぶのですけれども、その前は杉田一次という人が陸幕長をやっていました。

伊藤(隆)　この人は旧軍人ですよね。

伊藤(圭)　旧軍人で、例のシンガポールで、〔山下奉文中将がパーシバル中将に向かって〕「イエスかノーか」と迫ったときの参謀なのですよね。彼は強く陸士の後輩を推すわけです。そして、池田さんまで直訴しているのです。ところが、池田さんに直訴したって、池田さんが見るわけではないのです。秘書官が見て仕分けするわけでしょう。秘書官から返ってきたのですが、そうしたらそれに書いてあるわけです。そして、彼も池田さんに相談していました。これは廊下で相談しておったのです。私はたまたま付いていたものだから聞いていたのですけれども、〔藤枝長官が〕池田さんに、「私の考えで人事をやっていいですか」と言ったら、「それでけっこうだ」ということを言っていました。だから、やはり幕僚長の人事なんていうのは総理大臣まで相談するのだなというのをそのとき思いました。権限は防衛庁長官が持っているのですけれども、やはり総理の了解を得るのだなと感じました。

伊藤(隆)　たまたまそうだったということなのでしょうね。

伊藤(圭)　そうだと思います。そういう働きかけがあったせいなのでしょうか。ただ、その大森さんという人を幕僚長にしたことが良かったか悪かったかというのは、これはまた別問題なのです。私なんかが見ると、「内務官僚でも大した人ではなかったな」という

印象はあるのですけれども。だから、海原さんが、「防衛庁は四流官庁だ」とよく言いましたが……。

伊藤(隆)　四流官庁ですか。そんなことは言わなかったような気がしますが。

伊藤(圭)　そうですか。四流か三流と言っていましたよ。「しかしね、内務省だって大したことないじゃないですか。大森陸幕長とか、そのほかの内務省から来ているの、ああいう人たちもいるじゃないですか」と言ったら、「うん、まぁ、ああいうのはしようがない」なんて言っていましたよ。まあ、そんなひとこまがありました。

　それから、三十七年の四月一日にF104という戦闘機を初めて自衛隊が引き取るわけです。

河野　アメリカの…。

伊藤(圭)　いやいや、日本で国産した、ノックダウン（現地組立方式）したやつです。まあ、最初ですからね。それを引き取るわけです。その引渡し式が名古屋の小牧でありまして、それに長官も初めてだから行ったのです。私も一緒に行ったのですけれども。そのとき私も本当にびっくりしたのは、四月一日の晴天の日だったのですけれども、とにかく離陸して飛び上がって三十秒ぐらいたったら飛行機がぜんぜん見えなくなりましたから。それで、ジェット機というのは凄いなと思いました。その後、高度五十メートルぐらいで飛んで見せたりするのですが。このときにテストパイロットの奥さんが来ておったのです。後で聞いた話で本当か嘘か知りませんけれども、奥さんが、花束をもらって、それを握り締めて花がクシャクシャになっておったという話もあるぐらい、当時は、F104というのは超音速の飛行機で世界の最先端の飛行機でしたから非常に緊張しました。

　その次に書いてありますのが、市ヶ谷に殉職隊員の慰霊碑というのができるのです。五月に竣工式がありました。そのため、藤枝泉介という名前が未だに慰霊碑に残っているのです。池田（勇人）さんもそのときに来まして、その当時で、三十七年だから（自衛隊が）発足してから十年ぐらいですね。十年ぐらいで何百人かがもう殉職しておりました。だから、自衛隊の訓練は厳しいと思ったことがあります。

伊藤(隆)　やはり「空」ですか。

伊藤(圭)　いや、「空」もありますが、「陸」もあるのです。戦車がひっくり返ったとか、いろいろあるのです。「海」なんかもあります。船なんかも造る数が少ないものですから、一隻造るごとにいろいろ武器の置き場所を変えたりなんかするわけです。昔は同じ形のものをずっと造るから、一つの船で訓練すると同型艦みんなに通用するのですけれども、今は、ここの場所に立っていてこの船では安全だったのが、武器の置き方などで安全ではない場合があるのです。そんなので怪我をして死んだ者もおりました。だから、なかなか訓練というのは厳しいなと思いました。

　そのあとに、五月なのですけれども、F104の一般公開がありました。そのときに池田さんが見たいと言っていたのです。四月頃だったかな、予算が通った後かなんかですね、池田さんが箱根に静養に行っていたのです。五月に飛行機を持ってきて……。これは横田基地と書いてありますけれども、その頃は、航空自衛隊の基地は滑走路が短くて、F104が使えるところがなかったのです。それで横田に降りて、それから…。

伊藤(隆)　それはアメリカ軍の基地という意味ですね。

伊藤(圭)　アメリカ軍の基地ですよ。滑走路が長いですからね。二千四百メートル要るのですが、航空自衛隊の基地はまだ延ばしていなかったものですから。

伊藤(隆)　では、四月一日のときもそうなのですか。

伊藤(圭)　小牧は民間空港と一緒でしたから、かなり長かったのです。自衛隊の基地で、入間とかああいうところはだめだったのです。それで横田に降ろしたのです。

五月にあるものですから、藤枝さんが私に、「総理に声をかけてみないか」と言うのです。私も、「そうですか」と言って、確か三月か四月だったと思うのですけれども、箱根に行っているというのを知っていましたから、箱根に電話をしたのです。そうしたら、どういう間違いか知らないけれども、池田さんが直接電話に出てきたのです。伊藤昌哉さんという秘書官がいましたでしょう。宿の人に、〔私が〕「秘書官の伊藤です」と言ったものだから、おそらく彼と間違えてつないだらしいのです。それで、池田さんが直接出てきて、「池田ですが」と言うから、「これは失礼しました。私は伊藤秘書官に電話したのですが」と言ったら、「用件を話してくれ」と言うものですから、「実は藤枝さんに頼まれまして、総理がご覧になりたかったら、五月の何日に横田で公開しますから、ご覧になりますか」と言ったら、「ぜひ見たい」と言うのです。そうかと思って、「分かりました。そのように手配します」と言ったのですけれども、その後、一週間ぐらいたって、取りやめてくれということを言ってくるのです。これは大平（正芳）さんが止めたようです。

河野　大平さんですか。

伊藤（圭）　当時の官房長官がね。岸内閣のイメージを払拭するときに、池田さんがＦ104を見に行ったとなると、これは問題ではないかということだったのでしょうね。それで取りやめになったいきさつがあるのです。これは、私の秘書官時代の池田さんとのことでの思い出としてあります。

伊藤（隆）　池田さん自身はやはり、防衛問題については非常に関心が強かった人だと思いますから。

伊藤（圭）　その後になるのですけれども、これも確か三十七年になってからだと思うのですけれども、伊藤昌哉氏から私に話がありまして、「実は池田さんがこれからの防衛問題をどうもっていくかということについて物凄く関心がある。それで、今の『制服』の人たちがどういう考え方を持っているか訊いておけと言われたので、誰かいい人を紹介してくれ」と言われたのです。私は、「分かった」と、前にも申しましたように、防衛課というところが計画全体を取りまとめる課で一番知っているものですから、「陸」「海」「空」の防衛課長を紹介したのです。そのときの一人が鮫島（博一）さんなのです。もう亡くなってしまったのですけれども。「海」「陸」ははっきり覚えていないのですが、「陸」はそのころ業務計画班長と言っていましたか。そこで、伊藤さんが赤坂のどこかで彼らの話を聞き、それを池田さんに報告しているのです。そういう意味ではかなり関心をもっていました。あの頃から防衛大学校の卒業式なんかも池田さんは行っていましたし、関心はあったのでしょうけれども、どういうふうにもっていくかということを非常に苦慮しておったと思うのです。その意味では、当時は大平さんのほうが慎重だったみたいです。ところが、また後になって、この大平さんが総理になると意欲を燃やす場面も出てくるのですけれども、これはもっと後のお話になります。

ここに書いてあります、〔昭和三十七年〕五月に防衛施設庁が……発足ではないのですよ。きのう確かめたら、発足は十一月一日でした。三十七年五月に防衛庁設置法が改正になりまして、調達庁が防衛庁のなかに入ってくるのです。このときの経緯なんですが、前の年に国会で改正案が流れてしまうのです。社会党の反対で廃案になってしまうのです。というのは、自衛隊の組織、防衛庁の組織の中に入りますと組合が作れないでしょう。そんなことで社会党が反対しまして、流れているのです。どうしても三十七年度にはこれを通しておきたいというのが調達庁側にありました。実は、防衛庁の事務当局はそれほど熱心ではなかったみたいですね。私はそのとき秘書官だからその辺の動きは知らないのですけれども、内局サイドはあまり歓迎しないという気持ちがあったみたいです。というのは、いわゆる全駐労（全駐留軍労働組合）との関係なんかもあったでしょう。だから、ゴタゴタされるとかなわんという気持

ちがあって、あまり熱心ではなかった。

ただ、藤枝さんは非常に熱心でした。なぜかと言いますと、米軍がどんどん撤退してくるでしょう。そうすると調達庁の仕事が減るわけです。だから、どうしてもこれは自衛隊の施設の関係と一緒にやっていかないと先細りになるからというので、非常に熱心でした。五月の最後に法案が参議院の内閣委員会で決まるときに、社会党が何か付帯決議を付けるのです。職員組合のことだったと思うのですが、内容はちょっと記憶にないのですけれども、付帯決議を付けるのです。付帯決議を付けたところで、内局サイドは、「あんなのを付けられたらかなわんから嫌だ」というようなことを言っていました。ところが藤枝さんは、「それは絶対にやるべきだ」と言うのです。付帯決議なんていうのは、後で話をすればどうにでもなると。それでがんばって通した記憶があります。非常にあのときは主体的に動きました。わりあい大人しい人だったのですけれども、ああいうところはなかなかしゃんとしていたという感じがあります。

伊藤(隆) 法案が通ったということと発足するということは違うのですか。

伊藤(圭) 法案が通って、法律の施行の日というのが決まるわけでしょう。それが十一月一日みたいです。準備期間なんかも見るのでしょうね。

伊藤(隆) 今まで調達庁はどこに属していたのですか。

伊藤(圭) 総理府かなんかではないですか。調達庁は確か総理府だと思います。

伊藤(隆) もちろん自衛隊自体にも調達の機能を持っていた部分があるわけですね。

伊藤(圭) ありました。それは調達実施本部がありまして、武器の購入などをそこがやっておったわけですけれども、施設の関係は建設本部というのがありましてやっておったのです。それが施設庁のなかに行くわけです。

伊藤(隆) 調達庁自身は残るのですか。

伊藤(圭) 調達庁はなくなります。調達実施本部は武器などの調達を行う機関です。

伊藤(隆) 米軍のですね。

伊藤(圭) 自衛隊のです。米軍の武器は米軍が行っていました。最初の頃は、米軍の宿舎なんかを建ててやりますでしょう。そうすると、中に持ち込む家具から何から全部調達庁がやったものらしいです。

伊藤(隆) そうすると、それも吸収したわけですか。

伊藤(圭) 施設庁が吸収したわけです。

伊藤(隆) 逗子で米軍の住宅を作るとか。

伊藤(圭) あれは、いま全部施設庁がやっています。

伊藤(隆) そうすると、これは所帯としてはかなり大きいものですか。

伊藤(圭) 大きかったですよ。今はどのぐらいでしょうかね。かなりいますよ。局だけで、那覇の局なんていったら五百人ぐらいいますから。横浜だって三百人ぐらいいます。札幌だって二百人ぐらいいますから、仙台も二百人ぐらいいるのではないですか。だから、全部入れると三千人ぐらいいるのではないでしょうか。

伊藤(隆) かなりの所帯ですね。

伊藤(圭) それから、吸収合併した当時は、主として引揚者が多かったですね。満州で役人なんかをやっていた人が引き揚げてきて、そういう人が多かったです。福島慎太郎という外務官僚がいましたでしょう。最後は共同通信の社長。あの人も調達庁の長官をやっているのです(昭和二十八年七月～三十年十二月)。米軍との調整が必要だったからでしょうね。

伊藤(隆) それは、調達庁自体に揉めごとがあった。

伊藤(圭) あったわけではないのですけれども、むしろ調達庁と

防衛庁の間にあったみたいですね。今はほとんどの者が特別職になって組合ができないのですけれども、労務部だけは一般職なのです。だから、組合を作ろうと思えば作れるのです。いま米軍の基地で働いている日本人の従業員は全部日本政府が雇用して提供しているのです。そういう関係で、あの全駐労の交渉相手は、日本政府になるわけですね。

河野　雇用するのは日本政府になるわけですね。

伊藤(圭)　ええ。それなら最初から日本政府が給与を払っておけばよかったのですけれども、最初の頃は米軍の給与なのです。おそらく、私が思うのは、地位協定のなかにも日本人の従業員の給与は米軍が払うなんていうことは書いてないのですが、にもかかわらず米軍が払っていたのです。それは、その当時の国力からいって、GNPが日本とアメリカでは六倍も七倍も違う。十倍ぐらいあったでしょう。そんな時代だったものですから、予算というものは、ほとんど向こうがもってくれるというような形だったのではないかと思います。それが非常に苦しくなってくるのが、私が防衛局長をやっていた頃なのですけれども、長官は金丸(信)さんです。アメリカも非常に苦しくなって、少しもってくれということで「思いやり予算」というのが出るのです。ただ、「思いやり予算」というのを最初にやったときも、給与まではいかなかったのです。当時、米軍は、給与までとは言わないけれども、退職金だけは日本政府がもってくれないかということを言っていました。というのは、給与というのは、サービスを米軍が受けるわけですから、それに対する費用はしようがない。しかし、退職金まで俺たちが払うのはかなわんからというようなことがありました。その退職金も、最初はなかったけど、今は全部日本がもっているみたいです。最初は、全部で六十一億円ぐらいです。それで、例えば日本人の従業員の健康保険料とか、そういうのをもってやると。それから、語学手当てかなんかで、一般の公務員にはない手当てが付いているのですが、そんなものはもってあげましょう。そんなようなことだったと思います。

伊藤(隆)　そうすると、全駐労の組合員というのは国家公務員なわけですか。

伊藤(圭)　そうです。

河野　公務員ですか。

伊藤(圭)　公務員だと思います。

■藤枝長官に進講する

伊藤(隆)　藤枝さんという方はどんな感じの方でしたか。

伊藤(圭)　この方は、昭和五年に内務省に入った人です。一言で言えば、穏やかな方でした。私は一年間仕えましたけれども、一度も怒られたことはありません。秘書官としてもほとんど手のかからないほうでした。例えば国会の答弁なんかにしましても、最初に想定問答というのを作るわけです。それをやっておくと、一応それを勉強しているわけです。いよいよ国会が始まりますと、前の日に国会にいる担当者が翌日の質問者に、「明日はどんな質問があるのですか」と質問をとりに行き、それに基づいて答弁資料を作るわけです。それを、朝、私が役所に行って、総務課でその日の質問に対する回答を受け取って家に行って、国会に行く間にそれを渡すと、車のなかで読んで、それで答弁をしてくれましたから、実に楽でした。

伊藤(隆)　そのときは車に同乗しているのですか。

伊藤(圭)　もちろん同乗です。迎えに行って、私は自分の車を帰して、あとはずっと同乗するわけです。そのときにいろいろ訊かれたりなんかするわけですけれども。最近は、どういうわけか、前の晩に長官の家に届けるということになってしまいまして、なかなか大変みたいです。私はそういう意味では非常に楽をさせてもらい

ました。

河野　車に同乗されて、先生が長官にいろいろご進講をされるわけですか。

伊藤(圭)　やるわけです。いろいろ訊かれたりなんかしますから。例えば一つのいい例が、これは私も困った挙句にお話ししたのですけれども。外国の大使なんかが信任状を陛下に捧呈しますでしょう。あのときに誰か大臣が侍立するのです。それで、交代で行くのです。

伊藤(隆)　そうですか。

伊藤(圭)　ええ。それで行くことがありまして、そういうようなときに陛下とお話しする機会があったり、あれは月に一回か二月に一回か忘れましたけれども、陛下に自分の所管事項を報告する時間というのがあるのです。そのときも宮中まで行くのですけれども、そんなときに、「どんな話をすればいいかなぁ」なんてよく訊かれたりしました。陛下は新聞なんかをみんな見ておられるのだそうですね。だから、「あんまり新聞に載っていることをお話ししてもしようがないし…」というようなことを言っていました。私も当時は防衛課におって割合にいろいろなことを知っておったものですから、あれは何のときだったか忘れましたけど、「陛下にお話しすることがないのだ」と言ったときに、「じゃあ、研究開発のお話をしたらどうですか」と言ったことがあります。

それはどういう研究開発かというと、三十五年に初めて例の飛行艇の予算がつくのです。三十六年以降、少しずつ飛行艇の開発が始まるのです。この飛行艇につきましては、当時アメリカが注目していまして、「日本で成功したらアメリカも採用したい」というようなことを言っている時期なのです。川西という航空会社があって、優秀な技術者がおって、波切りの研究をしていまして、荒天でも着水できるような研究をやっていたのです。こういうのをいま研究していて、アメリカが注目しているというようなことをお話ししたらどうですか、なんて言ったことがありました。

それから、潜水艦なんかも、戦後アメリカから最初の「くろしお」というのをもらうのですけれども、三十一年から国産し始めるわけです。その潜水艦の話なんかもされるといいのではないですかと言ったことがあります。潜水艦というのは、戦争が終わるときに、当時の技術者が設計図を家に持って帰って隠していたのです。川崎重工の人ですが。それがあったので作れたのですけれども。

河野　なるほど、それを元に。

伊藤(圭)　ええ。三十一年に最初の予算がついて、建艦が始まるのです。三十三年か三十四年に初めての国産艦ができるのですけれども。だから、軍艦と潜水艦の技術というのはずっと昔から続いていました。

伊藤(隆)　潜水艦は自前で造ったわけですか。

伊藤(圭)　造りました。三十一年からですね。最初の潜水艦はもらったんですよ。そんなのも研究の材料にはしたみたいです。涙滴型の潜水艦です。そんなこともありました。

伊藤(隆)　いま飛行艇はどうなってしまったのですか。

伊藤(圭)　飛行艇を造るときに、ばかにでかいものを造ってしまったのです。どうして大きいのを造ってしまったかというと、そのときのソーナー―着水して潜水艦の音を聴く―が、アメリカから日本にリリースしてくれたのが五トンもあったのです。その五トンを積むようなものをというので、でかいものを造ってしまった。私は、「こんな大きなものを造らなくてもいいのではないか」と言ったのですけれども、造ったわけです。ところが、飛行機ができた頃にはソーナーが一トン半になってしまったのです。だから、バカみたいな話ですけれどもね。しかし、飛行艇の技術が非常によかったので、各国がそれを欲しがったのです。特にインドネシアあたりは島を周るのに飛行艇が要るわけです。ところが、とても高くて買えないのです。だから、YS11を売るためにずいぶん国で金を出し

ましたでしょう。あれと同じようなことをしなかったものですから、結局売れなかったのです。四十機ぐらいで打ち止めになったのでしょうか。

伊藤(隆)　それは自衛隊が使って。

伊藤(圭)　今でも救難飛行艇で使っています。救難飛行艇で、船なんかが沈没したときに五人とか十人を助けるようなときは、それが着水しないとなかなか間に合わないものですから。それから活躍したのは小笠原返還のときです。あのときに着水して人を運んだりなんかしました。だけど、今はちょっと大きすぎてあんなものあまり使わなくなったのではないでしょうか。救難飛行艇として主として使っているみたいです。

伊藤(隆)　飛行艇というのは、普段はどうしておくものですか。水に浮いているのですか。

伊藤(圭)　陸に上げます。

河野　格納して。

伊藤(圭)　下に台を置きまして、水のなかにその台を入れて、それに乗せて引き上げるのです。岩国に置いてありますけれども。

伊藤(隆)　発進するときは？

伊藤(圭)　水の上からです。

伊藤(隆)　自力で、カタパルトではなくて。

伊藤(圭)　昔の水上機もそうですよ。しょっちゅう浮いているわけではなくて、陸に上げているのですけれども、同じようですね。

伊藤(隆)　昔の軍艦で、カタパルトで普通に打ち出す。

伊藤(圭)　とても大きくて、そんなことはできません。

伊藤(隆)　大きさがぜんぜん違うわけですか。

伊藤(圭)　物凄く大きい。ぜんぜん違いますから。水上機と水上飛行艇というのはぜんぜん違います。

河野　先生は、前々回伺ったときには、戦時中に水上機の訓練もおやりになったようなお話も伺ったのですが。

伊藤(圭)　私は水上機にも乗りました。

河野　その頃の技術とはまったくもう違うのですか。

伊藤(圭)　私が乗っていたのは、フロートの付いた、いわゆる水上機なのです。飛行艇というのは、下駄履きではなくて、機体そのものが船みたいになっているのです。それで機体で着水するわけなのです。

伊藤(隆)　それで飛行艇なんだ。

伊藤(圭)　そうなんです。だから物凄く大きいのです。

伊藤(隆)　ああ、船なのですね。

さっき、F104はノックダウンとおっしゃいましたが、私もよく分からないのですが、ノックダウンというのはある程度の部品は日本で作るのですか。

伊藤(圭)　いや、ノックダウンは全部持ってきて組み立てるだけなのです。それからだんだん国産化というのをしていくわけです。ここの部品は国産し、ここの部品は持ってくると。そこはどういう違いがあるかと言いますと、持って来るものの基準は、まず技術的にできないものがあるわけです。それから、日本でわずかばかり作ると非常に高くなるということがあります。そのどちらかの原因で輸入するのですけれども。最近では、ほとんどのものは技術的には日本で作れるわけです。しかし、数が少ないと高いものですから、アメリカの軍が大量に生産するときに一ロットか二ロット入れてもらいまして、輸入するのです。

伊藤(隆)　結局、日本の国産化が無理だというのは、武器輸出の禁止と関係するからだと思います。結局、スケールが小さいわけでしょう。だから高くなる。でも、汎用性のある部品というのはあんまりないものですか。

伊藤(圭)　これはかなりあると思うのです。現実に出て行っているのもあるのではないかと思うのですが。例えば、飛行艇なんかは、武装しなければ武器ではないと国会で答弁もしています。それも

売りに出そうとしたのですけれども、これは高くて売れなかった。現実に、日本で造ったヘリコプターにはスウェーデンなんかに輸出しているのもあるのです。バートルの、二つのプロペラのある機種です。これはスウェーデンの海難救助隊か何かに輸出したのがあるのです。わずかですけれどもね。バートル社の飛行機を日本で作って、そしてスウェーデンに輸出したのです。

■国産化の限界

伊藤(隆)　国産化という問題について、ずいぶん海原先生もね、無駄というか…。

河野　海原さんは非常に厳しいご判断をされています。

伊藤(圭)　それは厳しかったです。これもお話があったかも知れませんが、端的に言うと、例の四次防のときF1という今の戦闘機を国産するか輸入するかというので物凄く揉めたのです。田中(角栄)さんのサイドは、最初はF5という飛行機の輸入というようなことも言っていたのです。これは断然安いですから。ところが、日本では、あれを国産しないと飛行機会社が作るのがなくなってしまうのです。それでどうしても国産したいと言うので、最後の段階で国産化が決まるのですけれども。あのときは、私は防衛課長をやっていたんですが、どっちにするか決める朝まで、増原(恵吉)さんが田中さんのところへ行っても、「うん」と言わないのです。それで真っ青になって。最後の国防会議の席で、じゃあ、国産しようということになったのです。後に、田中首相、後藤田官房副長官、相沢(英之)主計局長で決めたという問題が起こりました。防衛庁は知らなかったというようなことで後藤田さんが立腹されました。海原さんは批判しますが、海原さんが課長で責任をもって推進していた一次防、二次防には、防衛生産を強化するというようなことを謳ってあるのです。

河野　そのようですね。

伊藤(圭)　だから、あのへんもちょっと……。

河野　先生が秘書官でいらっしゃった頃に二次防で、その頃からぽつぽつ国産化という声も出てきたのですか。

伊藤(圭)　一次防で防衛生産を重視するというようなことがありましたでしょう。それを受けて、具体的に国産できるものはやっていこうというようなことでした。ただ、最初のころ国産化をやりました戦車とか装甲車とかは、あんまりできがよくなかったのです。そんなので海原さんは怒ったのではないでしょうか。国産してもだめじゃないかと。

伊藤(隆)　技術が低いということを盛んにおっしゃっていましたね。後になると、日本の戦車というのは相当評価されたように思いますが、最初の頃はだめなのですか。

伊藤(圭)　いや、最初もだめだったのではない、かわいそうなところもあるのです。戦車というのはたくさん持てないからというので、貨物列車に乗るような戦車を作ろうということになったのです。そうするとまず幅が狭いでしょう。重心が高くなってしまうわけです。だから非常に不安定になるわけです。そんなこともあって六一式戦車というのはできたのです。あとの七四式、それから九〇式戦車、そこらへんになってくると非常に大きくなって、五十トンぐらいあるでしょう。貨車に積めるというので、確か最初は重さを三四トンかなんかで押さえているのです。そんなようなこともあったから、かわいそうなところもあったのです。

　海原さんがいつも言うのは、輸送機のC1なんかも、あんなのは役に立たないと言うのです。ただ、これは考え方なのですけれども、私が海原さんほどだめだと思わないのは、とにかくジェット機というのは日本はぜんぜん経験なかったわけです。それが、小さなものについては、86Fから始まって、ライセンス生産をしていって、

練習機のＴ１というのを作るのです。ジェット機の小型機は作ったというところですね。あとは何かというと、大型機と超音速機ですね。その二つが課題として残るわけです。そこで、大型機というのでＣ１をやるわけです。Ｃ１も、あの当時のことですから非常に制限が厳しくて、とにかく航続距離が長くてはいかんというので、確か七百キロぐらいしかないのです。だから、あれは直接物を積んで硫黄島まで行けないのです。途中で降りて行かなければならない。

河野　航続距離について制限はどういうところから。

伊藤(圭)　外国へ攻めるという意味で、当時の社会党あたりが盛んに言うものですから。そのあとは、今度はＣ130なんかになるとどんどん延びてしまうわけでしょう。次は空中給油機まで入るというようなことですから。そういう制約のなかで作ったのだけれども、とにかくターボプロップのＹＳの双発はできていましたが、大型ジェット機が初めてできたのがＣ１なのです。そういうような意味があったと思うのです。それからＴ33という練習機の後継機でＴ２という練習機を作るわけです。これは音速を超えるわけです。一・六マッハかな。だから、音速を超えるという意味で意味があったのではないかと思います。

ただ、技術的に言えば、航空機の技術というのは十年間のブランクがありますからどうしたってだめなわけです。だから、海原さんのようにアメリカに駐在しておって、アメリカのいい飛行機を見ていれば、なにも日本で作らんでもいいじゃないかという気持ちはあったでしょうね。

あの頃から私どもが非常に苦慮しておったのは、とにかく日本というところは競争が激しいということです。飛行機の需要は小規模なのに、航空機製造会社が三つか四つぐらいあるのですから。「三菱」、「川重」、「富士重」でしょう。当時は「日本飛行機」なんかも作っていましたから。だから、これはちょっと多すぎるなという感じがしました。それから飛行艇をやった「川西」。だから大変だったのです。

河野　やはり、それぞれのメーカーは将来的には需要が多くなると見ていたのでしょうか。

伊藤(圭)　あの頃は、そうなのでしょうねぇ。戦争中に航空機を作っていた会社ばかりなのです。その技術を持っているものだから、これは将来役立つと思うのですね。軍用だけではなくて民間機にも役に立つというような気持ちはあったのではないでしょうか。

伊藤(隆)　飛行機を作るというのは膨大な資金を必要としますからね。

伊藤(圭)　実際、私が防衛庁にいた間にもずいぶん変わったなと思いましたのは、昔は飛行機というと、機体なんかを作るときにはみんな鋲を打っていましたが、今はあんなのぜんぜんありませんからね。全部張り合わせるのですね。それから、ハニカム(honeycomb)というのですか、蜂の巣みたいになっていて、鉄ではなくても硬いのです。非常に軽くなっていました。

海原さんなんかもお話しになりましたか。例えば戦闘機の国産か輸入かなんていう。

伊藤(隆)　海原さんは一貫して、「国産という意味は一体どういう意味だ」と、これを強くおっしゃっていました。

河野　そうでしたね。「国産とはどういう意味か説明せよ」と私などが言われまして、立ち往生いたしましたけれども。

伊藤(圭)　結局、あれもおかしなものですけれども、国産といっても本当に何を言うか分からないのは事実なのです。例えばＰ２Ｖという対潜哨戒機を四十六機作っているのです。国防会議で国産を決定し、最初輸入していたのを国産に切り替えるのです。更にＰ２Ｖという機体を改造しまして、Ｐ２Ｊというのにするのです。そのときに基本的に変えるのは、プロペラを普通のプロペラからターボプロップに変えるわけです。速力は速くなるでしょう。それか

ら、機体が一メートル五十センチぐらい伸びるのです。これは大変な改造になるわけです。ところが、それだけの改造をしておっても、日本では国産というのですけれども、アメリカのロッキードにはライセンス料を払っていましたのですから、ばかばかしいなと思いました。結局、P2Vを基準にして作ったものだからと、ライセンス料を払うのですからね。

伊藤(隆) 防衛産業といった場合に、飛行機だけではなくて、戦車とか、いろいろあるわけですね。

伊藤(圭) もちろんそうです。弾なんかもあるわけです。最初の頃は、弾なんていうのはアメリカ軍からもらったものが山ほどあって、どうしても使えないのです。そこで、弾を作る工場には、毎年、何もしないのに補助金をやっていたのです。その機械を維持するために。そういう時代があったのです。

河野 作っていなくても、ということですか。

伊藤(圭) 作っていなくても。とにかく国から補助金を出す。それを維持するために。それで、だんだん弾がなくなってね。

伊藤(隆) じゃあ、米軍はずいぶん大量の蓄積をしていたわけですね。

伊藤(圭) 物凄かったですね。それで、それを全部くれたのですからね。鉄砲やライフル銃なんかと一緒に。

伊藤(隆) そのうちにだんだん日本で弾を作るようになるのですね。

伊藤(圭) ところが、日本で弾を作るようになると、今度は予算が厳しいものだから、演習なんかでもあまり自由に撃てなくなってくるのです。

河野 足りないという話ですか。

伊藤(圭) 私が日本の研究開発で一番問題だと思うのは、いわゆる試射、それから試飛行の予算が少ないのです。だから、例えば大砲やミサイルなんかを作っても、アメリカだと何千発も撃つわけです。ところが日本は百発とか二百発ぐらいしか予算がつかないわけです。そういう点で技術の差が出てくるのかなと感じました。実際に私がシコルスキー社に行ったときにびっくりしたのですけれども、シコルスキーでヘリコプターのローターを回す試験をやっているのです。それは、とにかくどんな天候にも耐えられるようにというので、六千時間回しっぱなしにしているのです。「凄いなぁ」と思って、そんなのを見た記憶があります。

伊藤(隆) 防衛産業の業界みたいなのがあったと思いますが、それはどういうものが入るのですか。被服やなんかまで含むものなのですか。

伊藤(圭) 含まないと思います。例えば被服なんかは、一般の、それこそグンゼとかああいうようなところに頼んで作ってもらうのではないですか。ただ規格が違いますから、こういう規格で作ってくれと言うのですけれども、特別な防衛産業ではなかったと思います。

伊藤(隆) 防衛産業というと、武器、弾薬ですか。

伊藤(圭) 武器、弾薬が主だったと思います。防衛庁でしか扱わないものを作っているところということではないでしょうか。

伊藤(隆) ほかのものは特注すればできるということですね。武器輸出三原則というのは、あれはいつできたのですか。

河野 だいぶ後ですね。

伊藤(圭) これは佐藤内閣の頃だと思います。

伊藤(隆) それまではべつに……。

河野 輸出できたということなのですか。

伊藤(圭) 輸出できたと……。

伊藤(隆) いや、輸出できる技術があったかどうかは別として。

河野 別として、禁止はされていなかった。

伊藤(圭) 禁止はされていなかったですよね。飛行艇なんかも売り込もうと思って一所懸命やったことがありましたからね。

河野　インドネシアのほうのお話……。

伊藤(隆)　なんか奇妙なことになったものですね。

伊藤(圭)　私が国防会議にいた頃にフランスに行ったら、フランスの調達をやっているところの長官がどうしても会いたいと言うのです。私はべつに用がないからと言ったのですけれども、なんとか時間を作ってくれと言うので、それじゃあ、五時過ぎならと言って、五時過ぎに行ったのです。そうしたら、日本は武器輸出が緩和されるかということを訊くのです。私は、日本の政治情勢とか日本人の感情から見て、見通し得る将来まで自由に武器輸出ができるようになるとは思わないと言ったら、喜んで、翌日ブルターニュの森の豪華な店でご馳走してくれました。あれはどういうことかと思っていろいろ考えたのですけれども、フランスは東南アジア諸国に輸出しているでしょう。だから、日本が始めたら大変だと思ったのでしょうね。翌日、ご馳走してくれましたよ。そんなこともありました。

河野　禁止する根拠というのも、今になってみると。

伊藤(圭)　ただ、これからの問題としては、いま盛んに言われております、RMA、レボリューション・イン・ミリタリー・アフェアーズというのですか、軍事技術が革命的に変わっていくだろうということは、先生方の将来の課題として本当に考えるべきことではないかなと思うのです。というのは、最初のときに私は、人工衛星なんかが飛ぶようになってから、対潜作戦とかああいうのも根本的に変わるかも知れないと申し上げましたけれども、ああいうふうにだんだん変わってくるのではないかと思うのです。特に最近はロボットの技術なんかも上がってくると、戦場で兵隊が撃ち合うなんていうことがなくなってくるのではないかと思うのです。そうなってくると、ハイテクのための軍事技術というものと、重装備の警察みたいなのに分かれていくのではないかと思うのです。警察がだんだん重装備してくるようになるのではないかと思うのです。社会不安がありますでしょう。それから、近所からの侵略なんていう古典的な侵略に対応できるぐらいの警察になってくるのではないかと思うのです。そうすると、自衛隊とか軍というのがだんだん小さくなっていくのではないかなという感じがするのです。

河野　ちょっと話がずれるかも知れませんが、技術のことで、地雷の探知などの技術は今の自衛隊は非常に高いように思うのですが。

伊藤(圭)　まあ、それは高いのですけれども、地雷はもうめちゃくちゃに多いでしょう。だから、なかなか……。やはり、今の段階では手でやらなければならないのです。

こんなこともご参考になるかも知れませんけれども、ベトナムと中国が戦争をしたことがありましたでしょう。あのときに中国の武官が私のところに来て、「いやあ、参った」と言うのです。ベトナムは米軍から分捕ったいい兵器を持っていたというわけです。中国が行ったけれども、とても歯が立たない。しかも地雷を埋めてあった。これも中国らしいなと思ったのは、とにかく人が進んでいくとポカッとやられちゃうでしょう。前に馬を走らせるのだそうです。そして、その後を人が行った。ところが、馬というのは人よりもはるかに跳ぶでしょう。だから、馬が通って行った後を行ってやられたなんていう話を武官が言っていました。

地雷というのは、今すぐ発見して全部一掃できるというのはなかなか難しいみたいです。

河野　やはり日本の技術でもなかなか難しいのですね。

伊藤(隆)　地雷そのものがいろんな種類があるわけでしょう。

伊藤(圭)　いろんな種類があるのです。だから困ってしまうのですよね。これは機雷も同じですね。

伊藤(隆)　じゃあ、掃海技術なんかも。

伊藤(圭)　掃海というのはなかなか大変なのです。

河野　掃海の技術のレベルもかなり高いわけですよね。

伊藤(圭)　これは日本はかなり高いのです。浅いところはヘリコプターが掃海具を引っ張ったりなんかして、深いところは船が引っ張ったりしていますけれども、かなり技術は進んでいます。日本の周辺にある第二次大戦のときに撒かれた機雷は二万とか三万とかいうでしょう。その機雷が九五パーセントぐらいもう除去されているそうです。だから、航路の安全というのは全部確保されています。もうほとんどないみたいです。

河野　その技術開発というのも、先生が秘書官でいらっしゃった時代ぐらいからずっと蓄積して。

伊藤(圭)　海上保安庁時代からですね。昔から対機雷戦というのは、海軍時代から盛んにやっておったみたいです。

河野　蓄積があって、それが受け継がれた。

伊藤(隆)　あれはどこに引き継がれたのですか、やはり海上自衛隊ですか。

伊藤(圭)　海上自衛隊です。だから、海上自衛隊に掃海部隊というのがあります。

伊藤(隆)　朝鮮戦争のときに出て行った部隊は、あれは何ですか。

伊藤(圭)　あれは、海上保安庁の頃ですね。

伊藤(隆)　私はどうも、海上保安庁と海上自衛隊の関係がよく分からないのです。

伊藤(圭)　海上保安庁に編成されていたのが、大部分が自衛隊に移ってくるのです。それで、残ったのが沿岸警備。沿岸警備というのは海上自衛隊にもあるのですけれども、いわゆる沿岸警備のなかの警察的なことをやるのが海上保安庁です。それを併せてやっているのが航空自衛隊なのです。領空侵犯というのは、平時においては警察業務なのですね。防空作戦ではないのです。領空侵犯に対してそれを取り締まるのは、領空侵犯対処なのです。同じようなことで領海に入ってきたのに対してするのは海上保安庁がやっているわけです。

伊藤(隆)　戦争をしなければ、海上自衛隊はバーンと撃つことはできないわけですか。

伊藤(圭)　それは撃てるのです。海上の警備行動というのがある。例えば海賊なんかが来た場合にはやれるようになっている。これも総理大臣の命令ですね。それでやるわけです。この間の北朝鮮の高速艇が来たときに初めて命令が出たのです。それで追いかけていったのですけれども、実際に撃たないで、撃ったというか、前のほうに撃ったりなんかして、直接当てなかったみたいですけれども。

伊藤(隆)　威嚇して向こうに追いやったということですね。

伊藤(圭)　あれは、海上警備行動における総理大臣命令としては初めてですね。

伊藤(隆)　命令はどうやって出るわけですか。

伊藤(圭)　どうやって総理大臣の命令を出すかというのは、私たちのときもいろいろ考えたのですけれども。結局、内局で起案して、そして総理のところへ行って判をもらって、それが総理大臣の命令になる。命令に二つ種類がありましたよ。総理大臣の出す命令と、防衛庁長官の出す命令と。

伊藤(隆)　そうすると、現場から、「こういう事態がある」というところから、総理大臣が命令を出すところまで、どういう経路を辿って、どれぐらい時間がかかるものか。

伊藤(圭)　私は実際には分かりませんけれども、かなり時間がかかった。今の時代では手遅れだと思うのです。今度、総理官邸ができて、総理官邸でリアルタイムに現場の様子が分かればもっと早いと思いますけれども、今の段階では物凄く遅いと思います。

伊藤(隆)　しかし、総理の周辺にきちんとその状況を見ていて判断できる人がいなかったらどうにもならないですね。

伊藤(圭)　それはもうどうにもならないですね。

伊藤(隆)　これはもう、シビリアン・コントロールは危ないということですね。

伊藤(圭)　それからもう一つ、そういう場合に怖いのは、今、全部現場の人に責任が行くような仕組みになっているのです。例えば、鉄砲を撃ってもいい、大砲を撃ってもいいけれども、緊急避難の場合とか、ほかに手段のない場合に最小限とか、いろいろ制約があるわけですね。そうすると、それを判断するのは、そこにいた人以外にないわけです。これは非常にかわいそうなことがあるのです。

この間、『文藝春秋』の新年号に、ミグ25が来たときの函館の連隊の緊張ぶりというのが書いてあったのです。あれを見たときに思いましたのは、私は当時防衛局長で東京にいたのですけれども、函館の連隊に待機するようには言ったのです。ところが、私たちが考えているよりも、もっともっと緊迫した状況だったみたいですね。私たち東京におった者は、函館の陸上自衛隊が動くなんていう事態はあり得ないと思ったのです。しかし、ソ連が何らかの手段でミグ25を奪いに来る可能性はあると思った。しかし、そのためには、飛行機で来て爆撃するとか、あるいは小さなミサイルを持ってきて撃つとか、そういうことはあり得るけれども、ゲリラ部隊が上陸して函館に来るなんていうことはまったく考えなかったのですが、函館の連隊はそれを考えて緊張したと書いてあるのです。「ああ、こんなだったのかな」と、私はそのとき思いました。しかも、ヘリコプターが三機、ホークかなんかのレーダーに入ってきたらしいのです。それで非常に緊張したということが書いてあるのだけれども、ホークのレーダーに入ってくる前に我々は当然知っているはずですからそんな状況はあるはずないのですけれども、やはり、そこらへんは「陸」「海」「空」の連携というものがないものですから、「陸」は「陸」で緊張してしまってね。これはなかなか難しいものだなと思いました。

河野　先生からご覧になると、現場の方の判断が必ずしも全体的に見ると的確ではないこともありますか。

伊藤(圭)　それはあります。

河野　でも、それをフィードバックしてということが、仕組みのなかでは難しいわけですか。

伊藤(圭)　そうですね。そういった緊張感というのがあったのが、本当に、私の経験のなかでもミグ事件のときだけでしょうからね。あとは誰も実際に知らないわけです。戦前の軍の経験者も知らないわけです。というのは、真珠湾の攻撃を受けたアメリカなら分かるけれども、攻撃したほうは最初から計画立てて行っているわけですから、ぜんぜん分からないわけですよね。

伊藤(隆)　日本は伝統的に奇襲を受けた経験がないわけですから。

ところで秘書官になるというのは、どういう経緯なのですか。

■一日一日が勝負―秘書官業の面白さ

伊藤(圭)　これはまったく分かりませんけれども、ただ、総務課長に呼ばれて、「秘書官になるのだから、すぐ官邸に行け」と言われました。おそらく、秘書官を選考するときに、人事のほうで選んで、例えば防衛局長があのときは海原さんでした。その局長と課長の了解をとって発令するものだと思うのです。どういう基準でやったのか、そこはちょっと分かりません。

伊藤(隆)　とにかくそれは一方的なわけですか。

伊藤(圭)　でも、私は海原さんの下でフウフウ言っておったから、喜んで行きましたけれどもね(笑)。

伊藤(隆)　さもあらんと思います(笑)。

河野　海原さんからいうと、少し解放して差し上げたという…。でも、海原さんの下でずいぶんきついお仕事をなさってたんですね。

伊藤(圭)　それはきつかったです。非常に厳しい人でしたから。

河野　それに比べると、秘書官は多少……。

伊藤(圭)　秘書官は楽でしたよ。藤枝さんはなんでも私に任せてくれましたから。藤枝さんという人は非常にいい人で、私が秘書官になったときにまず、「政治家というのは人に会うのも仕事のうちでしょう」と言ったのです。「そうだ」と言うので、「私のほうで会ったほうがいいと判断した人には黙って会ってください」と言ったら、「分かりました」と。それで全部やっていました。その点は非常にありがたい人でした。日程なんかも全部こっちで決めてしまって、そのとおりにやってくれました。あんまり文句を言わない人でした。ところが、大臣のなかにはそういうのをうるさく言う人がいるのだそうですね。

伊藤(隆)　ご自身で、秘書官的な仕事をそれまでにやったことがおありですか。

伊藤(圭)　私ですか？　まったくありません。

河野　そうすると、レクチャーを受けるような場は？

伊藤(圭)　まったくないですよ。とにかく官邸に行けと言うのです。そのとき、藤枝さんは総務庁の長官でしょう。私はポツンと一人で待っていたのです。そして、「秘書官の伊藤です」と挨拶して、「よろしく」と、それだけですよ。最初の記者会見があるでしょう。あのときのご進講なんかは官房長が行ってやるわけです。

伊藤(隆)　秘書官というのは、さっき国会があるときの話を伺いましたけれども、国会がないときは？

伊藤(圭)　国会のないときは、とにかく一日の長官の日程を作るわけです。どういうことをやる、どういうことをやる、と。例えばこういう会議があるというと、事前に、こういう議題があって、こういう議論があるというようなことをレクチャーするのです。そういう意味では、防衛課にいて大体全体のことを分かっていましたから、割合に楽でした。

伊藤(隆)　でも、外向きのもあるわけでしょう。

伊藤(圭)　外というのは？

伊藤(隆)　防衛庁のなかではなくて、対外的に。

伊藤(圭)　それはあります。

伊藤(隆)　そういうのがスケジュールのなかに入ってくるわけですか。

伊藤(圭)　はい、入ってくるわけです。例えば、〔長官に〕会いたいというのがありますね。そうすると、用件を訊いたりなんかします。そして時間をとったり。それから、政治家ですから、地元の人が来たりしますでしょう。これはもう分からんわけです。それは、政務の秘書官がいて、日程に入れてくれと頼まれたりしました。

伊藤(隆)　秘書官は、政務と事務と。

伊藤(圭)　二人いるのです。

伊藤(隆)　それは、大臣室があって、その隣が大体秘書官室ですよね。その二人の秘書は一緒にいるわけですか。

伊藤(圭)　そうです。ただ、私の場合には、その秘書官というのが藤枝さんと歳が同じくらいなのです。それで、実際に藤枝さんの政治活動の金を作っておった人なのです。大物だったものだから、とにかくなんでもやってくれということを言われまして、ずいぶん私もそういう意味では地元向きの仕事なんかもしました。

伊藤(隆)　やっぱりやらされるわけですね。政治家、要するに地元の政治家としての藤枝さんと、それから防衛庁長官としての藤枝さんと、画然とは分けられないわけですね。

伊藤(圭)　特にあの人は前橋が地元だったでしょう。毎週帰るわけです。これがまた容易ではないのです。あの頃は土曜日は半日ありましたから、土曜日の午後の汽車で行くのです。上野の駅まで送って行って。大臣が汽車に乗るときには、駅長が先導するのです。だから、しようがない、秘書官が行くでしょう。終わって帰ってきて、月曜の朝、迎えに行くわけです。それが毎週だから、嫌でしたね。

伊藤(隆)　月曜日は朝ですか。

伊藤(圭)　朝です。まあ、十時ごろだったと思いますが、上野まで。

河野　毎週というのはなかなか大変ですね。

伊藤(隆)　昔よく、金帰火来と言っていたけれども、〝土帰月来〟ですね。

伊藤(圭)　そうですね。いや、金帰火来というのは代議士なのです。代議士というのは大体月曜日に仕事がないですから。

河野　選挙区の手入れが大変だということですね。

伊藤(隆)　閣議の場合は、どこの大臣もみんな秘書官が来る。

伊藤(圭)　そうです、一緒に行くのです。

伊藤(隆)　どこか溜まっているところがあるのですか。

伊藤(圭)　秘書官室というのがあるのです。

河野　各大臣全部？

伊藤(圭)　総理官邸の秘書官室の横に控え室みたいなのがありまして、そこで待っているわけです。

伊藤(隆)　そうしたらやはり、知り合いがそこにいるじゃないですか。

伊藤(圭)　だから、いろんな情報はそこで交換するわけです。

河野　秘書官同士で話がつくということもありますか。

伊藤(圭)　それはありました。終わったあと、内閣改造があって僕らがやめたあとも、秘書官の会というのはずっと十年ぐらいは続いていました。池田さんの秘書官で自殺したのがおったでしょう。あの人が自殺した後ぐらいからなくなりましたけれども、そのときは中川一郎なんかもその秘書官の仲間に入っていたのです。これは、大野伴睦が議長か何かをやっていて、それの秘書をやっていたのです。

伊藤(隆)　車で来るでしょう。運転手は運転手で情報交換をやって、秘書官は秘書官で。

伊藤(圭)　あれは非常に仲良くなります。

伊藤(隆)　そうすると、いろいろ頼んだり、頼まれたりということになりますね。

伊藤(圭)　なります。

伊藤(隆)　普通の日に、政治家だと夜に会合があるじゃないですか。そういうときはどうなさるのですか。

伊藤(圭)　夜は、「きょうはいい」と言われれば、行かないわけです。政治家なんかに会うときにはやはり一緒に行くわけです。そして別室で待っているわけです。

伊藤(隆)　政治家と会うときですか。

伊藤(圭)　例えば、うちの長官が招待して政治家を招くようなときにはね。プライベートの場合には、「きょうはいい」と言うと帰ってしまうのです。私的なのもいろいろありますからね。

伊藤(隆)　きのう、松野頼三さんの話を聞いていたら、労働大臣になって、前任者から、「夜はどうするんだ」って。SPと秘書官に、きょうは五時で帰ってよろしいと言って、あとはもう自由だと、こういう話でそのとおりやっていて、後で分かったことだけれども、SPが帰りに所轄にその旨を言っておくから、所轄がちゃんとついていく。それで、全部分かっているのだって。だから、女性のところに行ったのも全部分かっている。そういうものだそうですよ。藤枝さんなんか分かりやすいけれども。

伊藤(圭)　いやあ、藤枝さんもやはりそういうのはあったでしょうね。政治家というのは東京で一人でしょう。奥さんは地元にいるからね。

伊藤(隆)　奥さんは、選挙用に絶対地元にいないとまずいでしょう。

河野　選挙区にいないと仕事になりませんよね。

伊藤(圭)　私が秘書官をやっているころ、池田さんの子どもが赤坂にいるという話なんかがありましたね。それから、防衛庁の記者

クラブにいたNHKの記者が鳩山一郎さんの隠し子だと言っていましたが、そんなのもありましたから、昔は割合そういう点はおおらかだったのですね。今はとても……。

河野　昔はあまり隠さないという意味ですか。

伊藤(隆)　一応は隠していたのでしょうけれどもね。

伊藤(圭)　一応は隠していたのだけど、ばれても社会問題になるほどではなかったのですね。ミッテランの娘が葬式に来たようなものでしょうね。

伊藤(隆)　まあ、フランスほど下半身と人格は関係ないと、そこまではいかないけど。

伊藤(圭)　ちょっとまだ中間的。

伊藤(隆)　人によって、お妾さんが何人もいるというのを誇りにしていた人もいましたね(笑)。

河野　いるそうですね。国会でそう言ったという噂も。

伊藤(圭)　あれは誰だったかな。「妾が四人いるという噂です」と言ったら、「いや、俺は五人だ」と(笑)。

河野　三木武吉の伝説が語り継がれて。

伊藤(隆)　質問が終わって、「もう一人多いはずだ」と訂正したという(笑)。

河野　やはりだんだん厳しくなってきたのですね。

伊藤(圭)　この間、池田総理の奥さんが亡くなりましたね。ああ、もう時代が変わったなと感じます。当時の大臣は全部死にましたものね。それでも、あの内閣というのは、あのあと佐藤さんが総理になって、三木さんも総理になりましたでしょう。だから、やはり大物内閣だったんですよね。ただ、先生方はどうお感じか分かりませんけれども、私が最近感ずるのは、総理というのが軽くなりましたね。あのころは、総理は本当に重みがありました。佐藤さんなんかでも、あれは同じ高等学校でしょう。五高なのですけれども、やはり池田さんの前に出ると緊張していましたからね。今度は佐藤さんなんかになると、田中角栄さんなんかだって緊張していましたから。いやあ、本当に時代は変わりましたね。

伊藤(隆)　今、場合によっては官房長官のほうが偉いとか、いろいろありますからね。

河野　首相のほうが緊張しているかも知れません。

伊藤(圭)　自分で総理の座を勝ち取った人というのは、最後は田中さんですよね。中曽根さんが宰相として立派だったというけど、あの人はなるときは田中さんにしてもらったのですからね。

伊藤(隆)　それはそうですよね。だけど、初めから総理になるつもりで勉強してやってきているわけですから、図らずもなったのとはちょっと違う。

伊藤(圭)　そうです、そこは違いますね。

伊藤(隆)　図らずもなった一番最初は鈴木善幸。でも、最近は図らずもなった人が多いですからね。

伊藤(圭)　鈴木さんの後なんていうのは皆そうじゃないですか。だって、あの三木さんだってそうですね、あれも。

伊藤(隆)　でも、三木さんはやっぱり。

伊藤(圭)　いや、本人はなる気はあったのでしょうけれどもね。

伊藤(隆)　十分に(笑)。

伊藤(圭)　しかし、ああいう事件でもなければなれなかったでしょうね。

伊藤(隆)　ま、それはそうですね。でも、がんばっていればなれるという。

河野　そうでしょうね、気持ちはあったでしょうね。

伊藤(隆)　加藤紘一みたいに腰砕けになればもうだめですよ。三木さんなんかはめげない人だから。

河野　防衛庁の内局との間の調整というのも秘書官のお仕事に入るのですか。

伊藤(圭)　これはほとんどありませんでした。内局と幕僚監部と

いうのは。ただ、私はなるべく長官を幕僚長に会わせる努力はしました。例えばこういうことがありました。当時は中山（定義）という海上幕僚長なのですが、横須賀の基地の初巡視のときに、車で行くのですけれども、そのときに海上幕僚長に言って、長官の車に乗せたのです。二時間半ぐらいかかるわけですが、その間長官と話をしなさいと言ったのです。ゆっくり話す機会がないからと。そんなことはやりました。それから、長官が例えば航空自衛隊の部隊に行くときは一緒に飛行機に乗って行ったりするでしょう。そういうときはなるべく一緒にいさせるとか、そういうことをやりました。

伊藤（隆）　藤枝さんは部隊を実際にたくさんご覧になりましたか。

伊藤（圭）　見ました。「表通りだけではなくて、なるべく日の当たらないところをまわってくれ」と言うので、レーダーサイトとかあいうところにも連れて行きました。非常に皆喜んでいました。そういうのはあんまり苦にしないで行ってくれる人でした。

伊藤（隆）　そういう場合に大臣が話をする原稿なんかは作らなければならないのですか。

伊藤（圭）　原稿なんかはその頃は作りませんでした。大体こんな話をすればいいでしょうって。まあ、そういう点は非常に楽な人でした。この部隊はこういうことをやっている部隊で……。例えば、「レーダーサイトなんかは二十四時間で八時間交代でやっているのだから、『ご苦労さん』ということを言ってください」と言えば、ちゃんと言ってくれました。

河野　では、原稿とかはなくても、大体レクチャーで飲み込んでもらうと。

伊藤（圭）　ええ。だから、楽は楽でした。

河野　そのお膳立ては、先生が全部采配を振るうことになるわけですね。

伊藤（圭）　それはやりました。例えば、どういうところを見たほうがいいでしょうとか、バックグラウンドの説明なんかは全部やりました。

伊藤（隆）　藤枝さんのほうから、「こういうことをしたいんだ」というのはどうですか。

伊藤（圭）　こういうことをしたいというのは特にありませんでしたけれども、「宴会で国会議員を呼びたい」ということがあって、総務課に聞いたら「金がない」と言うから、「今は金がないからやめてください」と断ったことがありました。そうしたら、べつになんとも言わなかったけれども。まあ、やってくれというのもそれぐらいでした。

　私が自分の秘書官の一年間の経験で思いましたのは、秘書官というのはとにかく絶対に目立ってはいけないということです。「大臣よりも目立つようではいかん」と思いました。また、大臣が何か訊きたいとか、何か必要なときにはいつでも答えられるような場所におらなければいけないということは心がけました。これは矛盾するのですけれども、目立たないようで、必要なときにはすぐ答えられるような姿勢というのが必要だと思いました。

伊藤（隆）　政務秘書官との関係はどうだったのですか。

伊藤（圭）　非常によかったですよ。ずっと年上だったですし、「俺はもう何も分からないから、金は出すから頼むよ」というようなことで。

伊藤（隆）　金を出すというのは何ですか。

伊藤（圭）　金というのは、会社をたくさん持っていましたから。

河野　秘書官の方が？

伊藤（圭）　そうです。長官の行動は金がかかります。例えば旅行に行っても、旅費だって、役所の旅費だけでなかなか賄えないでしょう。賄えないというのは、例えば女中さんに対する心づけとかなんとか。そんなのはみんな彼がくれましたから、割合に苦労しませんでした。

伊藤(隆)　そういうものですか。

伊藤(圭)　その点で私がうらやましいと思ったのは、秘書官同士で話していて、河野一郎さんは凄かったみたいですね。とにかく宿に行くと、一日何万円とかくれるのだそうですよ。だから、女中にチップをやってもね。自分の泊まり賃も全部払ってくれて、だからその秘書官は役所からもらうのは全部貯金していたと言っていました。

河野　どこからそういう…(笑)。

伊藤(圭)　だから、金持ちの大臣に仕えた秘書官は楽だったでしょうね。

伊藤(隆)　政治資金でしょう(笑)。北海道から九州までいろいろ行かれたわけですね。

伊藤(圭)　ええ、周りました。特に私のときには、三十七年六月に参議院選挙があったのです。参議院選挙がありまして、総理のお供をして四国を全部周ったりしました。

河野　池田総理のあとについて。

伊藤(圭)　池田さんの遊説の。例えば四国を周るときは誰がついていく、九州に行ったら誰がついていくというのが分担されるのです。

伊藤(隆)　藤枝さんは四国。

伊藤(圭)　それで、その前の日まで北海道に遊説に行っておったのです。私も一緒に行っていまして、朝、旭川を発って、夕方、高松に着いて、徳島まで車で行ったことがあるのですけれども、そのときに、日本とは広いなと思いました。朝、旭川で列車に乗って千歳まで来るわけです。その朝の車には暖房が入っていました。そうしたら、高松から徳島に行くときは冷房ですからね。「日本も広いなぁ」と。六月でしたが。そのときはまだジェット機のない頃だから、羽田で飛行機を乗り換えるわけです。女房に言って、着替えを持ってこさせていました。

河野　冬服から夏服に。

伊藤(圭)　羽田で着替えて、交換して行ったりしました。

伊藤(隆)　じゃあ、やはり事務の秘書官でも選挙となると……。

伊藤(圭)　いや、選挙は本当は政務がついていかないといかんのです。だけど私のときにはそういう人なものだから、とにかく頼むから行ってくれと。ま、理屈がないわけではないのです。何か問題があったときにすぐ役所と連絡をとるということで。

　選挙のときの秘書官というのは楽なのです。とにかく選挙の場に行きますと、秘書官はぜんぜん関係なくなってしまうわけです。街頭演説なんかをしていると、喫茶店に入ってコーヒーでも飲んでいるわけ。全部自民党の県連がやってくれますからね。それから、宿賃だって何だって全部払ってくれますから、このときの旅行だけは楽でした。

伊藤(隆)　でも、強行軍じゃないですか。

伊藤(圭)　強行軍は強行軍、凄いですよ。池田さんと行ったときだって、あれは二日ぐらいじゃないかな。徳島で追いつきまして、徳島から池田を通って高知に出て、それから愛媛まで行ったのですけれども、確か泊まったのは徳島と高知だけですよ。一晩泊まって、そしてまた車で、それも途中で演説しながら行って。最後に松山で、池田さんは船で九州に行くので、私たちは自衛隊の飛行機で松山の空港から帰ってきました。

伊藤(隆)　そういうときは自衛隊の飛行機を使ってもいいのですか。

伊藤(圭)　使いました。

伊藤(隆)　問題にならないかな。

伊藤(圭)　いや、今なら問題になったかも知れないですけれども、あの頃はね。

伊藤(隆)　自衛隊の飛行機の乗り心地はどうですか。

伊藤(圭)　それはよくないですよ。

河野　一般の航空機のほうがいいですか。

伊藤(圭)　それはもう、はるかにいいです。ただ好きな時間に好きなところから飛べるというだけですね。それで、あの頃は、帰ってきたときに羽田に降りましたね。羽田を使っていました。

伊藤(隆)　航空自衛隊のですか。

伊藤(圭)　あのときは海上自衛隊の飛行機で帰ってきました。

伊藤(隆)　しかし、秘書官というのはなかなか得がたい経験ではあろうと思いますが、業績として自分に残るものはあまりないでしょうね。

伊藤(圭)　ないです。もう一つ、秘書官業が面白いと思ったのは、とにかく一日が終わると全部終わりなのです。翌日に持ち込むということはないわけです。悩んだりするのはないわけ。ところが、そのあと今度防衛局に行って四次防なんかをやると、一年半悩むわけです。その点は、一日一日の勝負というのは、失敗は許されないけれども、楽は楽ですね。一日終わったらもう。

伊藤(隆)　すぐ忘れればいいわけですからね。

伊藤(圭)　そう、忘れればいいわけです。

■将官クラスの天下り

河野　そのあと防衛課長時代のほうがもっときついのですね。

伊藤(圭)　これはやはりきつかったです。各省とやりあったりなんかしなければなりませんから。

伊藤(隆)　この場合は外との関係というのはあまりありませんね。

伊藤(圭)　この場合にはありませんでした。特にあの頃は米側と話し合うなんていうこともあまりありませんで、もっぱら仲良くしておったころですから、米軍のパーティーに呼ばれたり、そんな交際はありましたけれども。

伊藤(隆)　逆はないのですか。

河野　こちらが招くとか。

伊藤(圭)　それもあります。藤枝さんの奥さんという人は外国人の好きな人で、喜んで一緒に行ったりしました。だけど、今のようにシビアな関係というのはまったくありませんでしたからね。だから非常に楽でした。

伊藤(隆)　今はそんなにシビアですか。

伊藤(圭)　それはシビアです。例えば飛行機の国産の問題なんかにしたって、ＦＳＸの国産化の問題などがありました。それから、基地問題が物凄いでしょう。あんな基地問題なんかなかったですからね。

　この間ちょっと申し上げた最初のときの、これは大変だったのです。これは、北富士の演習場の問題で、米軍との関係ではないのです。地元の人との問題なのです。これは、もっと補償金を出せと言うのですね。その交渉で、とにかく毎晩徹夜なんです。とても務まらないなと思ったことはありました。ところが、それが終われば べつにどうってことなかったですけれども。しまいには新聞記者も地元の要求が無法だというようなことを言い出したものですから。後で聞きますと、あれは、天野という人が取り仕切っていまして、結局、補償金が下りても皆に渡さないのです。そんなことでなんかゴタゴタがあったみたいです。

河野　そういうことが分かる前は、問題としてかなり難しいというふうに思われていたのですね。

伊藤(圭)　そうです。とにかく夜まで座り込んでおられるので、それで参ったのです。

伊藤(隆)　大臣というのは、就任しますと局長クラスぐらいの人たちが次々にご進講に来るわけですか。それは、秘書官はついているわけですか。

伊藤(圭)　ついています。大体それが一週間から十日ぐらいかかります。

伊藤(隆)　そんなにかかりましたか。

伊藤(圭)　かかります。各部ごとに所管事項についてやるわけですから。それから、防衛庁の場合には、各局のほかに「陸」「海」「空」の幕僚長のご進講がありますから、やはり十日ぐらいはかかります。

伊藤(隆)　ご進講というのは、ただしゃべるだけではなくて、書いたものを渡しているわけですね。

伊藤(圭)　そうです。それから、いろいろ質問を受けたりなんかしました。

伊藤(隆)　まあ、それは大臣がどれほど熱心であるかによって違うのだろうと思いますけれども、藤枝さんはどうなのですか。

伊藤(圭)　その点は、やはり役人上がりですし、理解が早かったです。そういう意味では楽でした。あとの、私が防衛局長で仕えた金丸信とかになると、これは何がなんだか分からんから、説明は容易ではなかったです。

伊藤(隆)　逆に言えば、「よきに計らえ」になってしまう。

河野　そういうことですね。

伊藤(隆)　逆に言えば、またどこかから動かされて、ごり押しで。

伊藤(圭)　そういう点はあったでしょうね。

伊藤(隆)　そうですか、藤枝さんというのはお役人だったのですか。

河野　そういうときに、ご進講用資料を作って、そういった資料というのは残すものでしょうか。

伊藤(圭)　それは特に残さないと思いますね。あるいは、次の大臣に作るために何年かは持っておくかと思うのですけれども。

伊藤(隆)　受け取った側はとっているかも知れないでしょう。

伊藤(圭)　持っているかも知れないですね。

伊藤(隆)　でも、大体政治家はみんな捨てる。

伊藤(圭)　それも、たまたま私の後輩で調達実施本部長をやっていたのが捕まったでしょう。あのときに私なんかは言われました。「伊藤さん、持っている手帳なんかは全部焼いておいたほうがいいですよ。何かのことでひっかかって、全部調べられることがありますよ」なんて言っていました。だから、政治家なんていうのは、そういうのは廃棄するのではないでしょうか。

伊藤(隆)　…じゃあ、そんなに、徹夜でがんばらなければならないなんていう忙しさはぜんぜんないですか。

伊藤(圭)　ただ、予算のときは、ご存じのように昔は予算の閣議なんていうのはいつも真夜中ですから、これはなかなか容易じゃなかったです。

伊藤(隆)　大体十二月。

伊藤(圭)　大体十二月三十日でした。だから、私たちが終わったあと、経理局なんていうのは正月まであとの整理が大変でした。だから、今なんかずいぶん楽になりましたね。三十日の明け方の四時ごろ、閣議をやっていると電話がかかってくるのです。「いつごろ終わる?」なんて言われたって、閣議なんて分からんですね。そんなような、まあ、あの頃はひどいものでしたね。

河野　先生は防衛一課にいらっしゃって、全体の防衛庁予算について飲み込んだうえで秘書官になられるというのは非常によかったですか。

伊藤(圭)　これは非常によかったですね。ほとんど「陸」「海」「空」のことを知っていましたから。

伊藤(隆)　大体そんな感じなのですか。

伊藤(圭)　そうじゃないでしょうか。私のあとになったのは、これは私より一年先輩だったのですけれども、やはり防衛計画官室におった人です。最近はどういうふうになっているかあまり知りませんけれども。

伊藤(隆)　ご経歴のなかでは、ご自身としては多少異色の時期ではあるわけですね。

伊藤(圭)　そうですね。だけど、非常に面白かったです。ある意味では、これと広報課長というのがやや似ているのです。これも一日一日で大体仕事が終わっていきますから。防衛局の仕事というのはとにかく尾を引きますね。何年もかかる息の長い仕事でした。だから、毎年の業務計画を作るときなんていうのは、一ヵ月ぐらいずっと幕の人と詰め合って、夜の十二時ごろまでやることがありました。

伊藤(隆)　広報課長になると、業務計画はないですか。

伊藤(圭)　広報課長というのは割合にないのです。金はあればあるほどいいのですけれども、なくてもどうってことないんですね。だから、その意味では楽でした。それで、私の広報課長の頃というのは大蔵省がよく面倒をみてくれまして、どんどん、予算が増えていく頃で、映画を作ったりなんかしていました。

河野　この六番の、ちょうど秘書官でいらっしゃった時代に、退職になった幕僚長というような将官クラスのための参事官制度というのが検討されたと報じられていますが、実際にはいかがでしたか(【資料2】参照)。

伊藤(圭)　これは特に検討した記憶はありません。いわゆる昔の軍事参議官みたいなのを作ったらどうだという希望が「制服」のほうから出てきたのだと思います。しかし、庁議で議論したとかそういうことはなかったと思います。おそらくそういうのは、新聞記者なんかが来たときに誰かが話したのが記事になったのだと思います。一般的に言うと、昔の大将の定年は六十でしょう。ところがその頃は、陸将で五十八ぐらいの時ですから、早く辞めた人は気の毒だから軍事参議官みたいな処遇を考えたらどうだというような話があったのは事実です。しかし、制度化するための議論なんかはしたことはありません。

伊藤(隆)　何か優遇措置をするというふうなことは実際にはしなかった。

伊藤(圭)　しませんでした。

河野　もしそういったことをした場合には抵抗が予想されるというような理屈ですか。そうでもないのですか。

伊藤(圭)　いや、そうでもなかったですね。

河野　あまり強い要求でもない。

伊藤(圭)　そうそう、強い要求でもなかったですね。

伊藤(隆)　退職した自衛官の将官クラスの人たちなんてどうしたのですか。

伊藤(圭)　これは、結局、防衛産業の顧問になりました。だから、気の毒と言えば気の毒ですね。そういう意味では警察もそうでしょうけれども、防衛庁関係の人、特に「制服」の人というのは、辞めた後はかわいそうですね。というのは、ああいう閉鎖社会ですから、将なんかになると、昔の師団長なんていうのは殿様でしょう。それがただの人になってしまうのですから、代議士が落選したようなものですから、かわいそうですね。しかも、六十まで年金が下りないでしょう。だから細々と、例えば三菱重工なんていうああいう大きな会社になると、本当にただ飯を食わせるだけなのですよね。二十万とか三十万の金を出して。

伊藤(隆)　何もやらなくてもよろしいと。

伊藤(圭)　何もやらないでくれと。来て、碁かなんかをやって帰る。これもやはり辛いものみたいですね。

伊藤(隆)　そうでしょうね。プライドというものがありますから。

伊藤(圭)　そういう意味では、天下りというのは、いろんな特殊法人の天下りが言われていますけれども、実際は、通産とか運輸、大蔵あたりが行っている、銀行とか会社、ああいうところの経営者になるのが本当の意味で天下りじゃないかなと私は思うのですけれども。

伊藤(隆)　そういう、将官クラスの人たちをどこかの防衛産業が顧問やなんかにというのは、官房長あたりが取り仕切るわけですか。

伊藤(圭)　いや、これは「制服」の人が、各幕僚監部がやります。

伊藤(隆)　幕僚監部がやるのですか。

伊藤(圭)　内局の関係は官房長あたりがやっているみたいです。

伊藤(隆)　分けているのですね。

伊藤(圭)　それから、内局も力が弱いものですから、結局、例えば大蔵省から来ていて辞めた人は、大蔵省で面倒を見ているみたいです。警察は警察、自治は自治省で、世話するみたいです。

伊藤(隆)　元の古巣。

伊藤(圭)　そうそう。私の場合には、もう亡くなった方なのですけれども、四十三年に私が広報課長時代に、三菱電機のその当時の社長さんと一緒にアメリカに行ったのです。その人が電話をかけてきまして、「三菱電機に来ないか」と言うので、「私は役人しかやっていないので、商売のことは分かりません」と言ったら、「いや、講演でもしてればいいのだから」と言うので、それで世話になったのです。だから、まったく役所の世話にならないで行ったので、そういう点は非常に気は楽でした。私は割合いろいろな人を知っていましたから、いよいよ困ったら誰かが助けてくれるのではないかなという気持ちはありましたけれども。

伊藤(隆)　三菱電機はいつ頃までおやりになったのですか。

伊藤(圭)　去年の四月まで。これもほとんど仕事はないのですよね。仕事はなかったけれども、私はよく頼まれて話しに行っていたものですから、そんなことでけっこう楽しんでいましたけれども。

伊藤(隆)　私は今、三菱電機の、木内(信胤)さんの息子の孝さんと…。

伊藤(圭)　よく知っていますよ。

伊藤(隆)　それから、七番もあるのではありませんか(【資料2】)。

河野　先生がちょうど秘書官のころの。ちょっと細かいですが、もしご記憶があれば。

伊藤(隆)　在日米軍機がタイへ出動するという問題。

伊藤(圭)　これは、私はほとんど記憶がないのです。だから、これは防衛庁よりは外務省だと思うのです。

河野　あ、条約の問題。なるほど。

伊藤(圭)　うちのほうとは直接関係がなかったと思うのです。だからほとんど記憶がないのですけれども。

河野　ということは、こういう安保条約に関する問題で外務省が何か対応するときには、防衛庁との連絡というようなことはあまりとらないのですか。

伊藤(圭)　私が防衛課長、防衛局長のときにはよくやりました。例えば、どこの基地の返還ということを言ってきたのだけど、どうだろうかとか、そういう相談はありました。それから、私が局長のとき、横須賀を母港にする問題があったでしょう。あのときなんかも相談がありました。だけど、最近はあまりないみたいですね。

伊藤(隆)　安保条約は外務省の専管事項だということでしょう。

河野　ただ、実際運用するときにはどうしても関わってくると思うのです。

伊藤(圭)　私のときはいろいろ相談を受けましたけれどもね。

伊藤(隆)　やはり時期によって、問題によっても違うのではないでしょうか。

伊藤(圭)　人間関係もあるのですね。

河野　どなたが局長でいらっしゃるかによって外務省の対応が変わる場合もあるということなのでしょうか。

伊藤(隆)　八番の、アメリカとの間の防衛技術資料交換計画というのはどうですか(【資料2】参照)。

河野　これも報道はあったのですが。

伊藤(圭)　これも、聞いたことはありますけれども、私は直接内容

を知りません。

河野　そうですか。こういう場合はどういうセクションが？　これは「制服」の。

伊藤(圭)　「制服」ではなくて、これは、内局の装備局の技術担当参事官というのがいるのですが、そういうのがあるいは知っているかと思います。これはこの次に来るときまでに訊いておきます。

伊藤(隆)　いま目黒にあります技術研究所？

伊藤(圭)　あれは防衛研究所です。

伊藤(隆)　研究所ではなくて、あれと一緒にある。

伊藤(圭)　あそこは研究本部の研究所ですね。

伊藤(隆)　あれはずっと昔からあるものですか。

伊藤(圭)　そうです。技術研究本部というのが三宿にありまして、一、二、三、四、五。五つまで研究所があります。そのうちの二か三ではないですか。「海」の関係だと思うのです。だから、あそこはプールなんかがあるのです。

伊藤(隆)　はい、そうらしいですね。

伊藤(圭)　それから、飛行機の関係は立川にあるのです。燃料電池の関係なんかは久里浜かなんかでやっていました。そういうふうに分かれていますけれども、あそこに一部あります。

伊藤(隆)　やはり、軍事技術関係の研究開発という点では、かなりやっているのですか。成果を上げているというか。

伊藤(圭)　ある程度……。例えば戦闘機なんかも自前で作れると言っていますから、かなり進んでいるのではないかと思うのですが。

河野　技術的にはできると。

伊藤(隆)　ただ、またコストの問題があるし、アメリカとの関係があるのですね。ご存じのように、三菱電機で開発したのですけれども、フェイズドアレー・レーダーなんかは、どんな飛行機になっても採用するとアメリカとの話し合いでなっていたのです。あのレーダーなんかは断然日本が進んでいるのです。

伊藤(隆)　個々の技術で日本が進んでいるのはあって、アメリカからパッケージで技術を供与される場合に、日本発の技術も入っているということもあり得るわけですね。

伊藤(圭)　それはあると思います。

伊藤(隆)　アメリカは、しばらく前に、日本の産業技術でアメリカの軍事技術が左右される危険性があると問題になったでしょう。

伊藤(圭)　そういうことがありました。

伊藤(隆)　徐々にいろいろなところで技術開発をやったのだろうと思いますけれども、かなり民間が多いのではないですか。いまおっしゃったような三菱電機とか、ソニーとか。

伊藤(圭)　ソニーの汎用機器なんていうものはかなり軍事的なものに取り上げられているとは思いますね。

伊藤(隆)　あ、東芝の……。

伊藤(圭)　あれなんかまさにソニーの技術なのです。ベトナムで使われた、目をもっている爆弾というのがありましたでしょう。あれはソニーですよ。

河野　湾岸戦争でも使われたという技術ですね。

伊藤(隆)　あれをロボットにつければいい(笑)。

河野　そうすると、人間が要らなくなるかも知れないという。では、かなり技術開発の蓄積というのは日本側にもあって。

伊藤(隆)　いつの段階か知らないけど、こういう交換協定ができたでしょう。

伊藤(圭)　技術協定というのはかなり前にできているはずです。

伊藤(隆)　それで、社会党あたりが、これはけしからんじゃないかと騒いだ。いつのことかちょっと忘れましたけれども。時間的にもそろそろ終わりということですが、この次の日程を。

〈以上〉

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第4回

開 催 日：2001年2月16日（金）
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時05分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

河野康子（法政大学教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■調達実施本部と調達庁

伊藤(圭)　この間お話ししたなかでちょっと勘違いしておったのは、調達実施本部と調達庁の関係です。調達庁と一緒になったのは調達実施本部ではないのです。〔防衛庁に〕建設本部というのがあったのですが、調達庁が防衛施設庁になって建設本部を吸収するのです(昭和三十七年十一月一日)。

河野　じゃあ、調達実施本部は残るのですか。

伊藤(圭)　調達実施本部は残ったというより、もともと建設はやっていなかったのです。いわゆる武器の調達、それからそのほかの隊務に必要なテントとか。

河野　備品ということですか。

伊藤(圭)　そういうものの調達を一括してやっておった。ですから、調達実施本部はずっとそのままあるわけです。調達庁というのは、名前は調達なのですけれども、あれは全部米軍の調達をやっておったのです。だから、防衛庁とそれまではまったく関係なかったのです。

河野　別なのですか。そういうこともやっぱり、伺ってみて初めてよく分かりました。

伊藤(圭)　建設本部というのは今、〔防衛〕施設庁のなかの建設部になっているのです。昔からの米軍の関係をやっている施設部というところがありまして、米軍に基地を提供するとか、米軍の基地内の施設。

河野　住宅建設とかそれも全部入るのですか。

伊藤(圭)　そういうのも入るのです。その建設をやるのは建設部がやるのです。もう一つ労務部というのがありまして、これは基地の従業員の組合対策です。この間もお話ししましたように、日本政府が雇用して提供しているのです。あれも形としてはおかしいのですけれども、調べてみましたら、それはずっと前からみたいです。そのことは地位協定には何も書いてないのです。地位協定に書いてあるのは、直接経費はアメリカがもって、間接経費は日本がもつという書き方なのです。その直接経費が何かは分からないですね。少なくとも基地のなかの生活なんかは直接経費のはずなのですけれども、例えば電気代とかああいうのはこっちがもっているのです。あれは基地を提供するというなかに入っているみたいなのです。だから、その辺がどうもはっきりしないのです。

　それから、たぶん従業員の給料なんていうのは、その頃はアメリカが物凄く国力がありましたでしょう。日本は何もなかったから、まあ、アメリカで出すということだったのでしょうね。

河野　やっぱりだんだんそれではバランスが悪いことになってきたのでしょうね。

伊藤(圭)　バランスが悪くなったというか、円高になってきたものだから向こうが困ってしまったのです。それで一番最初に向こうが言い出したのは、私が防衛局長のときに金丸(信)さん(防衛庁長官)に随行してペンタゴンに行ったときでした。〔一ドルが〕二百四十円になったときでした。

河野　円高になりますと、そういうことが出てきますね。

伊藤(圭)　このあいだの補足からさせていただきます。

伊藤(隆)　はい、お願いいたします。

伊藤(圭)　まず、このあいだお話ししたなかで完全に抜けておったのが、三十六年度というのが長期計画のない年だったということです。これは、一次防以降、長期計画のない唯一の年度なのです。それがなぜそういうことになったのかというと、私の記憶ではたぶん、海原さんが防衛局長になって二次防を作るわけですが、前任者の二次防が気に入らなくて全部見直しをやるわけです。それで間に合わなくなって、三十五年度末、三十六年の一月頃の国防会議で決定しているのは、陸上自衛隊の師団の改変だけを決定してい

るみたいです。あとは何もやっていないのです。あとは単年度の予算でやったわけです。単年度の予算でやったものですから、割合に自由にやりまして、練習機とか新しい飛行機の機種なんかも三十六年度で決めたような記憶があるのです。今ではそういうのはなかなかできない。それこそ国会で問題になるところでしょうけれども、それが問題にならなかったのです。

伊藤(隆)　ということは、それは単年度予算で要求を出しておったということですか。

伊藤(圭)　はい。もう一つ記憶がありますのは、これは三十七年度の予算になると思うのですが。私が秘書官のときですから、三十六年の終わりの大臣折衝のとき。あのとき、実は予算折衝で非常に揉めまして、海上自衛隊はP2Jを六機追加生産を要求して、駆逐艦(DD)を一隻、……何隻かあったのですけれども、その二つだけは最後まで大臣折衝に残ってしまったのです。海上自衛隊は両方通るとは思わなかったのですね。それで、最悪の場合には船はあきらめるから、飛行機を通してくれということを言っていました。私が秘書官で藤枝(泉介)さんと一緒に大蔵省に最後の折衝に行ったときに、いよいよかんときには船〔の要求〕を降りてくれと「海」が言っているということを伝えたのです。折衝が終わって帰ってきたら、「伊藤君、両方通ったよ」と、両方ともとってきた記憶があります。これが三十六年十二月二十九日かなんかでしょうね。そんなことがありましたので、一次防が決定したのち、長期計画のない唯一の年が三十六年度ということです。

あとになって四次防のときに、予算委員会が、これは長期計画がないというので六十日間くらい止まってしまうわけです。あのときに私は、「防衛庁のなかで長期計画のない年だってあったじゃないか」ということを言うのですけれども、当時はみんな怖がっちゃってそれを誰も主張しないのです。結局、二階堂(進)さんの発案で大綱だけ決めろというので決めて、それで始まるのかと思ったらまた止まっちゃうというようなゴタゴタがあったのですけれども。そんなことがありましたので、これは特異な年だったということを申し上げようと思いました。

もう一つは、調達実施本部と調達庁の関係です。これは言葉が同じようなものですから私もちょっと混乱してしまったのですが、実は、防衛庁に付属機関としてありましたのが、調達実施本部と建設本部というのだったのです。調達実施本部は、武器、その他の装備品、例えばテントとか掃海具とかそんなものを買う。建設本部というのは、自衛隊の施設の建設を担当する。それで、調達庁が施設庁になったときに、調達庁の業務と建設本部――自衛隊関係の建設――が一緒になったのです。ですから、いま施設庁のなかには施設部と建設部というのがあるのです。そして、もう一つは労務部があります。施設部でやっているのが、主として米軍の基地の提供。建設部は自衛隊と米軍に提供する建物の建設をやっているのです。だから、米軍の基地の提供や返還については施設部がやっているのです。

河野　そうすると、例えば逗子の米軍施設に関する事件があったときの担当というのは施設部がやっている形になるわけですか。

伊藤(圭)　そうです。施設部のなかに、基地対策本部みたいなものがあるのです。それで、基地のことについて全部やっているところがあるのです。それから、施設部のなかに取得課なんていうのがありまして、これは米軍の基地の取得とかそういう仕事をやっている。それから補償課なんていうのもありまして、これは漁業補償とかそういうのです。だから、全部米軍基地に関することは施設部でやっています。この間ちょっと私が申し上げたのはうろ覚えで申し訳なかったのですが、整理するとそういうことになるということです。

建設本部は自衛隊の建設をやっておったのですけれども、施設庁になるときに一緒になるので、それで調達庁と一緒になって施

設庁になったという経緯でございます。

伊藤(隆)　米軍関係のものはすべて施設庁になったわけですか。

伊藤(圭)　そうです。施設庁というよりは、調達庁だったのですね。その後は施設庁です。ですから、米軍基地関係のことは防衛庁のなかは関係ないのです。

伊藤(隆)　建設本部のほうは。

伊藤(圭)　これは自衛隊の建物の建設工事をやっていたのです。

伊藤(隆)　ですからずいぶん違う業務が一緒になっているような気がしますが。

伊藤(圭)　そうですね、それはあると思います。ただ、例えば米軍の住宅を逗子に造ってありますね。ああいうときの設計とかなんとかいうのはこの建設本部でやっていると思います。ただ、どういう施設をどこに設けるかという折衝は全部施設部でやっているのです。だから、決まったあとにやるのは建設部がやっているのだと思います。

もう一つ宿題がありましたのは、防衛庁と調達庁が一緒になるときに、防衛庁側には反対があったというお話をしましたね。内局と各幕とも、なんかややこしい仕事がいっぱいくるので嫌だと。調達庁側はどうだったのかということでございましたので、調べましたら、首脳部は賛成だったのだそうです。というのは、米軍の仕事というのは先細りになっていきますから、昭和三十一年に、アイゼンハワー大統領の頃、陸上部隊はほとんど撤退しましたでしょう。これからはもう、だんだん縮小されていく。したがって、なんとかしなければいかんということ。同時に、首脳部には昔からの官僚というのはあんまりいないのですね。引き揚げてきた者とか満鉄の人が多いでしょう。だから、あんまり役所に対するこだわりがなかったみたいです。それよりは、今いる人員をどうやって生かすかということが重要だったものですから、賛成だったそうです。ところが、組合側は物凄く反対したのだそうです。まず、防衛庁に合併すると、いま作っている組合がつぶされると思ったのですね。まさになくなるわけです。防衛庁の職員になりますと特別職になりますから。調達庁は一般職の公務員でしょう。だから組合が作れるのです。ところが防衛庁は組合が作れないのです。

伊藤(隆)　それは現業であっても作れないのですか。

伊藤(圭)　作れないのです。だから、自衛隊も作れないのですね。警察官と同じになっています。そこで困るのが、いわゆる全駐労（全駐留軍労働組合）というのがあるでしょう。これは各基地におりますでしょう。この仕事は、大元は調達庁でやっておったのですけれども、実際に世話するのは各都道府県でやっておったのです。各都道府県に労務部というのがあって、地方の行政機関に委託しておったものですから、これを全部防衛庁のなかに取り込むというわけにはいかないわけです。したがって、施設庁として合併したときも、調達庁のなかの労務部職員だけは一般職で残したのです。数は少ないのですけれども、その労務部の連中が組合を作ったかということを訊きましたら、作ってないのですね。ただ、労務部というのは基地従業員の全駐労対策が主になるわけです。それで、各県なんかと相談しながら全駐労対策をしていたということでございます。

伊藤(隆)　全駐労の人たちというのはどういう位置付けなのですか。

伊藤(圭)　それは、訊きましたらやっぱり、最初から日本政府が雇って提供しておったものらしいです。

伊藤(隆)　公務員なわけですか。

伊藤(圭)　公務員なのです。一般職の公務員ですね。だから、これは組合を作れるわけです。それで、私はこの間数を間違えていまして、千五百人ぐらいと申し上げましたが、実際は今でも三千人いるのです。昔は三千五百人いたものらしいです。そういう話を聞きましたので、その点を訂正させていただきたいと思います。

伊藤(隆)　全駐労に組織されている人たちの職種というのはいろいろですか。

伊藤(圭)　これはいろいろあるのです。特に、先ほどもちょっと河野先生に申し上げたのですけれども、給与を全部アメリカがもっているのです。これもおかしな話で、日本政府が採用しておって、金は向こうが出しているわけです。だからおかしなものなのですけれども、そのことが地位協定に書いてあるかというと書いていないのです。それで、直接経費はアメリカ、間接経費は日本ということですから、だから基地の提供と同じように考えれば間接経費ともとれるのですけれども、向こうが出しておったのです。それはおそらく、アメリカが国力があって日本が貧しかったからそういうところは大まかに見ておったのだろうと思うのです。

その反面みみっちいなと思ったのは、私が企画課長になっていったときに、米軍の車が高速道路を通るときの料金は日本政府が払っているのです。理屈がまた非常に面白いのです。例えば、米軍のトラックが高速道路を通るときには、一時その施設を提供しているということになるらしいのです。提供したのだから金は日本政府が払うというようなこと。これもおかしいと思ったのですけれども、そういう理屈でした。いろんなややこしいことがありました。あとで、きょうのご質問のなかにあります施設庁の企画課長時代のことでそういう問題も触れることになるのかも知れませんけれども。

もう一つ、私は研究開発したフェイズドアレー方式のレーダーの話を申し上げましたが、これはアメリカのヒューズという会社が開発しておったのです。実際に我がほうもその技術を取り入れてやったのですけれども、それを小型化しまして、戦闘機にも積めるようにしたのは日本なのです。フェイズドアレーというのはどういうことかと言いますと、私も正確にご説明はできませんけれども、普通、レーダーというと電波を回すでしょう。こう回っている間はどこかが切れてしまう。それがないレーダーだと言っていました。

河野　いつも三六〇度全部出るのですね。

伊藤(圭)　全部出るのだと言っていました。だから、フェイズドアレー方式なんていうものがいろいろ研究されていた時期であったし、それから飛行艇の波切りが非常に優れた技術だというので、このあいだご質問があった技術協定の問題なんかがあったのかなという気がするのですけれども。ただ、私の記憶するかぎりでは、それが庁内で議論になったということはあまりないのです。おそらく装備局のサイドあたりで検討しておったのかも知れませんね。きょうは、技術協力の関係で武器輸出の一連の資料がありましたのでコピーしてまいりました。防衛生産の基本方針から始まりまして。決定的になったのは、後藤田(正晴)さんが官房長官のときの昭和五十八年に、武器輸出に関することで研究は一緒にやろうということを発表しますね。そのときまでは、具体的に技術供与というのが話題になった記憶がないのです。だから、あるいは装備局サイドで米側と話し合っていたのかも知れません。

私が宿題だと思ったのはそれだけですね。何かほかにございましたでしょうか。

伊藤(隆)　大体そんなところだと思いますが。

■ナイキとホークの帰属問題

河野　正式決定になる前に、そういう一部局で話題になったものが新聞の報道に出るということはあり得ることですか。

伊藤(圭)　それはあります。ご存じのように防衛庁には記者クラブがございまして、私が広報課長のころは特に七〇年安保がありましたから、三十人から四十人ぐらいの記者が詰めているわけで

す。そうすると、内局、各幕にしょっちゅう取材してまわるわけですから、そんななかでいろんな担当の課長と話しておって、こういう問題があるというようなことが話題になって、そういうのが記事になるということもあるでしょう。それと、非常におかしな話ですけれども、新聞記者のなかには、なるべく自分の記事を大きく載せたいというところがあるのでしょうね。自分が書いたのを新聞に出して、そして今度は国会議員のところに行って、質問してもらいます。そうすると大きな記事になるものですから。そんな人もいました。

伊藤(隆)　逆にリークする場合もあるわけでしょう。

伊藤(圭)　それはあるのですね。

伊藤(隆)　ちょっとアドバルーンをあげてみるといいますか。

伊藤(圭)　そういうことはありますね。きょうは、ここにご質問をいただいていますけれども、大体、秘書官を辞めてから、施設庁の課長が終わって、広報課長になるぐらいまでの期間だと思います。その間もここに書いてあるようにいろんなことがあったのです。ですから、それを申し上げていきたいと思うのですけれども。

　キューバ危機は、これは米軍から統幕を通じて入ってきたと思うのです。ただ、このキューバ危機のときに面白い問題がありまして、先生も議事録なんかをお読みになることがあるかと思うのですけれども、キューバ危機があったときに、航空自衛隊がデフコン5（DEFCON、緊急警戒態勢第五段階）というのですか、警戒態勢の一番高いのを発令するのです。これはもちろんアメリカが発令して日本も発令するのです。けれども、どうして日本がやる必要があるのだという議論が国会であった記憶があるのです。そのほかはあんまりキューバ危機については記憶がないのです。

伊藤(隆)　ということは、万が一の場合には核戦争になるということでしょうね。

伊藤(圭)　それで、おそらくあのときアメリカは全世界に配備している軍隊に、最高の警戒態勢をとらせたと思うのです。当然、日本にいる空軍も海兵隊も全部それをやったのですよね。それで、航空自衛隊も一緒にやっちゃったというようなことです。そのときに、それを長官が知っておったかどうかというようなことが確か国会で問題になったと思うのです。ところが、これは報告して出すというようなものではないみたいなのです。あの頃は、どこかでアメリカあたりがやると、自動的に世界中がそういうふうになるみたいでした。非常に危険な状態であるという連絡があると、同じように（警戒態勢の段階を）上げていったのではないでしょうか。まして、あの頃はまだ日本の防空体制も十分ではありませんでしたから、米側にもかなり助けてもらっているところがあって、そんな関係もあったのだと思います。レーダーサイトの運用なんかも、三十四年頃までは全部米軍がやっておったのです。それが日本に移ってくるわけですけれども。あれは三十六年ぐらいだから、日本に移った直後でもあるわけですね。そんなようなことで一緒に警戒態勢に入ったのだと思います。

伊藤(隆)　「海」や「陸」は？

伊藤(圭)　これはなかったです。あのときはミサイルの問題だったのでしょうね。

　そして、私は秘書官をやったのがちょうど一年でございまして、三十七年七月十八日にやめて防衛一課に帰るわけです。九月に、これは私の非常にいい経験になったのですけれども、米側が招待してくれまして、二週間オリエンテーション・ビジットというのに招待してくれたのです。全部アメリカが費用をもちまして、どういうわけか知らないけど、このときに教育関係の施設を見せるオリエンテーション・ビジットに私を、秘書官をやってご苦労だったという意味で入れてくれたのです。それでずっと回りました。このときに「陸」「海」「空」の士官学校を見たり、当時はベトナム戦争中だったのでアメリカは徴兵制度を布いていたものですから、コロ

ンビア大学とか、ミシガン大学、それからロサンゼルスの大学に行きましたけれども、ああいうところに全部軍の事務所がありまして、日本と同じように士官に応募する者を募集したりしていました。ハーバードにもありました。そういうところもまわったのです。これは面白い経験でした。

そのときに「陸」「海」「空」の士官学校を見てつくづく軍隊の教育というのはどこも同じだなと思ったことがあります。というのは、学生の躾をするときに、日本はすぐ殴ったのに対して、アメリカは殴りはしないのですが、「やり直し！」と言うのです。また食堂で私たちも一緒に食べたのですけれども、一年生というのは食事のときなんかもきちんと座って本当に緊張して食べていました。だから、軍隊の教育というのはどこも同じだなという感じをもった記憶があります。

ただ、これは本当に遊びと言えば遊び。一日に十二ドルもらいまして、大体米軍の基地に泊まるのですが、一ドルぐらいで泊めてくれるのです。ご飯なんかを食べても二、三ドルです。ホテルなんかも、あれは特にペンタゴンが契約しているホテルなのでしょうか、八ドルぐらいなのです。だから、それでそこそこ行けるような旅行をしました。

伊藤（隆）　まだ日本とアメリカのギャップが大きい時代ですよね。

伊藤（圭）　これはもう、物凄く大きいのです。だから、よくやってくれたものだと思うのですけれども、ロサンゼルスに着きましたら、向こうの海軍中佐が迎えにきてくれて、ずっと案内してくれるのです。今から考えればいい観光旅行だったと思うのですけれども（笑）。とにかくワシントンに行きましてから、ニューヨークに行って、ナイアガラを見て、ミシガン大学なんかを見て、それからロスに行って。そんなことで、楽しい旅行をいたしました。

それで三十七年が終わるわけですけれども、三十七年のときにナイキ・アジャックスが入ってくるのです。これは二次防のなかで入ることが決まっていて、それが入ってくるわけです。ところが、まだどこが何を持つかということを決めていないのです。とにかくナイキもホークも〔アメリカ〕陸軍が開発したものですから、陸上自衛隊がそれを受け入れるわけです。そのあと、私は防衛一課でナイキとホークの帰属問題についての担当を命ぜられまして、「陸」「海」「空」といろいろ話し合ったのです。最後に決まるのが、翌年十二月二十八日なのです。

河野　ぎりぎりだったのですね。

伊藤（圭）　ええ、これは御用納めの日にやっと決まるのです。志賀（健次郎）さんが長官でした。そのときにナイキは「空」でホークは「陸」ということで決まるのです。この間延々と一年間ぐらいやっているのですけれども決まらないのです。統合幕僚監部にその調整を依頼したのですが、どうしてもできないのです。ついにできないので内局にあがってきたので内局でこれを決めるわけです。

私もいろいろ調べてみたのですが、別にどこが持ってもいいわけですけれども、そのときに主張はこういうことだったのです。「陸」は、ナイキ、ホークとも陸軍が開発したものであって、ナイキは遠距離の防空ミサイルで、ホークは近くに来たものを撃つのだ。この連携が必要だから両方とも「陸」が持つべきだという主張なのです。ところが「空」は、ご存じのように当時F104を持ったのですけれども、最後の有人機というようなことを言われていましたでしょう。そうなってくると、航空自衛隊はF104がなくなったら何もすることがないと思ったのです。これは大変だというので、とにかくナイキは俺のところで持つということを主張したわけです。海上自衛隊は、もう既に防空ミサイルを持っていたのです。三十五年度に、私がまだ秘書官になる前に「海」を担当していたときですけれども、ターターという地対空ミサイルを装備したのです。アメリカの海軍は日本の海軍とは仲がいいのでしょうかね、いち早くく

れることになった。

結局、統合幕僚会議で最後に判断できなかったのですけれども、統幕議長が最後に言ったのは、「『海』は既に持っている。両方とも『陸』に持たせると『空』がかわいそうじゃないか」と。まぁ、というようなことが一つの根拠になったのですけれども、それでナイキは航空自衛隊に行くわけです。

ところが、その前の年に受け入れるための教育を受けにアメリカに行っているのですが、これは全部陸上自衛隊が行っているわけです。航空自衛隊は誰もいないのです。そこで、空陸転換というのがありまして、ナイキを担当しておった陸上自衛官が全部航空自衛官に替わるわけです。

河野　そういう再編成をしたのですか。

伊藤(圭)　そうです。人数はちょっと記憶にないのですけれども、確か二個大隊分来ましたから、かなりの者が行ったのです。ところが、これが三年ぐらいで全部「陸」に帰ってしまうのです。私が広報課長の頃だったでしょうか。「陸」に帰った人に聞きましたら、確かに彼らが言うのも無理はないと思ったのは、やはりそういうところの中核は陸軍士官学校なんかを出た人ですね。それから、海軍兵学校を出た人もおりました。そうすると、陸上自衛隊ができてからこれで十年ぐらいたつわけでしょう。予備隊から。その連中は、昔は陸軍とか海軍にいたけれども、これは一年か二年だというのです。同じように、十年間陸上自衛隊におった者が航空自衛隊に行っても、一年もたたないでしょう。だから、どうもやっぱり馴染まないというのです。結局、航空自衛官で運用できるようなレベルになったところで帰ってくるわけです。航空自衛隊というのはもともと技術教育というのを最初からやっていましたから、割合にそういうのは受け入れるのに楽だったと思いますけれども。

伊藤(隆)　航空自衛隊はもともとどういう人たちが…。

伊藤(圭)　航空自衛隊は、最初の幕僚長はなり手がなかったものですから内務官僚の人がなったのです。官房長だった人で、海原さんなんかの先輩ですけれども。その次に、今度は海兵を出た人、あるいは士官学校を出た人がなりました。航空自衛隊ができた頃は、昔の陸軍大学、海軍大学を出た人はもういないのです。みんな士官学校を出た人です。大学を出たような人はみんなリタイアしてしまっていましたし、戦争の終わり頃になると、最後のほうは陸大も海大も教育していなかったでしょう。だからいないのです。陸士、海兵を出た人が、交代でもないのですけれども、なっていました。まさに寄せ集め。民間から来た人、技術者なんかもいましたし、寄せ集めの部隊でした。

伊藤(隆)　じゃあ、あんまり昔からの因縁というのを持っているわけではないですね。

伊藤(圭)　まったくないですね。だから、割合にみんな仲良くやっていました。その点で昔のしがらみというのを一番持ち続けていたのが海上自衛隊です。いわゆる海兵の伝統というのは凄いと思いました。

「陸」「海」「空」の自衛隊を発足するときに、「陸」はとにかく戦争に負けているものだし、〔アメリカの〕陸軍が占領しているでしょう。全部占領軍と同じ組織を作ってしまったわけです。これは野戦軍と同じです。だから、平時に向かないというので、あとで組織変更をするわけです。

航空自衛隊は、これも何も分からないわけです。そこで、全部空軍の定員をそのまま当てはめたものを作ったわけです。これはこれで得したのは、なにしろ米軍の組織というのは日本の大蔵省なんかのように詰めないものですから、割合に人がゆっくりしているのです。私があとで広報課長になって思いましたけれども、広報を担当する人員は、航空自衛隊が一番ゆっくりしているのです。米軍の組織をそのままとっていますから。

ところが、海上自衛隊は硬直していて、海上自衛隊を作るときに

米海軍の通りにしなかったのです。俺たちのものを作るというので、昔の海軍の組織を作ったわけです。そうなってくると、これは全部必要性を説明しなければいかんので、定員をどんどん削られるわけです。だから、一番苦しい定員で発足しました。けれども、ある意味では、海上自衛隊の定員というのは比較的余裕があるのです。というのは、ご存じのように、船乗りというのはしょっちゅう〔船に〕乗っていると体を壊すのですね。だから、予備員というのをおきまして、何年間か船に乗ると地上にあげる。そういうのがあったのですけれども、そういうのもどんどん定員化しなければ組織が成り立たなくなるようなことになってくるわけです。その意味では海上自衛隊は損したのではないかなと。伝統を墨守せんがために苦労したというところはありますね。

伊藤(隆)　旧軍とのつながりが一番強いのは確かに海上ですね。

伊藤(圭)　そうですね。陸軍が悪、海軍が善というのが一般的な常識になっているのですけれども、必ずしもそうではないと思うのですが、特に船に乗っていた連中は、「俺たちは悪いことを何もしていない」という感じがありますね。実際は、「艦隊派」なんていうのがずいぶん無理して戦争に引きずり込んだということはあるのでしょうけれども。そんなことが三十八年度にはありました。

■災害派遣に動員する——新潟地震

伊藤(圭)　四番目の志賀長官の自衛隊の教育の再検討というのは、これはちょっと分かりませんけれども、一九六二年というと昭和三十七年ですか。彼がなった年ですね。彼がなった年の十二月だから、ナイキやホークが入ってきている頃で、ちょうど一番取り合いが激しくなる時期ですね。そんなようなことから、ミサイル時代に入るのだから近代化しなければならんというようなことを言ったのかも知れません。あるいは、あれが出たのがこの頃かな。「自衛官の心構え」というのが教育の指針で出ているのです。これが三十六年の六月だから、西村(直己)長官の最後の頃ですね。これによってやったのかも知れません。

伊藤(隆)　志賀さんは長官としてはどうだったのですか。

伊藤(圭)　あんまり私は印象がないのです。ただ、志賀さんは防衛庁長官で初めてアメリカに公式訪問した人なのです。海原さんが志賀さんにはついていきました。その次に訪米した上林山(栄吉)長官は〔海原さんの同行を〕断ったのです。

河野　お国入りで騒がれた人です。

伊藤(圭)　志賀さんは海原さんを連れて行ったのです。海原さんが、「行くについてはやはり『制服』の人を連れて行くべきだ」ということを言いまして、航空自衛隊で向こうのアタッシェ(駐在武官)をしていて帰ってきた人で高橋という当時の将補を長官の世話役に連れて行ったのを記憶しています。なんか、海原さんがだいぶ苦労したという話はしていました。

河野　苦労をされたというのは、どんな?

伊藤(圭)　苦労したというのは、べつに交渉ごとで行ったわけでもなんでもないですから、ただ招待であっちこっちを見るのですけれども、志賀さんという人は日本酒しか飲まない人ですので、日本から日本のお酒を持って。まあ、あの頃〔外国に日本酒〕はないでしょうね。お酒を持って行った話なんかをよくしていました。奥さんがなくなっていますから、娘さんのかう子さんがついてきました。志賀さんの印象としてはそれぐらいしかないのです。そのほかにはあまりないのですが。

伊藤(隆)　あんまり長くもなかったですね。

伊藤(圭)　ちょうど一年です。この頃は一年ずつ替わっているのです。ご存じのように池田さんという人は八の字を好んだ人ですから。あの人は、末広がりというので八の字を好むのです。それで、

私が秘書官になったのが七月十八日です。翌年の七月十八日に辞めて、〔長官が〕志賀さんになって、またその次も一年たって辞めているのです。池田さんが終わって佐藤さんになってから「黒い霧事件」なんかがあるものだからゴチャゴチャになるわけですけれども、池田さんのときには決まって一年ごとにやっていました。

伊藤（隆）　池田さんというのは、そういう神様のご託宣とかがお好きな方で。

伊藤（圭）　好きなんですね。私もそれを言ったことがあるのです。伊藤昌哉さんの『自民党戦国史』を読むと、〔池田さんは〕いよいよ困ると、伊藤さんを岡山にやって、金光経のお告げを聞いて来いと言う。日本も創価学会と同じだなぁ、なんて言ったことがあるのですけれども。

六三年に入ると三次防の検討に入ったのは事実だと思うのです。というのは、結局、二次防のときにいろいろゴタゴタがあったものですから、早めにというので三次防を始めたのですけれども。これを始めた頃は、海原さんはアメリカに行っていた頃なのかな。アメリカの参事官で行っている時期があるのです。確か三次防が検討されている頃はいなかったのではないかと思うのですが、どうも私もそこら辺は、三次防に直接タッチしていないものですからあんまり記憶がないのですけれども。

ただ、ナイキ、ホークが三十八年の十二月に決まりますでしょう。三十九年がオリンピックの年ですね。オリンピックの年は、私は防衛一課のいわゆる先任部員という総括の課長補佐をやっていまして、これはかなり思い出があるのです。

というのは、新潟地震がありましたね。その前の年、三十八年には豪雪があったのです。新潟と富山辺りが物凄い雪で、これに関わってもちろん自衛隊も災害派遣を出したのですけれども。私は防衛一課におりまして、当時は飛行機を新聞社が持っていない頃なので、ヘリコプターを出してくれということを頼まれて、〔記者〕クラブの人をヘリコプターで豪雪のときに運んだ記憶があるのです。帰ってきてクラブの人が言っておったのは、豪雪地帯を新潟からずっと行くわけですが、新潟なんかに行ったら、豪雪だけれども全然災害派遣なんか必要ないというのです。ああいう雪の多いところの人は日ごろからそういうことを予測して蓄えているというのです。ところが、富山とか鳥取の人は経験がないものだから、本当に孤立して困っていたと、そんな話を聞きました。

そして、オリンピックの年の六月二日ですか、新潟の地震があるのですが、このときは自衛隊がある意味ではかなり活躍したのです。ちょうど地震が起きたときに、入間にあります航空自衛隊の偵察航空隊が訓練で空を飛んでいたのです。それで、とにかくすぐに様子を見て来いというので下から連絡をとって、その飛行機が行って、空から新潟の空中写真を撮ってきたのです。それを持って帰ってきたのが三時頃だったでしょうか。それを現像して総理大臣のところに届けたのが五時頃なのです。

あの頃は、テレビなんかもあったのでしょうけれども、とてもそういうのを撮っていないのです。それから、電話がほとんど通じなくなっちゃったでしょう。ですから、官邸で状況がまったく分からなかったのです。それで、池田さんのところにこのぐらい大きな写真を持っていって。持っていったのはもちろん局長が持っていったのですが、それで対策を始めたということがありまして、非常に官邸から感謝されたことがありました。

このときに私が部隊と違って内局の弱点だと思ったのは、〔仕事を〕代わる者がいないわけです。私も三日間ずっと泊り込んで徹夜したのです。

河野　途中で交代できないわけですか。

伊藤（圭）　交代できないわけです。どうしてかというと、災害派遣をやるでしょう。災害派遣をやって、例えば大湊から毛布を何千枚か持ってくる、舞鶴から船ですぐ食料を持ってくるとか、群馬の陸

上自衛隊をすぐ派遣するとか、そういうのを全部やるわけです。それは長官の災害派遣命令で動くわけですから、そういうのはみんなこっちで作って、各幕僚監部と相談しながらやって出すわけでしょう。そのために、内局の防衛一課が全部それをやったわけです。それを統幕にやれと言ったのですけれども、当時は、統幕はそういうことができないのです。平時の災害派遣で各幕を統合して運用するということはできないわけなのです。有事の際にだけできるのです。統幕ができないということで、全部内局が被ったわけです。それを防衛一課でやって、一人でそれをやっておったのですけれども、あのときは順調にやりました。

もう一つは、統合運用しなきゃならんと思ったのはヘリコプターです。行くのは、鉄道も何もだめで、ヘリコプターでしか行く手段がありませんでした。それで、「陸」「海」「空」のヘリコプターを集めまして、郡山の連隊で燃料を補給して行ったのです。記者クラブの人ももちろん運びました。政府の人も運びました。当時は建設大臣が河野（一郎）さんでして、その調査団なんかもヘリコプターで行ったのです。

そういうようなことがあって三日間徹夜したら、やっぱり疲れてくるのですね。現場の状況がどんどん入ってくるでしょう。それをすぐ報告するわけです。私は、最後の日に、もう疲れておって、なんか石油タンクが燃えたということがあったでしょう。

河野　それは確かあったと思います。

伊藤（圭）　実はあったのです。昭和石油の石油タンクが燃えたのです。それは地震が起きてまもなくだったのです。三日目になって、「三菱の何かが燃えている」というのが来たものだから、これを〝タンク〟だと思って、「三菱石油のタンクが燃えた」というのを閣議の席に入れたのです。それを〔黒金泰美〕官房長官が発表したら三菱石油の株がガタッと落ちてしまって、会社の総務部長が飛んできて、「本当ですか」と言うから調べてみたら、三菱石油の研究所かなんかが燃えたと、そんなことがありました。前に昭和石油のタンクが燃えたものだから、三菱石油と聞いて、「あ、タンクだ」と思ってタンクと書いたのですが、そんなようなこともありました。そのときに、災害派遣でも統合運用というのが必要じゃないかということを感じました。それが改正になるのはずっと後のことですけれども。

伊藤（隆）　そういう報告をされたというのは、閣議の場ですか。

伊藤（圭）　いやいや、そうじゃなくて、たまたまそのときに閣議があったのです。長官に対して、刻々と、今こういうことがあったというのを報告するわけですね。だから、防衛庁にいるときには長官室に出すわけですけれども、そのときたまたま閣議に行っていたものだから、官邸に連絡をとって秘書官を呼び出して、「今こういう連絡が入った」と言うと、それを秘書官がメモをとって届けるわけです。それで、その閣議の席で長官が発言したのです。それで官房長官が……。そのときは大臣（防衛庁長官）が福田篤泰（在任、昭和三十八年十二月九日～三十九年七月十八日）さんでした。帰ってきて福田さんに謝ったら、べつに怒りませんでしたけれども、そんな失敗があったのを覚えています。

河野　伺っていますと、新潟災害のときの反応というのは非常に迅速で、タンクの火災等もあまり被害が広がらなかったということですね。

伊藤（圭）　そうですね。航空自衛隊のオンボロの輸送機ですけれども、C40で消化剤を撒きに行ったりしました。それはかなり迅速にいろんなことをやりました。結果としてよかったのは、新潟地震で亡くなっている方はほとんどいないのです。一人か二人が何かの事故で亡くなっただけであって、地震そのもので亡くなった方というのはいないのです。それで、非常によかったよかったということになったのですけれども。

ただ、こういうことがありました。河野さんが建設大臣で〔新潟

に）行っていまして、駅に行ったのです。そうしたら、機関車が泥かなんかにまみれておって、それを丁寧に拭き取っているのが自衛隊員だったというので、河野さんがとても怒ったみたいです。「駅員は何をしているんだ」と言って、怒ったというのです。だけど、後で考えてみると、それは無理ないと思ったのです。というのは、自衛隊の人は群馬から行っている人でしょう。そのために出動しているのですね。ところが駅員というのはみんな家庭を持っていますから、家のことが心配でみんな帰っちゃっているわけです。自衛隊任せでけしからんといって河野さんが怒ったという話を聞きました。

伊藤（隆）　この災害出動は非常に感謝されましたね。

伊藤（圭）　そうですね。それと同時に、連絡がほとんどとれなかったものですから、あとで考えてみるともう少しやり方があったんじゃないかと思います。新潟上空に飛行機を飛ばして、そこから通信を中継するともっと早かったような気がするのですけれども。まあ、そんなことがありました。

伊藤（隆）　そういうときには、例えばどこから何を持っていって、陸上自衛隊を派遣してというときの費用の精算というのはなかなかやっかいなのではございませんか。

伊藤（圭）　いや、それはやっかいというより、その頃はほとんど自衛隊がもってやっていました。自衛隊の訓練費か何かで全部やっていましたから、ほとんど地方に頼むことはなかったと思うのですけれども、最近は、派遣しますと、例えば燃料代とかそういうのは地方がもつようになったみたいです。だけど、あんまりそういったトラブルはないのです。むしろ災害派遣のときのトラブルで一番煩わしいのが、引き揚げる時期の問題なのです。地元はなるべくいてもらいたいと思うのですけれども、あんまりいると、地元の土木業者その他に対する民生圧迫という問題が出てくるわけです。ですから、ある程度日にちがたったら帰ってこなければいけません。地元の人たちはなるべくいてくれと言うし、一方には早く帰ってくれと言うのもいる。非常に難しいところはありました。

伊藤（隆）　タイミングの問題ですね。災害出動の場合にはやっぱり、自治体の要請ということが前提になるのですか。

伊藤（圭）　前提です。ところが、それが改正になりまして、必要と認めたときにはまず偵察なんかを始めろということで、積極的に出られるようになっているはずなのです。それから、急な場合には、よく間に合わないときがあるのです。電話で来てくださいと言うと、とりあえず行くわけです。そうすると、書類上はあとで作るというようなことはできました。今は積極的に出られるようになっているはずなのです。

　だから、阪神大震災のときの問題は私はよく分からないのですけれども、あのときは姫路の部隊が近くまで来ているのです。ところが、要請がなかったみたいですね。だから入れないのです。中部方面総監部から県庁に問い合わせても、「いや、大丈夫だ」というようなことを最初は言ったらしいのです。そこであれは遅れているのです。ところが実際は姫路の部隊が明石かなんかまで来ているわけです。

河野　県庁が「来てくれ」と言わないかぎりは、やはり行けないのですか。

伊藤（圭）　県庁に断られたら、ちょっと出て行けないですよね。来てくださいと言わなくても、必要があれば出て行くわけです。出て行くのですけれども、問い合わせて「要らない」と言われたら、それはなかなか行けないわけです。そういう問題があります。結局、兵庫県というところは、土地柄のせいでしょうか、危機対策を自衛隊と一緒にやったことがかつてないのだそうです。それがやっぱり問題だった。石原（慎太郎）さんなんかがいま一所懸命やっているのは、ああいう教訓を踏まえたものだと思うのです。

伊藤（隆）　そうですね。あれはちょっとデモンストレーションの

感じもありますが。

河野　ずいぶん話題になりましたね。

伊藤(隆)　あれは非常によかったと思いますけれども。

伊藤(圭)　時代というのはこんなに変わったのかなと思ったのは、私も記憶していないのですけれども、自衛隊が発足した昭和二十九年の自衛隊記念の日には戦車が銀座をパレードしているのです。誰もなんとも言っていないのですね。観閲式が終わったあと、戦車と装甲車が銀座をパレードしているのです。それで、歓迎されているのです。だから、世の中というのはずいぶん変わるなと思って。

伊藤(隆)　やっぱりずれていくのですね。

伊藤(圭)　ずれていくのでしょうね。今でも私が分からないのは、沖縄がそうなのです。沖縄は、返還になる前は、自衛隊、自衛隊なのです。初めて自衛隊があそこに行ったのが四十一年頃でしょうか。まだ返還前です。豪州を遠洋航海して、沖縄に寄って、海上自衛隊が町のなかをパレードしているのですから。大歓迎なんですよ。そして、『琉球新報』の講堂で音楽隊が演奏会をやって、満員なんですよね。さらに驚くのは、私が広報課長時代に、あそこのテレビ局が自衛隊の広報映画を貸してくれと言ってきまして、テレビで自衛隊の広報映画を映しているのです。それが、返還されると同時にまったく空気が変わっちゃうでしょう。どうしてこういうふうになったのかなと。

伊藤(隆)　あの返還というのは凄いですね。

河野　さっき、防衛一課の統括課長とおっしゃったのは、どういう…。

伊藤(圭)　先任部員という名前は通称で。

伊藤(隆)　なんか軍隊みたいですね(笑)。

伊藤(圭)　昔の陸軍なんかの高級課員というのがいたでしょう。あれにあたるのが部員なのです。そのなかの先任ということで、先任部員という俗称ですね。しかし、官名は防衛庁部員です。それで、職名が防衛一課勤務ですか、そんな名称でした。

伊藤(隆)　ですから、履歴書だけを見ていると分からないですね。

伊藤(圭)　そうですね。

　その年にそういう地震がありまして、オリンピックの頃はまだ防衛一課におったのです。オリンピックが楽しかったのは、オリンピックにいろんなことで協力しましたでしょう。だから入場券をもらえまして、オリンピックの開会式を見たのです。

河野　ご招待席ですか。

伊藤(圭)　いや、招待席ではなくて一般席ですけれども。これは私が招待されたのではないですよ。課長かなんかが招待されたのです。そうしたら、課長は申し込んでおったのですね。それが当たったから、一枚余っているからやるよというので、それで行って、オリンピックの開会式を見ました。

　オリンピックの協力というのは、ご存じのように法律改正もしまして、そして協力体制を作ってやったのです。

伊藤(隆)　どういう法律を作ったのですか。

伊藤(圭)　「オリンピックその他国際大会における協力」というのが附則のなかに加わっています。

河野　附則に付いたのですか。

伊藤(圭)　それがこのオリンピックのときにできたのです。

伊藤(隆)　具体的な協力はどういうことをなさったのですか。

伊藤(圭)　六千人ぐらいの支援集団というのを作りまして、とにかくまず通信、それから選手を運んだり役員を運んだり、それから国旗の揚げ降ろし、これは全部自衛隊員です。それから、テレビなんかに出てくる、防衛大学校の学生がプラカードを持ってという、あれも全部やりました。それからファンファーレもそうですし、音楽隊が全部やりましたし、かなり大規模な協力でした。

伊藤(隆)　このときは既に中央音楽隊もあったのですか。

伊藤(圭)　ありました。

河野　この法改正というのは、オリンピックのために急遽ということで。

伊藤(圭)　そうそう。確か、オリンピックと南極観測が一緒の頃だったんじゃないかな。「ふじ」(観測船名)ね。

伊藤(隆)　ああ、南極観測ね。

伊藤(圭)　それを一緒にして、そういう協力というのを附則のなかに入れた記憶があるのですが…。いや、南極観測は昭和四十年だから、もっとあとになるんだなぁ。

伊藤(隆)　南極観測の問題は、一番最初は「ふじ」ですか。

伊藤(圭)　そうです。その前は「宗谷」で、海上保安庁がやっていたのです。海上保安庁が新しい船がなかなかできないというので、それで自衛隊がつくって。四十一年の十一月に初めて施行していますね。だから、このときも確か改正をやっているのですが、オリンピックのときもやっているのです。これは、国際競技に対する協力で、オリンピックだけに限らないのですよね。

河野　そうですね、アジア大会とかそういう国際競技もありますしね。

伊藤(隆)　そうですね、この南極観測も国際協力の一環ですからね。

河野　そういう場合は、例えば外務省と調整するような場はまだまだないのでしょうか。

伊藤(圭)　それは、外務省というよりは、オリンピックのときは確か文部省あたりと話し合っているのではないでしょうか。

伊藤(隆)　そうですね、確かそうだと思います。

伊藤(圭)　どこの国のオリンピックでも軍隊が協力するからというので。

伊藤(隆)　いろんな意味で自衛隊が国民の前に姿を現すという。

伊藤(圭)　そうそう、出てきた一番最初ですね。さらに快挙だったのは、円谷(幸吉)がね。とにかくメーンポールに日章旗が揚がったのは戦後初めてなんですよね。だから、非常に自衛隊の士気も上がったし。

伊藤(隆)　いろんなことがあったにしても、これは非常に楽しい時期ですね。

伊藤(圭)　楽しい時期なのです。ただ、このオリンピックのときには中国が原爆の実験をやって、びっくりしました。

河野　ちょうど同じ時期にあたりますね。

伊藤(圭)　オリンピック大会中なのです(十月十六日)。びっくりしたのですけれども、まぁ、びっくりしてもしようがないのですが、国際的に非常に話題になった記憶があります。

伊藤(隆)　しかし、中国が核を持ったということで、日本の防衛体制の問題だって直接的に関係が出てくるわけですね。

伊藤(圭)　そうですね。結局、そのことがあとの沖縄返還のときの核をどうするかという問題に結びついてくるわけです。あの頃は、とにかく日本に対する核の脅威というのはソ連しかなかったわけです。ソ連というのはアメリカとの対立関係にありましたから、直接脅威を感ずるというよりも、感じてもしようがなかったのです。そういう状況だったのですけれども、中国が持ったということになると、ちょっとまた様子が変わってくるわけです。

伊藤(隆)　日本の西側は全部ですからね。

伊藤(圭)　そうです。ただ、あの当時は、やっぱりオリンピックに浮かれておったせいか、あんまり深刻に考えていなかったというのが事実でしょうね(笑)。

伊藤(隆)　これは考えてもしようがない、アメリカに考えてもらおうということですね。

伊藤(圭)　沖縄返還のときにどうするかという問題があって、海原さんからお話を伺ったと思いますけれども、このときはあの人が田中角栄さんに核抜きを勧めるのです。

河野　ちょっとずれますけれども、核抜きは確かにあのとき海原さんがだいぶ動いたようだということはいろんな本にも出ていますが、防衛庁の中でも何人かの方が動いたようですね。海原さんだけではなかったようですね。

伊藤(圭)　それは記憶がありません。実は〔沖縄に配備されていた〕メースBという核兵器は既に古い物なのです。それで、ポラリスなんていう潜水艦が配備されていた時期ですから、あそこにメースBを置いておいてもあんまり意味がないということは分かっていましたから。ただ、日本に言われてやめたというのではアメリカとしての面子の問題もあったでしょうから、最後は総理が要請して引き揚げることになったのです。当時は三木(武夫)さんが外務大臣だったのですけれども、最初の頃は、彼は核ぬきなんてことはとても無理だよというようなことを海原さんにも言っていたみたいです。それで、海原さんが田中さんに話をして、「分かった。国会議員の集まりの席でそれを説明してくれ」と言われて彼も困って、「それは幹事長であるあなたがやるべきです」と話したというようなことを以前言っていました。

伊藤(隆)　核問題というのは非常にナーバスな問題ですけれども、核弾頭と核推進力をあんまり区別しないで騒いでいるわけですが。

伊藤(圭)　それは国会でもいろいろ議論されたことがあるのです。日本は原子力潜水艦を持つかという議論があったときに、「推進力として原子力がポピュラーになったら日本もそういうことはあり得ます」ということは国会で答弁しています。原子力というものが推進力としてポピュラーにならなかったのですね。だからやらないだけであって。

伊藤(隆)　日本だって〔原子力船を〕作って、とうとうだめになりましたね。

伊藤(圭)　そうそう。日本でも原子力潜水艦を持つことは不可能ではないというのが国会の答弁になっているのです。

伊藤(隆)　技術的には十分できる。

伊藤(圭)　そこまで検討していません。

伊藤(隆)　技術的にあんまりうまくいかないからじゃないですか。ただ、原子力潜水艦はいま世界中で動いていると思うのですけれども。

伊藤(圭)　原子力潜水艦がなぜ必要かというと、水中における速力がまったく違うのです。普通の潜水艦だと十ノットぐらいの速力が、三十ノットぐらい出るのです。

河野　そんなに違うのですか。

伊藤(圭)　だから、原子力潜水艦に対する対潜水艦作戦というのは根本から変わってきてしまっているわけです。そういう問題もあって原子力潜水艦は維持しているのだと思うのですが、普通の船は、危険な原子力でなくても、二十ノットかなんかで走っていればいいというようなことなのではないでしょうか。

伊藤(隆)　あとの核処理の問題もありますし。ウラジオストック辺りでたくさん沈んでいるという話ですけれども、あれは一体どうなるのか本当に心配ですね。

■過大に扱われた「三矢研究」

伊藤(圭)　本当ですね。そして、私はその年〔昭和三十九年〕の十二月に防衛施設庁に企画課長で行くわけです。

伊藤(隆)　これはどういう含みなのですか。

伊藤(圭)　これは特に含みというのはないのですけれども、内局の課長になる前にどこかに出るというのが昇進していくための一つのステップだったのでしょうね。まぁ、中で動く者もあるし、警察に行く者もあるし、外務省に行く者もあったのですけれども、私

はどういうわけか知らないけれども外に出してもらえなくて施設庁に行くことになったのです。そのときに海原さんに言われたのは、「施設庁に行って少しゆっくりしてこい」なんて言われたのですよね。「これは助かった」と思って行ったのです。二年ぐらい行ってこいなんて言っていましたが、そうしたら十ヵ月で呼び返されるわけです。それで私が、「ひどいじゃないか」と言ったら、「いや、俺が呼び返したのではない。次官が呼べと言った」と言うのですけれども、まぁ、そこのところは分かりませんけれども。

伊藤（隆）　だけど、戻ったのが広報課長だったからよかったじゃないですか。

伊藤（圭）　ところが、海原さんは官房長ですもの、直接の上司ですよ。だから、海原さんは、防衛課でも直接の上司でしょう、広報課長のときもそうでしょう、国防会議の兼任の参事官、局長が海原さんですから、三度直接の上司です。

河野　ずいぶんご縁がおありだったのですね（笑）。

伊藤（圭）　まったくひどい目にあいましたよ（笑）。

私が施設庁に行っている間に、その翌年二月に例の「三矢研究」が国会で問題になるのです。実は私は防衛一課にいた頃、この「三矢研究」の会議に出て一緒にいろいろ話を聞いているのです。だから特に関心もあったのですけれども。「三矢研究」というのは、世の中で言われているほどシビリアン・コントロールを無視したというものでもないのです。例えば朝鮮半島で問題が起きて、その紛争が日本に波及したような場合には、自衛隊はどういう体制をとって、どういうことを国会で決めてもらってやらなきゃいかんかというようなことを研究しておこうというだけのことなのです。

伊藤（隆）　いま問題になっているようなことではないですか。

伊藤（圭）　そうなんです。今の有事法制みたいなことですよね。例えば、こういうことについては憲法に抵触するような場合があるかも知らんから、それは国会で検討してもらわなきゃいかん。ただし、二週間ぐらいでやってもらわないと間に合わないというようなことを書いて、そういうのがけしからんということなのでしょうけれども。あれは、内容的にみると大きな問題はないと思います。ただ、あれに対する佐藤（栄作）さんの最初の答弁が悪かったのです。それでゴタゴタしたのですね。最初に岡田春夫さん（社会党代議士）があれをかざして、「こういうものを『制服』の者がやっていてけしからん」と言ったときに、佐藤さんが、「調べて答える」と言えばいいのを、「私は知らない」と言ってしまったのです。そこで、これはシビリアン・コントロールを無視しているということになって、大騒ぎになってしまったわけです。当然この「三矢研究」の問題というのは当時の防衛局長が答弁に立たなければならないのですけれども、海原さんが官房長なのに一人で答弁するわけです。

伊藤（隆）　それは、「背負った、背負った」と言っていましたね。

河野　どうなのでしょうね。本当にいま先生がおっしゃる通り、「三矢研究」というのは基本的には憲法の枠内でどうやって自衛隊を合法的にうまく動かせるかということであって、まったくまっとうな防衛論議だと思うのですが、なんでそんなに……。岡田春夫さんの名前も出ましたけれども、国会ではずいぶん過大に扱われたというか、やや誤解も……誤解と言ったらちょっと違いますでしょうか。どうしてああいうふうに紛糾するような…。

伊藤（隆）　陰謀的におどろおどろしく、というふうになったのでしょう。

伊藤（圭）　さらにおかしいのは、岡田さんが初めて発表したようなことになっていますけれども、あれは前に雑誌か新聞に概要が載っているのです。

河野　あたかも隠し持っているような印象がありましたよね。

伊藤（圭）　ただ、もちろんその研究をやった結果について、この内容というのはかなりいろいろ法律なんかも改正してもらわなければならない問題もあるというので、内部の研究資料にしておこう

ということであったのは事実です。非常に極端なことを言うと、二十何部か資料を作ったのです。全部番号を打って、終わると全部集めるのです。私なんかも、もらって、そこで見て、また返していたのですが。だから、番号なんかが分かるとどこから漏れたかというのが分かるのですけれども。

河野　限定だったわけですね。持ち帰らずに必ず返すという資料であったはずなのに。

伊藤(圭)　そうです。どこかで漏れたのでしょうね。あの頃は防衛庁のなかのことはすべて外に分かるというようなことも言われるぐらいでしたから。

伊藤(隆)　それは、おそらく防衛庁のなかでいろいろ抗争があって、どこの組織でもそうですけれども、そういうものが漏れるというのは、中で対立がいろんな形であるときですよね。

伊藤(圭)　おそらく内局と幕との関係もあったかも知れませんね。よく分かりませんけれども。

伊藤(隆)　まあ、あれは社会党にとっては大得点でしたね。

伊藤(圭)　そうですね。

伊藤(隆)　だから、以後、有事立法についての発言をすることが非常に難しくなっていますね。

伊藤(圭)　非常に時間がかかってしまうわけですね。おかしな話ですけれども、手を縛られてやることをやれというようなことになってしまったものですから、戦車を運ぶのも全部地元の了解をとらないと動けないというような、そういう解釈になってきてしまって。

伊藤(隆)　逆にそういうふうに締め付けられてくるから、じゃあ、本当に有事が起こった場合には超法規でやる以外にないじゃないかという議論になってくるわけですよね。

河野　そういうことですね。

伊藤(隆)　べつにクーデターを謀ったわけではないし。

伊藤(圭)　そうなんですよね。むしろ、ちゃちだったけれども、内容的に言うと「三無事件」のほうがもっとテロめいていましたよね。あれは政府の要人を殺すという。

伊藤(隆)　そういうこととの連想と言いますか、「三月事件」とか「十月事件」とかという、戦前の若い連中が密かに謀議をするという、そっちのほうにイメージがいったのではないでしょうか。

河野　なるほど、そういうやや思い込み的なところがありましたか。

伊藤(隆)　思いたい、思わせたい。

伊藤(圭)　そういうふうな攻め方をしようという立場から見ると、いろいろ突くところはあるでしょうね。

河野　先生は、お仕事とは別に、例えば社会党の政治家との間での意見交換のようなことを心がけるというようなことはございましたか。

伊藤(圭)　これはやりました。海原さんに言われまして。あの人は、「とにかく野党と話し合え」ということを言っていました。私まではそれをやったのですけれども、あとはどうも途絶えてしまったみたいですね。防衛庁のなかにも、野党と話し合ってはけしからんという空気がだんだん出てきたみたいです。

河野　初めはそれほどでもないけれども、やはり社会党の対応がちょっと。

伊藤(圭)　いや、最初からあったのですけれども、海原さんがそれに抵抗してやっていたのでしょうね。まあ、私もそれは引き継いではいたのですけれども。

伊藤(隆)　社会党のほうでの態度はどうだったのですか。

伊藤(圭)　海原さんに対してはかなり尊敬していました。社会党も、絶対反対というところはまったくないのです。ただ、自衛隊を認めると憲法改正の問題が出てくるというのです。それで抵抗しているのだということを石橋(政嗣、元日本社会党委員長、昭和三

十年～平成元年衆議院議員）さんなんかははっきり言っていました。

伊藤（隆）　社会党の人たちのオーラルを昔やったときにも、内心と建前は違うということはほとんどの人が言っていました。

伊藤（圭）　私も、役所を辞めた翌年ですけれども、上原康助さんなんかがやっている社会党の「平和研究会」というのがあるでしょう、あれに呼ばれていろいろ話をしたことがあります。

伊藤（隆）　社会党のなかにもある程度は現実的にものを考える人たちはいたわけでしょう。

伊藤（圭）　そちらのほうがむしろ多いと思うのです。

伊藤（隆）　たぶんそうですね。だけど、声が大きいのは左派ですから。一対一で話せばよく分かるのだけど、集団になると全然違う答えになるという。

伊藤（圭）　海原さんが北海道に社会党の議員を案内していったことがあるのです。横路節雄さんたち十人以上の議員を呼んで、案内して、定山渓の温泉で大宴会をやりまして、私も見せてもらいましたけれども、十何人かが連名でお礼状をよこしました。

河野　社会党から。

伊藤（圭）　社会党からお礼を。向こうに行って戦車なんかに乗って、喜んでいるのですよ、みんな。

河野　北海道というのは社会党がかなり強いところですよね。

伊藤（圭）　そうですね。横路さんなんかが先頭で行きました。

伊藤（隆）　でも、その時期までの社会党の議員の人たちは、戦争体験のある人がある程度いるわけです。だから、組合から上がってきた、あとの人たちとはやっぱりそこら辺がちょっと違うと思うのです。

伊藤（圭）　楢崎弥之助さんとかああいう人々だって、話をすれば分かるのですよね。横路さんも分かりました。横路さんなんかは、私も直接ではないのですが、海原さんと非常に親しかったですから。横路さんが質問に立つというときには、閣僚がみんな緊張するわけです。海原さんが事前に会って、ここまでは言えるけれども、これからは言えないという了解をとって、そしてやったりしていました。そのぐらい非常に親しくしていました。

河野　横路さんのほうもそれをある程度飲み込んだうえで質問すると。

伊藤（圭）　ただ、盛り上げなければいけないものですから、大きな声を出したりなんかするのですけれども。それはもう、一つの舞台みたいなものですからね。

河野　国会はそういう側面がありますね。

伊藤（隆）　とにかく国会に「防衛」とかいう名前が付いた法案が出れば、これは何年かかるか。

伊藤（圭）　そうですね。社会党の先生方も長い間勉強するものですから、だんだん役人のほうが太刀打ちできなくなってくるのですね。私たちの世代まではまだ昔の軍隊を知っていますから即答できるわけですけれども、昔の軍隊を知らない人は、そういうベテランにかかってしまうとなかなか答弁できなくなってしまうのです。

伊藤（隆）　そうですよね、議員さんのほうがお年寄りになってくるわけですから。

伊藤（圭）　それで、十年も同じことをやっているでしょう。そうなってくると、過去のことなんかを言われると困っちゃうわけです。

伊藤（隆）　社会党で軍事に強い人というと、どういう人になりますか。

伊藤（圭）　飛鳥田一雄さん、横路節雄さん、佐多忠隆さん、それからもちろん石橋さん、楢崎弥之助さん。

河野　岡田さんも入りますか。

伊藤（圭）　岡田さんも、まぁ、そうでしょうね。岡田さんもあの当時の飛鳥田さんのグループですから。

伊藤(隆)　しかし、岡田さんもこの事件で名前が非常に有名になったのですよね。あれは彼にとって非常に大きな事件だったはずですね。

河野　むしろプラスだったと思っているのかも知れませんが。

伊藤(隆)　たぶん、歴史上にあれだけで名を残したという。

伊藤(圭)　ただ、考えてみると、社会党の先生方は、そういうグループがありましたけれども、やっぱりそれぞれにスタンドプレーをやるわけです。一人でやっているのが多かったですから、その点は、私なんかは比較的答弁が楽でした。そこへいくと共産党は凄いです。連携プレーできますから、これはなかなか大変でした。

河野　どことどこが連携ですか。

伊藤(圭)　いや、先生たちがお互いに情報交換する。それで、共産党の先生方というのは、〔自民党の〕先生方よりも付いている秘書が凄いのです。これは物凄くいろいろ調べて。

河野　優秀ですか。

伊藤(圭)　『赤旗』の連中なんか、よく私のところなんかに取材に来ましたから、非常に熱心でしたよ。

河野　防衛庁としても、もちろん『赤旗』の記者であっても同じように報道機関として接するわけですね。

伊藤(圭)　それはそうです。

伊藤(隆)　記者クラブに入っているわけですか。

伊藤(圭)　いや、入っていません。

伊藤(隆)　でも、取材はできるわけですね。

伊藤(圭)　取材はできます。ただ、記者会見なんかには出てこられないです。これはクラブのほうで排除してしまうのです。

伊藤(隆)　それは防衛庁の問題ではなくて、新聞記者の集団のほうの問題ですからね。

伊藤(圭)　個別に課長のところに取材に来たり、局長のところに来たりというのは自由でした。

河野　なかなか手強い議員さんで、例えば共産党の方で覚えていらっしゃるようなお名前はありますか。

伊藤(圭)　例えば共産党で言ったら正森(成二、昭和四十七年～平成九年衆議院議員)さん、あの人は論客でしたね。それから、不破(哲三)さんの兄さんの上田耕一郎さん(昭和四十九年～平成十年参議院議員)。よくやられました。あとはどうだったかな。

伊藤(隆)　共産党は情報収集のネットワークを持っていますからね。

伊藤(圭)　だけど、ご存じのように共産党というのはとことんやらないのです。というのは、共産党自身も、自衛隊は反対だけれども軍隊は要ると言っているのですから、とことんやれないわけです。その点が社会党の土井(たか子)さんなんかとは違うのです。

伊藤(隆)　あれはもう、〝非武装中立〟ですから。

防衛施設庁にお出かけになって、具体的にはどういうポストにつかれたのですか。

伊藤(圭)　施設部の企画課長というのです。それはどういう仕事かと言いますと、施設部のなかに駐留軍の施設の取得とか漁業の補償とかいろいろな各課がありまして、それの総括みたいな課で、来年度の予算の立て方を、例えば漁業補償についてはどれぐらい増やすかとか、補償の価格をどういうふうにするかというような全体をまとめて、駐留軍関係の予算をまとめて会計課に渡して、会計課がそれを予算化するというようなところです。だからまぁ、防衛課みたいなものでした。

伊藤(隆)　そうすると、米軍との関係も。

伊藤(圭)　米軍が多いです。ほとんど米軍です。

伊藤(隆)　米軍と折衝もあるのですか。

伊藤(圭)　課長はないのです。もっと上の連絡官みたいな人がいまして、その人が専門的にやっていましたから、直接はなかったのです。ただ、基地問題の訴訟問題なんかは企画課の担当でした。

伊藤(隆)　ずいぶんいろいろありますね。

伊藤(圭)　例えば、これはもうご記憶にないと思うのですけれども、昭和飛行機の工場が接収されていたのです。そして、昭和飛行機がそこを返してくれというので裁判になっていたのです。昭和飛行機の担当の人が、青木さんという参議院議員の弁護士の方でした。その人も来て、私なんかも裁判所に何回も行って、和解するのですけれども、返すことが決まるわけです。工場にするために返してくれということを当時盛んに言っていましたから、そんなことでやりました。ところが、実際に返したら工場なんかにしないのです。そこをまたゴルフ場で使って儲けていた。そういうことがありました。

河野　そうなんですか（笑）。

伊藤(圭)　本当は、返すときには現状復帰して返すのです。だから、ゴルフ場なんかも壊して返すと言うと、いや、そのままでいいと言うのでそのまま返した。そうしたら、それをけっこう使っていました。

　もう一つ私のときにやった訴訟の問題では、鳥取にありました終戦直後の米軍の慰安所に接収された家を持っている人が補償してくれというのがありました。これはもうないのです。昭和四十年ですから、戦争が終わって二十年たっているでしょう。家も何もないのだけれども、返してくれというのがありました。

伊藤(隆)　無償で接収されたということですか。

伊藤(圭)　いや、無償じゃなくて、接収するときは借料か何かを払っているのですかね。それで接収して、そして返したのだけれども、もう使い物にならないわけで、それで補償しろということだったと思うのです。補償しろということでずっとやっていたのを、私が課長のときに裁判所の和解勧告に従ってやったのです。そのときに確か、私もよく分からなかったのですけれども、あれは大蔵省が間違えたのかも知れないのですけれども、向こうの請求している補償額をほとんど丸呑みしたのかな。今でも記憶しているのですけれども、一千七百万円の小切手を渡したのを覚えているのです。四十年頃の一千七百万で、私なんかそんなのを見たのは初めてですよ。そうしたら、あれはかなりいい補償だったのでしょうね。その後ずっと、役人を辞めるまで毎年年賀状をよこしました。

　それが使い物にならないというのはあたりまえなのです。例えば床の間にバスタブを置いたりして風呂に入ったりしているのです。だからもう、めちゃくちゃになっているわけです。そういうのを補償しろということだったのでしょうね。そんな訴訟の問題もありました。

伊藤(隆)　そういう形で接収されたものというのは、米軍が去ったときには返還したわけですね。それは元の持ち主の所有になった。

伊藤(圭)　そうです。そのときに現状回復というのですか、前のようにして返すというのが原則だったのでしょうけれども、もう現状にならないような物件は補償問題になるわけでしょうね。

伊藤(隆)　それを受けるのは日本政府ということになるわけですね。

伊藤(圭)　そうです。それはまさに調達庁の仕事だったのでしょうね。

伊藤(隆)　防衛施設庁の時代というのは、そんなに面白い問題はあんまりないわけですか。

伊藤(圭)　そうですね、面白い問題はあまりなかったのですが。私は十ヵ月の間だったのですけれども、その翌年（昭和四十一年）から、これはちょっと私も何ていう名前だったのかは忘れたのですが、施設庁の予算のなかに補償金というのがあるのです。これは、私が企画課長のときに会計課長と一緒に予算の項目で作ったのがあるのです。それはどういうことかと言いますと、基地交付金という自治省の交付金があるわけです。そのほかにやっぱり地元にも

う少し利益を与えてほしいというのが地元の要望であって、非常に強かったのです。それで、こういう理屈をつけて大蔵省から予算をつけてもらったのです。米軍の施設がありますね。レーダーとかなんとか、それは米軍が自分で作っているわけです。しかし、それがあるために、本来地元が使えるような場所が、米軍の兵器なんかがあるために使えないというものに対しては補償してもいいのではないか。基地全体の交付金のほかにそういうものもあってもいいのではないかということで、わずかながら調整の補助金というのを、確か最初は五億円ぐらいだったのですけれども、それだけはやりました。これは、各部が非常に反対するのを押し切ってやったのです。というのは、施設部のなかでも、各課は自分のところの予算が削られると思ったものですから。結局、極端なことを言うと、地元の町村が割合自由に使える金ということで、地元は非常に喜びました。だからまぁ、いわゆる潤滑油みたいなものです。今の機密費じゃないですけれども。

伊藤(隆) 一般財政に繰り入れることもできるのですね。

伊藤(圭) それは分かりませんが、割合に自由に使える金でした。

河野 それが先生の企画課長の頃から始まったということですね。

伊藤(圭) そうです。私が印象に残っている仕事というのはそれだけですね。そのほかはあんまり……。私が企画課に行って驚いたのは、防衛課なんていうのはせいぜい十二、三人と、庶務を入れても二十人ぐらいの課でしょう。ところが、企画課では課員が五十人いるのです。課長補佐が四人もいるのです。課長なんか何もすることがない、そういうところでした。

伊藤(隆) 係がいっぱいあるということですか。

伊藤(圭) 課長補佐でも、予算をやっているのがいる、それから訴訟をやっているのもいましたし、それからどんなのがあったかな。何か知らないけど、ま、四人ぐらいいました。

伊藤(隆) それだけ業務が多々ということですね。

伊藤(圭) まあ、そうでしょうね。

河野 それはやっぱり米軍側と市町村との摩擦とかそういうことの…。

伊藤(圭) それは直接企画課ではないのです。それはそれぞれ、取得課とか補償課。補償課なんていうのと、大体漁業組合との折衝。

河野 漁民に対する補償ですか。

伊藤(圭) そうです。取得課は、基地を提供してもらうために、所有主との交渉とかをやるわけです。

河野 それはそれぞれまた別にやって。

伊藤(隆) じゃあ、前からの余剰人員をそのまま抱えていたのではないですか。

伊藤(圭) いろんな変な手当てもありまして、私も、「こんなものまで払わなきゃいかんのか」と思いました。基地の上を飛行機が飛ぶでしょう。農民の畑の上を飛ぶわけですね。そうすると、飛行機が来ると農民が〝見上げる〟というのです。その間仕事ができないから補償しろと、そんな金もあったのですよ。

河野 それは出されていたのですか。

伊藤(圭) 出していました。こんなの出して……と、私はびっくりしたことがあります。そういう名目で、金でなだめておったのでしょうね。それから有名なのが、例の富士山の入会権の問題です。「草を取りに行くのができないから補償しろ」と。あれは、ずっと歴史を辿りますと、昔の陸軍の頃からあったのですね。

河野 陸軍演習場がありましたね。

伊藤(圭) ありましたからね。あの頃、あの辺の人は非常に貧しかったのです。それで、演習をやっていないときには入って草を刈ってもいいよということで、入会権が続いていたのです。草なんか要らなくなっても入会権を補償しろということで、こういうものもあるのかなと思いました。

伊藤(隆)　かなり雑多な仕事がたくさんあるわけですね。

伊藤(圭)　そうですね。本当に前向きの仕事ではないのですけれども、後向きの仕事がたくさんありました。施設庁の人というのは、そういう意味では本当に苦労していますね。今の沖縄の問題でも、施設庁の人が苦労していると思うのは、基地反対というのと、基地があってもいいというのがいるのです。というのは、土地を貸していますでしょう。そうすると、たくさん土地を持っている人は、その土地を貸しているだけで、物を作るよりも潤うわけです。

河野　賃貸料が非常に大きいですね。

伊藤(圭)　大きいですし、あそこはさとうきびぐらいしかできないでしょう。だから、返還されると困っちゃうのですよね。

河野　やっぱり、そういう基地の賃貸料というのは、一度設定すると下げるという方向にはできないですよね。

伊藤(圭)　賃貸料は、沖縄返還のときに内地の基地の六倍にしたのですから、結局それが定着して。内地の借料も上がっているかも知れませんけれども。あの借料の問題なんかでも本当に細かいと思いましたのは、八戸の港に船が入りますでしょう。燃料を三沢の基地まで運びます。パイプをずっと通すわけでしょう。そうすると、そのパイプが通る土地を借りるわけですから、借料を払うわけです。細かいものだなぁと思いました。ずいぶんそういう雑多な仕事が多いですね。

伊藤(隆)　あんまり楽しい仕事ではないですね。

伊藤(圭)　そうですね。

伊藤(隆)　まあ、〝兵站〟というのはそういうものなのかも知れないですけれども。

河野　裏方的な要素が大きいですね。

伊藤(圭)　お金なんかも小さなものを積み上げていかなければなりませんから、飛行機のように、一機買うと何億なんていうのとは全然違いますから、そういうのは大変なことでした。

■三次防の策定と『朝日新聞』

伊藤(圭)　それで、十ヵ月でまた私は呼び返されるわけです。それで、広報課に行くわけです。どうして十ヵ月で呼ばれたかという問題なのですけれども、実は海原さんの頭のなかにあったのは、それまで広報課長というのは〔記者〕クラブの人と酒を飲んでいればいいというので、あんまり自衛隊の実態を知らなくてもいいというような人事の方針があったみたいです。だから、よその省から来て自衛隊のことを知らない人をどんどん広報課長につけておったのです。それではいけないというので、「自衛隊のことを知っている人を」ということを言ったのではないかなと思うのです。私が広報課長になったあとは、大体防衛局の経験のある人を広報課長につけるようになりました。だから、西広君なんかを広報課長につけるようになりました。防衛課におりますと、大体防衛庁の全体のことが分かりますし、新聞記者がこの問題についてどこに取材に行けばいいかと言ったら、どこそこに行けということが言えます。そんな関係で広報課長にされたと思うのですけれども。

　ただ不幸だったのは、私が就いた四十年から四十五年は七〇年安保にひっかかってしまうわけです。だから、七〇年安保に引きずられて五年間やりました。広報課長を五年間やったというのは、未だに記録になっているのです。

河野　でも、それは名課長でいらっしゃったということではないでしょうか。

伊藤(圭)　名課長かどうか分からないですけれども…。それなりに面白いところはありました。広報課長時代というのは、ある意味では一番多彩であり、今から思うといろんな人に会えて人脈が広がったというような感じはあります。それはほかのポストとはまったく違いましたから。

伊藤(隆)　伊藤先生のかつてお若い頃のこととともつながりますよね。

河野　そうですね、歌舞伎やいろんな演劇にもご理解があったというのを伺いましたが。

伊藤(圭)　だから非常に面白かったです。

その頃、まさに三次防というのが始まるわけです。もう始まっているわけですが。三次防のことを時間もないのでちょっとだけ申し上げますと、三次防から形が変わってくるのです。というのは、一次防、二次防は「陸」「海」「空」別に全体の計画を作っていくわけです。三次防から、大綱と主要項目というふうに分かれるわけです。

河野　そうですね。

伊藤(圭)　これは経緯がありまして、四十一年に、例の上林山さん。

河野　先ほどの〔自衛隊機での〕「お国入り」のときの長官ですね。

伊藤(圭)　そう、上林山さんがアメリカに行くときに誰を連れて行ったらいいかと言うので、海原さんと言ったら、海原さんを断って、ほかの人を連れて行くわけです。ま、それはいいのですけれども。向こうで「黒い霧」の問題が発生してしまうわけです。

河野　在米中にですか。

伊藤(圭)　在米中です。それで大変だったのです。帰ってくるときに、羽田に集まった新聞記者が百人ですか、それから写真を撮るのが百人ぐらい集まったのです。全部で二百人以上になったのです。クラブの者だけで四十人で、そのほか雑誌社なんかも全部くるわけですから、全部で二百人以上集まってしまったのです。

私は、これはとても収拾がつかないと思いまして、記者クラブの幹事に頼んで、「とにかく質問は記者クラブの幹事からしてくれ」と言ったのです。というのは、慣れていますから。雑誌社などがアトランダムに始めたら収集がつかないと思って。それは分かったということでやったのですけれども、四十分ほどやりました。ところが上林山さんが、これがまたあんまりよく分からない人ですから、なんだかいろいろとんちんかんみたいな問題もありましたけれども、なんとか四十分で収めました。その前に、私は雑誌社と週刊誌は全部回ったのです。とにかくそういうような状況で帰ってくるのだから、やたらに質問されても混乱するから、記者クラブが中心になってやることを了承してもらいたいということを話しておきましたら、それはうまくいったのですけれども。あのとき「凄いな」と思ったのは、全部で確か二百人ぐらいになったのです。記者クラブが四十人でしょう。そのほかに五、六十人フリーの記者が来ていまして、写真班が百人ぐらい。四十分間ひっきりなしにフラッシュですよね。だから本人は興奮しちゃって、いろんなことを言うわけです。それをいろいろ補足したりなんかしたのです。

そんなことがあって、彼は辞めていくわけですけれども。辞めるときに彼が、「三次防の格好だけでも俺が決めたというところを見せたい」と三輪（良雄）さんに言い出したらしいのです。大蔵省や国防会議で内容を詰める時間はとてもないわけですよね。それで、大綱という形で、これだけを決めてもらおうということで、十一月の二十九日ですね。

河野　そうですね、国防会議で。

伊藤(圭)　そのときに決めて、それで大綱をやって、翌年の三月に三次防の主要項目。その間に、今度は大蔵省と国防会議と詰めて、そして三次防の事業ができるわけです。

ところが、これがまた、発表になる前の日にその内容のほとんどが『朝日新聞』に出たのです。それで、一晩で形を変えまして、今まで「陸」「海」「空」別の構成を、今度は機能別にしたのです。対潜能力とか防空能力とか、そういうふうな機能別に分けたでしょう。そういう経緯があるわけです。新聞社に抜かれたものだから、同じものを出したら今度はほかの新聞社が文句を言うというので、あれ

は確か一晩か二晩で書き換えているのです。私は当時、直接は担当していませんから涼しい顔をしておったのですけれども、本当に防衛一課が大変でした。

それで三次防というのが決まるわけですけれども、大綱というのと主要項目に分けたものですから、結局その形が引き継がれて定着するようになってしまうのです。三次防のときはそういう経緯で決まったのですけれども、四次防のときはまたゴタゴタで結局引き継ぐということになってしまったわけです。だから、お読みになって分かるように、大綱というのは三次防と四次防でほとんど変わっていません。四次防で違っているのは、同じでもいかんというので、「民生安定のための施策をする」という文言をちょっと付け足してあるだけなのです。

というのは、二階堂(進)さんが予算委員会の理事をやっていて、「とにかく何でもいいから決めろ」と言うでしょう。何でもいいからと言ったって、今から相談して決められないから、考え方は三次防の考え方を踏襲しようということになって、まず大綱を決めて、内容の予算とかそういうことはもう少しあとまでかかってやろうということでやったものですから、大綱の内容というのはほとんど同じだと思います。私は現実に四次防のときは防衛課長だったのですけれども、当時、海原さんが国防会議事務局長です。間に合わないから同じものを作れと言うのです。ただ、まったく同じでもいかんからと言うので、「民生安定…」というのを入れるわけです。

伊藤(隆)　まったく同じにするということは、要するにそのあとの各論をあまり拘束しないようにかなり抽象的になっているということですか。

伊藤(圭)　それは、結局、三次防の大綱を決めるときに、そういう時期でございましょう。「黒い霧」解散が一月にあるわけです。そういう時期でしょう。だからもう、何も具体的なことが書けないわけです。漠然と、ただ、今までのような必要最小限の防衛力を整備するのですということを書くにすぎないです。

河野　非常に融通の利くといいますか、そのあとどんな各論がきてもあまり齟齬をきたさないようなことを大綱で決める。決めるというか、作っていくということにしたわけですね。

伊藤(圭)　そういうことです。

伊藤(隆)　上林山さんの〝勲章〟なんだ。

河野　〝置き土産〟というものですか。

伊藤(圭)　結局、政策というのも、そのときの状況によってまったく変わってしまうわけです。どうでもよくなってくるようなところがあるのですね。

河野　新聞社にリークされて、一晩か二晩で機能別にするというそのアイデアは、前からずっとあったのをそのチャンスに出したのですか。

伊藤(圭)　いやいや、それはまったく違います。一次防、二次防と同じような形式でいこうとしておったのです。ところが新聞社に抜かれたから変えようということで、急遽やったのです。

伊藤(隆)　そのアイデアはどこから出てくるわけですか。

河野　一晩か二晩ぐらいで知恵をしぼるわけですか。

伊藤(圭)　大体それは「陸」「海」「空」別に作ってありますから、それをあわせたり何かして機能別に作り替えていく。だから、防空能力というと、例えば航空自衛隊についてはナイキを幾つ持つというのが出ているわけです。それを持ってきて、「陸」のホークと、海上自衛隊のターターを一緒にして、防空能力の向上ということにすれば、それですむわけです。そういう点は役人というのはなかなか抜け目なくするわけです。

伊藤(隆)　これは単なる並べ替えだから、換骨奪胎でもないですものね。

伊藤(圭)　そうなんですよね。

河野　まったく知らずに外部から拝見していますと、ここで非常

にはっきりと「海」「空」の能力というのが出ますので、何かこう……。

伊藤(圭)　何か意図があってやったと思うでしょう。だが、特別な意図がなくやっているのです。

河野　非常に参考になりました。

■天皇の官吏かパブリック・サーバントか

伊藤(圭)　それはまさに日本の状態に似ていると思うのです。日本人というのは、自分の発想で新しいものというのはなかなかできないでしょう。日本は常に外圧で動くのですよね。役所というところもそうなのでしょうね。結局、自分から新しい発想のもとにやろうということはなかなかできないのです。私が見ていますと、例えば海原さんなんかはできる人だと思うのです。だから、あの人は本当は次官になるともう少しいろいろなことができたと思うのです。しかしあの人に、そういう危険性を感じたかどうか知らないけど、〔海原氏は防衛庁から追い〕出されるわけです。

伊藤(隆)　危険性を感じたのでしょう。やっぱり日本的な組織に馴染まないということでしょう。

伊藤(圭)　そうですね。結局、役所というところはやっぱり、前例、前例でくるわけです。今の外務省の機密費の問題だって、結局まわりの人がやっておったから、誰も疑問を抱かないで続いてくるわけでしょうね。だから、外に出て初めてみんなびっくりして騒ぐわけですけれども。

伊藤(隆)　やっぱり私たちが大学のなかでこういうことをしたいというようなことを言うと、じゃあ、この全体の事業計画のなかで、今まで一億の事業だったから、そのなかでどこかを削って入れろと。最悪の場合、そういうふうな覚悟をするのだったら要求してもいいと。

伊藤(圭)　そうなると、今度はそっちの担当者が反対してしまいますでしょう。だから、結局元に戻っちゃうわけなのですよね。

伊藤(隆)　そうなんです。だから、よほど強い人がいて、どこかを抑えなければ新規のことはできないですね。ましてや、中央官庁なんて大きな組織ではあるし、有能な人材がそれぞれ立っているわけですよね。ちょっとやそっとでは動かないでしょうね。

伊藤(圭)　陸海軍も、戦争に負けなければ絶対つぶれなかったですね。あれは負けたからつぶれた。あのときにつぶれたのが、財閥がつぶれましたね。それから陸海軍がつぶれたでしょう。

伊藤(隆)　大地主もつぶれましたよ。

伊藤(圭)　農地改革ね。ところが官僚組織だけが残ってしまったのです。確かに官僚組織というのは世代は交代しました。しかし組織が残っているということは、やっぱりやり方は変わらないのです。だから、組織が残っているために、若い人たちは、俺は内務省だ、俺は外務省だ、俺は大蔵省だというものがずっとそのままいくわけですからね。

伊藤(隆)　海原さんだって、内務省だ、と。

河野　そうなんです(笑)。

伊藤(圭)　私は、「内務省なんてなんだ」と言うのですよね。というのは、私はあのときに海原さんなんかといろいろ話をしておって思ったのは、やっぱり内務省の人の誇りというのは天皇の官吏ですよね。パブリック・サーバントという感じはありません。その点、私が人事院に入って最初に言われたのがパブリック・サーバントなんです。だから、どうもこの点は彼と意見が合わないですねぇ。天皇の官吏って、私は天皇のために死のうとしたのだから、もう十分尽くしたから結構だと。だから、私は天皇の在位五十年の記念式典も行きませんし、六十年のときも行きませんし、もう十分尽くしたから結構ですと言って。

河野　先生からご覧になって、海原さんの意識としてはずっと天皇の官吏ということでしたか。

伊藤(圭)　そうでしょうね、やっぱり天皇の官吏というのがあって。こういうところで申し上げるのは大変恐縮なのですけれども、私はやっぱり昭和天皇に対しても多少こだわりはあるのです。二百何十万の人が陛下のためといって死んでいくわけです。私は国民がこんなに苦しんでいるのだし、このきれいな国土のために死ぬのはいいと思っていまして、とても陛下なんて思わなかったです。とにかく現実に陛下のために死んでいっているのがいるわけです。上等兵の命令は天皇の命令だというような教育を受けたわけでしょう。そうなってくるとやっぱり、陛下に戦争責任がまったくないということはあり得ないと思うのです。そうすると、ある時期に陛下は退位なさるべきではなかったかというのが私の気持ちとしてあるわけです。

伊藤(隆)　そういう気持ちを持っている方はたくさんいますね。

伊藤(圭)　それは戦争を体験しているからですよ。シベリアで何万という人が凍土の中に眠っていることを考えると、今になってみると、皇室だけが非常に安泰みたいな感じでしょう。多少のこだわりはあるのです。しかし、内務省の人たちはそういう点はまったくないですね。

伊藤(隆)　海原さんはどうですかね。

伊藤(圭)　海原さんはないんじゃないかな。

伊藤(隆)　海原さんはやっぱり、内務官僚としての誇りはあるね。

河野　そのプライドは凄かったですよね。

伊藤(圭)　だけど、天皇のお話をすると、海原さんは非常に天皇に同情的ですね。昭和天皇ぐらい自分の股肱の臣に騙された人はいないと言います。まさにその通りなのですよね。とにかく軍人はみんな嘘を言っていますし、政治家も嘘を言っているでしょう。かわいそうなのはかわいそうですね。だから私もそれ以上は言わないのですけれども、多少感覚として違うかなと思うのは、役人になったときの経験からして、私は戦後なったでしょう。彼はやっぱり戦前の官吏ですからね。

河野　戦後直後の人事院でのパブリック・サーバントという考え方の洗礼を受けたというのは、短期間であったけれども非常にその後の仕事に影響しましたか。

伊藤(圭)　これは非常によかったと思います。今の人たちは、だんだんそういう意識が薄れてきているのではないかという感じがするのです。

伊藤(隆)　パブリック・サーバントでもないし、天皇の官吏でもないし、ただ単なる職業という感じですよね。「上級職を通ったから」、というようなことでしょう。嫌な感じを受けていますけれども。まあ、人間プライドも必要だと思いますけれども、たいしたいわれのないプライドですよね。プライドを振りかざすというのは、それしか誇るべきものがないということですからね。

　広報課長ということになると、そのお書きくださったもののなかに、その次の月（十一月）にある「砕氷船『ふじ』南極に出港」ということはどういう意味があるのですか。

伊藤(圭)　これは特に意味がないのですけれども、このときに初めて南極観測の仕事みたいなものまで自衛隊がやることになったという意味で、それまでは外向きのことはオリンピック以外何もやっていないのです。南極観測の頃から外向き。そういうものがだんだんＰＫＯとかそういうものにつながっていくのではないかという意味でちょっとこれを書いてみたのですけれども。

伊藤(隆)　だけど、南極観測というのはやっぱり各国とも軍隊がやっていますね。

伊藤(圭)　軍隊がやっているのです。海上保安庁が最初にやっておった「宗谷」が古くなったので新しい船を作ってうちがやるようになるのですけれども。

伊藤(隆)　外国では、日本の自衛隊はアーミー。

伊藤(圭)　アーミー、ネイビーと言います。だから、遠洋航海に行って帰ってきた連中が言うのは、自衛隊に対する感情が一番悪いのは日本だと言います。

河野　それまでは、自衛隊の存在そのものをオープンな場に出すのを控えると言うと変ですが、ちょっと引いていたのではないでしょうか。

伊藤(圭)　引いていたのですけれども、冒頭に申し上げましたように、最初のときは銀座を行進していることもあって。だから、訳が分からないのですよね。それから、私が秘書官のときも広報課長のときも、観閲式は明治神宮の前でやっていました。私はあのときは広報課長だったから当然行っていましたけれども、そのあと防衛課長になって練馬でやるようになってから、練馬のには一回も行ったことがないのです。明治神宮の絵画館の前でずっとやっていまして問題なかったのですけれども、〔都知事が〕美濃部(亮吉)さんになってから戦車を通さなくなってしまったもので、それで練馬になったのです。

河野　美濃部都政(昭和四十二年～五十四年)なのですか。

伊藤(圭)　美濃部さんで、あの頃から各自治体の長に左翼系の人の人が。飛鳥田(一雄)さんなんかも出てきて(昭和三十八年～五十三年横浜市長)、それから非常に反米、反自衛隊感情というものが湧き上がってくるという感じですね。

伊藤(隆)　自民党ができてしばらくの間というのは、国民の間に再軍備を支持する動きがあったわけですからね。

伊藤(圭)　私が二十九年に防衛庁に行ったときは、あと二、三年したら国防省になるというような雰囲気でした。

伊藤(隆)　社会党ですよ。完全にやられてしまいましたね。

伊藤(圭)　だからやっぱり、左翼旋風というのは凄いですね。

伊藤(隆)　今のようなお話を伺っていると、本当にいろんなことが分かりますね。

河野　本当に参考になります。

伊藤(圭)　この次はまた広報課長のあとから。

〈以上〉

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第5回

開 催 日：2001年3月16日（金）
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時05分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

河野康子（法政大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■前回の補足と訂正

伊藤(隆)　海原さんは、いろいろ批判されておられるわけですよね。じゃあ、あなたはどうお考えですか、というのがなかなか聞きにくいんですよね。

伊藤(圭)　そうそう。

伊藤(隆)　ですから、最後にやっぱりこれからの防衛問題についていろいろポジティブな意見を聞きたいなと質問しようと思ったのですけれども。

伊藤(圭)　彼は抽象的には言うんですよ。自衛隊というのは、昔の満州の独立守備隊みたいに。それは分かるのですけれども、じゃあ、独立守備隊というのはどういうことなのかというと、それは分からんわけです。彼は人に対する批判というのは非常に厳しいのですけれども、自分に対しては非常に甘いんですね。僕はそのことはよく言っていたのです。

伊藤(隆)　僕らもそう思いました。

佐道　自身への批判を許さない。

伊藤(圭)　そうですねぇ。私なんかはかなり言ったほうですけれどもね。

伊藤(隆)　質問なんかでも、じゃあ、海原さんはどうなさったんですかという話をしますと、はぐらかされてしまいました。はぐらかされるか、詰まってしまうシーンもあったりして。

伊藤(圭)　あの中の最初の頃(『海原治オーラルヒストリー』上巻、七八頁)なのですけれども、私のことが書いてありました。伊藤君がＮＨＫの討論会に(海原氏を)出したらどうだと言ったら断られていたと書いてありましたが、あれ、本当はやったんです。あの頃は解説委員長が家城(啓一郎)さんとか岡村(和夫)さんでしたから。

伊藤(隆)　討論会ですか。

伊藤(圭)　政治討論会とか、安全保障問題の討論会とか。海原さんを出したらどうですかと言ったら、いや、そう思うのだけど、海原さんが出ると言うと相手の人が断ってくる。だからだめだと言うのです。というのは、お聞きになっても分かるように、ピシャッとやりこめちゃうでしょう。だから相手の人と討論にならないわけですよね。相手の人が欲求不満になっちゃうわけです。自分の言いたいことを言おうと思うとピシャッとやられるから。それで嫌だと言うのですね。そんなことがありました。あれを思い出して、よくあんなことを覚えているなぁと思って。

伊藤(隆)　伊藤さんはお出になったわけですか。

伊藤(圭)　何回か出ました。

伊藤(隆)　それは広報課長の時代ですか。

伊藤(圭)　広報課長の時代もありました。それから、あとで局長のときなんかもありました。あの頃は政治番組というのはＮＨＫしかなかったでしょう。今の『日曜討論』みたいなのが、国会の間だけ国会討論会かなんかでありましたでしょう。だから大出(俊、昭和三十八年～平成八年、日本社会党代議士)さんなんかを相手にしてやったこともありました。海原さんはまた、あの頃はもっぱら日テレかなんかに出ていまして、ＮＨＫで安全保障問題の討論会をやっているときには三輪(良雄)さんが出ていました。三輪さんというのはまた、これが海原さんと仲が悪いのです。海原さんに言わせれば、あんな素人が出るのなら俺のほうがいいというような感じではありました。

　きょう、大変申し訳ないのですけれども、広報課長時代のお話だったものだから、ちょっと広報課長時代を時系列で書いてきたのを忘れてきちゃったものだから。

伊藤(隆)　記憶に残っている範囲でお話しいただければ。

伊藤(圭)　最初に、まずこのあいだのなかで付け加えたり訂正し

たりすることを申し上げたいと思います。

〔昭和〕三十八年に雪害があって、ヘリコプターを出した話がありましたね。あのときに非常に協力して、新潟のほうではあんまり苦労がなかったのだけれども富山のほうで苦労があったというのは、三十八年頃はまさにそうだったのです。先生方はご存じないかも知れませんけれども、私は秋田にいて分かっているのですが、ああいう雪国になりますと、雪が降るともともと車なんか通らないわけです。だから住んでいる人は食料なんかをみんな貯えているので、少々雪が降ったって驚かない。富山みたいなところで雪が降ると大変なのです。ところが今は、どんな道路でも車が通るようにしているでしょう。だから状況は同じになってしまったのです。北のほうでも大雪になって車が通らなくなるとやっぱり困るみたいです。その点が三十八年と今では違うなと私は感じました。

伊藤(隆)　今年あたりは、秋田とか山形とかあっちのほうよりも、むしろ北陸、山陰でよく降っていますね。

伊藤(圭)　そうですね。

それから、調達庁と防衛庁が一緒になったときに、調達実施本部は防衛庁に残って、建設本部が向こう〔調達庁〕と一緒になったと言いましたね。あの説明のなかでちょっと足りなかったと思うのは、施設を提供するのは施設部なのです。こういう建物を造ってあげますと。〔ところが〕それを〔実際に〕造るのは、今度は建設部なのです。そこで設計したり業者を選定したりする。私が申し上げたなかで、建設部は自衛隊の施設しかやらないというのは間違いであって、工事なんかは建設部でやるのです。だから、建設部は三十七年の合併以来、米軍の仕事もするということに仕事の内容が変わってきているわけです。そのことがちょっと言葉が足りなかったなと思いました。

その次に、ヘリコプターの統合運用が必要だということを新潟の災害派遣のときに申し上げていますけれども、あの頃はヘリコプターの需要というのが物凄く多かったのです。当時はまだ各新聞社がヘリコプターなんか持っていない時代なのです。もちろん警察もない頃です。自衛隊のヘリコプターしかないものですから、あの地震のときにあそこに行く手段というのはヘリコプターしかなかったわけです。だから「陸」「海」「空」を集めてやったのですけれども、それを統幕にやってくれと言ったら、それはできないと断られて、それで内局の防衛課でやったのです。

もう一つ大変間違っていたのは、潜水艦の水中速力でございます。あれを一〇ノット以下と言っていましたけれども、実は、自衛隊の潜水艦でも一番速いのは一八ノット出るのです。原子力潜水艦は常時三〇ノット以上出るのです。電池で走る潜水艦というのは、一八ノットは出るのですけれども、もし一八ノットで走ったら一時間しかもたないのです。電池を蓄電していくわけですから。だから、通常、水中でも六ノットか七ノットでしか動かない。それでないとずっと潜っていけないわけです。浮き上がって、またシュノーケルを上げて蓄電しなきゃいかんわけです。瞬間的と言いますか、十分とか二十分は一八ノットで走るのですけれども、原子力潜水艦は三〇ノットでどこまでも行くというのと、その違いがあるわけです。

伊藤(隆)　凄いギャップですね。

伊藤(圭)　ええ。潜水艦が水中で一六ノットか一七ノットから、一ノット上げるためにエンジンの馬力を倍にしなきゃいけない。最後のところから一ノットぐらいで。だから大きなものは積めない。原子力潜水艦というのが本当の潜水艦なんです。これは、潜ったら、一ヵ月ぐらい潜りっぱなしでもなんでもないわけでしょう。普通の潜水艦は、毎日、一日に何時間かシュノーケルを上げて蓄電しなければ潜っておられないわけですから。そういう意味で原子力潜水艦というのは凄いと感じました。

私が施設企画課長のときに一つだけやったのは補助金をとった

こととお話ししました。これは、自治省がやっている交付税のほかに、名前を忘れていたのですけれども、今は基地周辺対策費というのに変わっているらしいです。各基地周辺の市町村が一般財源と同じようにほとんど自由に使える金みたいです。だから、農家がにわとり小屋を作りたいなんていうと、その金で補助してやったり、何にでも使われるみたいですね。そんなことを言っていました。

これもやっと思い出したのですが、上林山（栄吉）さんが帰ってきたときの記者会見で、集まった記者は二百人なのです。最初は四十人とか五十人とか言っていましたけれども。いわゆる記者、記事を書く人が百人、それから写真を撮る人が百人。それで上林山さんがびっくりしてしまいました。

海原さんから私たちが学んだことの一つは、あの人は本当にずっと役人できた人なのですけれども、役人というのは時間に非常にルーズだと言うのです。書類がまわってきても、なかなか判を押さないで置いている。あれは失礼だと言うのです。「民間の人というのは時間が大事なのだから、そういうことは絶対するな」ということは強く言われました。これは、彼から教育を受けた大事な点だと思っているのです。

この前のご質問のなかにあったのですけれども、これをちょっとご説明したいと思います。教育局にいたときに、学校の規則に関して何が一番印象に残っているかというと、私は最初に防大を担当していたものですから、防大の教授会などの規則を作ったのですが、防大の関係が非常に印象深いです。

それから、海上自衛隊は二十九年十一月に留学していますが、ほかはどうなっているんだというご質問なのですが、陸上自衛隊は、アメリカの陸軍がこっちに来ていましたから、全部こっちで教育してくれるわけです。航空自衛隊は二十九年にできたばかりだから、留学どころではないのですよね。どこに飛行機を持っていこうかというような、陸上自衛隊に行っている飛行機を譲り受けたりなんか、そんな騒ぎのときですから。ところが海上自衛隊だけは、海上保安庁におった者がそのままこっちに来ましたでしょう。だから体制が整っていたのです。それから、もう二十八年頃から国産艦を作り始めるのです。二十九年頃になるとアメリカ留学というのは、国産艦を造るときにずいぶん米海軍が援助してくれていろんな武器なんかもくれたものですから、そういうものの勉強のために行かなければならんわけです。そういう意味では海上自衛隊が一番早かった。

それから、戦史室が研修所に移った理由というのは、私もはっきり覚えていないのですけれども、たぶんこんなことだろうと思うのは、陸上自衛隊にあると「陸」の戦史になるわけですね。ところが海上保安庁から来て海上自衛隊もできました。それから航空自衛隊もできたでしょう。「陸」「海」の戦史をやるということで研修所に移したのではないかと思います。この三十一年頃から、戦史室を担当する部員も教育課にいました。そんなことではないかと思います。

伊藤（隆）　後々まで「陸」「海」の対立が大変なんですね。

伊藤（圭）　もう大変でした。だから、いわゆる『大東亜戦史叢書』のなかで、最後の大本営のあたりというのは必ずしも正確ではないというのですね。

伊藤（隆）　二つ作りましたよ。

伊藤（圭）　そうですか。なんか生きている人がいろいろ文句をつけて。

伊藤（隆）　二つというのは、要するに開戦経緯というのが陸軍と海軍では全然違うのですよ。

伊藤（圭）　そうですか。それから、教育体系は基本的にはその頃と変わっていません。ただプラスになっているのがあります。例えば幹部候補生学校ができたり、陸海軍の大学に倣って幹部学校というのができます。そういう点が違うので、まず技術を受ける学校を

というのは基本的には変わっていません。

伊藤(隆)　そのときにお作りになったのと。

伊藤(圭)　私が行ったときは保安局教養課で、一カ月後に防衛庁になり教育局教育課になりました。それで、教育の体系がある程度はできていました。それと基本的には変わっていないと思います。

教育局と防衛一課の違いというのは、教育局というのはやはり教育関係だけです。防衛一課というのは業務計画という毎年度の年度の業務計画、それから当時は長期計画もやっていましたでしょう。両方やっていたものですから、全体を知らないといけないわけです。そういう意味では、昔の陸軍でいう軍務局みたいなものですかね。だから全体の計画を作るという意味では、内局のなかでも中心的だったでしょうね。

伊藤(隆)　総務局みたいなものですね。

伊藤(圭)　今の内閣府みたいなものでしょう。特に海原さんが非常に能力のある人だったものだから、全体に睨みをきかせていました。ただ、私が〔防衛一課に〕行ったときは〔課長は〕海原さんじゃないです。高橋幹夫さんのときに行きました。

それから、あんまり個人個人の印象は深くないのです。けれども、久保(卓也)さんは、あとで課長でも仕えて局長でも仕えたので優れた理論家との印象があります。あの人は海原さんとはまったく違うわけです。理論的に整理されていないと気がすまない人です。海原さんは現実以外のことは信用しないでしょう。ある意味では、本当はあの二人を合わせて半分にすると非常にいいのではないかという感じがするくらい理論家でした。小田村(四郎)さんという人は、もともとやはり右翼的な人ですね。

伊藤(隆)　もともとなのですか。

伊藤(圭)　もともとですよ、いま拓大の総長をなさっているけど、非常に考え方が右翼的なところがあるのです。だから、「陸」「海」「空」の言ってくることは大体肯定するほうでした。もう一人非常に印象に残っているのは、住田正二というJR東日本の社長をやった人。彼が来ていまして、彼は「海」の担当をしていたのです。あの人はかなり厳しい人で、あんまり余裕のあるようなものを作らない人です。きちっと整理してしまうのです。だから、海上自衛隊はある意味では損したと思うのです。例えば呉なんていうところは、その当時の海上自衛隊の必要なものしか施設も基地も場所をとっていないのです。あとで今度は潜水艦が入ってきて、潜水艦隊の基地を作る場所とかで非常に困ったりしました。もう少し余裕をもって土地なんかも確保しておくと楽だったのではないかという感じがするのですけれども、そういう点は非常に厳しい方だったという印象があります。

それから国防の基本方針でございます。国防の基本方針が策定されたときは、まだ教育局におりましたから、実は私は知らないのです。

アメリカとの関係におきましては、私が防衛課長をやっていた頃までは、アメリカは日本に対して極めて鷹揚だったという感じがします。日本の防衛力整備についてアメリカが注文をつけるということはほとんどありませんでした。いろんな政治的な問題もあるし、経済的な問題もあるだろうから、日本ができることだけをやっておけば、あとは全部米軍がやりますというようなスタンスでした。それが、私が局長になったときにドルが安くなるわけですが、その頃からかなり厳しくなってきました。具体的な面で申し上げますと、例えば飛行機を作るときに、F104まではほとんどなんとも言いませんでした。私が防衛課長のときにはファントムが国産になっていましたけれども、あのときもかなり鷹揚でしたが、最後の頃は、いわゆるブラックボックスは作らせないということを言っていました。ところがそのあとのF15になりますと、何割か、とにかくアメリカで生産する部分を残しておいてくれということを強く言っていました。だから、日本の技術でできるものはどこまで

やってもいいと言っておったのは、F104までです。ファントムのときには、ある部分はアメリカでやると言っていました。しかし、ファントムまではかなり自由にやっていた。F15になると、いろいろ注文をつけてきました。向こうの飛行機会社のために。そのあとは、今のF2という戦闘機の生産の問題になってくるわけですけれども、そういう感じはありました。

それから加藤陽三さんの印象ですね。私はあんまり強い印象はないのですけれども、非常に真面目な人だということです。だから、あの人はあとで政治家になるのですけれども、私なんかから見ると、もっとも政治家にはふさわしくない人じゃないかなと思ったぐらいです。〔当選〕三回ぐらいで辞めちゃうのですが、どうしてあいう政治のドロドロした世界に入っていこうと思ったのかというのは分かりませんけれども、そんな感じです。

それから「赤城構想」ですね。「赤城構想」は、極端なことを言うと、小田村さんが「陸」「海」「空」の希望をうまくアレンジして作ったわけです。だから、一次防なんかに比べると非常に膨らんだような構想になっている。そのなかには例のヘリ空母なんかも入っているのです。ヘリ空母なんかは、これはやはり、海自が大きな船を持ちたいという気持ちを持っていました。そういう気持ちの現れだと思うのです。これは直接関与したわけではないのですけれども、例えば教育関係について意見を聞かれたりなんかしましたから多少関わったのですが、「赤城構想」というのはそういうものでした。それを海原さんがつぶしてしまうのです。その「赤城構想」というのは、海原さんもお話しになったかも知れませんけれども、北海道で発表したのです。それで、まだ中で固まっていないうちにやったということで彼は非常に反発したのではないでしょうか。それは、「中曽根構想」もそうなのです。国内でまだ議論していないうちにアメリカで発表しちゃったでしょう。それで海原さんはカンカンになっちゃうわけですね。そのあと私は「中曽根構想」を抱えて一年半苦労しました。

それから、陸上兵力の増強が〔自衛隊の再編成の〕柱ですね。これはまさにその通りなのです。〔昭和〕三十一年にアイゼンハワー大統領のときに〔アメリカ〕陸軍が撤退していきましたでしょう。そんなことで「陸」が中心になっていったのでしょうね。

そんなようなことがこのあいだの宿題のなかにあったと思いますけれども。

■海自の基地・長官の影響力・三次防の決定

佐道　いまお話しになった積み残しだった話に関してちょっと。昭和二十年代後半から三十年代にかけてのアメリカの要望というのは、「陸」が中心で最初三十万人規模にしろというような話だったと思うのですけれども、一九六〇年代に入ると、「空」と「海」を充実しろという話がけっこう早くから来ているのではないかなと思うのですが。

伊藤(圭)　「空」と「海」というより、陸軍が引き揚げていったので、まず「陸」ということだったのですが。自衛隊が発足した頃から、大体「陸」「海」「空」、後ろには空軍がついており、海軍がついており、陸軍がついておりましたから、同じような要求はありました。特に海軍の場合には、物凄く日本の海軍に対する親近感があったのでしょうかね。ご存じのように例の誘導弾、ミサイルも、一番先によこしたのは海軍ですから。ターターを。そういう意味では非常に海軍は力を入れていました。

佐道　これは海原さんのお話のなかで出ていたのですけれども、公式的には言わないけれども、基本的には対ソ戦備というのがもちろん中心になるわけです。そうすると、なんで横須賀とか太平洋に海上自衛隊の一番の拠点を置くのか。日本海に置けばいいじゃ

ないかと。例えば舞鶴とか大湊とかああいうところがあるのに、海上自衛隊は横須賀に固執する。それは完全に旧海軍以来の伝統と、プラス、アメリカ海軍との連絡とか、そういうこともあってあそこを離れないという意志が強かったのでしょうか。

伊藤(圭)　それはやはり、海上自衛隊より米海軍のほうが強かったと思います。同時に、海上自衛隊は横須賀の基地はいずれ返ってくると思ったのですね。そうすると、昔からの伝統の地である横須賀を中心基地にしたいと思っていたわけです。ところが返ってこないでしょう。それで慌てて米軍基地の横に総監部を作っちゃうわけです。だけど、やはり横須賀に対しては郷愁がありましたね。横須賀、呉、舞鶴、大湊でしょう。みんなそういうことになっちゃうのです。本来なら海上自衛隊の基地というのは日本海に、例えば舞鶴と新潟辺りに作るというのは本当でしょうけれども、それはやりませんでしたね。

佐道　そこで議論になったということはあるのでしょうか。

伊藤(圭)　いや、議論になったというより、自衛隊ができた頃から、とにかく基地を新しく作るということは至難の業でした。だから、〔既に基地が〕あるところに置く以外にないという意識が強かったのです。だから、格好いい話ですけれども、北に備えて陸上自衛隊は五万が北海道にいるというのですが、とにかくあれだけの五万の兵力を置くところというのはもう北海道以外になかったわけですね。あとはみんな昔の軍隊の施設を使って。ご存じだと思いますが、いま六師団がある（山形県東根市）神町は戦時中海軍の基地で僕らがいたのですからね。練習航空隊だったのです。だけど、飛行場のところは民間の空港になったでしょう。基地の部分だけが残ったものですから、そこに陸上自衛隊が行く。みんなそんな格好です。

日本の場合には、配置というのは、本当に戦略を考えた配置ではないのです。ま、どこの国もそうかも知れないのですけれども。陸海軍が使っていたところを利用させてもらったところから出発したというのが正しいのでしょうね。九州辺りだって、みんな昔の軍隊がいたところです。僕は熊本にいたのですけれども、六師団司令部があったお城なんかは全然だめでしょう。昔、連隊のあったところに今は総監部を置いてあるわけです。それから、幼年学校のあったところに八師団をおいています。みんなそんなような格好です。

佐道　教育のところで一つ重要なのが、例の幹部学校ですね。海自にしろ陸自にしろ、昔の海大、陸大をおそらく模したというか、そういうイメージで創ったと思うのですけれども。海自の幹部学校の校長が海幕長になられる方が続々いらっしゃいますし。中山（定義）さんとか。

伊藤(圭)　あの人、幹部学校の校長なんかをやっているのですか。

佐道　やっています。

伊藤(圭)　そうですか。

佐道　やはり相当力を入れて。

伊藤(圭)　最初の頃はそうなのでしょう。ところが今は、幹部学校長になるともう〝上がり〟ですね。そうでしたかねえ、私も気が付きませんでしたが。

佐道　初期の頃はそうやっていたのかなと思ったのですけれども。

伊藤(圭)　そうかも知れませんね。幹部学校のなかに二つありますでしょう。初級課程みたいなのと高級課程が。だから、最初に予科みたいなところに入って、そこで終わる人もいるし、まだ上に行く人もいる。なんかややこしいのですけれどもね。

佐道　あのカリキュラムは、各自衛隊が独自に。

伊藤(圭)　大体独自に作ります。というのは、こちらにはもうそこまでの力がないわけですから。

佐道　前回のところで藤枝さんの秘書官と。藤枝さんというのは船田さんのご親戚。

伊藤(圭)　船田(中)さんの末弟ですね。あれは五人兄弟で、末弟なのです。

佐道　船田さんというのは、防衛問題で要所要所に出てこられる方ですが。

伊藤(圭)　あの人は防衛庁の長官もやりましたからね。それから、例の衆議院議長のときに防衛問題で国会が止まったときにいろいろ調停なんかしたのもあの人です。

佐道　という感じで、船田さんもそれなりに防衛庁自体に影響力というか。

伊藤(圭)　あんまりないと思います。歴代の長官であとまで影響を残したという人はちょっと記憶にないのです。中曽根(康弘)さんなんかは残したほうなのでしょうけれども、だからといって、具体的にはないのです。あの人が目指した情報本部なんかもつぶれてしまいますしね。あの人が残したのは、防衛医科大学校です。これは中曽根さんのときですから。考えてみると、あんまり歴代の長官がこれを残したというのはないのですよね。むしろ、いつも笑うのですけれども、藤枝さんの名前が今でも残っているのです。それは、藤枝さんのときに殉職隊員の慰霊碑ができたのです。それで、藤枝泉介と書かれた碑が今でもあるのです。その慰霊碑の除幕式のときには池田(勇人)さんが来てくれたのですね。だから面白いなと思って。今の人は、藤枝なんて言ったって、誰も知らないでしょう。あそこにいくと書いてあるのです。だから僕は懐かしいのですけれども。

佐道　歴代長官で言えば、いま話題の小泉(純一郎)さんのお父さん(小泉純也)も長官をなさっていますけれども(在任、昭和三十九年七月十八日～四十年六月三日)。

伊藤(圭)　小泉さんなんか、私なんか当時はまだペーペーだったので、全然印象ありません。小泉さんとか、あの法務大臣をやった人……。

河野　福田篤泰さん。

伊藤(圭)　福田篤泰さんね。あの人は一つだけ印象があるのは、例の新潟地震のときに私が間違って閣議にメモを入れたときにあんまり怒られなかったから、それで印象があるのですけれども。考えてみると、それこそ戦後の総理大臣が二十六人というけれども、自衛隊ができてからもう(防衛庁長官も)二十何人でしょう。だからとても覚えられないですよ。途中で代わる人も何人かいましたしね。西村(直己)さんだって途中で辞めたでしょう。それから、増原(恵吉)さんは、二回なって、二回とも途中で辞めたのですからね。

伊藤(隆)　防衛庁長官は狙われるのですね。

伊藤(圭)　そうなんですね。

佐道　長官は短期間でコロコロ交代されますからあんまり印象が強くないですけれども、自民党の国防部会の方、国防族と言われる議員さん。これは、六〇年代とかで印象に残っておられる方はいらっしゃいますか。

伊藤(圭)　それは国防族というのかなぁ。あの頃は割合に相談に行くことがなかったですからね。

佐道　ほとんど切れていた。

伊藤(圭)　ほとんど、こっちが持っていったのを一回説明すると、もうそれで通っていましたから。今のように、例えば毎年の予算でも、予算の全体の枠が決まるのが八月でしょう。そのときまで国防部会に行って許可をとるなんていうことは、我々の頃にはまったくありませんでした。予算が最後に決まって、大臣折衝の前に一度やって、こういうのでいきますと言って、もうそれでお仕舞。決まったときに、こういうふうに決まりましたと報告するだけです。国防族から何をしろというのはほとんどありませんでしたから、そういう意味では印象はあまりないです。

佐道　よく自民党ですと、海軍の関係で、野村(吉三郎)さんとか保科(善四郎)さんとかいう方のお名前が挙がるのですけれども、

あまりご一緒には。

伊藤(圭)　保科さんはありますね。ありますけど、あんまり私なんかが直接会ったことはないのです。保科さんなんかに直接会うのは、せいぜい海原さんと久保さんぐらいまでですね。久保卓也さんなんかは呼ばれたりしていました。

佐道　局長とかそういう感じの。

伊藤(圭)　そうですね。そんなところですかな。

それで、〔竹下登氏の〕『政治とは何か』(講談社、二〇〇一年)を読んでちょっと思い出したのですけれども、四十七年に竹下さんが官房長官になりますね。そのときに私は防衛課長になっているのです。四十八年に副幹事長になるときが、私が防衛課長なのです。それから五十年の田中内閣の官房長官のときはまだ審議官というのをやっていました。そして、五十一年の三木内閣のときに建設大臣になるわけでしょう。そのとき私は防衛局長なのです。五十四年の大平さんのときの予算委員長のときは、私は国防会議の事務局長なのです。それから、五十五年の大平内閣の大蔵大臣のときも事務局長なのです。五十八年に中曽根内閣になって、大蔵大臣にまたなるでしょう。そのときも〔事務〕局長なのですね。そんなことで竹下さんには非常に親しくしていただきました。そういう意味では、あれを読んで非常に面白かったのです。ちょうど同じ時期なものですから、大体九割ぐらいは知っていることだったものですから。ただ、津和野に行って演説をした話なんかは、あれは知りませんでしたけれども。

そんなことで非常に親しくしていただいたのですけれども。これも、政治家というのは面白いなと思いましたのは、彼が大蔵大臣で私が事務局長のときに、益田という町――今は益田市ですね――に行って話をしたときに、講演が終わったあとに、「大蔵大臣の竹下さんに頼んでおいてくれ」と言われたのです。「何ですか」と言ったら、「益田に飛行場を作ってくれ」と言われたのです。私は帰ってきて竹下さんにお会いして、「益田に行ったら、あなたの地元なのだけど、こういう陳情を受けました」と言ったら、「伊藤さん、あそこに飛行場を作っても客が居りますか」と言って、てっきり作らないかと思ったら、いま作っていますものね。だからやっぱり地元というのは凄いなと思って。定期便なんかあるのかどうか分からないのですけれどもね。

私が行ったときなんかは、宇部に降りて、そしてバスか何かで行ったのですけれども。ちゃんと益田に飛行場ができているのです。

伊藤(隆)　益田なんていうのは非常にさびれたような感じのところですね。

伊藤(圭)　私もそんな感じがあるのですけれども。あそこから山口に行くのも大変ですものね。

それから、私が海原さんのを読んで非常にショックを受けたのですが、昔の役人というのはこういうものかなと思ったのは、あの人は学生時代から官吏になることを目指して、そのほかのことは何もやっていないですね。そんな人生ってあるのかなって(笑)。私なんかが考えてみると、常にあの人は自分の目的に向かってあらゆる努力をするのですね。無駄なことは一切しない。それは仕事でもそうなのでしょうね。だから、それだけに人から裏切られたときの落胆というのは非常に大きいような気がします。ただ、あんなに張り切っておったら脳溢血にもなると思ったんですよ(笑)。本当にあの人はこのオーラルヒストリーをやって脳溢血になったのではないかと思います。というのは、これをやるために彼はあらゆる努力をしたと思うのです。

伊藤(隆)　そんな印象は全然受けませんでしたけれどもね。なんか、本ができたのでお元気になられて。

伊藤(圭)　元気になったし、それから奥さんが大変満足していました。とても喜んでいました。最初、ペラペラしたパンフレットと思っていたのが、あの本をいただいてとても喜んでいました。海原

さんも元気になったみたいで。私は来たばかりだったから読んでいなかったのですが、「これから読みます」なんて言ったら、「ま、昔のことはあんまり知っている者がいないからな」なんて言っていました。

佐道　だいぶお話しができるような感じですか。

伊藤(圭)　このあいだ行ったとき、今週の月曜日はそうでした。

伊藤(隆)　本が出たので喜んで、看護婦さんやなんかにもいろんな話をしているんだというようなことをおっしゃっていました。

伊藤(圭)　もう、行っても分かると思います。それから、あの本を贈って頂いて、おそらくまだ読んでいないと思うのですけれども、人からお礼状が来ていました。そういうのを持ってとても喜んでいました。

とにかく海原さんのを読んで、私はこんな真面目な役人じゃなかったと思って(笑)。

伊藤(隆)　淡々と話してくださったような感じでしたけどね。

伊藤(圭)　あれぐらい真面目に物事を考えておったから、本当に精一杯八十年を生きたという感じですね。だって、あの学生時代のところを見ると、家庭教師かなんかをやって、夜なんか遊んだことが何も書いていないでしょう。だから、私なんかと全然違うなと。

それからもう一つ、これは確かめたのですけれども、三次防を決定するときに大綱と主要項目に分かれるでしょう。大綱を決めたのが四十一年の十一月二十九日なのです。突然決めて、これは上林山さんが辞めるときの土産だと思っていたのです。当時関係していた人に確かめたら、違うと言うのです。これは、どういうわけか知らんけれども、十一月の初め頃だったか、はっきり彼も記憶ないのですが、十一月になってから突然、当時の佐藤総理が「やろう」と言い出したらしいのです。それで、まず幹事会というのを開くのです。幹事会というのは、各省の次官と国防会議の事務局長でやるわけです。そのときに、防衛庁の事務次官が三輪さんで、大蔵省が佐藤(一郎)さんですか。二人の意見が合わなかったようです。三輪さんは、数字まで入れた計画を作りたいと言うし、佐藤さんは、大蔵省は絶対にそれは嫌だと言う。とにかく十一月でしょう。これから予算が始まるときで絶対嫌だと言って、それで喧嘩になったらしいのです。その席でそれを主催しておった愛知揆一官房長官が席をはずし、しばらくたって出てきて、「いま総理に訊いたらやれと言っている」と。それでもうみんな困っちゃって、何か作らなきゃいかんなということで、数字を入れない大まかなものを作ろうというのがあの大綱になったらしいのです。だから、〔大綱を作るきっかけになったのは〕上林山さんではなくて佐藤(栄作)さんらしいです。なぜ佐藤さんがそういうことを言ったかというのは、それは分からないというのです。

ただ、これは私のまったく推測なのですけれども、長期計画というのは総理大臣が勢いのいいときしかできないのです。あの佐藤さんですら、三次防はやっているのですけれども、四次防のときにはつまづくわけです。〔総理在任期間〕七年八ヵ月。その四次防の主要項目は田中さんになってからやるわけですから、池田さんは、なって一年目に二次防を決めるわけです。そして、その決めたときに内閣改造をして私が秘書官になるわけです。それから五年たって、佐藤さんが三十九年に〔総理大臣に〕なって、四十一年の終わりでしょう。四十二年から〔三次防が〕始まるわけですから、絶対に決めようと思ったのですね。通常、四十二年から始まるのなら、四十一年中に決めなきゃいかんわけです。ところが「黒い霧」の問題なんかがあったものだから、決められないままずっと来ちゃって、解散になるでしょう。そこで佐藤さんは、四十二年から始まるのを、これはやろうと思ったのでしょうね。佐藤さんには池田さんとの対抗意識もあったかも知れませんけれどもね。というのは、池田さんがなった三十六年というのは〝空白の一年〟があるでしょう。それに対抗して、彼は、「俺は空白を作らない」という気持ちがあった

んじゃないかと思うのです。それで急がせたのだと思います。それで四十一年の十一月に〔大綱を〕決めて、主要項目は三月の予算が始まる前に決めるわけです。

三次防の大綱で一つだけ決まっている数字は、陸上自衛隊の十八万という数字だけなのです。これはどうしてかというと、十八万という数字は一次防以来ずっと陸上自衛隊の悲願なのです。陸上自衛隊の十八万体制というのが完成するのは、やはり佐藤さんのときなのです。結局その数字だけだった。あとは全然出ないわけです。それから三ヵ月間折衝して、最後に決まるのが三月の主要項目と、予算に三千四百億プラスマイナス二百五十億と決まるわけです。

そんなような経緯があって、これは私が間違っていました。当時の関係者に確かめたのでご報告いたします。

それから、主要項目が変わった理由ですね。これも確かめましたら、これは間違っていませんでした。やはり一日か二日前の『朝日新聞』に「陸」「海」「空」の計画が全部出たのですね。だから大綱は、陸上自衛隊の目標、海上自衛隊の目標、航空自衛隊の目標、それが防空とか何とか機能別になる。それは一日か二日前に『朝日新聞』に出たのです。その出たのが最終案ではないのだそうです。最終案の一つ前の案なのだそうです。だけど、同じようなのを閣議決定するのは嫌だというので、急遽、二日ぐらいで入れ替えたものらしいです。そんなことを言っていましたので、それは間違っていませんでした。

このあいだは三次防の主要項目の決定までやったわけですね。

■中ソの脅威とその対策

佐道　ちょっとまた遡ったりしますけれども、一九六三年の一月に日米安保協議委員会というものが開かれて、いわゆる中国の脅威という、その認識の差というのが日本とアメリカの間にあったのではないかと言われているのですけれども、そこら辺の問題で。

伊藤(圭)　六三年というと……。

佐道　昭和三十八年。

伊藤(圭)　三十八年ですか。防衛一課にいた頃ですね。中国の核実験は、確かにあったのはあったのですけれども。しかし、中国の脅威というものは、まだ直接的には感じていませんでした。何でもアメリカに負ぶさっていた感じでしたからね。私はこれはいつも言っていたのですけれども、わが国の防衛力整備といいますか脅威を考えるときに、まず一番先に考えなきゃいかんのは、〔サンフランシスコでの〕講和のときに日米安保条約を結ぶわけですね。あのときに、日米安保条約を結んだのは、日本は重武装は捨てたという決意だと思うのです。最後のところは全部アメリカに頼るのだという姿勢で来ていたと思うのです。その頃は東西対決の激しい頃でしょう。だから、日本に対して武力行使をできるのは当時はソ連しかないという感じがあったのです。だから中国あたりが武力で日本に脅威を与えるということはあり得ないと思っていたのです。ところが三十九年のオリンピックのときに核実験をするわけです。そのあとも、いわゆる運搬手段を完成してミサイルを飛ばせるようになるには当分かかるし、それに対しては、沖縄にメースBというのがありますから、全部アメリカが対抗してくれるからというので、中国の脅威というのはほとんど考えていなかったのです。ただ、それから十年ぐらいたってから、昭和四十八年頃でしたか。私は初めて東南アジアに行ったことがありまして、シンガポールから、インドネシア、タイをまわったのですけれども、そのときに感じたのは、アセアン諸国は物凄く中国を恐れているということです。ご承知のように、インドネシアは中国大使館を閉鎖している頃でした。シンガポールに行ったときには、極東においては中国と国交を結ぶ最後の国になるだろうということを国防担当者が言

っていました。そういう時期で、そんなに中国の脅威というものを東南アジアは感じているのかというのを驚いたぐらいです。それが十年後ですから、三十八年頃というのはまったく中国の脅威なんていうのは考えなかったと思います。

ただ、例の「三矢研究」が問題になるわけです。あれはまさに、中国が日本に攻めて来るというのではなくて、中国がどこかの国とトラブルがあっていろいろゴタゴタしているのが日本に波及してきた場合にどうするかという程度の対策でした。以前、北朝鮮が入ってきましたね。朝鮮戦争になったでしょう。それで釜山まで来たときでも日本では誰も脅威も何も感じていないでしょう。

伊藤(隆)　心理的にはちょっとショックは大きかったですけれどもね。

伊藤(圭)　だけど、現実にどういうことが起こっているかというのはあんまり知らなかったですものね。それと同じような感じだったのではないでしょうか。ただ、あのとき私がびっくりしたのは、そういう朝鮮半島の脅威なんてあんまり知らなかったですけれども、実は新聞社は大変だったらしいですね。あとで「天声人語」を書いていた荒垣秀雄さんから聞いたのですけれども、あの当時、本気になって新聞社の人で共産党に入ろうと思っていた人もいたと言うのです。というのは、朝鮮がやられて、日本もやられるのではないか。それぐらい緊迫した状況だったみたいです。特に私なんかは役人になりたてだったせいもあって何も感じませんでしたが。

伊藤(隆)　朝鮮半島の事態というのは、ソ連と中国が後ろについて北朝鮮はやっているわけですからね。

伊藤(圭)　だから朝鮮戦争のような状況で、あそこで止まらないで日本まで来た場合というのは想定していたのでしょうね。

伊藤(隆)　そうですね。だから、必ずしもソ連が来たからというのではなくて。

伊藤(圭)　ただ、その頃ソ連の船が来るかも知れないということは脅威としてはあったのです。それは、稚内で望遠鏡で見ていますと、ソ連の艦隊が南下してきて、あるところまで来ると反転する。そういう訓練なんかをやっていましたから、やっぱりソ連は脅威であると。それから、ソ連の海軍、航空力を見ると、日本に対して実際に核兵器じゃなくて攻めて来る能力はあるということはありました。ところが、北朝鮮にしろ中国にしろ、日本に攻めて来る、武力を行使する海軍力と空軍力がないだろうというのが当時の判断だと思います。空軍は、飛行機はたくさん持っていますよね。でも古いから、来たって、日本にある米軍の防空戦闘機とF104で十分対処できるというような感じはありました。それから、その頃は中国は船はたくさん持っていました。しかし、遠いところに出られないのです。沿岸をうろちょろしているような状況でしたから、ほとんど脅威というのはありませんでした。だから恐いのはミサイルだけでした。しかし、運搬手段が当分できないだろうというような感じでした。

佐道　今のお話の関連なのですけれども、一九六三年の日米安保協議というものもそうなのですけれども、日米安保体制のなかでの自衛隊の役割がありますね。それともう一つ、陸幕長をおやりになった杉田一次さんの回想なんかを読みますと、杉田さんはまさに六〇年安保の最中というか、六〇年に陸幕長になったと思うのですけれども。その杉田さんのご本で、これからとにかく日本の防衛で大事なのは間接侵略への対応だということを回想録のなかでずっとおっしゃっているのです。共産主義の脅威というのはどこに現れるかというと、間接侵略だという言い方をずっとしているのです。自分は、陸上自衛隊の間接侵略対応をなんとかしなきゃいかんということで努力したという書き方をされています。

伊藤(圭)　それは、六〇年安保の頃というのは国内が騒然としていたでしょう。当然、間接侵略ということを考えたでしょうね。陸上自衛隊はその間接侵略の恐れをそれから十年ぐらい持ち続ける

わけです。だから私が広報課長になって五年も引きとめられたのは、七〇年安保が終わるまでということでしたから、そのあいだはとにかく間接侵略中心ですね。

佐道　そういう間接侵略中心というのは、自衛隊とか防衛庁とか全体的にそういう……。

伊藤(圭)　いや、防衛力整備はまったく違うのです。防衛力整備は違うのだけれども、例えば訓練の時間を間接侵略対処の訓練の時間を増やすとか、そんなことで運用的には陸上自衛隊がやっていたのではないでしょうか。ただ、「海」とか「空」はそんなものはあんまり考えていなかった。

佐道　そうですよね。海上自衛隊で間接侵略対応といったって、じゃあ、何をやればいいんだという話になると思います。そうすると、実際、在日米軍というのは陸上部隊がどんどん引き揚げていってほとんど残らないということになると思うのですけれども、やはり安保条約のもとでの日米協力といいますか、実態面というか。六〇年代は結局何もなかったんだという話がいろいろと言われたりするのですけれども、やはりほとんどそういう協議の対象にならないという感じなのでしょうか。

伊藤(圭)　だけど、航空自衛隊だけはまだヨチヨチだったのか、「ブルラン計画」とかなんとかいうので米空軍と研究をやっていたみたいですね。あとで国会で問題になるのですけれども、別にそれはただ研究だというようなことで、海原さんが答弁したなかにありました。

佐道　国会で、アメリカが日米安保に基づいて日本防衛のために来るとして、どのくらいの時間がかかるのかというと、「陸」「海」「空」でみんな答弁の仕方が違うという話があるのですけれども。陸上自衛隊とか、そもそも本当に日米共同作戦というか、アメリカが本当に支援に来るということを考えていたのでしょうか。

伊藤(圭)　あの当時は考えていました。というのは、何週間たてばハワイにいるのが来るとか、そういうのは計画のなかに入っていましたからね。それから、飛行機なんかはあんまりなかったのかな。航空機は、防空作戦はだんだん日本に譲ってきて、昭和三十五年頃は大体レーダーも飛行機も日本が運用していましたからね。ただ協定はありましたね。「松前・バーンズ協定」があって、防空作戦を一緒にやるとかというのもありましたね。

佐道　一方で海上自衛隊も、けっこうアメリカと共同訓練みたいなことを規模が小さいながらもやっていたと思うのですけれども。これはやっぱり、米海軍との親しさというところからずっと個別的にやっていたと。

伊藤(圭)　でしょうね。

佐道　まったく個別的に。

伊藤(圭)　個別的というか、海上自衛隊と米海軍がやっていたということですね。「陸」「海」「空」が一緒になってということはないですね。最初に始めたのは通信訓練からです。コミュニケーションが大事だというので、戦場における通信訓練なんかが最初だったと思います。そのうちに今度は、掃海が日本は割合に得意だったのです。それで掃海訓練も一緒にやったりしていました。

佐道　前回のお話のなかでも、災害対策は共同で出なきゃいけないから統幕にしようとしたら、結局できなかったので内局がプランをたてたという話が出ていましたけれども。統幕の任務は各自衛隊の調整だという話がありますけれども、なかなかそこはうまくできないのですか。

伊藤(圭)　できないです。それは先生がお休みのときにお話ししたかも知れませんけれども、三十八年十二月二十八日にナイキとホークの帰属を決めた。あれだって統幕ができないのです。それで、結局、内局で決めるようなことになったわけです。

佐道　陸上自衛隊の陸上幕僚監部だけが、海上自衛隊や航空自衛隊の幕僚監部とはこの時代は組織が違いますね。部課並列制にな

っていまして、海上も航空も部課直列制になっているのに。杉田さんの本なんかでは、いざというときに日本の防衛の場合には国土本土中心になるから、その場合にはやはり陸上自衛隊が主にならざるを得ないということもあって、自分としてはほかの部隊の組織とは違うけれども、こういう組織がいいと思っていたという言い方をされています。今は一緒のシステムになっていますけれども、やっぱりそれはおかしいじゃないかという議論はあったのでしょうか。

伊藤(圭)　これは前にお話ししましたけれども、最初、陸上自衛隊ができたとき、二十九年の段階ですね。予備隊の頃からなのですけれども、全部米軍の指導を受ける。米軍は野戦軍なのですね。だから戦闘ができるような組織になっているわけです。それをそのままもらっておったというだけのことで、べつに、特にこれが適当だからというようなことではなかったと思います。

佐道　その流れでそうなっていたというだけですか。

伊藤(圭)　それから航空自衛隊なんかも、何も分からないものですから、とにかく米軍の言う通りにしていたというだけで。ただ海上自衛隊だけはそこでがんばったわけです。

佐道　昔からの組織がいいと。一九七八年に陸上自衛隊の並列制がほかと同じように。

伊藤(圭)　あれは何年になるのですか。七八年というと……。

佐道　(昭和)五十三年。

伊藤(圭)　私がもういなくなってからだな。

佐道　局長でいらっしゃったと思うのですけれども。

河野　国防会議の事務局長でいらした。

伊藤(圭)　十一月(からです)、(だから)防衛局長のときですが記憶ないです。

佐道　ちょうどガイドラインができたとか、いろいろワーッとしている頃で、陸上自衛隊の組織のそういう重要な変革だけがポッと行われるので。

伊藤(圭)　これは本当に印象ないですね。私はもっと前にできていたかと思った。

佐道　できてから二十年ぐらいたってからそういう変革があるのは何かなと思っていたのですが。

伊藤(圭)　おそらくそのときに「空」も一緒にやっているのではないかな。航空自衛隊は……、航空自衛隊は何時頃から変わったのですか。あれはずっと変わっていないかな。

佐道　航空自衛隊はずっと一緒だと思います。

伊藤(圭)　人事教育部というのがありますね。防衛部のなかに調査課か。そうか、あれは内局に似ているのかな。ただ、航空自衛隊の人員というのは割合ゆとりがありましたよ。

佐道　そういう各幕僚監部とか各自衛隊の組織をいじるというのは、これで見ると政令で最終的には決めるということになっているみたいですけれども、内局との相談は。

伊藤(圭)　それはありますよ。政令で出すときは、内局から総理府に出すわけですから。

佐道　それは、直接そういう組織を変えるという場合に、担当になるのは防衛局ですか。

伊藤(圭)　防衛局もやりますけれども、法規課というのがあります。官房の法規課。

佐道　次ですけれども、さっき池田さんと佐藤さんのライバル心みたいなものがあったのですけれども。志賀(健次郎)さん、福田(篤泰)さん、小泉(純也)さんとか、さっきあんまり印象がないという話ではあったのですけれども。

伊藤(圭)　印象がないというのは、例えば福田さんは災害派遣のときの印象があるのですね。志賀さんは、ナイキとホークの帰属を決めたのです。これは私が担当しておったものですから。どうしてこんな年末に決めるのかと思ったぐらい、十二月二十八日に庁議

で決めているのです。だからその印象ぐらいしかないですね。この人が何をやったという印象はまったくないです。小泉さんにいたっては、小泉さんというのは海原さんなんかはだいぶ印象あるみたいだけど、私なんかはぜんぜんないですね。

佐道　言われて、「ああ、そうだ、いらっしゃった」、というような。

伊藤(圭)　直接接触があったというのは、福田篤泰さんだけです。怒られるかと思って、恐る恐る行って、怒られなかったという。志賀さんだって、これは直接受けたわけではないですから、たまたま私がナイキとホークの帰属を決める文章を作ったりなんかするだけのことであって、そういうのは課長や局長がやっていましたから、あんまり直接印象はないのです。

伊藤(隆)　防衛一課の先任課員として。

伊藤(圭)　いや、志賀さんのときはまだなっていません。

伊藤(隆)　それぐらいのポストだと、大臣と直接接点というのはあんまりないのですか。

伊藤(圭)　あんまりないですよ。決裁をもらいに行くようなときに持っていったりすることはあるのですけれども、大臣がそこで訊くことはほとんどないですからね。ただ、ポンポンと判を押すだけです。例えば、私の経験からすると、山中(貞則)さんのときに防衛課長で八千五百人の増員をやるわけです。十八万体制を作るのですよね。山中さんという人は割合うるさい人で、「今まで〔問題なく〕来ておったのに、どうして何もないのに八千五百増やさなきゃならんのだ」と〔言うので〕説明に行かないといけないわけです。あのときには確か沖縄返還か何かにひっかけて八千五百名増やそうということでそんな説明をしたのですが、それは課長が行くわけです。部員は行きません。部員が説明に行くのは次官までで、最後の大臣のところは課長が行っていました。

伊藤(隆)　そうするとやはり、目は次官のほうを見ているわけですね。

伊藤(圭)　でしょうね。

佐道　次官と言いますと、加藤(陽三)さんとか、あとは門叶(宗雄)さん。

伊藤(圭)　門叶さんは、これもあんまり印象ないんですね。

伊藤(隆)　海原さんにみんな(笑)。

伊藤(圭)　海原さんの印象があまりにも強いものだから。

佐道　実は門叶さんが『国防』という雑誌に「シビリアン・コントロールとは何か」という論文を書いておられるのですけれども。

伊藤(圭)　ああ、あの人が書くはずがないなぁ。それは誰かに書かせたのでしょうね。

佐道　ああ、そうですか。そのなかに、今のようなシステムがいいかどうか分からないと書いてあるのです。昭和三十四年かなんかに出て、岸内閣の時代に出ているのですけれども、「あれあれ、こんなことをおっしゃるのは……」というふうに思いましたけれども。

伊藤(圭)　私の印象からすると、あの人はそんな人ではないですね。

佐道　そうですか。どんな人ですか。

伊藤(圭)　いや、もう茫洋とした人でしたね。

佐道　論理的にやっていくという。

伊藤(圭)　そういう人じゃなかったと思います。上村健太郎(昭和二十七年九月五日～二十九年六月三十日官房長、二十九年七月一日～三十一年七月三日空幕長)さんなんかもどっちかというとそうじゃないかな。最初の空幕長。官房長から〔なったのですが〕、空幕ができたときに空幕長を誰にするかということで「陸」と「海」が競争するわけです。それで、しようがないから官房長が行って空幕長になるのです。その上村さんなんかも、まぁ、みんな内務官僚ですけれども、内務官僚のなかでは海原さんというのは特異な人ですよ。内務官僚というのは大体、下から上がってきたものに内容を見ずに判を押すような感じでした。

佐道　次官として印象に残っておられる方というのは。

伊藤(圭)　私が印象に残っているというのは三輪さんですね。三輪さんは、結局、私は海原の子分だというので、やることに対してだいぶいろいろ反対されましたから。それから久保さんです。この人は理論家でしたから。あとは、ぜんぜん印象にないですね。

佐道　丸山(昂)さんとかもないのですか。

伊藤(圭)　仕事の上ではないですね。

佐道　次官にはおなりではないのですけれども、海原さんとかと一緒にいらっしゃって、草創のときから法制の面でやっておられた麻生(茂)さん。

伊藤(圭)　麻生さんね、これは印象にあります。というのは、物凄く緻密な人だということです。緻密な人で学者みたいな人です。

伊藤(隆)　学者……、うーん。

伊藤(圭)　アハハハハ(笑)。

伊藤(隆)　いろいろありますけど(笑)。

伊藤(圭)　この人はちょっと特異な経験がありまして、広島の原爆にあった人です。だから怪我しておりましたけど。まあ、非常に真面目な人でした。

佐道　島田(豊)さんとかは。

伊藤(圭)　あ、島田さんも印象ないなぁ。島田さんが次官のときは、海原さんが国防会議事務局長だったでしょう。もうぜんぜん影が薄くて。結局、海原さんに対抗しておった三輪さんというのは、そういう意味で印象があるのですが、そのほかはもう完全に海原さんにやられていましたから。海原さんがいなくなったあと、運輸省から来ておった人が次官になるのです。小幡(久男、在任昭和四十二年十二月五日～四十五年十一月二十日)さんです。この人は教育局長をやっておりましたから私は印象あるのです。「自衛官の心構え」なんかを作った人です。

佐道　海原さんがいらっしゃる間は、あまりにも海原さんが強烈すぎて。

伊藤(圭)　それはそうですよ。

伊藤(隆)　池田内閣から佐藤内閣へ交代したということで、何か変わるなというようなことはございましたか。

伊藤(圭)　それは、防衛庁は期待しておったのです。なぜかというと、池田さんは経済一点張りでしょう。防衛なんかはまったく押さえられているという印象があるのです。実はそうではなかったのですけれどもね。彼は非常に勉強していた。ところが佐藤さんは自主防衛というのを盛んに言っているから、あの人になったら、それこそ省昇格になり、防衛力が自立するという期待感を持っておったのです。ところが、総理になった途端に何も言わなくなっちゃったわけです。

伊藤(隆)　やはり期待はあったのですか。

伊藤(圭)　期待はありました。

佐道　六五年に「三矢研究」とかあそこら辺で大騒動があったというのが佐藤さんには影響があったのでしょうか。

伊藤(圭)　あったかも知れませんね。総理になってからまったく防衛のことは言わなくなりました。それから割合に消極的だなと思ったのは、沖縄返還のときなんかも、自衛隊を持っていくということを最初物凄く反対しましたものね。私は当時防衛課長でしたが、部隊が向こうに行ってそれなりに活動するためには早く行って準備しなきゃいかんでしょう。返還前にそういう人を送ったら、それが国会で問題になるわけです。それから持っていく人数も、何千人かだったのかな、それを出そうとしたら佐藤さんに止められました。私も多いと言ったのだけど、当時の防衛局長が、「そんなことはない。俺が出せというのだから出せ」と言って、何千人かの部隊を配置すると言ったのですが、佐藤さんのところで止まってしまって。それで、当時の防衛庁長官の江崎(真澄)さんが頼みに行くのだけど、〔佐藤さんが〕「絶対にいかん」と言って、それでだい

ぶ数を削られました。そんなことがあったから、非常に消極的だなという感じがしました。それは、どういう訳が知りませんけれども、返還直後沖縄で反自衛隊の気運が非常に高まってきたのですね。そういうのを知っておったのではないでしょうか。

伊藤(隆) 何がきっかけなのですかね。

伊藤(圭) これは分からない。前にもお話ししたけれども、防衛庁で作った映画なんかをテレビで流していたのですからね。それから、遠洋航海で寄港したときで、海上自衛隊があそこを行進して、『琉球新報』の講堂で音楽会なんかをやったり。だから分からないですね。

佐道 日の丸を揚げて抵抗のシンボルにしていたのが、いつのまにか日の丸がだめになっちゃうし。そこもなんか……。

伊藤(隆) 沖縄は、聞いていてもよく分からないですね。

伊藤(圭) 私も分からないのは、ご存じのように曽野綾子さんが『生贄の島』というので沖縄のことを書いた本があるのです。このときに、いろいろ沖縄戦のことについてアメリカの戦史なんかも見たいからと言って、私はペンタゴンに頼んで沖縄戦の資料なんかを送ってもらって彼女にやったりしたのです。彼女は喜んで、それを書いて、私に持ってきてくれたときに話していましたけれども、どうも沖縄の人の気持ちが分からないと言うのです。彼女のその『生贄の島』に書いてある結論は、渡嘉敷列島で何とかという中尉が命令して三十人が自決したということになっているでしょう。そのことをずっと追っているわけです。そして彼女の結論は、「自決を命じたということも確認できなかった。同時に、命じなかったという証拠もない」というのが結論なのです。分からないということですね。そのため、当分沖縄に行けないというのですね。「曽野綾子はけしからん。あれだけの犠牲を強いられた渡嘉敷の人間の気持ちを踏みにじった」と言うのだというのです。恐いところだなと思ってね。

河野 曽野綾子さんのその本についての反応というのは、たまたま私が調べているときに新聞等々で読んだのですが、曽野さんを人格的にバッシングするような論調が非常に強くて、私も驚きました。

伊藤(圭) そうですか。

河野 どうしてだろうと思いました。

佐道 未だに政治的に意見を異にしている人に対して、人格に及ぶような批判をしますね。今でもそうです。

河野 やはり沖縄の人たちは、あれは当然強制された集団自決であるというふうに考えないと、沖縄の人たちにとっては飲み込みにくい事件でしょう。

伊藤(圭) それは日本人一般にあるんじゃないですか。いま中国あたりからけしからんと言われると皆ひれ伏しちゃうでしょう。それに対して抵抗しにくいような雰囲気が日本にあるでしょう。同じような心理じゃないかなと思います。

佐道 抵抗して教科書を作っている人もいらっしゃいますけれども。

伊藤(圭) ただ、私は中国人の気持ちもある程度分かるのです。というのは、私は満州で育ちましたでしょう。満州にいるときの日本人の中国人に対する態度なんていうのは、これはひどいものでしたから。結局、いまアメリカで何かあると日本人はすぐヒステリー状態になるでしょう。同じだと思うのですよ。中国人はやっぱり、いつまでたっても日本人のやることに対してはヒステリー状態になるんじゃないかと思うのです。これは本当に、戦争が終わってから五十年にもなるのにと思うのですけれども、やはりそういうところはあるのでしょうね。それと、その裏にあるのはやはり中国の中華思想でしょうね。行ってみて話をすると、日本なんて本当に、南蛮夷狄じゃないけど、そんな感じですよね。

■自衛隊を知ってもらう―『科学の脅威』の制作

佐道　ちょっと戻りますけれども。防衛庁長官はあんまりご印象がないということですけれども、広報課長になられたところなのですが、前回のお話のなかで、防衛局での経験を持っている人ということで先生が呼ばれたのだろうということなのですけれども。実際、〔一九〕六五年ですから、さっきもお話に出ました「三矢研究」とかいろんなことがあったり、そういう時期でもあったと思うのですけれども。二年ぐらいゆっくりできるかと思ったら急に海原さんに呼び戻されて、海原さん直轄のところですね。じゃあ、どういうふうにやってやろうかというようなことを最初お考えになりましたか。

伊藤(圭)　まず広報課長になって一番最初に思ったのは、当時の「陸」「海」「空」の中枢にいた人は旧軍の出身ですね。そのせいか、「日本の軍隊というのは広報がなかったんだな」というのが印象ですね。ということは、いわゆる報道はあったけれども、広報はないのです。国民にサービスして自衛隊のことをなるべく知ってもらう努力なんていうのは、本当の軍人のやることではないという感じがありました。だから、各幕の広報担当者は上司の反対があって広報活動に苦労していました。それで、ああ、こういうのが自衛隊が国民に受け入れられない一つの理由かなと思いました。昔は徴兵制度だったから、それぞれの家庭から誰かが軍隊にかかわっておったわけです。今は全然関係ないわけでしょう。とにかく安保騒動なんかもあって、自衛隊は敵だというような雰囲気のなかですから、こういうものかなぁという感じが最初はしました。だから自衛隊の実態をなるべく見てもらう必要があるのではないかと思いました。そのことは海原さんも同じ気持ちを持っていました。

そこでまた海原さんがすぐ無理なことを言うわけです。私が四十年の十月に〔広報課に〕来ますでしょう。翌年の三月だったかな。「一ヵ月で映画を作れ」と言うのです。日米安保体制の実態を国民にＰＲするような映画を作れと言うのです。そんなことを言ったって、そんなもの一ヵ月でできるわけがないでしょう。

伊藤(隆)　それは予算の関係ですか。

伊藤(圭)　予算でね。それで、まず米軍といろいろ相談したのです。そうしたら米軍も非常に一所懸命やってくれまして、その頃日本にないフィルムなんかもどんどんくれて、例のミニットマンの発射風景とかそういうのもくれました。それで『日米安保体制』という映画を作ったのです。作ったのはいいのだけど、実際にあれは予算の執行が翌年度にかかるわけですけれども、一ヵ月か二ヵ月はいいのですね。それでやったのですが、そのときはずいぶんひどいことを言うなと思いました。

それを作って、松竹の映画館で上映したのです。あの頃は何か短編映画と長編が組み合わせになっていて、採用されたのです。『日米安保体制』というのでは難しいというので、『科学の脅威』という題名で、ミニットマンの発射風景とか、ポラリスの発射とか、そういうのが入っているのをやったのです。

伊藤(隆)　制作は防衛庁ということですか。

伊藤(圭)　そうです、防衛庁でね。

伊藤(隆)　それを一般の映画館に配給したわけですか。

伊藤(圭)　そう、配給したのです。確か金をつけましたね、一本幾らと言って。

伊藤(隆)　こっちから金を出したのですか。

伊藤(圭)　そうです。そうすると、松竹で全国をまわるのに一年ぐらいかかるのですよね。だから一年ぐらいその映画が流れていました。映画は、プリントして十本とか二十本やるのですね。それで全国をまわるのです。たまたま当時は、城戸（四郎）さんが社長で、その下にいた今の奥山（和由）の親父（奥山融）が私の五高の一年

後輩だったのです。彼が映画を担当していたから、頼んで上映したのです。それが一番最初の映画でした。

伊藤(隆)　評判はどうでしたか。

伊藤(圭)　評判はかなりよかったのではないでしょうか。とにかく今まで見たことがないような場面があるわけです。ポラリスを撃つところなんていうのは、水中から出てくるところがあったり、ミニットマンが上がってくるところなんか凄いんですね。だからみんなびっくりするというところがありました。

佐道　しかし、当時マスコミを中心に、かなり軍事とか防衛とかには厳しい論調の時期で。

伊藤(圭)　だけど、むしろ積極的に私はやったのです。だから、博覧会とかそういうのがあるとどんどん出したのです。小田急の向ケ丘遊園がありますでしょう。あそこなんかにも戦車なんかを持っていって、子どもを乗せてあの辺をまわったり。それから高知の博覧会もやったし、姫路あたりもやっていますか。ずいぶんあちこちやりました。

伊藤(隆)　それは、反対運動みたいなのはなかったのですか。

伊藤(圭)　全然ありません。小規模の演習なんかをやるのです。空砲なんかを撃ったりして。だけど何も。

佐道　空砲ならいいんですよね。

伊藤(圭)　そのときに、一番最初にお話ししたと思いますけれども、今の三越本店の上にF104の飛行機をクレーンで吊り上げたりして。何も反対ないですよ。

佐道　監督とかは、一応プロの映画の。

伊藤(圭)　映画会社にシノプシスを出させて、そしてどれにするかというのを決めて。あれは何ていう会社だったかな。読売映画社とか毎日映画社とか、ああいうのがみんな応募してきました。

佐道　米軍から借りたフィルムとかを使いながら、記録映画みたいな感じですか。ナレーションが入って。

伊藤(圭)　そうそう。

伊藤(隆)　それはいま見られないかなぁ。

伊藤(圭)　ありますよ。

佐道　ビデオ化されたりしていないわけですか。

伊藤(圭)　ビデオ化しているかも知れない。今でも、おそらくあると思います。

佐道　『防衛白書』とかの後ろを見ると、貸し出ししていただけるようなビデオなんて載っていますけれども、それには『科学の脅威』というのは残念ながら載っていませんでした。

伊藤(圭)　いや、それは『日米安保体制』で載っています。『科学の脅威』というのは、一般の映画館に出すときは、『日米安保体制』ではあまりにもどぎついからというので変えたのです。

伊藤(隆)　多少編集はし直したのですか。

伊藤(圭)　いやいや、同じ。ただ題名だけで。

佐道　それが成功して、じゃあ、次のをどんどんやろうという話に。

伊藤(圭)　だからやりましたよ。ほかのですが、ずいぶんテレビなんかに流しました。それから映画も作ったと思います。

佐道　主に上映するのは映画館ですか。

伊藤(圭)　いや、映画館で上映したのはその『日米安保体制』だけですね。あとはもう、地方の舞台あたりで記念祭のときとかにやるんじゃないかな。あるいは貸し出して、どこかの公民館でやるとか。とにかく全国の映画館でやったのはおそらくそれだけではないでしょうか。あとは、例えばゴジラに協力したり、私が広報課長のときに非常に力を入れたのが黒澤明さんの『トラ・トラ・トラ』。黒澤明さんが途中で降ろされる映画ですけれども。あれなんか協力しました。芦屋の基地に空母の半分のセットを作ったりしました。ちょうどそれが撮り終わった頃、私はアメリカに招待されて行きましたが、そのときにロスのFOXでそのフラッシュを見せても

らいました。あの映画は、アメリカの国内では評判がよくなかったそうですね。あまりに日本に対して好意的に描きすぎていると。

佐道　客観的に描いたのではないかと思ったのですが（笑）。

伊藤（圭）　だけどやっぱりアメリカがやられるところですからね。真珠湾なんか。あんまり評判はよくなかったみたいですよ。

伊藤（隆）　そうでしょうね。

佐道　でも、アメリカの戦闘機が日本の零戦をバタバタ落としたりとかいうのを見て、あれ？　と思ったのですけれども（笑）。

伊藤（隆）　そんな心地よいはずがないでしょうね。

■新聞・雑誌記者と交際する

佐道　広報課長ですから、新聞とか雑誌の関係もございますよね。

伊藤（圭）　これは非常にありました。

佐道　もちろん、クラブのことなのですけれども、今度広報課長ですからよろしくみたいな感じで。新聞はクラブがありますけれども、雑誌とかそういうのはどういう感じになるわけですか。

伊藤（圭）　雑誌は、取材に来るのはいつでも会いました。それから、こっちが雑誌社を訪ねたことが一度あるのです。それは、上林山さんが帰ってきたときの記者会見で、これはどうなるか分からんと思ったものだから、週刊誌を全部まわりました。こういう訳だから、記者クラブの人に質問してもらうので、アトランダムに質問しないでくれと頼んでまわって。そんなことはやりました。それから抗議に行ったこともあります。F104の照準機（ナサール）の性能が悪いという『週刊現代』の記事でした。ところが、ああいう週刊誌なんかで非難されても、役所は名誉毀損で訴えられないのですね。役所は自分で名誉を回復する力があるはずだと言うのです。要するにやられっぱなしなのです。そうらしいですよ。全然だめなのですね。それから、いろいろスキャンダルなんかが週刊誌に載るでしょう。そのときに名前を載せないように頼みに行ったり、そんなことはしました。

佐道　一般の雑誌もありますけれども、例えば『国防』とか『軍事研究』とか、そういういわゆる専門誌はどういうふうな関係になるのでしょうか。それから、いま顧問をしていらっしゃる『朝雲新聞』とか、こういうのはどういう関係に。

伊藤（圭）　『朝雲新聞』というのは、これはもともと機関紙なのです。共済組合で作っておったのですよね。それを朝雲新聞社というのが独立して作り始めたのが。だから機関紙そのものですね。同じようなので、『海上自衛新聞』というのがあります。業界紙みたいなもの。空は『ウイング』というのがあったけど、今はあるのかどうか知りません。

伊藤（隆）　『ウイング』はあるんじゃないですか。

伊藤（圭）　ありますか。そんなのがありました。

伊藤（隆）　ご自身がいろいろ寄稿を頼まれるということも。

伊藤（圭）　ありました。

伊藤（隆）　ずいぶんお書きになりましたか。

伊藤（圭）　書きました。今度持ってきてもいいですけれども、〔防衛費のGNP比〕一パーセントの問題を書いたりしたことはあります。

伊藤（隆）　そういうのは人に書かせるというのではなくて。

伊藤（圭）　全部自分で書きました。

伊藤（隆）　海原さんもよくお書きになったようですね。

伊藤（圭）　海原さんもよく書きました。海原さんは物凄く正確に書くものだから、よく調べて書いて、旧軍時代の国防の基本方針はこうだというようなことを書いているでしょう。あれは偉いものだと思いますけれども、私はそれほどの熱意がないものだから自分で調べて書くということはあんまりなかったですけれども、自

分の経験があったものですから、一パーセントの問題とかそんなのは書きました。

佐道　防衛庁の方が外部のものについてお書きになるときに、何か。

伊藤(圭)　私の頃は何もありませんでした。今はどうか分かりませんけれども。

伊藤(隆)　「制服」の方はやっぱりなかったのですか。

伊藤(圭)　いや、「制服」の人もないのではないですか。だから割合「制服」の人が、何を書いたという記憶にないのですが、三島(由紀夫)さんのときにかなりいろんなことを書いていました。私は三島さんと交流があったというようなことをいろんな週刊誌に書いたりしていました。べつにそれをチェックしたりはしませんでした。私がいた頃の防衛庁というのは、そういう点は割合に自由でした。施設の中も見せました。今は本当にうるさくなりました。OBもなかなか入っていけないのです。私は新聞記者に、「少し新聞に書きなさい。もっと役所がディスクローズするように書けばいいじゃないか」と言ったら、「いや、それはちょっと書きにくい。新聞社はもっと厳しい」と言うんです。考えてみればそうなんですね。

伊藤(隆)　まったくそうですね。そう言えばどこかに書かれていましたよ。

佐道　新聞社は役所より官僚的だし、もっとクローズだし。防衛関係ですと、堂場(肇)さんですとか篠原(宏)さんですとか、いわゆる大記者というか、仲間から「元帥」と言われているような大物の方がいらっしゃったりするのですけれども、そういう方との付き合いはずいぶん多くなるのですか。

伊藤(圭)　私は比較的にいろんな人と交際しましたけれども、海原さんは特にその堂場、篠原という人をかわいがっていました。長くいたせいもあって。おそらく、あの人たちは海原さんにかわいがられていたので我々は相手にしてくれなかったのでしょうね。ただ私が非常にうれしかったのは、私が広報課長時代のクラブの人が同窓会をやるというので去年やったのですが、それが六十五人集まりました。非常に懐かしかったですね。

伊藤(隆)　広報課長を五年やられたから、向こうはどんどん入れ替わりがあってそれだけの数になるのですか。

伊藤(圭)　いやいや、もっと多いのですよ。もっと多いのですけれども、最初のときに知っている人とあとでは、向こうがお互いに知らないのです。それで、七〇年の前後におった人に限ったのです。そうすると、二年間ぐらいだとみんな知っていますから、それで六十五人です。その前の三年間ぐらいを全部入れたら百人を超しますものね。

佐道　どなたか記者の方が幹事でおやりになって。

伊藤(圭)　記者が幹事でやったのですけれども、おまえの名前を貸せと言うから、いいですよと言ってね。私は何もしないのです。何をやったかと言うと、その会が始まるときに、この会は私がやったのではありませんで、皆さんが努力してやったのですという挨拶だけをしたわけです。そうしたら、あとになって、どうして俺を呼ばないんだと言う人がいて参りました。

佐道　そうやって印象に残っておられる方とか、今でもお付き合いのある方というのはどういう方がいらっしゃいますか。

伊藤(圭)　例えば今の『朝日新聞』の中馬(清福)なんて、彼なんかもクラブにいました。それから亡くなった松下(宗之)さん。『毎日』でいうと、いま盛んにテレビに出ている岸井(成格)、その前の岩見隆夫さん。『読売』は、いま編集局長をやっている老川(祥一)さんがいましたね。

佐道　岸井さんも同窓会に行かれたのですか。

伊藤(圭)　岸井さんは、来ませんでした。

伊藤(隆)　岸井さんなんか、あんまり熱心にならなかったような気がしますが(笑)。

伊藤(圭)　岸井さんはもう少しあとかも知れないですね。

伊藤(隆)　そうですね、まだ若いですものね。

佐道　七二、三、四年ぐらいですよ。

伊藤(圭)　私は、広報課長のときと、防衛課長、局長のときと人が入り混じっているものだから、わけ分からないですよね。

伊藤(隆)　ずっと続けて考えたら、お付き合いになられた新聞記者の数というのは膨大なものですね。

伊藤(圭)　だから本当に、名前は思い出せないぐらいです。

伊藤(隆)　名前の挙がる人ぐらいは親しかったということですね。

伊藤(圭)　ただ、新聞記者というのは、本当に文章で食っていけるという人は少ないですね。新聞記者で現役を辞めたら本当にかわいそうですよ。それまでは何々新聞社を背負ってやっているでしょう。パタッとなくなるわけですからね。それでなおかつ活躍できるというのは。その意味では岩見とか岸井なんて偉いと思うのです。あとは、松下とか中馬みたいに管理職になった人はいいですよ。

伊藤(隆)　文筆で食っていくという人は少ないですか。

伊藤(圭)　少ないですよ。だから、業界紙の編集者みたいになっているんですよ。いいのが、大学の講師とかね。まあ、非常に優秀な人で助教授、教授になったりする人はいますけれども。大学の講師なんていうのは本当に給料が安いらしいですね。

伊藤(隆)　まあ、そうですね。

佐道　身につまされる話ですが……(笑)。新聞ももちろんそうですけれども、さっきの雑誌なんかのことをちょっとお聞きしたいのですけれども、今もあります『軍事研究』という雑誌です。『軍事研究』は小名さんという方がやっていらっしゃいますね。その小名さんはかつて海原さんを誹謗中傷なさって裁判沙汰になったような人ですけれども、「制服」の人なんかの情報はずいぶん詳しかったようですが。

伊藤(圭)　とにかくあの人は人事の好きな人で、『軍事研究』というのも人事が載るものだから「制服」がとても関心を持っていました。

佐道　どんな人なのですか。

伊藤(圭)　どういう人なのでしょうね、私もよく知りません。何回も会っていますけれども、どういう経歴の人で何をやった人かというのは分かりません。

佐道　平気でなかでいろいろ取材をしていらしたのですか。

伊藤(圭)　していたみたいですね。あんまり私のところには来ませんでしたけれども。

佐道　広報課長、つまり自衛隊の外に向けての窓口になるわけですよね。そうすると、何かあったときには広報課が対応しなきゃいけないということになると思うのですけれども。そうすると、庁内で起こっているいろんな情報というのは必然的に広報に集約するというようなシステムというのは。

伊藤(圭)　それは、システムというより、すぐ広報課に来るというわけではないのですね。むしろこちらからアンテナを張っておかないといけないというところがありました。

伊藤(隆)　逆に新聞記者から聞いてしまうということだって起こるのではないですか。

伊藤(圭)　どういうことですか。

伊藤(隆)　庁内のことを、新聞記者のほうが取材してよく知っていると。

伊藤(圭)　そういうこともあるかも知れませんね。私は直接経験はないのですけれども。私は防衛課に長くいたものですから、割合にいろんなところを知っていましたから、何かあるとすぐ電話で訊けば入ってきましたから。

伊藤(隆)　やっぱりそういう場合だって、広報課長としてという

よりも伊藤さんという個人として。

伊藤(圭)　そういう面もありました。これもお話ししたかも知れませんけれども、海上自衛隊が広報で船に乗せて、半日ぐらい航海するでしょう。そういうのに船を出せと言うと、運用課の課長あたりが来て、あんまり広報で使われると訓練ができないというようなことを言ってきました。私は訓練なんか明日やればいいじゃないかというようなことは言えましたね。防衛課において前から知っているから。

佐道　やはり防衛課にいらっしゃったということが。

伊藤(圭)　そうでしょうね。

■広報課の組織と業務

佐道　各幕僚監部にも広報課がございますね。そういうところとの関係とか連絡というのは。

伊藤(圭)　それはしょっちゅうありました。

佐道　何かをやろうという。

伊藤(圭)　それから、大体広報の予算というのは内局の広報課についてくるのです。それを分けてやるようなこともやっていましたから、だから各幕の広報というのは。例えば陸幕で陸幕の映画を作るというようなときにはその広報の予算をまわしてやったりしていましたから。

伊藤(隆)　定期的に会議があるというようなものではないのですか。

伊藤(圭)　定期的に決まってあるというわけではありませんでした。

佐道　こういう方針で今年は広報活動を行うとか。

伊藤(圭)　それはあるのです。年に一回、予算が成立すると、各幕の広報の責任者と、「陸」でいうと五つの方面総監部の広報の担当者とか、そういう主だった人たちが集まって広報の会議をやっていました。例えば、今年は陸幕は映画を作り、パンフレットを作り、テレビをこうやるとか、そんなことをやりました。

伊藤(隆)　それは全部でですか。

伊藤(圭)　「陸」「海」「空」一緒にやりました。

伊藤(隆)　それを司宰なさることになるわけですか。

伊藤(圭)　ええ。大体官房長が来て最初に挨拶して、あとを引き継いで広報課長が司会をするのです。

伊藤(隆)　広報課自体が、各「陸」「海」「空」ではなくて、映画を作るとかビデオを作るとか。

伊藤(圭)　それもあるのです。

伊藤(隆)　だけど、実際にそういうものを作ったりするのは、〔外部〕委託ですね。

伊藤(圭)　もちろんそうですね。

伊藤(隆)　広報課というのはどのくらい人数がいるものですか。

伊藤(圭)　定員は十人ぐらいでした。だけど、「陸」「海」「空」から派遣自衛官というのがいましたから、私の頃は二十五人ぐらいはいたのではないですか。

伊藤(隆)　それだけ業務があるということですか。

伊藤(圭)　そうです。新聞記者のクラブがあるでしょう。この世話だって三人ぐらい要るわけですから。例えば大臣なんかの記者会見があるでしょう。そういうのをメモなんかをとらなきゃいけないでしょう。そういう報道担当というのもいるわけです。それから、クラブでお茶なんかをやる女性もいましたからね。そんなのがいて、結局、クラブ担当が三人ぐらいいたのではないかな。報道係とかでしたか。

佐道　クラブのお茶というのは、記者が勝手にやるのではないですか。

伊藤(隆)　それが役所におんぶなんだ。

伊藤(圭)　全部おんぶですよね。

伊藤(隆)　場所だってそうでしょう、電話代もそう。それはちょっと問題があるのですよ。

伊藤(圭)　しかも、物凄く閉鎖的で、ほかの外人の記者を入れないとかね。

佐道　外国からの取材の申し込みというのは。

伊藤(圭)　ありました。

佐道　それは、アメリカとか。

伊藤(圭)　そうです。大体通訳を連れてきていました。

伊藤(隆)　向こうが連れてくるのですか。

伊藤(圭)　向こうが連れてくる。

佐道　それはやはり、今の自衛隊の状況を見たいというのが多いのですか。

伊藤(圭)　ありましたね。三次防なんかができると、どういう内容だとかいうので来たり。いろんなところで取材する一環として来るのでしょうけれども。

佐道　統幕にも広報がありますか。

伊藤(圭)　統幕は広報というのは特になかったと思います。五つの室がありまして、一室というのが庶務関係をやっておって、そこで広報なんかをやっていたのではないかな。一室というのが総務関係、二室が情報、三室がオペレーション、四室がロジスティックですね。五室というのがあったけど、五室というのは何だろうな。

佐道　統幕にまであると、役割分担はどうなっているのかなと。

伊藤(圭)　広報ですか。役割分担というのは特に……、「陸」は「陸」のことをやっているし、「海」は「海」のことをやっている。それだけですね。

佐道　統幕はみんなの上に乗っかっているのですか。

伊藤(圭)　だから特に広報というのはなかったですね。一室で総務班みたいなところでやっていたのではないでしょうか。

伊藤(隆)　実際は広報課長が統括をやるのでしょう。

佐道　その広報課長は、普通のいわゆる広報だけじゃなくて、報道とかそういうのも全部。

伊藤(圭)　そうです。全部をやっているのです。

伊藤(隆)　実際、三十人ぐらいいて、係を作っているのですか。

伊藤(圭)　私のときには係を作るほど多くなかったものですから。報道を担当しておるのが二人ぐらいおって、あとはクラブの部屋にいる者とか、映画を担当している者とか、雑誌なんかの相手をする者もいました。雑誌からの問い合わせなんか。そんなもので、特に何班何班というのはなかったのですけれども、今は班みたいなものを作っているみたいですね。人数が増えたのですね。三十五人か四十人ぐらいいますから。

伊藤(隆)　やはり課長自身がかなり動き回らないといけない。

伊藤(圭)　広報というのはまさにそうでした。それから、これも海原さんの教えなのですけれども、役所の仕事はとにかく〝課長〟が中心だと言うのです。だから課長が積極的に動けというようなことは言われていました。

佐道　やはり記者の人とお飲みになる回数はずいぶん多かったですか。

伊藤(圭)　もちろんありました。あったのですけれども、私は酒はあんまり飲めないものですから、水を飲んで付き合っていました。やはりきついものでしたね。夜なんか、向こうは十時になっても十一時になっても平気でしょう。翌日出てくるのが十時頃ですからね。こっちは、帰って、翌朝また九時には出なきゃいけないでしょう。やはり相当ハードな仕事でした。

佐道　それを五年間ですね。体は大丈夫でしたか。

伊藤(隆)　まあ、水を飲んでいれば大丈夫でしょうけれども、本当に酒で付き合ったら大変なことですよね。

伊藤(圭)　それはそうです。だから、酒の好きな人だったら体を壊すでしょうね。

佐道　前回のお話にもありましたが、七〇年安保があったので五年間というようなお話でしたが、六七年、六八年ぐらいから、「七〇年の危機」とか言われていて、そういうことがあったのだと思うのですけれども。これはやはり、七〇年安保に向けて、防衛庁のなかでも広報活動をもっときちんとしなければいけないということもあったのですか。

伊藤(圭)　それはありました。特に六〇年安保のときにあの騒ぎになったものですから、積極的に新聞社あたりも付き合って、まずマスコミの理解を得るということが非常に大事だという時代でした。

伊藤(隆)　六〇年安保のときは、国会の答弁にもあるように、わりと〝ワッショイワッショイ〟。せいぜい南門も突き破ってという段階でしたけれども、七〇年安保が近くなってくると今度は〝爆弾〟になってくるでしょう。

伊藤(圭)　そうそう、全学連がね。全学連が騒いで、新宿の騒動があったでしょう。あの前に防衛庁に来ているのですよね。十時頃。それから新宿に流れていって、あの騒ぎになる。防衛庁に来たときは、赤坂の警察官が来て門のところを守っていました。しかし中に入ってきましたので、警察が排除してくれましたけれども。

佐道　その警察なのですけれども、防衛庁の方、海原さんもそうですけれども、警察から来られている方がけっこういらっしゃいますね。

伊藤(圭)　とにかく防衛庁というのは予備隊から始まったでしょう。自衛隊の初期の頃までは、ほとんど内務省系の人が中枢にいました。ただ、経理局長は大蔵省から来ていて、会計課長は大蔵省から、装備局長が通産、装備局の管理課長が通産、そんなところは大蔵と通産がやりましたが、あとは大体内務省の人です。

佐道　六〇年安保以来、さっきの杉田陸幕長の間接侵略の問題ではないですけれども、治安とかテロとかそういう話があるときに、警察との連絡とか関係とか協議とか、そういうのは実際にどうなのですか。

伊藤(圭)　実際は、協定はあったのですけれども、警察との間でそういったことで打ち合わせなんていうのはほとんどありませんでした。だから、そこで杉田さんの間接侵略に対する備えというのがおそらく出てくるのだと思うのです。というのは、レーダーサイトに暴徒が来たら、どうやって防いでいくか分からんわけですね。警察はもちろんできないでしょう。そうなってくると、付近の自衛官が行って陸上自衛隊が守る以外にないというので、それで杉田さんなんかは考えたのではないでしょうか。レーダーサイトなんていうのは山の上にあるのですからね。普通の基地なんかはフェンスがあるからいいわけですけれども、ああいう山の上になるとどうにもなりませんから。

伊藤(隆)　そういう幾つかのウイークポイントがあるわけですね。向こうが狙えば大変なことになる。守るには非常に守りにくい。

伊藤(圭)　そういうことです。だから、どこの陸上自衛隊はどこのレーダーサイトを守るとか、そういうのがいわゆる間接侵略に対応する計画で「陸」は持っていたと思います。

伊藤(隆)　持っていても、実際に暴徒に襲われたときに、例えば銃を発射するなんていうことはできないわけでしょう。

伊藤(圭)　いや、治安出動のときはできるのです。できるけれども……。

伊藤(隆)　ちゃんと上からの命令がないとだめなのでしょう。

伊藤(圭)　そうそう。そのほかは緊急避難と自己防衛ですか、そのときはいいということでした。

伊藤(隆)　実際問題、例えば防衛関係の施設に爆弾を積んだトラックに突っ込まれたら、ちょっと手の施しようがないという。

伊藤(圭)　それはありましたよ。例の反戦デーのときに、防衛庁の横の門のところにトラックで突っ込んできたのがありました。それは門で止まりましたけれども。

佐道　実際に自衛隊の武器弾薬を盗んでやるというようなことが想定のなかに入っていてもおかしくないと思いますしね。

伊藤(圭)　そうですよね。

伊藤(隆)　やっていたんですよね。実際、狙ったわけだから。

伊藤(圭)　治安出動訓練を新聞記者に公開したのです。あれが七〇年安保の前の年ですか。これはやはり迫力がありましたね。新聞記者がびっくりしていました。戦車が出てくるのです。そうするともう、みんなびっくりしちゃって。戦車といっても、アメリカからもらった軽戦車です。M24という小さなものですが。それも公開したのです。あの頃はとにかく全学連が騒いでおったものですから、世論もそういうことについてはあんまり抵抗感がありませんでした。

佐道　広報課長の時代ですか。

伊藤(圭)　広報課長のときですね。

伊藤(隆)　確かに新左翼が爆弾をということだから、六〇年安保のときに自衛隊を出す出さないという問題になったときとはちょっと違う。

伊藤(圭)　まったく違いましたね。六〇年安保のときは、岸さんあたりはとにかく自衛隊を出せと言うしね。

佐道　だけど、空気的には一般では自衛隊について少し理解が深まっていたということでしょうか。

伊藤(圭)　一般的に自衛隊への理解が深まっていたというよりは、新聞社が安全保障の問題について関心を持って、研究を始めたということでしょうね。六〇年安保のときにはまったくそれがありませんでしたから。だから、新聞そのものもあんまり非難するような書き方ではありませんでした。一般の人もそういうことだったのでしょうね。

伊藤(隆)　確かにあの年の世論調査もそういう結果が出ていたのではないですか。

河野　やはりこの時期で、七〇年安保の頃から安保効用論のような議論がかなり出てきて、間接的にはむしろ防衛庁にとっては有利な環境になってきましたね。

伊藤(圭)　だから、ある意味では私なんかいいときに広報課長をやったような気がするのです。何をやってもあまり問題にならないのですね。今ならちょっと問題になるかもと思うのは、例えば子どもを戦車に乗せてやったとか、装甲車に乗せてやったりしましたからね。

伊藤(隆)　まあ、潜水艦に乗せたことが(笑)。

伊藤(圭)　潜水艦じゃなくて、阿川(弘之・尚之)さんとか曽野(綾子)さんなんかも魚雷艇に乗せて走ったのです。みんな喜んでいましたものね。

伊藤(隆)　いや、最高でしょう。私も乗りたいです。

佐道　本当に私も潜水艦に乗りたいと思います。時間になりましたので、また途中ではあるのですけれども。

伊藤(圭)　この次にまた、この広報課の仕事というのはまだいろいろあるのです。申し上げたいことがたくさんありますから、それをまた今度整理してお話しします。今日は、こういうのをお話ししたいというメモを忘れてきてしまったものだから、申し訳ありませんでした。この次に用意するものはありますか。

佐道　そのメモと、用意してあります質問などもご覧いただいて、また併せてお答えくだされば と思います。

伊藤(圭)　はい、分かりました。

佐道　どうもありがとうございました。

〈以上〉

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第6回

開 催 日：2001年4月17日（火）
開催時刻：午後3時30分
終了時刻：午後5時30分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

河野康子（法政大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■〝報道〟よりも〝広報〟を

伊藤(圭)　始めましょうか。このあいだご質問いただきました中で、おそらく今度は四番と五番ですか。広報課長時代が中心になるのですけれども、五年もあったものですから、いろんな問題がありますので少し長くかかるかも知れません(以下【資料3】参照)。

このあいだお話ししたのを読み返しましたが、特に訂正するような内容はありません。ただ、海原(治)さんのオーラル・ヒストリーの中に、『日米安保体制』という映画は松竹がとても喜んで上映したような話があるのですが、実際は違うのです。一般の映画会社では、ああいうものはなかなかやってくれませんでした。たまたま僕の後輩が映画担当の役員をしていたものだから、「おまえ、やれ」と言うのでやってもらったのです。

ところが、あの映画はあとになってずいぶん役に立っているのです。私は一九六七年、昭和四十二年にペンタゴンに招待されて行きましたが、そのときにお土産に持っていったのです。それが非常に喜ばれたということ。それから、僕から三代ぐらいあとの広報課長が、これはまた面白い男で、ソ連に「これ(『日米安保体制』)をやるから何かよこせ」と言って、ソ連の『ドニエプル演習』という映画で、核兵器なんかを使うところもあるのですが、その映画と交換したりなんかして、結構役立っているのです。いろんな面白いことがあったなと思いました。

まず広報課長になったときの抱負を聞かせろと言うのですけれども、就任したときには抱負なんていうのはなかったのです。だって私は当然二年間は施設庁の課長でゆっくりしていると思ったら、突然十ヵ月で帰って来いと言われたでしょう。だからべつに抱負も何もなかったのです。

ただ、来てから一ヵ月ぐらいたって、とにかく戦時中の軍隊には、〝報道〟はあったけれども〝広報〟という概念がないということを感じました。これに対してどうするかということを考えました。そんなことで、これからどうしようかと思いましたときに考えたことがありますので、このご質問のなかで、一、二ご説明しておきたいと思います。

六番に、安保の延長問題について外務省といろいろ話したことがあったかというのですが、私は実際にこれについては外務省と話したことはないのです。ただ、外務省が「日米安保条約の必要性」というようなパンフレットをたくさん作っていました。ところが外務省はそれを配る手段がないわけですね。それを各県の地連(自衛隊地方連絡部)で広報資料として配らせました。そういう協力はいたしました。そういう意味では外務省との協力関係はありました。

七番で、武器輸出三原則で困ったなという感じはあまりなかったのです。私は直接交渉にあたっていないのだけれど、ただ、武器が高くなるなという認識はありました。それぐらいでした。

八番目の非核三原則ですね。このときには、「持ち込ませず」というのは、持ってきて、核兵器を日本でオペレーションできるような状態にするというのが「持ち込む」だというふうに思いました。だから、船が来てすぐに出て行くなんていうのは、「持ち込み」だとは当時は思っていませんでした。

伊藤(隆)　これは日本語の問題ですね。

河野　それは「通過」というふうに認識していらしたのですね。

伊藤(圭)　そうです。そのあとも、私は防衛局長の頃だと思うのですけれども、三木(武夫)さんが、領海を核兵器を積んだ原子力潜水艦が通っても、これは持ち込みにはあたらないという答弁はしているのです。港に来るときに、核弾頭を置いてくるとかなんとか説明もしていましたけれども、とにかく港に寄るのが持ち込みになるとは思いませんでした。

九番の松野（頼三）さんですね。松野さんは、当然私も海原さんの部下だったものですから松野さんに対してあまりいい印象はないのです。兵器の国産化なんかで、彼は防衛産業に影響力を及ぼそうとしたのは事実みたいです。とにかく兵器を一律十パーセント予算を削ると言っておいて、あとでまた五パーセント戻すというようなことを言ったりなんかして、防衛産業を自分の勢力下におきたいという気持ちがあったのですね。そんな感じはありました。

伊藤（隆）　国産化論というのは大体そういう背景が一般的にあるのではないですか。

伊藤（圭）　あるんじゃないですかね。例のＢＡＤＧＥ（自動警戒管制組織）を作るときに、生田（宏一）という政務次官がいました（在任昭和三十七年七月二十七日～三十八年七月三十日）。この人がずいぶん動いて、あちこちから金をもらったというのでだいぶ問題になったことはありました。松野さん自体については、新聞記者の話で、かなり金権政治家だという印象はありました。ご存じかどうか知りませんけれども、韓国からの海苔の輸入の問題なんかでずいぶん彼は金を集めたというような話がありました。もう一つは、特に新聞記者のなかでは有名だったのですけれども、女癖が悪いというのです。

伊藤（隆）　ありそうな話ですね。

伊藤（圭）　お金に対して非常に執着があったというのは、ご存じのように、あとで海部（八郎日商岩井元副社長）という人が五億円をやっているでしょう。それを国会でも証言しているわけですよね。

ところが最近思うのは、あの人が今や政治のご意見番みたいな格好で盛んに出るでしょう。新聞記者に言ったんですよ。「おかしいじゃないか、あんな人にどうしてそんな意見を聞くんだ」と言ったら、「割合にあの人は思ったことを何でも言ってくれる」と言うのです。ところが後藤田（正晴）さんは、あるところまで行くとやはり自制するところがある。そういう意味では使いやすいのだということを言っていました。

それと、変な話ですけれども、今の若い新聞記者のなかには、彼が五億円もらったと国会で証言しているのを〝潔い〟という感覚で受け止めている者がいる。ところが、これはご存じかも知れないけれども、彼が国会で証言したときには事件は時効なのです。だから彼は堂々と言ったんでしょうね。田中（角栄）さんの場合には受託収賄だから時効じゃなかったんです。それで引っかかっちゃったわけでしょう。そこら辺も知らないで今の若い人は松野さんを評価するところがあるというような感じがいたします。

伊藤（隆）　いまマスコミで松野さんはもてていますね。

伊藤（圭）　もてているでしょう。言うことが面白いというのですよね。

最後の十番目のところですね。日米安保体制の映画のことです。この映画なのですけれども、作ったのは確かに私なのですけれども、「日米安保体制のことをやれ」と言ったのは海原さんなんです。それを受けて私がやったのですけれども。そのときにいろいろ米軍の協力を求めて、当時非常に珍しいフィルムももらったりして作ったわけなのです。

この沖縄返還については、これは防衛庁の内部というより、私は当時広報課長で返還の前の時代なのですよね。「佐藤・ニクソン会談」で七二年の返還が決まった頃は広報課長なのです。実際の返還のときには防衛課長なのです。返還のとき「久保・カーチス協定」なんかには私も関係したのですけれども。その頃関心を持っておったのはやはり新聞記者なのです。きょうの説明のなかにも出てまいりますけれども、返還が決まって間もなく記者クラブと沖縄に行ったのです。そのときの話なんかもあとでいろいろしていきたいと思っております。

もう一つ申し上げておきたいのは、海原さんのオーラルを全部

読んだのですが、私は大体九割は話を聞いていて知っているのです。だから、ずいぶん長い付き合いだなという印象があります。それから、とにかく真面目な人だと思っていたけれども、「これぐらい真剣に考えておった人か」と思ってびっくりして、よく相当いいかげんな私なんかと長い間付き合ってくれたなという印象を持ちました（笑）。これは接せられてお分かりだと思うのですけれども、人に対する好悪の情というのが激しい人でして、嫌な人は徹底的に嫌なんですよ。いい人は割合にいいのですけれども、それがあんまり長続きしない（笑）。だから私の経験からすると、前にもお話ししたかも知れませんけれども、最初の半年はとにかくしょっちゅう「海原、海原」ですよ。大臣がね。あとの半年はもう全然嫌っちゃうのです。というのは、やはり政治家ですから、だんだんいろんなことを知り始めると自分も何かやりたいわけです。そうすると、「そんなことはいけません」とかなんとか言うものだから、それでだめなんですね（笑）。そういうようなことがありました。

もう一つあれを全部読んでみて思いましたのは、海原さんの日本の技術に対する評価というのはやはり二十年か三十年前の評価ですね。あのあとの日本の技術の進歩というのについては、彼はとてもフォローしきれていないなという印象があります。例えば、ファントムを国産しますときに、あれを作ったのは三菱重工の工場なのですけれども、日本の航空機の技術者がとにかく驚いたと言うのです。設計図を見たら実にずさんだと言うのです。こんなものでよく作っているなという感じがしたと、当時言っていました。これは四十四年ですから、〔一九〕六九年ぐらいですか。その頃はもう言っていました。だからそういう意味では、十年間の空白があって国産を始めたので、できるはずがないですよね。やっとヨチヨチ歩きの頃を彼は見て、それがずっとまだ尾を引いています。そこに私は必ずしも同意できないところがありました。現に私は防衛局長のときに、F15を国産する際に、「とにかくアメリカで作るところも残しておいてくれ」とずいぶん頼まれましたから。ということは、〔アメリカは〕全部作られたらかなわんという感じだったのです。それから、さらに今のFXの国産化の問題でF16をもとにして作るのが今のF2ですね。それを最初から国産するというのに対してアメリカが反対しました。今、手嶋（龍一）というNHKのワシントン支局長をしている人が書いていますでしょう（『ニッポンFSXを撃て』）。だから、それだけ〔国産化が〕育ってきているというのも事実だと思います。

それで、まず広報課長になったときの抱負でもないですけれども、最初に思ったのは〔防衛庁には〕〝報道〟しかないということ。そこで、一ヵ月か二ヵ月たった頃にまず考えましたのは、とにかく自衛隊の実態をいろんな方法でディスクローズしようと思ったのです。それに対して海原さんは全面的に賛成です。ところが、「陸」「海」「空」の「制服」の人、そのほかの内局の連中でも、やはりあんまりやりたくないというのも多かったです。だけど私が積極的にやったのは、例えば博覧会に対していろいろ協力する。これは私も忘れているようなものがずいぶんありましたけれども、もうずいぶんやっているのです。高知とか姫路とか福島とか、小田急の遊園地でもやりましたし、栃木あたりでもやっているのです。ずいぶんやっているのですよね。

伊藤（隆）　よくそんなに博覧会があったものですね。

伊藤（圭）　あの頃は万博の前でしょう。いわゆるイベントというのは博覧会ぐらいしか地方では考えつかないのでしょうね。それもなるべく安くあげたいというので、自衛隊あたりに頼むと、メインイベントみたいなのは全部ただでやってくれる。なものだから声もかかったし、こっちも売り込んでいきました。だからそういう意味では今よりもやりやすい時期ではあったのです。

それから、私も積極的に話しに行きました。女性は絶対に自衛隊反対なのです。これはあたりまえなのですね。というのは、とにか

く女の人は大半戦争で生き残っているわけです。東京なんかは別ですけれども、ところが、亭主とか息子とか親父が戦争で死んでいるわけです。そうすると、「戦争なんて嫌だ」と思いますね。これはあたりまえだと思うのです。それで、女の人に説明するのがやはり一番難しかったです。それでもなるべくそういうところも行きました。映画の話をしながら、先生方はご存じかどうか知りませんけれども、あの頃、ジョン・フォードの映画だったかな、クエーカー教徒で奥さんが南北戦争を否定するのですけれども、その奥さんが、南軍の兵士がアヒルを捕まえようとするのを箒で叩くんです。そういうようなところなんかがあって、最後の抵抗だけは必要だというような話をしたこともあります。そんなことでいろんなことをやりました。

テレビにも積極的に出ました。それからもう一つは、いま盛んになった音楽祭り。あれは私の何年か前から代々木にあった東京体育館でやっていましたけれども、これがまた音楽祭りでもなんでもないのです。都民の音楽祭りといいながら、音楽隊が出てきて、長官とか幕僚長に向かって敬礼して、演奏するだけです。なんだか都民のためのじゃないじゃないか。あれを全部やめろと言って、そして全部やめて、バラエティー方式でやったんです。それを始めてからだんだん人気があがりまして、いろんな女優さんとか、古賀メロディーの…。

伊藤(隆)　古賀政男。

伊藤(圭)　彼に来てもらって儀仗隊の敬礼を受けてもらったり、それを音楽祭でやるわけです。そういう意味では楽しかったです。

伊藤(隆)　いま凄い人気ですよね。

伊藤(圭)　そうなんですよね。日劇ダンスチームが当時ありまして、日劇の舞台にチアガールを出したことがあるのです。当時はまだ婦人自衛官というのはありませんでしたけれども、松戸に落下傘の整備などをする女子職員がおりまして、そういう女子職員が旗を持ってやる今のチアガールみたいなことをやっていた。それを日劇ダンシングチームの演出家で、名前を忘れましたが、その人が来て出演してくれと言うので、一緒に舞台でやったりしたことがありました。

河野　そうすると、そのチアリーダーの訓練もあらかじめその女子職員に受けさせて、できるようになっていたのですか。

伊藤(圭)　それは松戸の補給所でやっていたのです。それをたまたま連れてきて音楽祭りでやらせたら、それを見に来ておって、あれはいけるというので日劇の舞台に。

佐道　松戸の部隊でやっているのですか。

伊藤(圭)　部隊の女子職員がやっておったのです。それを音楽祭りに連れてきてやって。

佐道　私の家の近くです(笑)。

■ペンタゴン訪問

伊藤(圭)　それが一つですね。もう一つ私が心がけたのは、在日米軍との協力関係を強めたわけです。『日米安保体制』を作るときの経験なんかもあったものですから、とにかく米軍との協力関係を強化しようと思って、非常に努力しました。そんなおかげで、(昭和)四十二年、(一九)六七年一月に私はペンタゴンから招待されるわけです。

ペンタゴンに招待されたときが、これがまた凄いのです。海原さんにいつも言われるのですけれども、「俺と間違って呼ばれたのじゃないか」と言うのです。当時、私はまだ広報課長ですから、外国に行くのはエコノミークラスですね。ロサンゼルスに着きましたでしょう。そうしたら、向こうから迎えに来ているのが中佐のエスコート・オフィサーなのです。それで、そこからは専用機なんです

よね。二週間アメリカ中をその専用機でまわりました。

佐道　凄いですねぇ。

伊藤(圭)　それで、そのエスコートオフィサーがホテル代から何から全部払ってくれるのです。だから自分で使ったのは、朝起きたときのベッドの、あの頃は二五セントでしたが、二五セント置くだけでした。土曜、日曜になると休みになっちゃうでしょう。そうすると、今度はいろんなところへ遊びに連れて行くわけです。それも全部向こうでもってくれました。ボルチモアに行ってプレイボーイクラブなんかにも行って。あれもペンタゴンの金で連れていったのかどうか知りませんけど(笑)。バニーガールなんかがいて、あの頃はバニーガールなんて初めてですよね。バニーガールというのは面白いですね。写真を写しにくるわけです。バニーガールと一緒に撮ってくれる。ここに座って撮ってもらおうと言ったら、私は座るのは許されていない、立てというのですよね。それで立って撮っている写真なんかがあります。そんなとても楽しい思いをしました。

　そのエスコートの人が在日米軍におった二世の人で、これは今でも付き合っていますけれども、その人がずっと。ロスからワシントンに行って、それからノースカロライナにある八二連隊という落下傘部隊を訪問しました。行ったら、落下傘の一個中隊が落下傘降下を見せてくれました。

佐道　凄いですね。

伊藤(圭)　そういうことはめったにないものだから、部隊の家族をみんな招待しているのですね。そうすると、自分は写真機を持っているけど、自分では撮れません。だから自分で撮った写真が全然ない(笑)。そんなことがありました。

　インディアナポリスに広報学校がありまして、そこに行きました。そうしたら今度は、その広報学校の校長がアメリカの兵隊と結婚した日本人の奥さんを四人か五人呼んでおいてくれたのです。あなたが来られるのでこういう人たちを呼んでおきましたと言って。それで三十分ばかり話しましたが、そのときに私がかわいそうだなと思ったのは、その頃、アメリカ人の奥さんになるのは日本では大変なものでした。とにかく生活が豊かになるわけです。ところがアメリカに行ってみたら、兵隊の下士官の家庭なんていうのは貧しいわけです。だから、結婚してから十年になるとか言っていましたけれども、「一度も日本に帰ったことがない」と言っていました。

　コロラドスプリングスに行ったときなんかは、ホテルに泊まって食堂でご飯を食べていたら、メイドが、私が来るのを新聞で見たというので話しかけてきました。この人は、かわいそうに行ってから離婚しているのですね。

伊藤(隆)　日本人なんですね。

伊藤(圭)　日本人です。いわゆる戦争花嫁ですね。離婚して、帰る金もないものだから働いているんだと、そんな人にも会いました。

　今のデンバーに行ったときに、『デンバーポスト』というところの編集長がビル細川という二世の人でした。この人と会っていろいろ話したんです。そのときに私は聞いたんです。「アメリカ人というのは我々戦争したものに対してよくしてくれるけど、どうしてなんだ」と聞いたら、彼が言っていましたのは、アメリカ人の性格は、物凄く嫌っている人に対して、あることがきっかけになってやたらに好きになると全然変わっちゃうのだそうです。戦争中は日本というのは憎いと思っていたけど、戦争が終わってみたら、結局ちゃんとしているのは日本だけだというのですね。どこの国に援助したって、全部お金がどう使われているか分からない。日本だけは立ち直っているというのでどうも日本が好きになったみたいだ。そんなことを言っていました。いろんな面白い話を聞きました。

　当時私のカウンターパートでありました在日米軍の広報部長と

いうのは、最初はフランクという空軍大佐、そのあとはオーディックという空軍大佐です。この二人とも、除隊するときに日本の勲章をもらってやったのです。勲三等。ところが広報部長で勲章をもらったのはこの二人しかいない。あとは誰ももらっていないのですよね。そのあと僕が行ったときに、フランクが感謝するわけです。「どうしたんだ」と言ったら、実は、このあいだ天皇陛下が来られたときのレセプションに招待されたと。勲章をもらっていると招待されるわけですね。それで喜んじゃって、それ以来ずっと付き合っていました。去年亡くなりましたけれども。

このフランクという大佐がまた面白い人で、在日米軍の広報部長をやって、その次に、これはコースなのかどうか知らないけど、北米防空軍の広報部長になるのです。

伊藤(隆) どこですか。

伊藤(圭) 北米防空軍ですか、コロラドスプリングスにある。そこの広報部長になって、そこでリタイアするのです。そのあと、カリフォルニア大学、UCLAの広報部長に再就職するわけです。

伊藤(隆) ほお、大学のですか。

伊藤(圭) さらに凄いのは、そのあと彼はネパールの大使になるのです。

河野 アメリカの大使ってそういう人事がありますね。

伊藤(圭) それはどうしてかというと、UCLAの理事長というのがレーガン大統領のスポンサーなのですね。それで、フランク大佐というのは広報部長で非常によくやってくれた。それから、日本にいるときも非常に日本人とよくやったというので、その理事長がレーガンに電話するわけです。こういう面白い男がおるけれども大使に使ってみないかと言ったら、分かったと言うので、ある日、ホワイトハウスから電話がかかってきた。いま空いているところがネパールしかないんだけどいいかと言われて、いいと言ってネパールに行くのです。そのときにそこにある赤坂プリンスホテルに泊まるわけです。私に電話がかかってきて、会いに行きました。大使になったというのでとても喜んでいました。そんな人事もあるんですね。

伊藤(隆) アメリカというところはね。日本じゃあ、考えられない。

伊藤(圭) そんなことで米軍とは仲良くしました。

佐道 交流を深めたということだったのですけれども、具体的にはどういうことを主にされたのですか。パーティーを開いたりとか。

伊藤(圭) パーティーを開いたというよりも、むしろこっちが呼ばれることが多かったです。それから、向こうが、例えば六九年の五月に沖縄に記者クラブを招待するのです。まだ返還前ですね。そのときにクラブの人と一緒に行っていろいろ交流した。それから七〇年の四月には米軍の招待で韓国と台湾に行くのです。そんなことをよくやってくれました。

その代わりに私もやったのは、アメリカのDOCAというグループがあるのです。ディフェンス・オリエンテーション・カンファレンス・アソシエーションの頭文字をとって。これはどういうグループかというと、全米で千七百人かしかいないのです。国防総省ができたときに、「陸」「海」「空」で、第二次大戦が終わって、結局、米軍が軍隊の存在意義というものを国民に知らせたいと思った。そしてそういう外郭団体を作ったのですね。入るのはなかなか難しいのです。いろんな条件があって、定員があって、退会者がないと入れないのです。それで、年に一回ヨーロッパに派遣している米軍の基地を訪問したり、極東の基地を訪問したり、そういうことで来るわけです。日本に来たときには、自衛隊のYS11の長官機で、名古屋に行ったり大阪に行ったりしたのです。そういうときにはこっちでも防衛懇話会がパーティーをやって交流を深め、六九年には防衛懇話会の人たちがペンタゴンに招かれるわけです。

伊藤(隆)　防衛懇話会とペンタゴンの招待で米国訪問を。

伊藤(圭)　これは六九年ですね。来たときに私が案内したお返しみたいな格好で。それで、交互に相手を呼ぶようになりました。それはかなり続いたけど、最近はもうなくなったかも知れませんが、そういうこともやりました。そういう意味でお互いに理解を深めるという努力はしました。

伊藤(隆)　広報課長時代に二回アメリカに行っているのですね。

伊藤(圭)　そうです。二回アメリカに行ったのです。一回は、まったく一人で行って、海原さんが間違えたんじゃないかというぐらい。

佐道　うらやましかったのでしょうね(笑)。

伊藤(圭)　本当にありがたかったのは、まず行ったら、インビテーションオーダーかなんかを見せてくれて、アメリカ国内の電話はどこへかけてもただだった。それから、洗濯は全部ただだった。だからホテルに着いたらハンカチまで洗濯に出したんです。全部ただなんです。洗濯がただというのはアメリカではありがたいですよね。だから、自分で洗濯なんて、全然しなかったですね。

佐道　楽ですよね。

伊藤(圭)　食べるものは全部ただでしょう。本当にあのときは、タバコ代とベッドのお金だけでした。あの当時、今から三十年前でしょう。一日六十ドル使っていいというのがきているんですよね。六十ドルというのは大変なものですよね。

佐道　まだ外貨の持ち出し自体が。

伊藤(圭)　制限がありましたからね。確か、最初に行った頃はまだ三百六十円の頃ですね。だから、そういう意味では非常に楽しい旅行をいたしました。

伊藤(隆)　これは出張なのですか。

伊藤(圭)　これは出張でした。向こうの招待なのですけれどもね。だから出張旅費ももらったなぁ(笑)。

佐道　いろんな意味でよかった(笑)。

伊藤(圭)　ただ、アメリカのメーンランドに着くまでと帰りは日本の負担なんです。

佐道　向こうに着くまでは一応規定でエコノミーで行かれて、一歩降りたら全然違うという。

伊藤(圭)　本当に凄いものでしたね。ずっとまわって最後にロスに帰ってきたでしょう。そうすると、ほかの旅客機は全部ホールディング(待機)ですよ。インディアナポリスなんてあんな田舎に行くと、飛行機が着いた途端に赤い絨毯ですよ。いやあ、凄かった(笑)。

伊藤(隆)　空前絶後じゃないですか。

伊藤(圭)　帰ってきて当時の三輪(良雄)次官にこうだったと言ったら、「俺が行ったときより待遇がよかった」って。アメリカの面白いところは、私がペンタゴンに行ったら、そのときのトップがマクナマラ長官でしょう。それから次官がバーンズなんです。あとで国務長官になったバーンズね。その次がシルベスターという広報担当の次官補なんです。だから三番目なんです。この人がワシントンで一週間付き合ってくれましたから。

まず行った翌日かなんか、朝七時に来てくれと言うのです。七時に行くと、ペンタゴンの中の次官補以上の食堂というのがあるんですね。アメリカは階級が厳しいですね。そこに行って朝ご飯を食べて、それから九時頃から朝の打ち合わせがあるんです。それは、次官補の部屋で主だったスタッフが十五、六人集まるのですね。その日に全世界で、当時はもうベトナム戦争が始まっていましたから、アメリカ軍に対するいろんな新聞記事、ニュースになっているのを全部報告させるわけです。それで、それに対してどういう対策をとるか検討するのです。私が行った日にはちょうど、ベトナムに女性のアメリカの記者が行って批判的記事を書いたが、もう少し様子を見ようというようなことを言っていました。そういう会議

にも出してくれました。

その前だったかな、そのあとだったか忘れましたけれども、スピーチをすることになり、広報担当の人たちが三十人ぐらい集まりましたかね、そこで話をしました。その原稿は日本で作っていって、海原さんもよく言う阿嘉さんという二世の人がいましたから、その人に直してもらって、それをもとに話しました。そんなことで非常に大事にしてくれました。

やはり国防次官補というのが偉いと思ったのは、私が行った翌年に調達実施本部の本部長が行って、調達関係の次官補に会いたいと言ったら、べつに用がないからって断られているのです。だからやっぱり次官補に招待されるというのは大変なことなんですね。

佐道　そうですよね。

伊藤(圭)　非常に面白いことがありました。

伊藤(隆)　それは、海原さんはうらやましかったろうな。

佐道　うらやましがったでしょう、きっと。

伊藤(圭)　だから最初はいろいろ言われましたよ。

河野　そうですか(笑)。

■芸能人と交流する

伊藤(圭)　それが米軍との交流ですね。それからもう一つやりましたのがマスコミに対する協力ですね。それと、芸能関係に対する協力。これは非常に楽しかったのですけれども。

まずマスコミに対しては、〔記者〕クラブの人と親しくするというよりは、クラブの人が欲しいと思うような情報を欲しいと思うときになるべく与える努力をしました。これは非常に努力しました。そういうことでクラブとの信頼関係というのはある程度ありました。それから、各社の論説委員との懇談会を毎月一回やりました。論説委員というのは社説を書いたりしますから、そういう人たちにいろいろ説明したりなんかしました。それから、各新聞社の政治部長会と社会部長会に働きかけまして、年に一回ずつ、社会部長と政治部長を部隊視察に連れて行きました。それから、当時は各新聞社が七〇年安保に備えていろいろ安全保障問題研究会みたいなものを作っていましたから、それに対しては積極的に協力しました。

これは私もはっきり記憶にないのですけれども、新聞を見れば分かると思いますが、『朝日新聞』が一番最初に自衛隊の取材をやったのです。そして、いわゆるF104を中心に部隊を二ヵ月間にわたって取材して、一ヵ月間毎日連載したのです。それから各社がこぞって来ました。それに対していろいろ協力をしたのですけれども、一番最初にやった『朝日新聞』の影響というのは大きかったと思います。そのときのキャップが疋田桂一郎さんなんです。そのグループにいたのが、一人が柴田(鐵治)というあとで社会部長なんかをやった人です。それからもう一人が細川護熙さんです。

佐道　論説委員とか政治部長さんとかで印象に残っておられる方はいらっしゃいますか。

伊藤(圭)　論説委員というのは、割合に印象に残っているというのは、例えばNHKの家城(啓一郎)さんとか岡村(和夫)さん、あの人たちは非常に印象に残っています。それから『毎日新聞』の人なんかも残っているというのは、論説委員の人とたまたま旅行で対馬に行っておったのです。そうしたら、そのときにロバート・ケネディが暗殺されたのです。それでもう彼らは慌てふためいたわけですね。あの頃は、一九六八年か九年頃でしょう。電話が通じないんですよね。東京に電話するのでとても騒いでいました。特に『毎日』の天野(勝文)さんなんていうのは。自分がちょうど書かなきゃならん日だったらしくてとても慌ててやっていました。そんな印象があります。

伊藤(隆)　やはりそういう人たちはどんどん質問してくるわけですか。

伊藤(圭)　そうですね。

伊藤(隆)　それに懇切丁寧に。

伊藤(圭)　それから、いろんな資料が欲しいとかいうのはなるべくあげました。

伊藤(隆)　内部からはあまり文句は言われなかったのですか。

伊藤(圭)　言われなかったですね。私は誰にも相談しないでやっていましたけれども。

河野　先生からご覧になって、当時の各紙の論説委員の安全保障に対する考え方で、ちょっとギャップがあるなぁとか、違うなぁというふうなことをお感じになったということは特にないですか。

伊藤(圭)　特にありません。

伊藤(隆)　新聞の論調は大体反自衛隊的だったじゃないですか。

伊藤(圭)　これはもう全体的にそうですから、特にどこがひどかったという印象はないです。

佐道　程度の問題ですか。

伊藤(圭)　程度の問題ですね。『産経』だって今ほどじゃなかったですから。やはりある程度距離をおいていました。その後ですよ、『産経』と『読売』が変わってきて、『朝日』と『毎日』が変わって。『東京』はどちらかというと『朝日』、『毎日』系ですね。『日経』が……。

伊藤(隆)　『日経』も最近は怪しいんですよね。

伊藤(圭)　最近はね。

佐道　『読売』、『産経』が変わった頃は、先生の印象ではいつぐらいだったと思われますか。

伊藤(圭)　比較的最近ですね。私たちの頃はやはり厳しかったですね。ただ『読売』の人というのは、この間お話ししましたように、社会部の人なんかは記事を押さえてくれるのに協力してくれたりなんかはしました。

伊藤(隆)　『朝日』の篠原さんとかそういう人たちはどうなんですか。

伊藤(圭)　あの人たちは、理解はしているけれども、書くことはやはり厳しいです。

河野　理解していることと、論説それ自体とはやはりちょっと違うのですか。

伊藤(圭)　違うんですね。社の方針というのがあるのでしょうね。

伊藤(隆)　やはり論説委員とか何かにしたって、政治部長にしても社会部長にしても、ある程度は理解してくれるんでしょう。

伊藤(圭)　これはもうまったく理解するんですよ。理解しているのですけれども、それをそのまま出せないのですね。

伊藤(隆)　紙面には出てこない。

伊藤(圭)　それは、私は最後にやめるときに石橋(政嗣)社会党委員長のところに挨拶に行ったら、「自衛隊が必要なのは俺も分かる」と言うのです。「しかし、社会党が認めたら憲法改正になる。だから認められないんだ」と言いました。石橋さんが最後に会ったときに言いましたから、そういうものでしょうね。

伊藤(隆)　建前があって、理解しても動かせないということですね。

河野　確か『毎日新聞』が「転換期の安保」というような連載をずっと書いて、あとで本にしたりした頃に、私の記憶では、論調が多少変わってきたかなんていうような印象も。そんなふうなことはございませんでしたか。

伊藤(圭)　特に印象はないですね。ただ、決定的に私が感じましたのは、六〇年安保のときはまったく勉強していなかったのが、七〇年安保のときはやはりずいぶん変わったなという感じはありました。

伊藤(隆)　安保そのものを理解してきた。

伊藤(圭)　自衛隊のいわゆる国内治安維持の任務なんかについてもかなり理解してくれているなという感じがしました。新聞記者なんかに治安出動訓練なんかを見せても、べつに反対と書かないですもの。

河野　それは必要なんだということはだんだん定着してきた頃なのでしょうね。

伊藤(隆)　いま定着しているかどうか分かりませんよ。またそれから。

河野　いろいろ紆余曲折があって。

伊藤(隆)　やはり新聞だってその時々で非常に揺れているわけで。

佐道　自衛隊の治安出動訓練というのはどういうものなのですか。

伊藤(圭)　まず持っている武器というのは、今はまったく見ませんけれども、当時は全部〝木銃〟を持たせたのです。その〝木銃〟でまず制圧しておいて、あとは催涙弾みたいなものも用意しました。あとは、訓練のときには戦車なんかも出したりしました。

伊藤(隆)　いかにも新聞がワーッと書きそうな感じですよね。

伊藤(圭)　書きそうでしょう。それが全然書かないんですよね。

伊藤(隆)　今だったら書くと思いますよ。

伊藤(圭)　今なら書くでしょうね。そのときは防衛庁内には反対がありました。富士学校で治安出動訓練を見せるというのは。だけどそれは押し切ってやったのですけれども、結果的にはよかったんじゃないかなと思うのですが。

伊藤(隆)　七〇年安保の前後というのは騒然としていたでしょう。

伊藤(圭)　騒然としていました。例の安田講堂の事件なんかもあったりしたものだから、やはり国民全体のなかになんとなく不安な感じもあったでしょうね。

伊藤(隆)　新左翼の凋落とともに元に戻ったという。

伊藤(圭)　そうかも知れませんね。それともう一つ協力したのは芸能関係なんです。

伊藤(隆)　これをさっき伺ってどういうことかなと思ったのですが。

伊藤(圭)　一つは、映画を制作するようなときに、当時流行ったのは昔の戦争映画です。戦争中の『同期の桜』だとかなんとかいろいろ。

伊藤(隆)　『雲流るる果てに』とか。

伊藤(圭)　ああいうのは全部自衛隊の協力がないとできないわけです。演習場を使ったりなんかして制作しました。それから、例えば昔のちょんまげの映画でも、チャンバラをやるようなところは演習場じゃないとだめなんですよ。電柱が入ってしまうから。そうすると、国有財産を貸すというのは二ヵ月ぐらい手続きが要るのです。私は「そんなものは簡素化して、要望があったら全部貸しなさい」と。

佐道　確かにそうですよね。

伊藤(圭)　もう一つは、私は割合に芸能人と付き合ったんです。あの時代において、隊員はお金を持っていますから、劇場に行って映画を見ても充分慰安はできるのですけれども、例えば部隊の記念祭とかなんかに有名な俳優が来るということで、隊員たちは非常に親近感を持つわけですね。それから、みんなから嫌われているというのを多少とも和らげることができる。私は芸能人に来てもらおうと思って「自衛隊友の会」というのを作ったんです。そして芸能人を呼びまして、多少の謝礼を出して歌いに来てもらった。映画のロケなんかで例えば北海道なんかに俳優が行くでしょう。そうすると、「部隊に寄ってくれ」と言うのです。これは、映画会社にいろいろ協力しているものだから、嫌とは言わないんです。だから加山雄三さんなんかが北海道の部隊に来てサインなんかをしたりす

ると隊員は喜ぶでしょう。そういうのをやりました。そういう意味では非常にうまく付き合ったという感じがあります。

佐道　ほかにはどんな俳優さんが。

伊藤(圭)　ほかには、例えばきのう死んだ三波春夫なんかも来て歌ってくれたりしました。それから、最近『水戸黄門』に出ている女の子がいるでしょう。

佐道　由美かおる。

伊藤(圭)　あれが踊るときに落下傘を降下してくれと頼まれて、落下傘が降下するシーンで踊ったり、そんな協力もやりました。それから、日劇ダンシングチームを横須賀に招待して、軍艦に乗って、大砲の上で足を上げたりした。そんなのが『週刊サンケイ』に載っているんですよ。誰にも文句言われなかった。昔なら不謹慎だって(笑)。

佐道　軍のほうが文句言いそうですよね。

伊藤(圭)　そういうこともやりましたし、小説家たちとも、かなり付き合いました。

伊藤(隆)　元々そういうご趣味があるんですよね。

伊藤(圭)　まあ、割合に。

伊藤(隆)　文学青年で。

伊藤(圭)　楽しみで。だから、阿川(弘之)さんとか曽野綾子さんとか三浦朱門さん、それから息子の。

佐道　(阿川)尚之。

伊藤(圭)　あの人たちを呼んで魚雷艇に乗せてやったりしました。四〇ノットで走ったりしてね。

伊藤(隆)　いま広報課長だったら我々も連れて行ってもらって(笑)。

佐道　そうですよね。

伊藤(圭)　そんなことがいろいろありました。

伊藤(隆)　そういうのが芸能人の。いろいろそういうことをお考えになるんですね。

伊藤(圭)　まあ、考えたんですかね。

伊藤(隆)　策士だ(笑)。

佐道　某雑誌には、先生のことを策士でもあると書いてあるのがあったのですけれども、どこがそうなのかなぁと思っていたのですけれどもね。

河野　先生がブレーンみたいにして相談されたようなスタッフというのはいたのですか。先生ご自身でアイデアを出されるのですか。

伊藤(圭)　やはり課の連中とは話をしていました。

伊藤(隆)　やはりそういうのが好きな人もいるわけですね。

伊藤(圭)　それでまた、僕らの知らないことでいろんなことをやっているのがいるんですよ。

佐道　そういうアイデアとかは部隊とかもすんなり受け入れるものなのですか。

伊藤(圭)　連隊長とか師団長はあんまり快く思わなかったかも知れないですよ。だけど若い人が喜ぶから文句言えないですよね。今はだいぶ違っているのだけど、当時はジェネラルなんていう人もだらしないなと思ったことがあるんです。沖縄に研修に行くようになりまして、防衛研修所の学生が、研修に行ったら、沖縄で一人病気になったのです。そうしたら広報課長に電話をかけてよこして、「どうすればいいか」と言う。「どうすればいいかって、ジェネラルが判断すべきでしょう」と言ったんです。「病気ならしようがないから、米軍の病院に頼んで入院させて、それで後で帰ってくればいいじゃないですか」と言ったのですが、どうもそういう点は頼りないなと思いましたね。

伊藤(隆)　当時だと、ジェネラルというのは昔の軍人さんでしょう。

伊藤(圭)　そうですよ、昔の軍人です。

伊藤(隆)　ずいぶんだらしない軍人がいるものだなぁ。

伊藤(圭)　昔の軍人というのは、そういう意味ではジェネラルとかアドミラルというのが本当に自分の判断を持っておったかどうかというのは分かりませんね。少佐とか中佐あたりが意見を述べると、それに対してうなずいておっただけじゃないかなという感じがするのです。

佐道　富士の総合火力演習というのがいま公開されていて凄い人気ですけれども。

伊藤(圭)　あれは私の頃から公開されていました。

佐道　先生の頃から始まったのですか。

伊藤(圭)　だと思いますけれどもね、ちょっと記憶にありません。

伊藤(隆)　今のお話で、いろいろ広報活動して、そういうことというのは例えば隊員の募集とかそういうことに反映してきますか。

伊藤(圭)　ところが当時は物凄く景気がいいときでしょう。だから全然だめなんです。むしろ早く辞めて出て行く人のほうが多かったです。募集するのが容易じゃなかったのは、辞めていく人が多かったからなんです。今は募集が楽なんです。辞めていかないから。

伊藤(隆)　でも老齢化するでしょう。

伊藤(圭)　その老齢化という問題があるんですよね。一期で、「陸」だと二年で辞めていってくれる人が多ければいいのですけれども、今は辞めないでしょう。そうすると、四年、六年になっちゃうでしょう。そうするとやはり老齢化していきますよね。だから、これは将来問題になるでしょうね。

伊藤(隆)　まあ、女子隊員も増えてくることだし。

伊藤(圭)　女子隊員というのは凄いですね。いま全部でどのくらいいるのだろうな、四、五千いるんじゃないでしょうか。それで、女性というのは優秀ですからね(笑)。

伊藤(隆)　どこの世界でもそうだと思いますよ。

■　旅客機事故を報道する

伊藤(圭)　そうですね。

きょう、これ全部行けるかどうか分かりませんけれども、最初のところを申し上げますと、六五年ですね。「三矢研究」のところは海原さんが詳しく言っていますね。あれ以上のことは私も知りません。ただ、このときの思い出で言うと、「三矢研究」というのは私は楽しんだのです。海原さんが奮闘しておるわけですね。私は当時施設庁の企画課長でしょう。何も用がないわけですよね。そうすると、国会のバッジを付けて、よく一人で聞きに行ったんです。そうすると、フウフウ言っているのを聞いていまして、海原さんがやっているのを見て、私は芝居やなんかを見るのより面白いなんて言って、怒っていましたよ(笑)。結構面白かったですね。海原さんが何度も言うように、国会なんていうものはいわゆる歌舞伎の世界だと。まさに見ていると面白いんですよね。

伊藤(隆)　海原さんは歌舞伎のような余裕はなかったんじゃないですか。

伊藤(圭)　余裕がないというより、あの人は真面目すぎるんですね。これは前にお話ししたことがありますか。私が秘書官のときに〔社会党の〕淡谷悠蔵という代議士がいまして、これは淡谷のり子のおじさんかなんかですが、これが物凄く細かいことを訊くわけです。誰も答えられない、本当の担当者以外は答えられないような、あの部品は幾らするのかとか、飛行機のあそこの部品は何ヵ月ぐらいで消耗するのかとか、そんなことを訊くわけです。それを予算委員会で訊くわけです。誰も答えられない。それで困っちゃって。それは夜の七時半頃ですよね。もう真っ暗で、お腹が空いてイライラしているでしょう。当時私は秘書官ですから行っておって、官房長の海原さんが出てきまして、「すぐ調本〔調達実施本部〕の担当者

を呼べ」と言うのです。七時半頃なんか、みんな帰っていないですよね。「分かりました」と言って、それから外で一服して帰ってきて、「あと十五分か二十分待ってくれ。それまで持ちこたえたら来るから」と言ったんです。そうしたらみんなちょっとほっとするわけです。そうしているうちにだんだん時間が迫ってきて、困ったな、どうしようかと思っていたら、社会党のなかで、おまえは何時までやれと、ちゃんと約束ができているんですね。八時になった途端にやめちゃったんですよ。それで事なきを得ました。そんなこともありました。

伊藤(隆)　淡谷さんなんていうのはそんなことを訊くようには……。大体農民運動やなんかをしている人ですからね。

伊藤(圭)　しかしあの人は本当にしつこい人でした。それから、矢島という社会党の先生が参議院にいたのですが、これがグラマン・ロッキードの頃だったかな、細かい質問だったのですね。本当に答弁に困るような人がいました。

伊藤(隆)　海原さんは、答弁はお上手なのですか。

伊藤(圭)　これはもう絶対うまいですよ。それから久保(卓也)さんもうまかったです。うまかったのですけれども、久保さんはときどき相手を怒らせることがありました。上田哲さんなんかを物凄く怒らせたことがあるのです。というのは、余計なことを言うのです。「おそらく先生はこの次にこういうことをご質問になるでしょうから……」なんて言うと、怒っちゃうわけですよね。質問しようと思っていることを先に言われて、そういうのでとても怒られたりしたことがありました。あのときは田中(角栄)さんがかばいましたけれども、ファントムの給油装置をとるとらないという問題のときでとても上田哲さんが怒ったときに田中さんがかばって、「私は久保君を信用しているのだから、それでおさめてくれ」と言ったことがありました。そんなようなところがありましたけど、まあ、立派な答弁でした。だけど、海原さんについては向こうが怒るということはまずなかったです。

伊藤(隆)　そうですか。というのは、向こうに対してやはりちゃんとリップサービスもしたと。

伊藤(圭)　それはしたんでしょうね。したと同時に、あの人とやってもかなわんという気持ちが相手にあったんじゃないかな。

河野　社会党といえども。

伊藤(隆)　社会党の人とは比較的日常的に仲良くしていたとおっしゃいましたよね。

伊藤(圭)　私はそれは海原さんから習ったものですから、私のときも社会党の先生とは親しくしました。

伊藤(隆)　でも、それを自民党から見たら、あいつ、社会党と通じているじゃないかと、こういうふうに見られる危険性もあるんじゃないですか。

伊藤(圭)　まあ、それはあったかも知れないですけど、言われたことはないですね。ただ、こういうことがありました。私のクラブにいた人が、防衛庁のクラブから国会の社会党担当のクラブに行ったんです。その人を社会党の記者クラブに訪ねて行ったんです。そうしたらその人から、「君、ここには来ないほうがいいよ。君がここに出入りしているといろんなことを言われるかも知れないから」ということは言われました。社会党の担当の記者クラブでね。

河野　そういうことで、じゃあ、やめようというふうにされたということもおありだったのですか。

伊藤(圭)　そのクラブに出入りするのはやめました。

河野　そういうことですか。あまり目立つようなことはしないほうが、ということなのですか。

伊藤(圭)　記者がそういうことを言ってくれました。

四十年は特に申し上げることはないんですよね。日韓の基本条約ができたということ。ただ四十年の事件は、私が突然広報課長になったということです。これは私が予期しなかったことだったので

す。

伊藤(隆)　日韓基本条約のときも、これは物凄いデモでしょう。

伊藤(圭)　デモはあったのですけれども、これはあんまり記憶ないのです。関係がなかったというより、なったばかりだからあんまり記憶ないのですね。

その次の〔一九〕六六年の全日空機とカナダ航空とBOAC（英国海外航空）の航空機事故があったでしょう。このときのことは印象深いのです。二月の何日かに全日空機が落ちるわけです。全日空が落ちて、これは全部死んじゃうわけでしょう。それから一ヵ月たって、三月四日にカナダ航空機が羽田の滑走路に突っ込んじゃうわけです。あれは半分の人が死ぬわけですね。その翌日に、今度はBOACが落ちてしまうわけです。あれは次の日なんです。

これはどうして印象深いかというと、全日空もBOACも直接防衛庁は関係ないのですが、BOACは落ちたのが富士山麓でしょう。それで防衛庁と関係が出てきたのです。富士山の演習場に人が落ちてしまったのですから。運の悪いことには、あれは土曜日です。実は広報課全員で大洗に課の旅行に出かけたのです。そのときに私は、「ひとり人を残すから」とクラブの幹事に言ったら、〔幹事は〕「きのう事故があったばかりでどうせ何もないから皆連れていけ」と言ったのですけれども、なんか知らないけど私は一人残したのです。辻という自衛官で、これは「陸」から派遣されていたのですが、途中でレンタカーのバスの中でBOACが……。最初はT33が落ちたというようなことを言っていましたね。そんなようなことでなんかえらい騒ぎになっているのです。それで大洗に行って聞いたら、BOACが落ちて、富士学校が全部災害派遣で助けに行って遺体を収容しているところだと。「じゃあ、すぐ帰るか」と言ったら、記者クラブが、「いや、もう大体終わったから、いい」と言うのです。それで私たちは行ったのですけれども、一人、梅岡というあとで広報課長になる部員を返したのです。結局その二人が対応してくれたのです。

このときに私は非常によかったと思うのは、その当時はまったく通信の手段がないわけです。富士学校と広報課と電話をつなぎっぱなしにしまして、そして一々報告させたわけです。それを全部記者クラブが記事にして送るわけです。それを、夕方までずっと続けて、そして静岡あたりから各新聞社が車で着いて、それで解放されるわけですけれども。その最初の落ちたときの写真を富士学校で撮っているわけです。それを持ってこさせたらしいのです。ところが、これがまた慌てていたんですね。写真が全然写っていないんです。富士学校の連中が慌てるものだから、キャップをとらないで撮ってしまった。だから全部写っていない。本当に失敗したことがありますけれども。あのときによかったのは、一人残しておったということですね。まったく問題にならなかったですけれども、そのニュースを聞いたときには本当にドキッとしました。「そういうこともあるもんだなぁ」と、カナダ航空機事故の翌日ですからね。

伊藤(隆)　ああいう航空機事故というのは連続することがありますね。

伊藤(圭)　割合に飛行機の事故というのは続きますね。

伊藤(隆)　つなぎっぱなしにして、どんどん、どんどん新聞社に情報を提供したわけですか。

伊藤(圭)　そうです。

伊藤(隆)　じゃあ、新聞社としては非常によかったわけですね。

伊藤(圭)　結局、静岡支局などから富士山麓に到着するまでの間は、それ以外に情報がないわけです。結局みんな死んだということが分かった。

あのときに私は人間ってこういうものかと思ったのですけれども、一万メートル近いところから人間が落ちてくるでしょう。そうすると、地面に一メートルぐらい潜っちゃうのだそうです。ところが人間の体というのは、皮というのは案外強いのですね。遺体を掘

り出すと、骨は砕けているけど皮はつながっているので、氷枕を引き上げるような感じだと言っていました。あとで聞いたのですけれども。あのときは、亡くなった方は割合に楽に死んでいるみたいです。八千メートルかなんとかからはじけて落ちてくるでしょう。外に出ると空気がないから、それで大体死んじゃうのだそうです。下に来るまでにもう死んでいるのですね。そんなことがありました。

伊藤(隆)　あれは爆発なのですか。

伊藤(圭)　乱気流が原因のようです。

河野　富士山に近づくほど乱気流があるといいますね。

佐道　それにしても続いたものですね。当時はまだテレビのニュースの取材なんかではあまり行かないでしょうね。

伊藤(圭)　まだこの頃は、テレビというか、まだビデオのない頃でしょう。だからフィルムでやる頃でしたね。ビデオはあったかも知れないけれども、持ち運んでそういうところで撮るようなビデオはなかったと思います。

佐道　現場取材なんてまだまだ。

伊藤(圭)　〔一九〕六六年の「黒い霧事件」は非常に印象深い問題なんですよね。八月に上林山(栄吉)さんが来て、十月に「お国入り」の問題が出た。これは海原さんが詳しく説明していますけれども。このときは私も行っているのです。「お国入り」のときに。

伊藤(隆)　随行ですか。

伊藤(圭)　記者団が行っていますから、記者団と別の飛行機で行っているわけです。向こうに着いてからも、上林山さんに付いていたのは海原さんでしょう。部隊なんかをまわって視察している間、私たちは別行動で夜の宴会に出て、指宿(いぶすき)の温泉に行くわけです。ところがあとで、記者団が行っているということが国会で問題になり、私は社会党の先生のところに頼みに行ったのです。これは質問しないでくれと言ったのです。そうしたら、社会党もそれは質問しませんでした。例の、政界の内幕なんかを書くような変なのが載っていて、それがあとで「黒い霧問題」になってくるのです。

そして、そのあと上林山さんがアメリカに行くわけです。行くときに上林山さんが私に誰を連れて行けばいいかと言うから、海原さんを連れて行けばいいと言ったのですけれども、それは連れて行きませんでした。海原さんを連れて行かないで、防衛局長だったかな。島田(豊)さんを連れて行ったのかな。それで行って、「お国入り」がこっちで問題になって、急遽予定を変更して帰ってくるわけです。それで例の記者会見が始まるわけですけれども。そのあと、三次防の大綱だけを決定して、十二月に辞めちゃうわけです。

佐道　上林山さんは、先生からご覧になってどんな印象ですか。

伊藤(圭)　これは本当に田舎の政治家です。政治家というよりは、政治屋です。何も知らない人でした。いつかもお話ししたように、「黒い霧問題」で新聞に載っただけで、「この次は絶対トップ当選だ」と言ったぐらいの人ですからね。その通りになったのですから、鹿児島の人々の政治意識は低いですね。

伊藤(隆)　言うとまたあれですよ、でも、民度が低いといったらまずいですね(笑)。

伊藤(圭)　ああ、そうですか。

河野　でも、実感としてはよく分かります(笑)。

佐道　訪米に海原さんを連れて行かなかったというのは、海原さんに何か含むところもあったということなのですか。

伊藤(圭)　含むところがあったというより、あの人はとにかく、上林山さんがいろいろ何か言おうとすると、「それはやめなさい」とかなんとか言うでしょう。やはりうるさいと思ったのでしょうね。

伊藤(隆)　ご指導申し上げちゃうわけですね。

佐道　なられてすぐにそういう気持ちになられたという。

伊藤(圭)　なったんでしょうね。何かあったのかも知れません。何かあったというのは、前から聞いておったわけでもないでしょう

けれども、あるいは松野さんあたりにいろいろ言われておったかも知れないし。松野さんのあとですから、海原に気をつけろというようなことは。

伊藤(隆) 松野さんもやはり嫌っていたわけですからね。

伊藤(圭) それはもう、絶対嫌っていましたよ。

佐道 やはり対立というか、ぶつかっているなというのはもうお分かりになられて。

伊藤(圭) 周知の事実でした。

佐道 防衛庁のなかで。

伊藤(圭) 凄かったですからね。

伊藤(隆) しかし、上林山さんをああいう形で「お国入り」させたというのは、防衛庁のほうで。

伊藤(圭) 僕もそこが分からないのです。海原さんが官房長でありながら、どうしてああいうことをさせたのかなと思って、それが分からないのです。

伊藤(隆) 陰謀説だってあり得るわけですよ(笑)。

伊藤(圭) そこまで分かりませんけれども。いま先生がおっしゃったのはまさにその通り。あの海原さんがおってどうしてあれをやったのかと思います。とにかく統幕議長以下全部同じ飛行機で行ったのですから。

伊藤(隆) 海原さんのお話を伺っていると、そういうことについて厳しい人じゃないですか。

伊藤(圭) 海原さんですか、物凄く厳しい人です。加藤陽三さんが防衛局長のときに海原さんが審議官でいたのです。そのときに、加藤陽三さんのお母さんかお父さんかが亡くなるのです。広島でしょう。あれは昭和三十五年頃ですから、汽車で行ってもずいぶんかかるでしょう。それで「自衛隊の飛行機で行きたい」と言ったのです。ところが、「それは絶対にいかん」と言って止めました。私はああいうのを見ておるから、どうして上林山さんのときに止めなかったのかなと思います。これはまったく分かりません。

伊藤(隆) ちょっと不思議な感じがしますね。

佐道 この上林山さんの「お国入り」問題は……。

伊藤(圭) あるいはそのときに多少のいざこざがあったかも知れませんね。だからアメリカへ行くときに、もう嫌だというふうになったのかも知れません。

佐道 これが問題になったのは、アメリカに行かれている最中に問題になったのですよね。

伊藤(圭) だから、「お国入り」が終わって間もなく行ったと思うのです。

佐道 記者の方は一緒に行ったわけだから、記者の人はあまり問題にしなかったわけですよね。国会のほうが。

伊藤(圭) たまたま社会党の国会議員が乗った飛行機が上林山さんの飛行機が着くためにホールディングさせられたわけです。それで二十分かなんか遅れたのですよね。それで降りたら、上林山さんがおって敬礼かなんかやっているので、「この野郎」と思ったんでしょうね。それが発端なんです。だから運が悪いんです。たまたま社会党の先生が同じ時刻に飛行機に乗っておったという。それがなかったらおそらく何も問題にならなかったでしょうね。

佐道 歴代の長官が「お国入り」されてそんなことをされていたということはないわけですか。

伊藤(圭) 「お国入り」に統幕議長以下を連れて行ったということはありませんね。しかし、私が(藤枝泉介長官の)秘書官のときには、あの頃は「お国入り」がありましたから、新聞記者が全部付いてくるわけです。私は今でも記憶しているのですけれども、就任したのが七月十八日でしょう。そして、「お国入り」が三十日頃、暑い盛りなのです。前橋の町の中をパレードして、晩ご飯は、記者を全部温泉に招待するのですね。あそこは伊香保温泉ですか。そこで宴会をやって、記者はそこへ泊まるわけです。長官は帰ってくるわけ

ですよね。しようがないから一緒に〔前橋へ〕帰ってきて、あの頃は冷房も何もない宿屋に泊まって、ひどい暑いところだなと思ってね（笑）。記者の連中は上で温泉に泊まって。

伊藤（隆）　誰が持つのですか。

伊藤（圭）　政治家が持つのです。帰りは、群馬県ですから絹の白いのを一反ずつ。

河野　お土産にですか。

佐道　恒例になっているわけですね。

伊藤（圭）　恒例になっていたのです。

佐道　記者の方も、新長官になって「お国入り」があると、行くものだと。

伊藤（圭）　そうなんですよね。だから、例の海原さんがカンカンになって怒る「赤城構想」なんて、北海道の部隊視察中に発表するのです。

伊藤（隆）　そうですか。そういう構造なんだな。

伊藤（圭）　あの頃に比べると、今は本当に厳しくなりました。これも面白い話があるのです。私が国防会議の事務局長を辞めたときに、海原さんが私に、「おい君、総理から餞別をもらったろう」と言うのです。「いや、全然もらいませんよ」言ったのですが、彼は田中さんから餞別をもらっているのです。これはまったく個人的に。三十年近く前ですからね。二十五、六年ぐらい前でしょう。百万円もらっているんですね。私は全然もらわない。それで私は中曽根さんが嫌いになっちゃった（笑）。オーラルでも言っていますね。

佐道　恒例になっているというか、前例もあったということで、「お国入り」されること自体は海原さんも反対する理由はないということだったのでしょうね。まさかそこまで大掛かりにされるとは、という。

伊藤（圭）　でしょうね。だから、あれなんかは事実なんですよ。宴会場を替えさせたというのは。あれは海原さんも言っていますけれども、すぐ警察に頼んで。

■暗い昭和四十二年

伊藤（圭）　この防衛力整備の関係はまた別にお話しいたします。増田（甲子七）さんが〔長官に〕なって、そして一月に私はペンタゴンに招待されて行くわけです。そのときに海原さんが〔ご自分と〕間違えたんじゃないかということを言うわけです。そして、三月十四日だと思うのですけれども、三次防の主要項目というのが決定されるわけです。そのときに、これは佐藤さん〔が首相〕のときですね。佐藤さんで、増田さんが長官でしょう。それから大蔵大臣は相当な年の人で、あれは何ていう人だったかな。なんか知らないけど、大臣同士が話し合っても全然埒があかないというようなことがありました。

　それから、三月から四月にかけて、三島由紀夫さんの体験入隊の問題があるわけです。これは海原さんが話をしているのですけれども、三輪さんから直接私のところに来たんです。海原さんに言っても、海原さんが断っちゃったものだから。

伊藤（隆）　これは何で断ったのでしょう。

伊藤（圭）　三島由紀夫だけを優遇するのはおかしいというのが彼の論理なのです。それと同時に、やはり三島さんと肌が合わなかったのでしょうね。そういうところもあったのでしょう。それで、三輪さんに共産党の『赤旗』が体験入隊を申し込んで来たら、やりますかというようなことで、三輪さんも困って私に言ってきたのでしょうけれども、私も困っちゃったけど、しようがない。二ヵ月通しで行くのはとても無理だと言ったのです。ほかとの関係があるから。だからせいぜい十日か二週間ずつ区切ってくれと言うので、富士学校から始めてやったのですけれども。三島さんとはそれ以

来非常に親しくなりました。

佐道　こういう場合、三島さんが入隊されている間、やはり伊藤先生も。

伊藤(圭)　いやいや、全然行かないです。これはみんな陸上自衛隊に任せて。自衛隊でやっていることは自衛隊に。糸口はつけますけれども、あとは自衛隊に任せてやっていました。

　その次の「恵庭事件」の判決というのは、これは私はあまり記憶ないのですけれども、ただこれは憲法問題には触れないで事故としてやったというだけのことですね。あんまりこれは記憶ありません。

　その次にソ連の礼文島の領空侵犯というのがあるでしょう。これはソ連が領空侵犯を初めてやったときなんです。ソ連というのは、その頃しょっちゅう飛んでくるのですけれども、立派だと思うのは、領空侵犯はしていないのです。近くまで来て、何度もスクランブルに行くのですけれどもね。このときに初めて領空侵犯をやっているのです。あとで、十年ぐらいの間に、実際に領空侵犯というのは六回か七回ぐらいしかないのです。だから、ベトナム戦争の頃、よくソ連の偵察機が朝鮮海峡のところを通っていくでしょう。あの海峡の公海というのはほんのわずかなのですが、そこを通って行っていましたから、そういう点は非常にソ連は気を使っていました。そういう意味では初めての領空侵犯ということです。

伊藤(隆)　領空侵犯は一般的に意図的なものですかね。

伊藤(圭)　これは意図的ではないと思うのです。操縦ミスですね。ベレンコ中尉が来たときの領空侵犯(一九七六年)は意図的ですよ。これはもう最初からね。海南島の場合(二〇〇一年)も、これも意図的といえば意図的でしょうね。とにかく緊急着陸だからどうにもしようがないわけです。だからあそこに降りただけのことであって。そのほかは領空侵犯というのはしないですね。近くまでは来ても。

佐道　スクランブルの頻度とか回数が増えたりということは。

伊藤(圭)　それはもっとずっと後ですね。

佐道　七〇年代に入って。

伊藤(圭)　そう、七〇年代に入ってです。

河野　領空侵犯だということをこちらが認めた場合に、何か抗議をするのですか。

伊藤(圭)　すぐ外務省から。

河野　抗議は必ずするわけですね。しかし、抗議をしたときにソ連からの対応は。

伊藤(圭)　それは返事は来ないです。それから、ここには書いていなかったのですけれども、自衛隊の年表を見ていましたら、この四十二年の十月に森田(三喜男)という装備局長が自殺しているのです。

　森田さんは通産省から来た装備局長なんです。それが十月に自殺しているのです。十月にナイキハーキュリーズとホークの国産化が決まるのです。そのときに彼は自殺しているのです。これは西武鉄道に飛び込んで死ぬのですが。彼が十月の何日かに自殺するのですけれども、その前の日に記者会見をやっているのです。そのときに、国産化についていま大蔵省と折衝しているんだというようなことを記者会見で話をして、その翌日自殺してしまうわけです。私もその記者会見に一緒に出て、この人が翌日自殺するとは思わなかったのですけれども。

　これの原因はどこにあったかというと、ナイキとホークを国産化するにあたって、それまでは国産化するにしてもアメリカは研究開発の経費までは取らなかったのですが、このときから取るようになったのです。それに対して大蔵省が物凄く抵抗するんです。その抵抗するのが、実は海原さんが非常に評価している海堀洋平なんです。これはきつい人でしたからね。かつて海原さんの部下でした。大蔵省の主計局の次長になっていました。森田局長が折衝す

る相手です。ギャンギャンやられて帰ってくる。そうすると、こっちの次官は三輪さんでしょう。三輪さんがもっと交渉してこいと命令する。夜中までやっても解決できないため、彼は死んだと私は思うのです。海原さんは海堀洋平はそういう無理を言う人じゃないと言うけれども、本当はかなりきつい人でした。彼はその間に挟まって死んだと思うのです。

ところが、森田さんが自殺して、夕方まで彼の遺書を発表しないのです。三輪さんも知らないと言うのです。ところが、『産経』の記者が私のところに遺書があるはずだと言ってくるのです。私は三輪さんのところに行って、「新聞記者がこういうことを言っているのだけれども、本当にないのですか」と言ったら、夕方になって出してきたのです。遺書には、交渉に疲れ果てて錯乱状態になって申し訳ないというようなことが書いてありました。私が新聞記者から言われて三輪さんのところへ行ったら出してきました。そういういきさつなんかもありました。だからあの年はやはり陰惨な年でしたね。

それで非常におかしいのは、森田さんが自殺したのに防衛庁葬をやっているんですよ。これは僕もちょっと変だと思うのです。

伊藤(隆)　異例なのですか。

伊藤(圭)　だって、防衛庁葬というのは初めてですもの。そのあとでも防衛庁葬なんてないでしょう。

河野　じゃあ、三輪さんのご判断で。

伊藤(圭)　分かりません。

それで翌年の三月には空幕の防衛部長の山口(二三)さんが自殺するのですが、たまたまその日の朝に国会で記者会見があったのです。そこに山口さんが自殺したという連絡がありまして、〔増田〕長官にそれを報告したのです。そうしたら、「いやぁ、思い当たることがある」というようなことを、彼はちょっと記者団にほのめかしました。ところが、実際に葬式に行ってみたら全然違う人だったというようなこともあるんです。そういうようなこともありました。

山口さんがどうして死んだかというのは、これは私も分からないのですけれども、山口さんが死ぬ前の日に海原さんは電話したと言ったけど、私は前の日に彼の部屋に行っているのです。「実は、新聞記者が言っているのだけど、あなたも検察庁に呼ばれるらしいよ」と言ったら、「私は呼ばれても何ら恥ずるところはありません」と言っていました。それが翌朝死んでしまうのですから、私もびっくりしたわけです。単なる推測かも知れませんけれども、あの人は検察庁に呼ばれるということが非常に辛かったのではないかと思うのです。あの人は絶対に物をもらったりなんかする人じゃないですよ。ただ、いろいろ説明を聞いたりなんかしたときに、向こうで説明を聞いた後に一席設けてもらったりなんかということは当時だからあったと思うのです。そういうようなことまでみんな訊かれるんじゃないかということで。ある意味では気が小さかったのかなという感じがするのですけれども。

とにかく、その二人の自殺者と前の日に私は会っているものだから、この二年というのは非常に暗い感じがするのです。

伊藤(隆)　それは四十二年から翌年にかけて。

伊藤(圭)　そうです。四十二年の一月は楽しかったですけど、その後は全然だめだったですね。確か私が米国に行っている最中に海上自衛隊の飛行機が落ちているのです。これは十人ぐらい死んでいるんじゃないかな。あのときは、変な話ですけれども、私はアメリカにいて助かったなと思ったんです。これは東京にいたら大変な騒ぎだったなと思ったことがありました。

佐道　四十二年は自殺者もありますけれども、海原さんが転出されるのもこの年ですね。

伊藤(圭)　ああ、そうだ、この年ですね。四十二年の六月。海原さんが出て行くときに、いろいろあの人もしゃべっていますけれども、まあ、ああいう状況だった。私はあのときに官房長室に行った

のです。私は次官と言われたのだと思って、「おめでとうございます」と言ったら、「俺はそんなこと言われない」というようなことで。あのときに、やっぱりこの人は奥さんを大事にする人だなと思ったのは、ちょっと家内に相談するからというので私は席を外して帰ってきたのですけれども、奥さんに相談するものかなぁと思ったのです。私が国防会議に行くときに相談しなきゃいかんかなと思ったけど、べつにしませんでしたけどね。奥さんに相談するものかなぁとちょっと思ったことはありました。

結局、海原さんは、松野さんに嫌われたというようなこと、それから増田さんがそれを引き継いで、そして出ることになるんでしょうね。

佐道　増田さんともやはりだめだなというのは分かるくらいの状況だったのでしょうか。

伊藤(圭)　増田さんのことはちょっと馬鹿にしていたみたいな感じでしたね。

佐道　防衛庁の中の反響といいますか、かなりの方が海原さんが次官になられるんじゃないかと。

伊藤(圭)　かなりというよりも、ほとんど皆そう思っていたのではないでしょうか。

佐道　国防会議ということですから、これは相当な驚きだと思うんですよね。

伊藤(隆)　海原さん自身も非常にショックだったわけでしょう。

伊藤(圭)　物凄くショックですね。私が海原さんの気持ちが分かるのは、防衛局長で次官にならなかったのは海原さんと私ぐらいでしょう。あとはほとんどなっているのです。だから防衛局長になったら当然次官になると思いますね。私もそう思いました。

私のときにならなかったのは、これはよく分かりませんが、新聞記者なんかから聞いたので、私は金丸(信)さんに言ったんです。「私は行ってもいいけど、本人が知らないうちに決めるのはおかしいじゃないか」と言ったら、「その通りだ。申し訳ない」ということを言ったのです。そのときに、これは海原さんも忘れているのですけれども、「俺が田中さんに言おうか」と言ったのです。金丸さんは田中さんの子分だから、俺が言ったら止まるよと言ったけど、私はそれを断ったのです。

私が国防会議に出る原因というのは、幾つかあると今でも心当たりがあるのですけれども、一つは、やはり大蔵省の人が次官になっていたからでしょう。あの人たちは皆経理局長で来た人ですよね。そのため、防衛庁に長くいる私が煙たかったのかも知れません。だから非常におかしな人事なのですけれども、防衛局長の私の後任は、原(徹)という私より一年先輩です。それが私の後任の局長になるわけです。そして、次官になるわけですよね。だから、大蔵省サイドが嫌ったのが一つあったのかなという感じがするのです。

それからもう一つは、丸山昂さんがやっぱり嫌ったのではないかなという感じがしています。というのは、これは海原さんから聞いたのですけれども、海原さんが、丸山さんが次官のときに、私のことを次官に推したいということを言ったというのです。それがそうしなかったみたいですから、だから分からないのですけれども。

伊藤(隆)　でもやはり、海原さんの子分だからと思われていたからということもあるのではないですか。

伊藤(圭)　あるいはそうかなぁ。

伊藤(隆)　そこまで海原一派の一掃という。

佐道　そこまで尾を引いていますかね。

伊藤(圭)　尾を引いているかどうか知りませんけどね。ただ、海原さんがいなくなって、久保さんがいなくなったあと、防衛庁のことを一番よく知っているのは私でしたよね。それに対して多少煙たがっていたのは、亘理(彰)という大蔵省から来た次官ですね。亘

理さんが次官になるときに私は向こう〔国防会議事務局〕へ出るわけですけれども、彼は次官になるについて煙ったいと思ったのでしょうね。

それから、結局次官になるためには防衛局長をしなきゃいかんと思って、彼のあとの原という人を防衛局長に持ってくるというようなことがあったんじゃないでしょうか。

伊藤(隆)　その辺の人事というのは大臣ですか。

伊藤(圭)　いや、おそらく次官じゃないでしょうか。

佐道　先生のあと、前の丸山さんもそうですけれども、西広(整輝)さんが次官になられるまでは、外様の方というか、外来組がなられますね。大蔵にしろ、あるいは警察から来られる方にしろ。

伊藤(圭)　夏目(晴雄)君がその前になるんですよね。夏目君がなるときは海原さんが物凄く努力したようです。

佐道　もともとの防衛庁の本庁ではなくて、施設庁からの方ですよね。

伊藤(圭)　ある意味では海原さんは私のことを〔次官に〕したかったと思うのです。しかしまあ、これはもうしようがないことですね。まあ、いろいろ役人人事というのはある。ただ、あの頃に私が非常に思いましたのは、役人連中が政治家のところに人事のことで頼みに行くのですね。田中さんのところなんかはずいぶん行ったものらしいです。〔私は〕ああいうのが嫌だったからねぇ。

伊藤(隆)　さっきの話だと、海原さんも田中さんと。

伊藤(圭)　幹事長時代から知っているようでした。田中さんというのは力を持っているから、俺が言ったら田中さんは聞いてくれるよということは言っていました。それぐらい田中さんという人は力のあった人なんですね。当時は田中さんが総理は辞めている頃ですよね。闇将軍の頃です。

佐道　そうですね。厳然として力を持っておられた。

伊藤(圭)　ところがあの田中事務所には役人が行っていたのですからね。

伊藤(隆)　海原さんは、田中さんに言ったら自分の影響力はあると思っておられたのですか。

伊藤(圭)　海原さんですか。それはあったのでしょうね。田中さんは海原さんに一目置いていたと思うのです。総理になったときに海原さんを官房副長官にしてもおかしくなかったのです。あのときに海原さんは国防会議の事務局長です。後藤田さんは警察庁長官でしたけど当時は浪人だったのですから、それを連れてきて副長官にするわけでしょう。国防会議の事務局長というのは、その頃内閣の中では最先任なんですよ。官房副長官が小池(欣一)といって〔昭和〕十八年〔内務省入省〕の人ですから、海原さんがトップなのです。だから官房長官が交代したときの挨拶なんか海原さんがやったのですから。官房副長官がやるんじゃないですよ。官房長官の歓迎の言葉を海原さんがやるぐらいですから、田中さんは海原さんを副長官にしてもまったくおかしくなかった。それをしなかったのです。

私は海原さんに、おそらくそれは二つ理由があるだろうと言った。「俺〔田中角栄〕はとても海原のことを使えないと思ったのが一つだろう。後藤田なら使えるけど海原は使えない」と。それからもう一つは、「やはり警察を味方にしておこう」と、この二つじゃないかと言ったら、いや、そんなことはないだろうと彼は言っていましたけれども。というのは、いつかもちょっとお話ししたのですけれども、「あんた、言っていることがおかしいじゃないか」というようなことを田中さんにだって面と向かって言うわけですからね。それぐらい影響力があった。

それから、海原さんのオーラルのなかに一つだけ私が彼から聞いたのと違っているのは、「政治家になれ」というのを断ったところがあるでしょう。彼は参議院に出ようとしたことが一回あると聞きました。辞めたときに小佐野(賢治)さんから話があって、ど

うも気が動いたときがあるような気がするのです。ただ彼が出なかったのは、必ずしも当選確実の順位に入れてもらえるかどうかというのが分からなかったということがあるのではないでしょうか。出て落ちるよりは出ないほうがいいと思ったんじゃないかという感じがします。あるいは奥さんあたりが反対したのかも分かりませんね。

伊藤(隆)　それは考えられますね。

伊藤(圭)　本人は出る気ありました。奥さんが明らかに反対したというのは、徳島県知事に出る話があったときに、それは奥さんが断ったようです。それで徳島県知事になるのもやめているのです。その前に高知の県知事の話があるでしょう。あれは年齢が足りなかったからというのがある。そのあと徳島県知事の話もあったと聞きました。

佐道　それはいつ頃のことですか。

伊藤(圭)　あれはもう国防会議の事務局長になってからじゃないかな。だけどこれは、確か奥さんが嫌だというのでやめたというようなことを聞いた記憶があります。

伊藤(隆)　やはり奥さんの言うことは聞くんですね。

伊藤(圭)　そうらしいですね。

伊藤(隆)　やはり大事な人が最後あれだけちゃんとみていてくださるのだから。自分の背骨を折ってまで。

伊藤(圭)　この次はどうですかね。

佐道　できればこういう形がいいですね。

伊藤(圭)　そうですか。じゃあ、この残りのところを続けてやります。

〈以上〉

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第7回

開 催 日：2001年5月22日（火）
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時00分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

河野康子（法政大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■ "大都会"エンタープライズの入港

伊藤(圭)　それでは始めますか。まず最初にお断りしなきゃならんと思いましたのは、今度の速記録を読んで、あんな話でいいのかなということを思ったのです。

伊藤(隆)　僕は、読んで、ああ、これは面白いと思って、もう一回読み直したのですから。

伊藤(圭)　私は大事なことを忘れていたので付け加えさせていただきたいと思います。私が最初にペンタゴンに呼ばれて行きました話を申し上げましたが、あれを見ると楽しい話ばかりを申し上げているのですね。ところが実際に私が感じたことは、もちろん楽しかったのですけれども、基地を見学して、日本の安全保障というものと米軍との関わりを考えてきたのです。そのことを最初に申し上げたいと思いまして。

ペンタゴンからずっと各基地をまわって学んだことの第一は、日本は核武装は絶対にできないということを感じたのです。どういうことかといいますと、核のミサイルの発射基地とか、当時はB52が核を搭載していつでも飛び立てるように基地で待機しているのです。そのときの核兵器を操作するオペレーターの顔つきを見てびっくりしたのは、B52のパイロットの勤務というのが、三日間続けてずっと基地にいるのです。そして、あとの四日間が休暇になるのです。というのは、核爆弾を自分が落とすということは世界の破滅につながるでしょう。そういう責任を負っている人の緊張状態というのは、一日やって一日休んでなんていうことはとても無理らしいのですね。そういう緊張状態を三日間続けて、あとの四日間は何もしないのだそうです。そして基地自体が非常に緊張しているわけです。もし日本が核武装なんかして、こんな二十四時間永久に戦時体制というのが続けられるのか？　という印象が非常に強かったのです。核武装をしないということよりも、日本という国はこれから永久に核武装はできないと思いました。そんな印象が一つあります。

それから、オマハの戦略空軍の基地に行ったときに、米軍はとてつもない凄い力を持っているなというのを感じました。核攻撃を受けたときに、指揮機能がつぶされるのが一番恐いわけですよね。それで、二十四時間、八時間交代でジェネラルが飛行機に乗って空中を飛んでいるのです。そうすると、司令部や基地がやられても空中から残っているミサイル基地に対して発進命令を出せるわけです。これは「凄い」と思いました。とにかく、一月中旬でオマハは寒いところなのですけれども、ずっと温風で機内を温めていまして、いつでも飛び立てるようにしてある。ジェネラルが各基地から交代で来まして、そして八時間乗って、交代するのです。そんな状況を見まして、これは大変なことだなと感じました。

それから、私が行ったときに見せてくれたのですけれども、世界中の空軍の基地と同時に対話できるような通信網ができていました。ボタンを押すと各基地から応答があるわけです。私が行ったときに、日本の嘉手納の基地辺りの今の天気はどうだなんていうと、雨が降っているとか。それを世界中にやるのですね。この通信網というのは凄いなと思いました。

それからもう一つ、三番目は、やはり日本人のエネルギーというのでしょうか、真面目さというのか、そういうものに対して非常に期待しているという感じがしました。ある意味で平和に貢献できるパートナーは極東では日本しかないというような感じを持っていました。今から三十年前のことですから、アジア諸国というのは非常に科学技術の面でも遅れていましたでしょう。日本だけが戦後の復興がいち早くできているというので、パートナーという気持ちを強く表していました。

最後は、これは面白いと思いましたのは、北米防空軍というのが

あるのです。その司令部がコロラドスプリングスにあります。穴を掘ったなかにあるんですね。そこに行ったら、説明してくれたのが司令官なんです。ところが、北米防空軍ですから、アメリカの空軍とカナダの空軍が一緒に任務を分担しているわけです。司令官がアメリカの軍人で、副司令官がカナダの軍人なのです。これがカナダではしょっちゅう問題になるというのですね。「どうして俺のところが司令官じゃないんだ」と。アメリカ軍というのは、どこかと共同作戦をするときは、常に自分がトップをとるのだそうですね。それでカナダが非常に文句を言っているというような話をしていました。いわゆる指揮系統というのは、日本でも、自衛隊で「陸」「海」「空」でもほかの自衛隊の指揮下に入るのは嫌だというようなことを盛んに言いますから、軍隊というのはどこも同じだなぁと、そんなことを感じました。

そういう大事なことを申し上げるのを忘れていたものですから、それを足したいと思います。

伊藤(隆)　やはりアメリカ軍というものの強力さに圧倒されたという感じですか。

伊藤(圭)　圧倒されました。オマハに行きますと、戦略空軍の司令部がありますでしょう。そこに行って思ったのは、まず米軍の陸海空軍を見ますと、一番きちんとして服装なんかを整えてやっているのが陸軍なんです。ワシントンで陸軍の何かのパーティーがあって、それに呼ばれて行ったのですけれども、みんな正装で来たわけです。ところがオマハの空軍基地に行くと、もうドンチャカ騒ぎですね。空軍にとっては戦時中なんですね。そうすると、きちんとなんかしていられないわけです。夜、兵隊たちの集まるクラブに晩ごはんを食べたあとに見に行ったら、とにかくみんな大騒ぎですよ。ああ、こういう違いがあるのかなと思ったのは、アメリカの陸軍というのは、アメリカにいる間は戦争なんかすることはないわけですね。〝儀式〟でもやっていなきゃやることがないというとおかしいですけど、そういう違いを感じました。だから面白いなと思って。

伊藤(隆)　アメリカ軍が実際にベトナムか何かに行ったらまた別なのでしょうね。

伊藤(圭)　そうでしょうね。

それから、記者クラブ員と沖縄に行ったときのことを申し上げていましたが、そこのところに付け加えたいと思います。ちょうどきょうの話にもダブるのですけれども。そのときは、まだ返還前なのです。ですからアメリカが施政権を持っているときに行ったわけです。米軍の招待でですね。このときに面白い経験をしましたのは、まず行きましたら、我々日本人の記者クラブを案内したのが、沖縄戦のパノラマがある部屋でした。ちょうどこの倍ぐらいの部屋ですかね。このテーブルの倍ぐらいの大きさのところに沖縄本島の模型があって、何月何日どこに上陸して進軍して来たというのを全部示している。ここで何月何日に司令官が死んだとか、そういうのが全部書いてあるのです。

河野　(サイモン・B・)バックナー(中将、米陸軍第十軍司令官、一八八六～一九四五年)です。

伊藤(圭)　バックナーですか。それを見せて、沖縄戦闘の説明をするわけです。僕らはその説明を聞いたってどうってことないのですけれども、これはある意味では兵隊さんの教育用だと思いました。アメリカで新しい兵隊が入って戦争を知らない世代が沖縄に行くときに、なんで俺は沖縄に行くのだろうと思いますね。ここはおまえたちの先輩がこんなに苦労して戦った島なのだということを教育する場ではなかったかなと思いました。その後、占領が終わってから国会議員の先生なんかを案内して行ったことがありますけれども、そういうのはもうありませんでした。占領中はそういうことがございました。

そのときにもう一つ感じましたのは、返還は急がなければいけ

ないと思いました。あのときに、沖縄の人々の考え方は二つあったのです。戦争を経験した世代は、もう戦争が終わってから二十何年たっていますけど、彼らは早く日本に帰りたいということを言うわけです。ところが若い人はべつにどうってことないのです。もう戦争もないし、米軍の基地の仕事がたくさんあるわけですね。だから、べつに急いで日本に帰る必要はないというようなことを若い人たちは平気で言うわけです。そうすると、このままの状態でいくと、将来は、年輩の人がいなくなったら〝沖縄独立論〟が起きるのではないかなということを感じました。やはり、返還を急がなきゃいけないのではないかという感じがしました。

それから、日本はそのときは占領が終わってから二十年ぐらいたっていました。ところが沖縄の高等弁務官ですか、その沖縄県民に対する態度というのは、これは本当に占領軍ですね。だから沖縄の新聞記者はその弁務官との会見なんていうのは全然させてもらえないのです。それが、日本から行った記者に対してはすぐ記者会見をやるわけです。それで、ああ、施政権を持つということはこんなに差別されるのかなと思いました。

もう一つ別なことで、これは楽しいことなのですけれども、物凄く物価が安いという感じがしました。米軍が占領しているでしょう。だから、物はほとんど税金なんかかからないわけです。〔記者〕クラブの人五、六人と、米軍の広報部長なんかを連れてキャバレーに行って、それこそジョニ黒かなんかをどんどん飲んで十ドルぐらいなんですよね。まあ、当時は三百六十円でしたけど、それにしたって安いものです。

佐道　安いですよね。

伊藤(圭)　それで女性はいっぱいいるのですからね。そういうところでダンスやなんかをしてね。感じとしては、一ドルが百円とかそんな感じでしたよね。ところが返還後に行ってびっくりしたのは、一ドルが千円ぐらいになっているのですね。物凄く物価が上がっていました。そんなことを感じました。

きょうは私の広報課長時代の終わりの頃の四十四年の頃ですか。このあいだ、円谷幸吉の死んだのなんかをお話ししましたか。

伊藤(隆)　ええ、伺ったと思いますが。

佐道　円谷さんではないですね。このあいだは山口(二三)さんの。

伊藤(隆)　確か、ソ連機の礼文島の領空侵犯の話で終わりになったのではなかったですか。

伊藤(圭)　そうですか。

伊藤(隆)　確かエンタープライズの佐世保入港の話もなかったと思います。

佐道　そうですね。三島(由紀夫)さんの入隊の話とか。

伊藤(圭)　それじゃあ、エンタープライズの佐世保の入港の辺りからお話しいたしましょうか。

このあいだもちょっと、米軍の招待でクラブの人と行った沖縄と、それから韓国の話をしましたね。韓国と台湾に行った話はしませんでしたか。

佐道　台湾は伺ってないと思います。

伊藤(圭)　それはもっとあとになるのですが、これもまたいろいろ話がありますから。

まずエンタープライズですけれども、これは例の大騒ぎになったときです。楢崎(弥之助)代議士がデモの先頭に立って捕まったりなんかしたときなのですけれども、このときに面白いことがありまして。米軍と私どもが非常に仲良くしておった一つの例だと思うのですけれども、エンタープライズが佐世保に行く途中にクラブを招待してくれたのです。私が案内していきまして、二十人ぐらいだったと思います。各社一名とかいう制限がついていましたけれども、厚木の基地から小さな輸送機に乗りまして、これがどこか分からないのですけれども、エンタープライズの甲板に着陸するわけです。そして中を見せてくれました。それでお昼ごはんを食

べて。とにかく「凄いな」と思ったのは、五千人かそこらの〝大都会〟ですね。エレベーターでも十一階ぐらいまであるのですから。中を連れて歩いてくれているのですが、一度迷子になったらどこへ行っていいか分からないわけです。だから迷子にならないように心配しながら歩きました。それでまたそこから今度はカタパルトで飛び上がって厚木に帰ってきたのです。輸送機のカタパルトですよね。

伊藤(隆) それは陸上に降りられる飛行機ですか。

伊藤(圭) 陸上に。S2Fというのを改造した、二十人乗りぐらいのですかね。

伊藤(隆) あれはカタパルトで。

伊藤(圭) カタパルトだったと思います。

伊藤(隆) 飛び上がる瞬間、相当衝撃はないわけですか。

伊藤(圭) 衝撃に耐えるため後ろ向きに載る輸送機でした。

伊藤(隆) 面白い経験ですね。

佐道 それもなかなか貴重な体験ですよね。

伊藤(圭) だから、当時一緒に行った人たちは大喜びでした。

それからもう一つ、あのときは各社が一番先に航海中の空母の写真を撮りたがったわけです。どこを通っているかということを各紙が競って研究したのです。結局一番最初に発見したのが『読売』です。『読売』が発見して写真を掲載するのですけれども、そのときに『読売』の人は一所懸命になって海上自衛隊あたりと相談して、船が通る航路にはどういうのがあるかというのをいろいろ研究しました。そして何月何日頃というのでやったのです。僕らが乗ったのは十七日頃です。十九日に佐世保に入ってあの騒動になるわけですけれども。やはり八万トンの空母というのは凄いなと思いました。一つの都会ですからね。

佐道 その『読売』の記者さんなんていうのは、堂場(肇)さんとかではなくて、もっと若い。

伊藤(圭) 堂場さんじゃなくて、社会部の中本という人です。私は佐世保のデモは直接知らないのですけれども、その前にけっこう楽しい思いはしたのです。

佐道 中のほうもずいぶんご覧になったのですか。

伊藤(圭) 全部見せてくれました。飛行機の格納してあるところから何から。割合によくやってくれましたね。

伊藤(隆) 記者さんたちの感触はどうだったのですか。

伊藤(圭) ただびっくりしていましたよ。彼らも初めて見るのですから。

佐道 ずいぶんオープンですね。

伊藤(圭) そういう点はオープンでした。その点は、最近はあんまり付き合いがないみたいですが、あの頃は本当によくやってくれました。だから、あとでお話ししますけれども、韓国や台湾に行ったときだって、米軍の招待ですからね。米軍の招待なんていうのは凄いんですよね。当時は、韓国へ行ったって、オートバイかなんかがついてノンストップでどこでも行くような状況でした。

伊藤(隆) 国賓並みじゃないですか。

伊藤(圭) それから、板門店に行くのも、車なんかで行かないのです。ヘリコプターで。非常に米軍はあの当時はよくやってくれました。

伊藤(隆) アメリカの景気もよかったですしね。

伊藤(圭) まさにその通りなのです。それは、このあいだ差し上げた本に「防衛懇話会」の人と行った話が載っていますでしょう。あれだってとにかく、こっちで旅費は出しましたけれども、食事なんかは昼も夜も大体向こうの招待でした。それから基地に行ったりなんかするのは全部向こうでバスを提供してくれましたし。そういう点は豊かだったんだなと思います。私自身が行ったときも豊かな気持ちでやったわけですからね。

伊藤(隆) 余裕があった時代なんですね。

■激戦地硫黄島を訪問する
―小笠原諸島返還に際して

伊藤(圭)　そうですね。あのときはベトナム戦争をやっている途中でもありましたから、軍事費というのは割合にゆとりがあったのでしょうね。

それから円谷幸吉の自殺というのは、結局、非常に日本人的な感じなのですね。一度英雄になっちゃうと、日本人というのは追い詰められちゃうのですね。自分がだめだということが分かっていながら、正月の休暇で福島の自宅に帰るわけです。そうすると、今度はメキシコでがんばってくれみたいなことを皆に言われて、壮行会みたいなことをやるわけでしょう。「自分はもう走れない」ということが分かっているわけです。それで自殺に追い込まれるみたいなのです。まあ、あの文章は三島さんなんかも大変誉めていましたけど、母親や父親に遺書を残しているのですよね。

河野　家族に感謝の言葉を述べていましたね。

伊藤(圭)　感謝の言葉を書いていますね。非常にいい文章だと三島さんは言っていましたけれども。ま、三島さんは特にああいうのが好きなのでしょう。だけど本当にかわいそうだと思いました。

それからもう一つは、これは私もはっきり聞いたわけではないのですけれども、年上の女性と結婚したかったらしいのですね。それを部隊の上の人が「考えろ」というようなことを言って、そんなことでも悩んでいたというような話も聞いたのですけれども。これは事実かどうか分かりません。

その次に、今度は小笠原諸島が返ってくるわけです。これは六月なのですけれども。このときに私が、「あ、こういうものかな」と感じましたのは、あのときは日本の新聞は全部父島の返還式を報道しているのです。ところがアメリカ人の記者はあれにはまったく関心ないのです。アメリカが米軍機で連れて行ったのはどこかと言いますと、硫黄島なのです。硫黄島の返還式が全部アメリカでは報道されました。というのは、硫黄島は、米軍の海兵隊にとってはあれだけ損害を受けた戦争というのは経験ないのだそうですね。それで、あの島をとるために物凄く苦労しているわけなのです。そして、結局、旗を立てた岩がありますでしょう。今はワシントンのアーリントンの墓地のところに銅像がありますね。あれを見ると、日本人の中には、非常に不愉快だという人もいるのですけれども、そうじゃなくて、とにかくあの銅像はアメリカの海兵隊の勇気の象徴なのですね。同じのがどこにあるかと言ったら、硫黄島にありますね。岩に彫刻してあります。

伊藤(隆)　僕も見てきましたけど。

伊藤(圭)　そうですか。それじゃあ、先生もご覧になったのなら面白い話を申し上げますと、硫黄島が返ってきてから何人かの人を案内して行ったのです。各新聞社の政治部長を案内して行ったのが、これがその年だったかその次の年だったか記憶ありませんけれども、連れてったことがあるのです。ちょうど「武蔵野壕」というのが発見された翌日に行ったのです。壕は発見されますと、遺骨収集団が厚生省から行きまして、全部遺骨を集めて帰ってくるのです。ところが発見された翌日だから全然手付かずでしょう。それで、司令が、ジャーナリストだからというので、その骨だけになって散らばっている現場を見ますかと言ったら、見たいと言うのです。

そうすると案内していた私が行かないわけにはいかない。それで、しようがないから一番先に入ったのです。中は空気が悪いから一人ずつ入ってくれと。一人で行って、五十メートルぐらい行って、出てくるわけです。私は一番最初に入っていって愕然としたのですけれども、そこらへんは白骨累々ですよ。骨を踏まないように歩くのが物凄く苦労なんですね。そして五十メートルぐらい行って、

出て。見ていたら、一人ずつ次から次へ来るのですけれども、出てくる人が皆顔が真っ青です。

それぐらいこの戦争というのは激しかったと思いましたのは、壕のなかに、部屋が幾つかあるのですけれども、その部屋におった人が、苦しいのか暑いのかどうか知りませんけれども、なるべく出口に近いほうに集まって死んでいるわけです。だから入っていったところあたりは大変なんです。白骨が累々としておって。それを見て私が本当に戦争というのは悲惨だなと思ったのは、〔テーブル上のペットボトルを指さして〕先生のようなそういう水が残っているのです。戦争が終わって三十年もたっているのに。もちろんポリエステルじゃないですよ。一升瓶に水をつめて蓋をして置いてある。それが残っているわけです。ところが洋服なんかは全部なくなるのですね。もちろん肉はなくなる、骨だけですね。戦争というのは本当に悲惨だと思いました。帰ってきて、とにかく皆「しゅん」としちゃって、このまま別れるのは嫌だと言って、また有楽町に行って飲んだりしたことがありましたけれども。

伊藤(隆) まだ、今でも新しく壕が見つかっているのですよね。

伊藤(圭) そうなんです。というのは、あの島は火山で動いているらしいのですよね。だから穴が分からないと言うのです。

伊藤(隆) 暑かったでしょう。

伊藤(圭) 中は暑かったです。

伊藤(隆) 壕のなかに入ったら、たまらなく暑いですね。

伊藤(圭) 四十度ぐらいあるでしょう。こんな中で戦争してね。先生もご存じのように、日本人が死んだのが二万でしょう。アメリカ人が一万ですよね。ケガをしたのを入れると向こうも二万ぐらいでしょう。

先生、あの話を聞きましたか。僕が昔の兵隊というのは凄いなと思ったのは、三月二十六日に組織的な抵抗はなくなっちゃっているわけです。ところが、五月十五日まで生き残っていたのがいたのはご存じですか。弾薬庫のあたり。ご存じですか。

伊藤(隆) はい。

伊藤(圭) 摺鉢山の麓にある弾薬庫で、九人か十人か生き残っているのです。それで、五月十五日に全部自決して死ぬわけです。そして遺書を残しているのです。ところが、普通、遺書というのは自分の上司とか自分の家族とかに残すでしょう。この遺書はアメリカの海兵隊司令官あての遺書なんですね。まず、きょうまで我々が生き延びられたのは、あなたが毎日壕の前に食事を置いてくれたからであるということが書いてあるのです。それで、そのことについては感謝する。しかし、その食事と同時に置いてあった降伏勧告については帝国軍人としては従うわけにはいかないという文章を書いてある。そして、あしたの朝四時を期して全員が自決するので、あしたから食事は要らないと書いてあるのです。これはアメリカの戦史に書いてあるのです。そして翌朝全員が自決するわけですけれども、思い悩んだのでしょうか。四時と書いてあったのが二時間後ぐらいに爆音がして全部死に絶えたというようなことがアメリカの硫黄島の記事にあるみたいです。

伊藤(隆) やはり隠れるところがよく分からないので、まだ敵がいるかも知れないというふうに、向こうはずいぶん長い間思っていたみたいですね。

伊藤(圭) そうですね。摺鉢山の下に弾薬庫があったのですね。これを守れということで派遣されて行っているのです。ところが米軍が上陸してきちゃったでしょう。だから全然連絡がとれない。こっちはもう負けたのですけど、その負けたのを知らないわけです。それでがんばっているわけです。どうして生きているのを知ったかそこはよく分からないのですけれども、出てきて撃ったりなんかして、また入ったのかも知れませんね。

伊藤(隆) 最後は火炎放射器でやられていますからね。行ってみると、あれはすさまじい感じがしますね。

伊藤(圭)　六九（昭和四十四）年に、私は藤山（一郎）さんと宮城まり子さんを案内して行ったことがあるのです。どうしてかというと、藤山さんが昔一度硫黄島に行ったことがあるというのです。ぜひ〔もう〕一度行ってみたいと言うので、じゃあ慰問してくれますかと言ったら、慰問すると言うから、宮城まり子さんと二人を連れて行ったのです。藤山一郎さんがびっくりしておったのは、昔はやはり木が繁っていたのだそうです。一本も木がなくなっているでしょう。それから、島の形が分からないと言うのです。それくらい弾を打ち込まれていますね。

伊藤(隆)　あそこに打ち込まれた弾薬の量というのはとてつもないものですからね。

伊藤(圭)　そうらしいですね。小笠原の返還のときにはアメリカ人の記者が硫黄島に非常に関心を持っていたということを申し上げました。

ちょうどその六月なのですけれども、そのあと私は論説委員を連れて対馬に行っているときにロバート・ケネディが暗殺されるのです。対馬で夜、死んだというのを聞いて論説委員が慌ててしまって。外交とか安全保障を担当している論説委員ばかりなものだから、あした書かなきゃならんというような人たちもいまして、慌てて電話で東京と連絡をとっていました。あの頃は電話がかからないときなのです。とにかく今から三十五年ぐらい前ですからね。それで、慌てて電話を取り合っていた記憶があります。それはまあ、別の話として。

対馬に行って驚きましたのは、対馬というのは昔から侵略されているところでしょう。ですから島民の「島を守る」という意識が強いのです。あの頃、朝鮮戦争が終わったあと、南に逃れてきた人、あるいは韓国の人たちがずいぶん日本に密航してきているのです。対馬が一番近いでしょう。だから、まず釜山あたりから船に乗って対馬に上陸するのです。すぐにばれてしまうのですね。島の人たちが連帯感が強いものだから、変なのが来るとすぐ通報するわけです。それで、対馬には行ってもとてもだめだということで、私たちが行った年が四十三年ですから、その頃になると密航者が減ったということを地元の警察署長さんから聞きました。本当に侵略されたところの人たちの防衛意識というのは凄いなと思いました。そういう意味では日本という国は侵略ということをされたことがないようなものですからね。元寇のとき以来。だからまあ、そういう意味ではのんきかなと思いました。

それからもう一つ、ここ〔広報課長時代の年表を指す【資料4】参照〕に少年工科学校のことを書いてありますが、その前に、この年、これは海原（治）さんが言っておられる最初の婦人自衛官が発足した年なのです。幹部候補生が朝霞で四月から最初の教育を受けた年なのです。だからまあ、この年はそういう意味では海原さんの言う一つの画期的な年だったでしょうね。私がこのあいだ申し上げたのは間違っていたのですけれども、今は五千人ぐらいだと思ったら、一万人ぐらいになっているみたいですね。「陸」「海」「空」を通じて。だから、男女差別がないというのは自衛隊が割合早いかも知れません。

それから、この七月二日に少年工科学校で水死事件というのがあるのです。ご記憶にありませんか。これは、装備をつけて訓練をしているときに、池の中をわたり深みにはまって十三人死んじゃったのです。当時私は広報課長で、長官が増田（甲子七）さん。その事故があったときに、『産経新聞』の記者が学校近くの道路を通っていたのです。それで、『産経新聞』がそれを出したわけです。それで大問題になりまして。あの頃だからあれですんだのでしょうけれども、今なら大変ですね。増田さんがこれでクビになっていないのです。少年工科学校長は辞めましたけれども。このときに面白いやり取りがありまして、記者会見で増田さんが〔記者〕クラブに、「私は佐藤さんに辞表を出してきた」と言うのです。佐藤さんが首

相ですからね。そのあとになって、慰留されて彼はそれを撤回するわけです。そうしたらクラブの人が怒って、おかしいじゃないかというのですね。国務大臣ともあろう者が、一度辞表を出して、慰留されて、おめおめとまた帰ってくるというのはおかしいじゃないかということを言われて、彼も憮然としたことがありましたけれども。しかし、今ならもう絶対にクビ。「なだしお」の事件で瓦（力）さんは辞めているわけでしょう。中学校を出たあとですから、十六、七ですかね。そのぐらいの人が十三人いっぺんに事故で死んだのですから当然辞職ものですけれども、このときの陸幕長も替わってないのです。だから、そういう時代だったのかなという感じでそれを書いてあるのですけれども。

それからもう一つ、これは私も見ておって、ああ、この年だったのかなと思いましたのは、あとで三次防のご説明をするときにも申し上げたほうがいいのかも知れませんけれども、ＰＳ１という飛行艇がこの年に完成しているのです。そして八月に領収しているのです。この飛行艇は、三十五年に初めて研究開発の予算がつきまして、これは私も記憶があるのですけれども、わずか四百万円の予算で研究開発から始まった。そして四十三年ですから八年ぐらいかけて造ったのです。非常に高いものだから、結局、その後あんまりたくさん造らなかったのですけれども。しかし、当時は各国から注目されまして、非常に優れた着水性能、離水性能だったものですから、アメリカなんかからも注目された飛行艇なのです。いま何で活躍しているかというと、救難艇で活躍しているのです。漁船なんかがひっくり返るでしょう。そうすると、ボートなんかで十人ぐらい生存者がいると、飛行艇じゃないとだめなのですね。それで、三メートルまでの波のところは着水できるのです。今でも岩国に何機かありまして、救難艇として使っているのですけれども。日本が独自に最初から開発した実用機としては珍しいものですから、そんなことがあったということを。

佐道　新明和工業ですね。今も一機ずつぐらい補充されて。

伊藤(圭)　まだ造っているのですか。

佐道　この前も一機ぐらい予算があったのではないかと思います。

伊藤(圭)　ああ、そうか、それはＰＳ１のほうだね。救難艇のほうですね。

佐道　世界中でも例がない。

伊藤(圭)　そうなんですよね。

佐道　この年なのですけれども、ご紹介いただいた『朝雲新聞』の記事を読んでいましたら、国防に関心がある学生の座談会というのが載っていまして、それの司会をされているのですけれども。

伊藤(圭)　司会をしています。で、森田…。

佐道　そうです。森田必勝、楯の会で三島さんと一緒に死んだ人が出ている座談会で司会をされているのです。

伊藤(圭)　僕はあまり記憶にないのですけどね、あのときには。あとで、ああ、あのときにいたんだなと思いました。

資料のことですが、時系列的に広報課長時代までで助かったのは、たまたま私がもらってきたもののなかに捨てないでとっておいたものがあるのです。自衛隊二十年の年表というのがあるのですよね。

伊藤(隆)　それはどこが作ったものなのですか。

伊藤(圭)　分からないのですけど、『朝雲新聞』でいつかくれたのを僕が持っていたのです。もし必要なら差し上げます。

佐道　ぜひコピーをとらせてください。

伊藤(圭)　いやあ、こんなものは要りませんからね。それを読むと、四十五年の八月までですかな、国際情勢、国内情勢、内局の動き、それから「陸」「海」「空」にどういうことがあったかというのが全部書いてあるのです。

佐道　いやあ、それはぜひ。

伊藤(圭)　これを差し上げますよ。だから、これから先というのはあんまりないのですよね。

佐道　でも、そこから先は私自身の作った年表がありますから、今度はそれを交換で。

伊藤(圭)　そうですか。その先の年表を先生からいただくと有り難いのは、それからいろんなことを思い出すわけです。私なんかも、今度なんかでも、本当に忘れていることをずいぶん思い出しました。人間というのは、すべてのことを覚えていたらとてもやりきれませんから、大体忘れているのですよね。ああいうのをきっかけに。

伊藤(隆)　ちょっと糸口があればいいんですよね。

伊藤(圭)　だから、海原さんが言っているなかで、F104をマッハ以上で飛ばして実験したというのがあるでしょう。これなんかも、実は、何年になるのかな、実際にそれを実行したんですよ。それがいつだったかな。十一月三日にエアーショーを入間（埼玉県）でやるわけですね。毎年やっていますでしょう。あれは航空自衛隊がやっていたのです。それも確か、これも年表を見て思い出したのですけれども、〔一九〕六六年、〔昭和〕四十一年ですね。だから私が広報課長になった翌年ですね。十一月三日に東京航空宇宙ショーというのを『朝日新聞』がやったのです。それを入間でやって協力しました。そのときに、『朝日新聞』というのはああいうのが好きなのですね。例の「神風」のときに東京からロンドンまで何時間かかるか募集したでしょう（昭和十二年）。それで、東京―大阪間をF104がトップスピードで飛んだ場合に何分何秒かかるかというのを募集したのです。あれは実際は十分二十一秒かかったのです。ところが、東京―大阪の上を飛ばすわけにはいかんのです。陸の上だから。マッハを超えるときには物凄い音がしますからね。それで、実際は大島から串本の間の海上でやったのです。同じ距離を。それを二マッハで飛んだのですね。そうしたら十分二十一秒で飛んだのですよね。そんなことも、それを見ておって思い出しました。海原さんがオーラルで言っておったのはこれだなぁなんて思いました。

佐道　あれだけ自衛隊のことを攻撃しているのに、本当に都合のよい新聞ですね（笑）。

伊藤(隆)　よくも「神風」と名づけたものだと思うけど（笑）。

■兵器の開発・整備とカネ

伊藤(圭)　六九年に、F4J（ファントム）が百四機国産が決定するわけです。これが一月に決まるわけですけれども、私は当時広報課長ですから決定した経緯というのはあまり知らないのです。

このときに、私がその後あちこちで話すなかでよく使ったのは、いかに兵器というのが高いかということなのです。最初86Fを国産するわけですよね。ライセンス生産です。あれは一機一億円なのです。ところが、F104は一機五億円、F4は一機二十億円になるのです。そして私が防衛局長のときに決めたF15というのは、百億円だったのです。その後円高になったから九十億ぐらいになっていますけれども、当時は百億円です。主力戦闘機の寿命というのは大体十年で次に替わっていきますね。まあ、徐々にですが。そうすると、そのたびに大体五倍ぐらいになっていくのです。だから、いかに兵器というのは金がかかるかというのをそのとき感じました。

同時に、これは私の予感が当たったのですけれども、この調子でいったら、とにかく核兵器なんていうのはどこまで金がかかるのか分からんなと思ったのです。いかにアメリカと言えども財政的にまいっちゃうのではないかと思ったら、先にソ連がまいっちゃったでしょう。核兵器というのは拡大しているけれども、航空機〔の価格上昇〕から推測しまして、どこかでとどまるという予感が

ありました。

伊藤(隆)　でも、核が拡散しているじゃないですか。

伊藤(圭)　拡散しているけれども、新しく拡充していって、例えばかつてのロシアとアメリカのように、アメリカの一〇五四のＩＣＢＭに対して、ソ連がもっと多く一六〇〇ぐらい持つでしょう。それでさらに多くするとか、そういうことがなくなったわけですよね。拡散しているのだって、結局あれは、ソ連が金を儲けたり、あるいはそのノウハウを知った者が自国で造ったりしている。最初に造るときは物凄く金がかかるわけです。だけど真似をするのは割合に簡単です。だから、中国が造ったのだって、やはりアメリカあたりで学んだ人たちが帰ったのが役に立っていると思うのです。そんなことで、拡散はしているのですけれども、無制限に拡大するということはないだろうと思いました。特にソ連なんていうのは、ＧＤＰというのですか、昔はＧＮＰといっていましたが、それがアメリカの半分でありながら、軍事力はアメリカと同じ、あるいはそれ以上のものを持っていたわけですから。そうなってくると、とても核兵器の競争は続かないだろうという印象は持ちました。

河野　先生のようなご専門の方から見ても、米ソの核競争というのは、いずれ、近い将来限界に達するのではないかというようなお考えをこの当時からお持ちになっていたというのはとても面白いのですけれども。

伊藤(圭)　この戦闘機（Ｆ15）、これで私は思いました。とにかく五年か六年ごとに五倍になっていくわけでしょう。そうすると、Ｆ15で今までずっと来ていますけれども、結局あれは、その次のものを開発したら金がかかってしようがないからでしょうね。ステルス（Ｆ117）なんていうのは、あれは結局途中でやめちゃっているわけでしょう。あんまり金がかかるからじゃないかという気がするのです。私は分かりませんけれどもね。航空自衛隊は常に世界最先端の飛行機を持っているのです。Ｆ104にしてもそうですし、ファントムにしてもそうでしょう。Ｆ15なんかにいたっては、とにかく日本がこのときにＦ15を百二十機かなんか〔保有することに〕決定するのです。私が局長のときに。そのときに、アメリカ以外で持っているのは、イスラエルが二十五機。世界中のどこも持っていないようなものを平気で持つのですから、航空自衛隊というのは金がかかるなというのが今でも印象にあるのです。

佐道　今は、航空自衛隊もそうですけれども、海上自衛隊も、アメリカ以外に持っていないイージス艦を何隻も持っていたり、アメリカ以上にたくさんＰ３Ｃを持っていたり。

伊藤(圭)　Ｐ３Ｃというのは、これは申し上げるとびっくりするかと思うのですけれども、とにかくあれだけ周りが海に囲まれているオーストラリアが持っているＰ３Ｃというのは十三機ですよ。僕は日本がどうして百機要るのか分からない。しかし本当に、日本人というのは思いつめるとことんやるというようなところがありますね。

佐道　さっきちょっと話に出たのですけれども、中国も核を開発していたのは知っていたのですけれども、先生が広報課長になるのは一九六五年ですけれども、六四年に中国が初めての核実験をやりますね。

伊藤(圭)　はい、オリンピックのときですね。

佐道　アメリカのベトナム戦争とかいうこともあるのですけれども、日本のジャーナリズムの人と接触をしておられて、中国の核とか、中国の軍事的問題とか、そういうことについて、当時先生が接触された記者の方とかはどういうふうな感じを持っていましたか。

伊藤(圭)　私は中国という特別な意識はなかったのですけれども、日本のジャーナリストというのはわりあいに核兵器に対しては関心がないなと思ったのは、ＩＣＢＭ（大陸間弾道弾）についてはえ

らい恐い兵器と書くわけです。ところが日本に対しては、沿海州のＩＲＢＭ（中距離弾道弾）がずらっと並んでいるわけでしょう。これについては何も言わないわけですよね。中国で開発しても、ただちにそれを脅威として感じない。こういう点は非常に面白いなと思ったのです。ところが、一方、テポドンみたいなものが飛んでくるとびっくりして大騒ぎするわけでしょう。本来ならば、どうするのだということを国会あたりでも議論があってもいいはずなのですけれども、国会でも議論がないですね。

伊藤（隆）　そりゃあ、だって中国からそのへんはもう、社会党ですからしようがないです。

伊藤（圭）　私は、中国の核兵器については、これは先生方も気づいておられるかも知れませんけれども、私なりの関心がありましたのは、あの核実験をオリンピックのときにやりましたね。そのあと、「ズボンをはかなくても核兵器を持つ」ということを毛沢東が言っているわけですね。ところが、実際にミサイルができたあとに中国が言っているのは、中国は最初に核を使わないということを言い出しているのです。僕がこれを感じたのは、核兵器を初めて持った者がその威力におののいたのではないかという感じがするのです。というのは、実際問題として、ソ連が核兵器を使えないなと思ったのは、やはりチェルノブイリがあってからだと思うのです。あれは非常に大きなショックだったと思うのです。同じように、中国も自分が核兵器というのを持ってみて、それから広島のいろんなことを聞いたりなんかすると、これはとても使えないと思って、最初に使うなんていうといつやられるか分からんから、俺たちは最初に使わない、ということを言い出したんじゃないかと。これは単なる私の推測ですけれども、そんな感じさえします。

伊藤（隆）　当初、核を持ったとしても、運搬手段を。

伊藤（圭）　ありませんからね。だから、オリンピックのときの核実験なんかについては、私どもは、これからが大変だなという感じだけで、特に恐いとは思いませんでした。

伊藤（隆）　いま盛んにミサイル開発をやっているわけですからね。

伊藤（圭）　やっていますね。

関連して申し上げますと、さっきの沖縄に行ったときの話がありましたね。あのときは、沖縄という基地についていろいろ私たちも勉強したりなんかしたのですけれども、沖縄の基地というのは、一言でよく、極東の平和を守る〝要石〟とかなんか言いますね。

河野　キーストーンと言いますね。

伊藤（圭）　これはどういう意味だろうかなといろいろ考えたことがあるのです。沖縄の基地というのは、これは私も何かで読んで、こういうことがあったのかと思ったのは、一番最初にあそこの基地は、日本が独立したあと日本を監視するために置いたというのですね。そういえばそれから二十何年間持っているわけです。ところが日本と仲良くなったあとは、その次は朝鮮半島だというのですね。あそこでまた事が起きたらすぐに行けるように。そして、最後は中国に対するものだというのです。沖縄の基地の性格がずっと変わってきて、最後は中国だと。中国に対するものとしては、中国の核兵器に対してメースＢをもっていたわけですね。もうこれは古くなったのでやめちゃった。そのあと、いわゆる海兵隊の基地として各地、極東の紛争が起こった地域に派遣する基地として変わってきているということを、誰かの論文で読んで、なるほど、こういうものかなと思ったのですけれども。確かにある時期中国の核兵器に対する基地として非常に重視しておった時期もあったでしょうね。それから、あとはベトナム戦争のとき。

ベトナム戦争のときも、戦車とかああいうものの修理は全部沖縄でやっているのですよね。フィリピンの人なんかを雇ってやっている。あのときに、ヘリコプターの修理は日本に持ってきてやっているのです。名古屋あたりで。私が在日米軍の広報部長に「どう

して日本なんかでやるんだ」と訊いたら、まず、アメリカにもって帰るのは非常に金がかかるのだそうですね。それから、日本の技術は信頼できるということを言いました。だから、戦車は沖縄でやっているのだけど、ヘリコプターになると沖縄でできないので、三菱重工とかあそこへ持ってきてやるのだということを言っていました。

伊藤(隆)　戦車なんかの場合はアメリカ軍が直営でやっているわけですか。

伊藤(圭)　直営でやっておったみたいですね。もっとも戦車なんていうのは、壊れたらそのまま捨ててしまいますね。ああいうのに比べたら飛行機は物凄く高いですから。先生もご存じですか。アメリカで百万ドルの戦車というのを開発して、途中でやめちゃったのですね。百万ドルもかけるのはばかばかしいというので。

佐道　そんなの、もったいなくて使えないじゃないですかね。

伊藤(圭)　ところが、日本の戦車は百万ドルどころじゃないんですよ、当時から。だから、日本という国はやりだすと凄いなと思いました。

伊藤(隆)　三菱の戦車ですか。

伊藤(圭)　そうなんですよ。

佐道　そうですよ、日本の戦車は高いですからね。

伊藤(圭)　そして、この年に、その次は安田講堂の封鎖解除がありますね。一月十九日。私が非常に印象深いのは、先ほど言いました藤山一郎さんと宮城まり子さんを硫黄島に連れて行って帰った翌日がこの封鎖の解除の日だった。僕が思ったのは、硫黄島では二万人の人が死んでいるんですよね。ところが、あの安田講堂で騒いでいる学生は命にはまったく別状ないんです。だから、「これは気楽なもんだなぁ」と思ってテレビを見ておった記憶があるのです。

河野　おっしゃる通りですね(笑)。

伊藤(圭)　まあ、ああいう時代なんでしょうな。

伊藤(隆)　アメリカであんなことをやったら、必ず射殺されていますよね。

伊藤(圭)　そうですね。

佐道　でも、封鎖解除にあたった警官のほうは犠牲者が出たのではありませんでしたか。

伊藤(隆)　けが人は出たけど、死者はでなかった。

伊藤(圭)　あのときに、阿川(弘之)さんと三島(由紀夫)さんでしたかな、行って説得して。三島さんが来て、とにかく日本語が分からないということを言っていました。

　そして、その次のF104の墜落事故は、二月八日に落ちているのです。雷にやられて落ちたのです。これは、落ちてパイロットも死んだのですけれども、民家に落ちて民間人が四人死んでいるのです。民家って金沢の市内ですから、すぐ長官が行かなきゃいけないというので、予算委員会の最中に、野党の了解をとって、その夜発つわけです。有田(喜一、在任昭和四十三年十一月三十日～四十五年一月十四日)さんと一緒に。私が付いていったわけです。夜なものですから、新幹線で米原まで行って、乗り換えて、夜中に向こうに着くわけです。そうしたら、この有田さんがなんだか頼りない人で、もう、オドオド、オドオドしているのです。金沢に着くとすぐ記者会見でしょう。「何を言っていいか分からない」と言うのです。それで、寝台が一つとれたので長官をそこに寝せて、その間に記者会見で言うことを書いたのです。とにかく申し訳ないということと、それから事故対策をやるということ、それから遺族に対して補償を厚くするということ、この三点だけを言って、あとは頭を下げていなさいというようなことを言って。そういう苦労をしたものですから特にこれを思い出したのですけれども。そして翌日、お葬式があるときに、行くときは一緒だった教育担当の参事官を残して、こっちは国会がありますから断って帰ってきたわけですけれども。

　でもそのときに、なんて言うのかな、本当に危機管理というよう

な考えがまだあんまりない時期ですから、だからもう、どういうふうに事を大きくしないかというようなことを誰も考えないのですね。たまたま私がついていって、広報課長が一人でそれをかぶるようなことになって。ああ、あんなこともあったなということをちょっと思い出しました。だから、あの日はもう一睡もしませんでした。夜中の一時半頃に記者会見ですからね。それで、すぐその現場に行って。

伊藤(隆)　現場もご覧になったのですか。

伊藤(圭)　現場も行ってきました。凄いものですね。ご存じのようにF104というのは翼が小さいでしょう。だから、あんまり滑空で飛べないわけです。ストーンと落ちちゃうわけですね。だから、操縦して人家を避ける間もなく落ちちゃったみたいですね。

伊藤(隆)　雷にやられたら瞬間的なんじゃないのですか。

伊藤(圭)　いや、瞬間でもないみたいですよ。飛行機というのは、あれはもともと雷が機体を通って流れるようにできているのです。だからあのときにはどういうのか知らないのですけれどもね。

伊藤(隆)　そういう雷を想定したあれ〔備え〕はあるわけですね。

伊藤(圭)　あるのです。

伊藤(隆)　そりゃあ、あるでしょうね。

伊藤(圭)　そのときに思いましたのは、向こうの日本海側の冬の雷というのも本当に恐いなと思いました。雷対策というのをそれからいろいろ研究したりなんかした記憶があります。

■「非核三原則」は憲法問題ではない

伊藤(隆)　しかしまあ、政治家がおろおろするなんていうのは、ちょっと、どういうことですかねぇ。

佐道　有田さんはあんまりしっかりしていなかった。

伊藤(圭)　頼りない感じでした。

佐道　だけど、有田さんという方は、そんな前から防衛に関係しているということはなかった。

伊藤(圭)　いやあ、全然ないですよ。あの頃は防衛庁長官というのは〝伴食大臣〟でしたから、各派閥で誰かを入れなきゃならんというときにあそこに入れてくれというようなものでしたから。

伊藤(隆)　防衛でもよければ、という。

伊藤(圭)　そういうことですよね。だから、そのあと中曽根さんあたりから割合に大物をもってくるようになったのですかね。あとで金丸さんをもってきたりしましたから。

佐道　その前のほうの昭和三十年代のときとかは、船田（中、在任昭和三十年十一月二十二日～三十一年十二月二十三日）さんとか小滝（彬、在任昭和三十二年二月二十五日～七月十日）さんとか、一応それぞれの役割をできるような方々でしたね。

伊藤(圭)　ああ、そう言えばそうですね。ただ、僕はその人たちとは直接接触がなかったものですから全然感じないのですけれども。僕が少なくとも広報課長をやっている間というのは、あんまり凄いと思うような人はいませんでしたね。

伊藤(隆)　それは海原さんが。

佐道　岸（信介）さんのときに赤城宗徳さんが防衛庁長官で、その「赤城構想」を海原さんがつぶして以来、防衛庁長官は（笑）。

伊藤(圭)　そうかも知れませんね。

伊藤(隆)　海原さんのせいだ（笑）。

伊藤(圭)　その次の沖縄訪問というのがまさに米軍が招待してくれたもので、これは本当に、米軍の飛行機で沖縄に行って、米軍の基地のなかに泊まったのです。

伊藤(隆)　どこから飛んでいったのですか。

伊藤(圭)　横田から飛んでいきました。横田から飛んでいって、米軍の基地に降りて、そして米軍の基地を。海兵隊の基地をまわりま

したね。それから、嘉手納、那覇、みんな見せてくれました。

佐道　しかし、当時の防衛庁の記者クラブはずいぶんといろんなところを見せてもらっているわけですよね。

伊藤(圭)　そうです。私が広報課長になる前には、米軍の招待でフィリピンのクラークフィールドなんかも行っているんですよ。

伊藤(隆)　そうですか。

伊藤(圭)　そんなこともよくやってくれていた時代です。

佐道　沖縄に行ったり、エンタープライズに乗ったり。

伊藤(圭)　あのエンタープライズというのは面白かったですね。

そして七月に、「ニクソン・ドクトリン」を発表しますね。それで、なるべく前方の米軍の展開を下げて、それぞれの国に防衛の責任をもってもらうというのが出たのがこの年ですね。この頃は僕も広報課長だったものですから、ああ、そうかと思っただけで、それがわが国の安全保障にどういうふうに直接関わってくるかというのをあんまり考えませんでしたけれども。

伊藤(隆)　でも、一応広報課長で説明はしなければならない。

伊藤(圭)　説明はするわけですね。だけど、そんなこともあったのでしょうかね、この頃、佐藤さんが言う「自主防衛」なんて言葉が流行ったのは。そのときに私が説明しておったのは、佐藤さんが言っている「自主防衛」という言葉自体は、池田(勇人)さんがかつて言っているのですよということは言ったことはありました。

佐道　こういうときに説明されるときに、説明内容のすり合わせとか、例えば外務省とかと情報交換をするということはまるでないのですか。

伊藤(圭)　説明の内容は直接は〔すり合わせ〕ないですけれども、資料交換はしました。例えば「ニクソン・ドクトリン」の発表にあたって、バックグランドのブリーフィングをアメリカの担当者みたいなのがやるでしょう。そんなのをくれたり、そんなことはしました。

河野　そういうときに、例えば防衛庁から、「ニクソン・ドクトリン」のこの部分はどういう意味なのかみたいな質問とかはできるのですか。

伊藤(圭)　できると思いますけれども、そのときにやっておったかどうかというのは僕は知らないのです。

河野　あのときに発表したアメリカ側のアジアに対する戦力について、アジアそれぞれの国々が様々な解釈というか。それぞれちょっと違う受け取り方もあったような。

伊藤(圭)　そうなんですよね。だから、あるいは久保さんの資料のなかにその辺のことを書いたものもあるかも知れませんね。そこのところはよく分かりません。当時は久保さんが何をやっていたのかな。久保さんがこの頃は……。

佐道　七〇年に防衛局長で戻ってこられて。

伊藤(圭)　もう帰ってきていましたか。

佐道　七〇年に戻ってこられました。その前に、警察にまた一度戻って。

伊藤(圭)　そうそう、福島の本部長をやっていたのですよね。あのときに何か訊きに行ったことがあるな。三次防のことを訊きに行ったのかな。福島まで行って、いろいろ話を聞いたことがありました。

そしてこの次の反戦デーですね。これは十月二十一日ですか、国際反戦デーで、このときには新宿の騒動があった。新宿の騒動がある前に、あれは防衛庁に来ているのです。防衛庁で大騒ぎになりましてね。

伊藤(隆)　中に入らなかったのですか。

伊藤(圭)　中に入ってきたのです。それで、赤坂の警察がそれを排除するのですが、防衛庁はだらしないじゃないかというようなことをよく言われたのはそのときなのです。それに対して三島さんあたりが物凄くそれを歯がゆく思ったということは私のところに

来て言っていました。どうして自衛隊が自分の力で排除しないんだということを盛んに言っていました。反戦デーのゴタゴタがあったのですけれども、その直前に陸上自衛隊の治安出動訓練を初めて富士演習場で公開したのです。これが十月三日なのですよね。それが新聞に載ったのですけれども、そういう反戦デーの騒ぎがあったりしたものだから、まったく新聞が批判しませんでした。だから、あれはタイミングのいいときにやったなと思います。それはもう、凄いものでした。最初、木銃を持ってやっているうちはまだよかったのですけれども、アメリカのＭ24という軽戦車が出てきたら、それはもう迫力ありましたよ。新聞記者が皆びっくりしちゃって。

佐道　治安というより、〝内乱鎮圧〟ですよね。

伊藤(圭)　そうですね、内乱鎮圧ですね。ま、そういうことなのでしょうね。実際は、治安維持の責任は警察が第一義的にあるわけですから。

伊藤(隆)　まあ、防衛庁の庁舎にちょっとぐらい入られたぐらいでは内乱というわけじゃないですからね。

佐道　そうですよね。警察でどうしようもないときに出て行くという決まりですからね、法的には。

伊藤(圭)　それでこのときに、確か国際反戦デーのときかな、京都大学の前かなんかを行進しておって、物を投げつけられて、それを警察が制止したというので憤慨している人もありましたね。「もっと自衛隊しっかりしろ」、なんていうことを聞いたことがありましたけれども。

伊藤(隆)　自衛隊が出るような事態になったら、それは大変ですよね。

佐道　ほんと、大変ですよ。

伊藤(圭)　そして、同じ十月だったと思うのですけれども、「防衛懇話会」が初めてアメリカに行くわけです。これは年表に書いてありますけれども（【資料４】参照）、そもそものこれが行われた理由というのは、その前の年にアメリカのＤＯＣＡというのが来るのです。このあいだちょっと申しました、ディフェンス・オリエンテーション・カンファランス・アソシエーション。全部の人員が千七百人ぐらいの団体なのです。それで、政治的にも動かない、ただ米軍を精神的に支援するグループということであるわけです。これはかなり権威を持っていまして、欠員が出なければ会員になれないのです。それで、年に一回、ヨーロッパとか、あるいはアジアとか、そういうところに行って米軍の基地を慰問する、視察する、そういうことをやっている団体なのです。

その前の年にたまたま日本に来たのです。日本の基地と沖縄の基地を見にきまして。そのときに、日本の「防衛懇話会」というのができて間もないものですから、交流をしたらどうかと、米軍の広報部長と私の間で相談して実行しました。日本の「防衛懇話会」というのは、六百社ぐらい会社が集まってできたのです。金を持っているものですから、じゃあ、パーティーをやりましょうというので、工業クラブでパーティーをやって、向こうを呼んで。防衛庁は、長官機があったのですよね。これはかなり中のシートなんかもいいものですから、それを提供しまして、そして、小牧の基地と、大阪の造船所とか、それから新明和〔工業〕なんかも見せたのです。そんなことをやったのです。それで非常に喜んでくれて、今度は我々を招待したいというのでペンタゴンに話をつけて、翌年、この年に初めて行くわけです。それで、二週間にわたってまわるのですけれども、本当によくしてくれました。

たまたま、すぐそのあとに佐藤・ニクソンの共同声明が十一月にあるわけです。その前だったものだから、新聞記者が「佐藤・ニクソン会談」の根回しに行ったんじゃないかと言うのです。だから帰ってきたときに記者会見があったものですから、記者会見の文章なんかを作って、牧田与一郎〔元三菱重工社長〕さんに渡してそ

れを読んでもらって。

伊藤(隆)　牧田与一郎さんが代表なのですか。

伊藤(圭)　牧田さんが代表でした。それの原稿を書いたりして。そんなことがありましたけれども、非常によくやってくれました。

そして、今度は共同声明があって、いよいよ安保の自動延長と沖縄返還が決まるわけですね。このときの自動延長のときの核兵器の持込の問題ですが、これは海原さんが詳しく説明していましたね。海原さんが田中(角栄)さんに話をしてやったというのですけれども、これもずいぶん後までゴタゴタしていましたけれども、まあ、〝核抜き〟ということになったわけです。その後、核はあったんじゃないかとかなんとか言うのですけれども、私は実際にはなかったと思うのです。というのは、もうあの頃メースBなんていうのは古いので、メースBがなくても、ポラリスなんかがグァムに配置されていましたから、何もあそこに置いておく必要はないわけです。核兵器は、返還と同時に全部クリアになって撤去しておったかどうかは分かりませんけれども、しかし持って帰ったとは思うのです。だから、あのあと公明党の質問なんかで、ヤギが弾薬庫のところおったのは、あれは核兵器が隠してあるからというようなことを言ったのですけれども、それは違うと私は思うのですけれども。

それからこれはご記憶にありますか。二月に、佐藤総理が国会で、「非核三原則」の核を「持ち込ませず」というのは、これは憲法に違反するからではないですよということを答弁しているのです。これは政策の問題であって、憲法の問題ではありませんということを言っているのです。これはその後もずっと貫いていたのです。というのは、純粋な防御兵器で核弾頭が必要な場合には、これを装備しても憲法違反にはならないということを〔政府は〕国会で答弁していたのですね。それは、佐藤さんの二月四日衆議院の予算委員会での答弁が根拠になっているわけです。

河野　そういう答弁を佐藤さんがするときには、やはり事前に防衛庁との間で〔すり合わせがありますか〕。

伊藤(圭)　あります。

伊藤(隆)　だけど、どっちの発意でそういう発言をなさることになるわけですか。

伊藤(圭)　それは、その前から防衛庁のなかでいろいろ純粋に防衛するために核兵器が憲法に反するかどうかという議論はやっていたわけです。たまたま質問でそういうのが出てきたときに、防衛庁でその原案を作って官邸に送るわけです。それで答えるというようなことです。

河野　確か岸内閣のときに、小型の防御型の核兵器であれば憲法の範囲内だということがちらっと出ていました。それがかなり早い時期。それで、佐藤さんの頃までやはり、どこまでいいかというようなことを内局で議論していらっしゃったということでよろしいのでしょうか。

伊藤(圭)　はい、そうです。

河野　よく分かりました。

■ 中曽根康弘と「診断する会」

伊藤(圭)　その次の年、七〇年、いよいよ私が辞める年なのですけれども、そのときに中曽根(康弘)長官が一月に来るわけです。この人は、海原さんもいろいろ言っていますけれども、私が見るところでは、物凄くパフォーマンスの好きな人だったということです。だから、自衛隊も中曽根さんを利用して自衛隊をPRしようという気持ちがありました。中曽根さんは、その先頭に立って旗を振ることによって自分を売り込むというか、その手段として利用するというような感じもありました。だから、自分でジェット機に乗っ

て北海道に行って、隊員と一緒に泊まってね。ああいうことは好きな人でした。

その一つが、着任してすぐ、「日本の防衛と防衛庁・自衛隊を診断する会」、これをやろうということになったわけです。これは、私が呼ばれて、命令されました。それで、どういう人でやるかということについては、大体中曽根さんの希望なのです。ただ、中曽根さんがまったく連絡がとれなかったのは、遠藤周作でした。小説家を入れたいので、遠藤周作を入れたいということを言った。私に、どこかを通じて接触してくれないかと言うから、「いや、僕は友達だから頼んでみます」と言ったのです。そうしたら遠藤君が言うのは、「俺一人で小説家が入るのは勘弁してくれ。誰かと一緒じゃないと」と言うから、「誰だ」と言ったら、「佐藤愛子だ」と言う。これは遠藤君が言ったんですよ。それで、佐藤さんと自分で連絡をとってくれて、二人で一緒に行くよというようなことになったものですから、私は佐藤さんのお宅に伺って。

伊藤(隆)　中曽根さんは。

伊藤(圭)　中曽根さんは全然行かないです。

伊藤(隆)　オーケーなのですか。

伊藤(圭)　中曽根さんは、とにかく小説家を入れてくれというわけですから。

伊藤(隆)　ああ、人数のことは言っていないのですか。

伊藤(圭)　言っていない。

佐道　佐藤愛子さんでもオーケー。曽野綾子さんじゃないですね。佐藤愛子さんですね。

伊藤(圭)　佐藤愛子です。曽野綾子さんでもよかったと思うんですよ。だけど、遠藤君が指名したのです。

河野　あの二人は文学上の仲間だったんですよね。

伊藤(圭)　そう。

伊藤(隆)　ほかの人は全部中曽根さんが連絡をとったのですか。

伊藤(圭)　いや、連絡はとらないけれども、こういう人のところに行って交渉してくれということを言われました。

伊藤(隆)　じゃあ、交渉なさったわけですか。

伊藤(圭)　交渉はしました。あの細川隆元さん（政治評論家、元朝日新聞参与）だけは自分でやったと思います。これはどうしてかというと、一番最初は松下さんを担ぎ出そうとしたのです。松下（幸之助）さんはもう高齢だから、とてもそういうのは無理だから、金は出すけれどもほかの人にやってくれと言うので、それで細川さんに頼んだのです。ほかの人は、ここに行って来いと言うものだから、私が行って、一人一人みんな頼んだのです。

伊藤(隆)　断られた人はいない。

伊藤(圭)　断られた人はおりません。全部オーケーでした。

伊藤(隆)　一応、どういう方が。

伊藤(圭)　まず細川隆元さん。それから島（秀雄、鉄道技術者、元国鉄理事・技師長）さんというのは、宇宙開発事業団の当時の理事長で、どういう人かというと新幹線を作った人なのです。相島（敏夫）さんというのは科学評論家で、ＮＨＫのラジオなんかによく出ている人でした。平沢和重さん（外交官、元ＮＨＫ解説委員）は外交ですね。猪木（正道）先生（政治学者、元防衛大校長）は京大。猪木先生のときには、私は京都まで行ったのです。最初はだいぶ渋っていましたけれども、まあ、出ましょうということになった。中村菊男（政治学者、元慶應大学教授）さんなんかは割合にすぐオーケーしてくれました。それから盛田（昭夫、元ソニー会長）さんなんかも行ったらすぐオーケーしてくれました。それから遠藤君はそういう条件つきで。米原（正博）さんというのは当時の青年会議所の会頭なのです。ただ、この人は割合に若い頃は左翼的な人だったみたいですね。この人は、私がもう辞めてからかな、鳥取の内外状勢調査会で講演に行ったら、講演場で会いまして、あそこのテレビの会社の社長をやっていました。こんなような方で。

これはそれなりに面白かったですよ。二月から六月まで、九回ぐらい会っていろいろ議論をする。それから、いろいろ各地の基地をまわってね。これを読んでみると、比較的順当なことを書いてあると思うのです。おかしなことはないわけです。わりあい的を得ているなと思ったのですけれども。そのなかでも面白かったのは、北海道に行きましたときに、盛田さんが指摘されたのですけれども、当時、北海道というところは〔基地が〕できたばかりでたくさん人が行ったでしょう。そのために官舎なんかが不足していました。それで、一戸ぶんの予算で二戸作るようなことをやったのですね。だから、「曹」の官舎なんか、六畳と三畳ぐらいの官舎が並んでいるわけです。そういうところを見て、これは隊員の処遇改善というのが必要じゃないかというようなことを皆さん言っていました。そのときにたまたま、その小さな官舎でソニーのカラーテレビの十三インチを見つけまして、盛田さんが喜んでいたのを覚えています。

盛田さんは、それ以後、自衛隊のためにいろいろ努力してくれました。例えば『民間防衛』というスイスの国防省が出した本を、原書房で出版してもらい、各方面に配ってくれたりしました。それから、飛行艇なんかは、これは優秀だから日本の技術として世界に売り込みたいから見に連れて行ってくれというので、岩国まで一緒に行ったことがあるのです。その一緒に行ったときに飛行機がソニーの飛行機なのです。パイロットが大賀（典雄）さんなんです。岩国の基地は米軍の基地でしょう。だから民間機は降りられないのです。それで、愛媛の松山空港に行きまして、そこまで海上自衛隊のヘリコプターが迎えにきて、岩国に行き、そして飛行艇に乗って沖合いに行って、着水したりなんかそういうことをやりました。そんなことをやって、その後も盛田さんとは親しくしていただきました。私は、ここに出た方には本当によくしていただきまして、あとで猪木先生が防大の校長になるわけでしょう。

伊藤（隆）　診断の結果、いろいろ生かされたことがあるわけですか。

伊藤（圭）　いま読んでみて、生かされたというのは具体的には覚えていませんけれども、いろんなことが生かされているような気がするのです。まあ、割合に抽象的なことなのですけれども、技術研究開発のこととか、手当ての増額の問題とか。これは、私が広報課長が終わって人事課長になったときに、事故で死んだ殉職隊員の手当てなんかを大蔵省と折衝して非常に高くしました。そんなのは結局こういうのに基づいて。当時の警察官の殉職者は、国からの慰労金と同時に、その県やなんかの慰労金もあるわけです。そういうのを併せたぐらいのを弔慰金として国から出してもらうようなこともやりました。だから、そういった意味ではよくなったと思います。それから、施設の生活環境、いわゆる生活改善というのがその後の四次防なんかの一つの重点事項になってきていますから、いろんな意味で生きていると思います。それから、表彰制度なんて面白いのですけれども、功労賞みたいなものを作ったほうがいいと。これも作っているのです。面白いですね、あの「制服」の世界というのは、ああいう勲章みたいなのがないと諸外国と付き合うときに肩身が狭いみたいですね。略章みたいなものがないといかんらしい。それで、功労賞みたいなもの、勤続年とか、無事故でなんとかなんていうのをいろいろ略章みたいなのを作ってつけたりしました。そんなことになっているわけです。そういうのは割合に海原さんは冷淡でした。意味がないということで、よく言っていました。けれども、いろんなことで生かされたのではないかなと思っています。

伊藤（隆）　これはまったく中曽根さんの発意ですか。

伊藤（圭）　はっきり憶えていません。

河野　やはりその背景には、自衛隊もだんだん対外的な接触の場というものが実際に増えていて、そういうところに出て行くと、やはりほかの国の一般的な軍人さんと比べるとちょっとここがおか

しいんじゃないかなというところが幾つか出てきていて、それが一つそういった勲章とかそういうところになっていったという、そういうことなのでしょうか。

伊藤(圭)　いわゆる在日武官なんかとの集まりなんかがあるでしょう。そうするとみんな、アメリカ人とかタイとかシンガポールの人たち、みんな付けているわけですよね。で、自衛隊だけないわけです。これはまたなかなか難しい問題がありまして、〔総理府〕賞勲局あたりが文句を言うのです。日本は勲章がないでしょう。日本の勲章というのは、死んだときにお棺の上に飾るだけなのですよね。ところが、そういう略章というのは軽軽に作ってはいけないということを盛んに言うわけです。そんなことでだいぶ賞勲局あたりとはやりました。これは私が人事一課長になってからやったのですけれども。そんなことで略章を作ったのですけれども、海原さんは、そんなものは要らないと言っていましたけれどもね。

佐道　かなり極端な合理主義者でいらっしゃいますから。中曽根さんは、さっきパフォーマンスということをおっしゃいましたけれども、やはりあれほどのパフォーマンスをされると、全体として雰囲気が変わるというか、明るくなったとか、そういう感じは。

伊藤(圭)　それはあります。私は割合に身近にいたものですからパフォーマンスという言い方をしましたけれども、非常に端的な言い方をすると、中曽根さんという人は〝富士山のような人〟です。富士山というのは、眺めていると実に美しいでしょう。私なんかが申し上げると僭越なのですけれども、私はある意味では中曽根さんからずいぶん利用されたと思っているのです。例えばこういう「診断する会」でも、全部私がやりましたから。これは〔記者〕クラブにも公表して、非常に評判がよかったです。それで、中曽根さんがこれに我が意を得たのかどうか知らないけど、私が広報課長を終わって人事一課長になったあとで、『防衛白書』を出すわけです。そのときの執筆を私に言うわけですよね。私はもう広報課長を辞めているのに、と思ったのです。そういう点は、なかなかこの人はうまく利用する人だなという感じはしました。

佐道　第一回目のあの『国防白書』は先生がお書きになったのですか。

伊藤(圭)　あれは三章にわたっているでしょう。第一章は最初から私が書いたのです。第二章は防衛局で書いたのです。防衛力整備の関係で。第三章は私の後任の広報課長が書いたのです。ところが中曽根さんが気に入らないわけですよね。三章を書き直せと言われて、僕は三日間市ヶ谷会館に泊まり込んで書かされたのです。だから極端なことを言うと、最後のなんていうのは三日間ぐらいで書いたのです。

佐道　そうすると、全体の三分の二は先生がお書きになった。

伊藤(圭)　そんなことになりますね。

佐道　そうですか。これは、もういっぺんきちんと読み直さないと。

伊藤(圭)　しかもスタッフなんか誰もいないのですからね。一人で書いたのですから。それに比べると、今は、一年かかって、六人か七人でかかって書いているから。

佐道　閣議了解になるわけですよね。

伊藤(圭)　だから私が自分で大蔵省に行って説得して。ああいうのは、閣議に出すためには、大蔵省あたりがいろいろ文句をつけるものですから、まず大蔵省の官房長のところに行って話をし、それから外務省に行って話をし、そして閣議へ報告するわけです。

佐道　じゃあ、細かいところをいろいろすり合わせようとする時間もない。

伊藤(圭)　時間もなかったですけれども、大蔵省はさすがにいろいろ文句を言ってきました。大蔵省はすぐまた『防衛白書』の検討を手分けしてやるのでしょうね。それでいろいろやりましたけれども、それもみんな一人でやったわけですから。

伊藤(隆)　大蔵省が何か言ってくることというのは、金目のことに関わるようなことですか。

伊藤(圭)　いや、それだけじゃなくて、大蔵省というのは何でも言うわけです。

佐道　三次防のときの国防会議の議事録なんかを見ますと、本当に細かいことに注文をつけていますね。国防政策の基本的なことなどか。

伊藤(圭)　僕がびっくりしたのは、あれはあとで私が防衛課長の頃ですかね。F104を三十機追加生産するでしょう。航空自衛隊の人を連れて説明に行ったら、一番最初に質問するのが、「どうして航空自衛隊は飛行機が要るのですか」と。主計官が言うのですからね、もうがっかりしちゃって。そんなような言い方をしましたね。何でもかんでも文句を言うのですよ。

佐道　当時の『朝雲新聞』の中曽根さんが来たときの〔記事〕を読むと、前の年と新聞の作り方が違うというか、新聞の全体の雰囲気が凄く変わっているのです。

伊藤(圭)　あなたがおっしゃるのは、例の川柳を募集したことなんかもあったでしょう。

佐道　なんか、あれほど防衛庁長官がたくさん出てくるということはなかったと思うのですが。

伊藤(圭)　結局それは、記事になるようなことをするわけです。ただ、普通だと防衛庁長官というのは国会で答弁したりなんかするのだけど、そのほかのパフォーマンスが非常に派手でしたよね。部隊に行って隊員と晩ごはんを食べながらそこに泊まり込んだり。それはみんな、写真になると絵になるでしょう。

伊藤(隆)　やはり絵になることをやるというのは、今の小泉内閣もそうですけれども、非常に大事なことだと思いますけれどもね。

伊藤(圭)　特に政治家というのはそういうのが大事なのでしょうね。

伊藤(隆)　それができる人というのはあまりいないですから。

伊藤(圭)　いないですね。そういう意味ではあの人はやはりタレントでしょうね。

伊藤(隆)　ま、防衛庁としては非常によかったのではないでしょうか。

伊藤(圭)　そうですね。それは確かによかったです。あの人がやったことは、後に坂田（道太）さんがまた真似をして「自衛隊を考える会」というのをやるわけです。あのときもたまたま、「診断する会」をやった関係からか、またやらされましてね。審議官で。あのときは苦労しました。平沢（和重）さんあたりがなかなか報告書をうんと言わないので、それを説き伏せるのに苦労したりしまして。

　きょうは一応ここで、「診断する会」までにしていただけますか。というのは、この「よど号事件」なんかも、これまたいろいろ面白いことがあるのです。それから、韓国へ行ったときの話がまた面白い。これは金門島まで行っているのです。

伊藤(隆)　えーっ！

伊藤(圭)　金門島に行くのなんか、凄いんですから。

伊藤(隆)　全島要塞という。

伊藤(圭)　そうでしょう。しかも、行くときには高度五十メートルぐらいを飛んで行くのです。レーダーに捕まらないように。まあ、そういうのがいろいろありますから。そして、この次にこれと同時に三次防までのことをちょっとお話ししようと思います。

伊藤(隆)　データをちょっと少し。

佐道　そうですね。今度はちょっと揃えて、前もってお送りできると。

伊藤(圭)　一次防、二次防というのは海原さんから詳しくお聞きになったと思いますけれども、海原さんに言わせると、三次防以後はなっていないというのですけれども、ところがそうでもないんですよね。実際に見てみると、一次防、二次防の延長線上に三次防

があるわけで、例えば、海原さんが抽象的なことばかり書いていてけしからんとおっしゃるのだけれども、二次防だって一次防だって、〝骨幹的防衛力〟と言ったって何のことかさっぱり分からんですね。

佐道　具体的数字を外しちゃったりしたわけですから、ますます分からないですよね。

伊藤(圭)　いや、どうもありがとうございました。

〈以上〉

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第8回

開 催 日：2001年6月19日（火）
開催時刻：午後2時10分
終了時刻：午後4時10分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

河野康子（法政大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■万博・「よど号」・板門店

伊藤(圭)　今までの速記録を読んでみますと、周りの話ばかりで本筋を何も話していないような気がしまして。一次防から三次防までというのは、海原さんは作ったときの経緯とか全体像は話しておられますけれども、それを我々下の者がどういうふうに具体化したかということがないわけです。きょうは、広報課長の最後の頃とその辺をお話ししようと思ってそのメモを作ってきました。

伊藤(隆)　それは有り難いですね。

伊藤(圭)　一次防でやったことはどういうことをやったのか、二次防ではどういうことをやったのか、三次防ではどういうことをやったのかということをお話ししようと思って来ました。

伊藤(隆)　この前の残りが少しありますね。

伊藤(圭)　それが金門島の話になるわけですけれども。

伊藤(隆)　この前の先生のお話だと、大阪万博のところから残っているのかな。

佐道　「よど号事件」と、韓国、台湾の旅行が印象深いのでこれをというお話でした。

伊藤(圭)　そうでしたね。

伊藤(隆)　昭和四十五年の『第一次国防白書』のところまでは一応ざっとお話しいただけると、と思いますが。

伊藤(圭)　その『国防白書』なのですが、これはお話ししたのですけれども、僕のところにないのです。先生はお持ちですか。

佐道　そうですか。コピーを持っておりますので、今度コピーを一緒にお送りします。

伊藤(隆)　苦心の作を持っていないのですか(笑)。

佐道　第一号の白書というのはあまりないのですよね。図書館に入ってないところもけっこうあって。

伊藤(圭)　ないのです。ただ、第一号の白書の構成というのがその後ずっと続いているのです。あんなもの直せばいいと思うのですけれども、三日ぐらいでやったようなのがずっと生きちゃっているから、本当にまずいなぁと思っているのですけれども。

伊藤(隆)　よくできたということではないですか。

佐道　そうですよ。形を作ったということで。

伊藤(圭)　「防衛を診断する会」までやったわけですね。「防衛を診断する会」というのは、このあいだも申し上げましたけれども、今回私は報告書を読んでみまして、その後いろんな面で生きているなという感じはいたしております。あれはやはり中曽根(康弘)さんの功績なのでしょうね。おかげでずいぶんいろいろ使われましたけれども。

大阪万博が三月に始まります。大阪万博というのが私は非常に思い出深いというのは、直接は関係はないのですが、あそこでは、いわゆる国旗を揚げる隊員さんとか、通信の関係者とか、いろんな形で協力したのは確かなのです。一度私は家族連れで行ったことがあるのですけれども、もう一回行ったのが、各国の武官を連れて行ったのです。武官を連れて行くのは本来広報課の仕事ではなくて渉外担当参事官室の仕事だったのですけれども、どういう訳か知らないけれども広報課長が行ってくれというものですから私が行ったのです。

各国の武官を連れて行ったものですから、まず日本館に行きました。通産省や外務省にも連絡をとっておりましたから、日本館は全然並ばないですぐ入れて見せてくれました。次に各国のパビリオンですが、武官が全部セットしているものですから、全然並ばないでアメリカとかフランスとかも全部見たのです。これは非常によかったと思いました。あそこで、例の月から持ってきた石を見るので大変人が並んでいたのですけれども、全然並ばないで見ました。それぐらいなのですけれども、そういう意味ではいろんな協力

はしたと思います。

それから、あのときにアジア諸国の武官もいたわけです。アジアの国のパビリオンってあまり人気がないのですよね。それで各国の武官が我々の視察を非常に喜んでいました。日本人というのは極端に並ぶところは並ぶけれども、見ないところは見ないのですね。そういうような感じはありました。

次は「よど号」の事件なのですけれども、この事件に防衛庁は直接関係なかったのです。ただ、最後の場面で防衛庁が関係してくるのです。それは、ピョンヤンから羽田まで飛行機が帰ってきますね。その飛行機をレーダーでフォローしたのです。ですから、広報課からＮＨＫの記者が、いま帰りの飛行機がどこを飛んでいるというのを実況放送するのです。そんなことで協力しました。あれは大体朝鮮半島から出るとすぐ捕まるのです。二百海里からレーダーに写るものですから、すぐキャッチして、いま能登半島の上を通ったというように、そういうのをリアルタイムで実況放送しました。「よど号〔事件〕」ではそういう思い出があるのです。

伊藤(隆)　その頃レーダーはそれぐらいのあれ〔範囲〕しかカバーできない。

伊藤(圭)　大体二百マイル、だから四百キロですね。レーダーというのはそういうものでしたよ。

伊藤(隆)　今はそんなことはないでしょう。

伊藤(圭)　今はどうなんですかね。レーダーそのものはどうなのでしょうか。

伊藤(隆)　よくなっているんじゃないですか。

伊藤(圭)　よくなっているのかも知れませんね。

佐道　水平線の向こう側がどうのこうのという問題がありますね。だから常時空にいてカバーをするという話に。

伊藤(圭)　ただ、上のほうからならいけると思うのですけれども。

佐道　地上波からのやつだったら、やはりそんなには伸びないかも知れないですね。

伊藤(圭)　だからあの頃は二百マイルと言っていました。二百マイルというのは当時はあんまり公表できないとは言っていましたけれども。もっとも当時は米軍からもらったのを順次変えていく時期ですから。米軍からもらったのだから大変なものですね。朝鮮戦争の頃から使っている器材ですから。そんなようなことぐらいでした。

伊藤(隆)　ＮＨＫに協力したというのは、ＮＨＫに情報を流した〔ということですか〕。

伊藤(圭)　ＮＨＫじゃなくて、防衛庁の記者クラブに情報を提供しているわけです。テレビだけはリアルタイムでできるわけですから、ＮＨＫはそこから放送しているわけです。新聞記者は、いまどこを通ったって電話で新聞社に連絡していました。それは防衛庁しかとれないわけですから。

伊藤(隆)　レーダーを見せたというわけではないでしょう。

伊藤(圭)　防衛庁にはレーダーはありません。

伊藤(隆)　あ、防衛庁の話なのですね。

伊藤(圭)　防衛庁の中で広報課から放送しているわけです。レーダーは対馬あたりでとっているわけです。そのレーダーの情報が防衛庁に入ってくるわけです。それを広報課から放送していました。映像そのものは広報課にはありませんでした。航空自衛隊のオペレーションルームにはそれがあったと思います。

伊藤(隆)　そういう広報をする場合、どこまで公にしていいかということはどこが決めるのですか。

伊藤(圭)　あの頃はあまり規制がなくて、広報課長の判断でやっていました。今はずいぶんうるさくなったみたいですけれども。官房長あたりに言ったのかなぁ。とにかく放送したりするのは全部広報課だけでやっていました。

佐道　いい時代だったのですね。

伊藤(隆)　年表を見ていると、けっこう忙しいですね。

伊藤(圭)　そうなんですよ。そのあとの韓国と台湾の記者クラブの旅行がまた楽しい思い出なのですけれども、四月に行っているのですが、米軍の招待なのです。米軍が輸送機を出して、横田から金浦空港に行くわけです。

伊藤(隆)　それは日本人記者だけですか。

伊藤(圭)　日本人の記者、防衛庁の記者クラブ員。

伊藤(隆)　防衛庁の記者クラブですか。

伊藤(圭)　そうです。金浦空港に着いて、大韓航空のホテルがありますね。KAL本社の上のほうがホテルになっていまして、そこに泊まったのです。そこに三日泊まって、それからウサンというのですか、オサンというのですか。

伊藤(隆)　注意の「意」に……。

伊藤(圭)　あれじゃなくて「烏」というような。

伊藤(隆)　ああ、「烏山」ですか。

伊藤(圭)　あれは米軍の基地でしょう。そこへ連れて行ってくれたのです。あそこでスクランブルに飛び立つ飛行機の待機の状況を見せてくれたり。翌日は板門店にヘリコプターで連れて行ってくれて板門店も見せてくれて。それから、もう一つ近くにある監視所に行きました。そこへもヘリコプターで行って。確かあの頃、例のトンネルが発見された直後なのです。そのトンネルの奥までは行きませんでしたけれども、入り口の辺りを見せてくれました。掘っているのは明らかに北朝鮮のほうから掘ってきたような掘り方なのです。こういうのがあるというような話をしていました。

伊藤(隆)　こっちに口が出ているわけですか。

伊藤(圭)　そうです。最初のが見つかったときです。あのあと三本ぐらい見つかるんですね。その最初のときでした。

非常に面白かった経験が、一つは、私たちが行った途端に『朝鮮日報』か何かに、中曽根さんが韓国で騒動が起きたときには自衛隊を派遣するということを国会で答弁したということがでかでかと載ったわけです。そして、翌日、それが〝間違いだった〟というのがベタ記事で載っているのです。それはどうしてああいうことをやったのか分かりませんけれども、訂正記事というのは非常に小さいでしょう。最初の印象が非常に強いわけです。自衛隊が来るのだという印象を与えて、緊張感を与えるつもりだったのでしょうか。そういう事実があったのを憶えています。

それからもう一つは、米軍のバスで烏山とかいろんなところに行くわけです。板門店に行くのも、そのヘリコプターに乗るところまではバスで行くわけです。それでヘリコプターに乗って行くわけですけれども。その移動するバスに、ヘリコプターでもそうなのですけれども、全然わけの分からん我々みたいな黄色人種が三人ぐらい乗っているのです。米軍もそれを拒否しないわけです。誰だろうと思って、私はこちらから聞いてみたのです。「私は防衛庁の者だけど、あなたはどこの方ですか」と言ったら、「KCIAの者だ」と言いました。だからKCIAの者が三人ぐらいずっと付いてまわっているわけです。

私が防衛庁の者だと話したものですからいろいろ話をしてくれました。今から思うと、ああ、こういうものかなと思いましたのは、いま盛んに南北統一ということを言っています。しかし、あの頃も若い人たちは南北統一ということを言っているというのです。若い世代は、青少年は、どうして朝鮮半島が二つに分かれているのか分からないと言う。朝鮮戦争を知らない世代ですからね。どうして一緒にならないのかと言うので、韓国は〔北朝鮮のことを〕「北韓」というのですか、「北」の恐さを国民に教えるのが非常に大変だという言い方をしていました。

そのためには、こんなこともやっていました。どこかの村に北朝鮮から飛行機が飛んで来て撒いたというビラを私にも見せてくれたのです。朝鮮語だからハングルで書いてあるので分からなかっ

たけど、日本語をしゃべれる人ですから、こういうことだと言うのです。北朝鮮からのメッセージで、「南へ行って潜伏しているスパイよ決起せよ」という、そんなような文章だと言うのです。これは実際はKCIAが作ってばら撒いているみたいなのです。あとで私が大使館の武官に聞いたら、それはおそらくいろんな工作の一つだろうと言うのです。なぜかといいますと、よくそういう話を韓国軍が話しに来るのだけど、非常におかしいのが、ある村だけそういうのがばら撒かれて、隣の村へ行くと何もないと言うのです。だからあれは意図的にやっているのではないかと。これは武官の判断でしたけれども、そういう話をしてくれたりしました。

それから、今は韓国は繁栄していますが、あの頃は、相当いいかげんだなと思いましたのは、私たちがいる間に市営住宅で五階建てのアパートが壊れちゃったのです。新聞に大きく載って、市長が責任をとって辞めるわけですけれども。五階建てのアパート、市営住宅に鉄筋が入ってなかったのです。ひどいものだと思いましたね。そういう時代でした。

伊藤(隆)　これは汚職ですよね。

佐道　ソウルオリンピックの頃でもデパートが突然倒壊したりとかありましたよね。

伊藤(圭)　ああ、そういうことがありましたね。

佐道　橋が落ちたりとか。

河野　技術のレベルがまだ……。

伊藤(圭)　だけど、鉄筋が入ってないコンクリートの建物を造っていたというのが凄いなと思って。

佐道　やることもしかし(笑)。

伊藤(圭)　私が招待されました日本の大使館の武官の家なんかに行きますと、これは外人用のマンションなのですけれども、広くて立派なのです。一方ではそういうのを造っていて、一方では手抜きなんかを平気でやって。こういう国と付き合うのもなかなか大変だなというのが当時の印象でした。ただ、アメリカ軍は威張っていましたね。パトカーか何かをつけて、ほとんどノンストップで移動できるような状態でした。

それから、韓国の基地なんかも見せてくれたのですけれども、いわゆる国連軍の部隊というのが韓国軍の中にもあるのです。それは本当のエリートなのです。この連中は、敵が攻めてきたらすぐ米軍と共同してやるということだから、英語ができます。給料もいいのです。だけど、とにかくあの訓練を見ていると厳しいですよ。昔の日本の軍隊と同じです。ぶん殴ったりなんかして。「いや、凄いなぁ」と思いましたが、やはりそれだけ南北が緊張しているときだったのでしょうね。

それと、そのKCIAの人が言っていたのは、南北が仲良くなるのが非常に難しいのは、なんといってもとにかくその頃は朝鮮戦争が終わってまだ二十五年でしたから、国民の半分まではいかないかも知れないけれども、朝鮮戦争の悲惨な経験をした人が生き残っていると言うのです。この人たちが生きているかぎりはとても「北」は許せないという気持ちのほうが強いと言うのです。だから、最近統一問題が起きて、離散家族の再会なんかを見ると、戦争が終わって五十年も経ってなおかつこういう状況が続いているのかなという感じがします。そんなことがありました。

それから今度は韓国から台湾に行くのです。

■〝ショーウィンドウ〟金門島

伊藤(隆)　直接ですか。

伊藤(圭)　直接、韓国からそのままアメリカの輸送機で。台湾に行くと、やはり台湾というのはわりあい日本人に対しては寛容なんです。もう大歓迎なんです。まず台湾に行きますと国防省でブリー

フィングをしてくれて。まあ、韓国でもやってくれたにはやってくれたのですけれども、かなりおざなりだったのですが、台湾は物凄く熱心なのです。台湾の国防部主催の歓迎会なんかもやってくれました。これがまた凄い。将校クラブも立派なものがありまして、そこで、向こうの陸軍省の幹部が全部出席してご馳走してくれるのです。

それから、このあいだもちょっと申し上げましたが、金門島まで案内してくれたわけです。金門島に行くのは、この時は台湾の飛行機で行くわけです。台湾の飛行機で行って、レーダーにかからないように高度五十メートルぐらいでずっと行くわけですから。

金門島に行ってびっくりしましたのは、金門島そのものが完全な要塞ですね。しかし、もうあの頃は弾の撃ち合いなんていうのはやっていないのです。一週間のうちの、月、水、金は台湾から撃つ、火、木、土は中国から撃つと約束してあって。弾は撃つのですよ。撃つのだけれども、火薬を入れないで手紙を入れたのを撃っていました。しかしそれは恒常的にやっている。そのほかにやっていることは、声が届くわけですから、物凄く大きな拡声器で宣伝をやるわけです。向こうからもやったり。それが主でした。

金門島というところは、いわゆる台湾の〝ショーウィンドウ〟なのですね。だから物凄いですよ。地下壕のなかに劇場なんかもありますし、商店街なんかもありますし、農民なんかもいるのですけれども、みんな豊かなのです。どういうわけか知らんけれども、私どもを案内してくれて、老人ホームに行ったのです。それが、九十とか百〔歳〕の人がいるのです。清潔なところに悠々として生活している。こういう豊かな生活をしているということを向こうから逃げて来た連中に見せるみたいですね。そんなようなことで、びっくりするぐらい贅沢でした。

たまたま、案内してくれた将校が大連にいた人なのです。私が中国にいた頃に大連の実業学校にいた人で、私も大連にいたと言ったら非常に懐かしがってくれました。あの頃は、共産軍に行ったのと、それから蔣介石と一緒にこっちに来たのといたのでしょうね。大佐の人だったのですけれども、そんな人がいました。

それで、高度五十メートルぐらいで行きますでしょう。着陸すると、そのまますぐ壕の中へ入ってしまうわけです。山に穴が掘ってありまして、輸送機がそのまま穴の中に。

伊藤(隆)　壕になっているわけですか。

伊藤(圭)　壕です。そこで降りて。まあ、緊張していましたね。

佐道　何人乗りぐらいの飛行機ですか。

伊藤(圭)　とにかく行った人は皆乗れましたが、そんなに大きなものではありません。当時、おそらくアメリカから日本でもC46というのをもらっていましたけど、あんなようなものじゃないですか。四十人ぐらい乗れたと思いますから、そんなのだったと思います。

伊藤(隆)　行った記者というのは何人ぐらいなのですか。

伊藤(圭)　行った記者が、各社が一人か二人ぐらいですから、全部で三十人ぐらいでしたか。

伊藤(隆)　じゃあ、けっこうな数ですね。

伊藤(圭)　ただ面白いのは、『朝日』と『読売』が韓国しか行かないのです。台湾に行くと、今度は中国で取材ができないという。それで『読売』と『朝日』の記者は韓国から帰っていきました。ほかの人は皆一緒に行ったのですけれども。

それから、台湾の植民地政策というのはよかったという話ですけれども、実に驚きましたのは、食事なんかをするときに出てくるホステスがいるでしょう。これが日本語をしゃべるのです。二十歳ぐらいのが。びっくりして、「どこで習った？」と言ったら、「うちのお父さんもお母さんもお兄さんもお姉さんも皆日本語をしゃべる」と言うのです。それできれいな日本語なのです。当時はまだ日本と国交がありましたから大使館がありましたね。大使が言って

いましたけど、台北の町というのは、総督府なんかも残っていますから、昔の日本の風景があるんですよね。そうしたら、「台湾の人の気持ちの中に日本人の心が残っている」と言うのです。非常に礼儀正しい。そんなようなところがありました。だから日本人に親しみを持っている。特に大陸から来たのにやられているからかも知れないですね。

伊藤(隆)　それもありますよね。

伊藤(圭)　だから台湾の人たちは非常に親しみを持っている。そんなようなことで、面白かったです。

佐道　それは何日間ぐらい行ってらっしゃったのですか。

伊藤(圭)　全部で一週間かそこらです。ソウルに三日、台北に三日ぐらいです。

伊藤(隆)　その間にいろんなところに行かれるわけですね。

伊藤(圭)　今はなくなったのですか。その頃あった北投温泉なんていうのは、あれは昔の海軍の療養所だったそうですね。あんなところにも行って温泉に入りました。

伊藤(隆)　あそこは歓楽地になったんですね。

伊藤(圭)　そうそう、歓楽地でした。

佐道　町としては台北だけですか。

伊藤(圭)　そうです、台北だけです。

伊藤(隆)　基地はどこかご覧になったのですか。

伊藤(圭)　いや、台湾では基地はほとんど見なかったな。台湾では基地は見なくて、なんか知らんけど国防省が歓待してくれた記憶だけがある。基地というと金門島ですかねえ。あとは、普通の陸軍の基地とかなんかは見ませんでした。

　あのときに驚きましたのは、日本の防衛費がGNPの一パーセント行かない頃でしょう。ところが台湾は凄いのですね。あの頃予算の二割とか三割とか、三〇パーセントとか四〇パーセントでしょう。これでよくやっているなと思いました。だからまあ、盛んな頃だったのでしょうね。

佐道　今のお話に関連するのですけれども、中曽根さんの頃は「中曽根構想」をぶち上げられて。その前の四次防の議論段階から、三次防を大幅に拡張して日本が軍国化の道を歩んでいるんじゃないかといって内外からいろいろ批判を受けたという時期にもあったのですけれども、まさに中曽根さんのときには非常に大幅な軍備拡大であるということを言われた。特にアジア諸国から。アメリカからも反発があったというのが今いろいろ出ている資料にも書いてあるのですけれども。実際に韓国とか台湾に行かれて、日本の防衛の問題については向こうはどういうふうなことを。

伊藤(圭)　そういうことを言いませんでした。ただ、新聞なんかに中曽根さんの発言が出たりなんかするのは、日本の軍事力の増強に対して警戒しているということの表れだったかも知れませんね。台湾なんかは全然そんなことはありませんでした。

佐道　台湾はそうなのかも知れませんね。広報課長でいらっしゃって、日本の記者なんかは、四次防、きょうあとで防衛力整備のお話をいただきますけれども、中曽根さんの軍拡の問題とか、ちょっと論調を変えてきたとか、そういうことはご記憶ありますか。

伊藤(圭)　それは私もちょっときょう差し上げた年表を調べて分かったのですけれども、四次防の長官指示というのは四十四年に有田(喜一)さんが出しているのです。それを四十五年の一月に中曽根さんが就任されてから新しくまた構想を打ち出すわけです。あれは四十五年の中頃ですか。四十五年になってからでしたね。だからその「中曽根構想」が出た頃から日本の新聞記者もある程度警戒感を示しました。それから特に大蔵省あたりが嫌がったのです。金がかかるというようなことで。

伊藤(隆)　これは米軍が招待したのだろうと思いますが、韓国への招待はそこに米軍がいるわけですから分かりますが、台湾はどういう。

伊藤(圭)　台湾にも当時いたのです。米軍がまだいました。まだ全部引き揚げてなかったのですね。それから、いわゆる顧問団みたいなのがありましたから、そんなようなことだったと思います。

伊藤(隆)　行っている記者たちはどんな感想だったのでしょう。

伊藤(圭)　そのときのことを一番よく書いていたのが『産経』の千田さんという人です。この人は帰りの飛行機の中でも原稿を書いていましたから、あるいは当時の『産経新聞』あたりを調べてみるとその旅行の記事があるんじゃないのかと思います。私も新聞記者も、取材というよりはやはり、米軍が招待してくれたから多少物見遊山的な気持ちで様子を見に行ったという程度だったというのが本当でした。

伊藤(隆)　これは米軍の広報活動ということですか。

伊藤(圭)　ということですね。

佐道　板門店なんかは、当時あんまり見られない。

伊藤(圭)　見られないというよりは、板門店に行くときはやはり非常に緊張感はありました。ヘリコプターで着いて、板門店から十五分ぐらいのところにある米軍の駐屯地に降りるのです。そこからバスで行くのですけれども。バスで板門店の境界線の近くまで行くと、北朝鮮の監視所から写真を撮っているのが分かります。それから、あそこの境界線から絶対に前に出るなということを強く言われてまして、向こうからいろんなことをしかけられるというわけでもないですけど、話し掛けられたりなんかしても絶対に応じないでくれということは言われました。私なんかが降りて歩いていますでしょう。そうしますと、そのあいだも米軍がずっと監視に立ってくれるのですけれども、北朝鮮の兵隊が走り回って写真なんかを撮っていました。例の建物があったでしょう。あれが韓国のほうが立派なものができた。それで、まだ北朝鮮のほうはあんまりしっかりしたのができない頃でしたけれども、非常に緊張感がありました。だから、いわゆる境界地帯から出てきたときにはホッとしたような感じがしました。例の「帰らざる橋」なんていうのも遠くから眺めただけですけれども。

佐道　そういうのは日本の新聞記者の方はなかなかご覧になる機会はないから、いい経験になったんじゃないですかね。

伊藤(圭)　そうですね。その頃はあんまり行けなかったものですから、非常に喜んでいました。おそらく帰って何か書いていたのでしょうけれども、そんなに悪いことは書いていないはずです。

佐道　記事にちゃんと反映していればいいですけれどもね。

伊藤(隆)　書いたけど掲載はされないとか。

伊藤(圭)　それはそうかも知れません。

佐道　記者は深く感じるところがあって書いても。

■一次防でなにをやったか

伊藤(隆)　次は安保ですね。

伊藤(圭)　そうですね。それで、このあいだの速記のなかに、海原さんがファントム〔を主力戦闘機の新機種として採用すること〕を決めるときに〔その経緯を〕知っていたはずだということを私は申し上げていますけれども、あれは私の思い違いです。海原さんはファントムを決めるときにはもう国防会議へ行っているのです。だから、あれを決めたのを承認するときにいろいろ質問なんかはしたでしょうけれども、決めるときには直接やっていない。ただ、三次防のなかで三次防の期間内に新しい戦闘機の機種を決めて、整備に着手するという言葉が入っているのです。それについては彼はおそらくいろんな意見を言っていると思うのです。というのは、彼は当時官房長ですから。四十二年の三月十四日に三次防が決まるわけですが、その前に防衛庁の決裁文書が官房長を通らないはずがないのですから、必ず通るわけです。私は今でも覚えています

けれども、防衛局長の島田（豊、在任昭和四十年六月十五日～四十二年七月二十八日）さんとか担当しておった計画官の玉木（清司）なんていう人が官房長室の前で思い悩んでいるのです。これは本当にかわいそうでしたよ。

佐道　なんか目に浮かぶようです（笑）。

河野　想像できますね。

佐道　それをご覧になってあの海原さんが何もおっしゃらないわけがない。

伊藤（圭）　わけがないと思うんですよね。だから、自分が記憶ないというのは、「三矢研究」に忙殺されていたからかも知れません。

佐道　非常に臨場感のあるお話ですね。

伊藤（圭）　それから中曽根さんが〔防衛庁長官に〕就任されて、六月に「診断の会」の報告を提出して、七月に私は人事一課長に替わるわけです。ですから中曽根さんとの付き合いは短かったので印象は深くないのですが、確かその間に、猪木（正道）さんが校長になったと思います。

佐道　防衛大学校ですよね。

伊藤（圭）　そのときに私は猪木さんのところへ行っているのです。それは人事一課長の頃かも知れないな。

伊藤（隆）　広報課長として行くというのも変ですね。

伊藤（圭）　いや。

伊藤（隆）　そうでもないですか。

伊藤（圭）　というのは、猪木さんには広報課長のときに「診断する会」に出ていただいて、そういう関係があったから行ってこいというようなことだったのかなと。そこのところはこの次までに調べておきます。

それで、今度は一次防からの。

伊藤（隆）　ここにお書きの「安保自動延長」については何か（【資料4】参照）。

伊藤（圭）　これも私はあまり記憶ないのです。というのは、私は当時広報課長でしょう。一つ印象があるのは、最初のときみたいに何も問題はなかったなという印象しかないのです。というのは、直接私がそれにタッチしていないものですから。自動延長のために広報課長を五年間延ばされていたようなものですから。

佐道　そうですか。

伊藤（圭）　そうなんですよ。だって、広報課長を五年なんかやった人はいないわけですから、私はどうして五年もやらされるのかと思ったら、とにかく七〇年安保が終わるまでというようなことでした。それで、それが終わったものですから、「ああ、助かった」というような感じのほうが強いのです。自動延長でどういうやり取りがあったかなんていうのはほとんど記憶がないのです。だから、これは先生方のほうがむしろ、いろいろ新聞なんかを調べておられたらお分かりじゃないかと思って、教えていただきたいぐらいです。

佐道　さっきの猪木さんの防大校長は、昭和四十五年の七月九日です。

伊藤（圭）　九日でしょう。だから僕はその前に行っているんです。

伊藤（隆）　人事課長は七月ですよ。

伊藤（圭）　七月十日ですから。

佐道　七月九日着任ですから。

伊藤（圭）　だから、六月が終わってその直後ぐらいに行っているんですよ。確か中曽根さんが、「猪木さんに頼んであるから、おまえ行ってこい」というようなことで、行ったような記憶があるのです。

伊藤（隆）　頼んであるからというのはどういう意味ですか。

伊藤（圭）　頼んであるからというのは、防大の校長に就任をお願いしてあるからという意味でしょうね。

伊藤（隆）　確認をとってこいということですか。

伊藤(圭)　確認をとってこいというよりは、実はほかにも行く用があったのです。それはどうしてかというと、あのときに、終わったあとに参加してくれた先生方にお礼を持って行ったのです。お礼を持って行った金は、これは私もはっきり記憶ないのですけれども、確か松下幸之助さんが出したのではないかと思うのです。役所のお礼というのは少ないというのは分かるでしょう。それで申し訳なかったので、〔中曽根さんが〕「皆さんのところに持って行ってくれ」と言うので、私はそれを持っていろんな人のところをまわったことがあるんです。そのときに猪木先生のところに持って行って、京都に行って、そしてご苦労さんですけれども防大校長をお願いしますというので、猪木さんも自分が防大校長になるものですからいろんなことで防大のことなんかを訊かれたことがありました。私は最初に教育局で防大を担当していましたから、防大ができるときはこういうことでしたというようなお話をした記憶があるのです。だから私が頼みに行ったというよりはブリーフィングみたいな格好だったのでしょうね。

そこで、まず最初の長期計画なのですけれども、「第一次防衛力整備計画」と書いてありますけれども、ご存じのように防衛力整備計画というのは、最初はいついつまでにというのはなかったのです。ただ防衛力整備計画という名前で始まったのがこれなのです。これは海原さんも言っておられますけれども、二十九年に自衛隊が発足して、そして三十一年からの計画を始めるわけです。だからおそらく、二十九年に発足して三十年に入ったら久保さんあたりが命令を受けて五ヵ年計画というものに着手していると思うのです。そして、三十一年に防衛庁の案というのができたみたいです。これは直接私は知らないのですけれども、例えば教育関係なんかでどういうことを盛り込めばいいんだということを訊かれるので、行って説明したりなんかした記憶はあるのですが、計画そのものは私は記憶にないのです。ただ、これを見ると分かるように、防衛力整備計画というのは最初は三十一年から三十五年までの五ヵ年計画になっているわけです。

佐道　そうすると、ここで先生が「第一次」とお書きになった前にですか。

伊藤(圭)　いや、そうじゃなくて、「防衛力整備計画」というのが本当で、「第一次」なんて名前はなかったのです。「防衛力整備目標について」というので閣議の了解を得ているのです。それで最初の計画だけは、これは題名は「防衛力整備目標について」となっていまして、三十二年の六月十四日に国防会議では決定しているのです。閣議では決定じゃないのです。了解なのです。これだけは、最初のだけは閣議了解ですから、閣議決定より軽いのです。

その軽い理由というのは、これは私もあとで聞いたのですけれども、大蔵省が物凄く反対したのです。日本の予算というのはいわゆる単年度予算でしょう。したがって五年後まで予算を縛るというのに物凄く抵抗したのです。どうしてもそれを認めてくれないわけです。それで、とにかく三十一年から三十五年までの計画をずっとやっていまして、当時は海原さんが〔防衛局第一〕課長だったのですが、向こうの主計局のほうとやって、どうしても決まらないで、結局、何とかやらないといかんというので決まるのが三十二年の六月十四日になるわけです。三十二年の六月十四日になりますと、これは三十二年度の予算がもうできちゃっているわけです。だから三十三年からやって、三十三、三十四、三十五と、三年計画になっちゃうわけです。最初の二年間というのは単年度でやってしまうわけです。だから五年計画の最初の二年を切って三十三年から三十五年ということになっているわけです。そして名前も、「防衛力整備計画」というのではなくて、「防衛力整備目標について」ということで目標をまず出すわけです。

整備の目標が、「陸」が十八万、「海」が一二万四千トン、「空」が千三百機という、ただ大まかな数字だけが出ているわけです。そして

重点事項として、研究開発を一所懸命やる、それから装備を近代化しましょうということ。ま、古いものだけをもらって始めたものですから。それから、経済力を圧迫するようなことはいけませんというようなことですね。それから防衛産業を育成します。この四つぐらいが重点になっているわけです。

そういうような内容のことなのですけれども、そこで実際にやったのはどういうことかと言いますと、「骨幹防衛力の整備」なんていう言葉を使っていますね。これはどういうことかと言うと、米軍からもらって作り上げるものが軍隊であるということはもう分かったわけですね。戦車をもらい、艦艇をもらい、飛行機をもらいでしょう。そうすると、将来どういうことになっても必ず自衛隊として必要なものはこういうものだから、そのいわゆる骨幹になるような、基盤になるようなものを作っていこうというのがこの第一次防だったと思うのです。そのために十八万とかなんとか出ているわけですけれども、十八万体制というのは、最初から最後までこういうことを言って終わっちゃうわけですけれども。この考え方を作ったのは、私はおそらく久保(卓也)さんあたりが中心だったのではないかと思うのです。三十一年頃というのは米陸軍が急速に撤退していく時期ですね。ですからとにかく陸軍に代わるものを陸上自衛隊を中心にしていこうというようなことで、まず十個単位の戦闘単位を作ることになり、六個管区、四個混成団というものを作ったと思うのです。

「海」「空」については、やはりもらったもので始めるわけですけれども、まず「海」は、日本に潜在的に建艦能力はあったのですね。船を造り始めるのは昭和二十八年からです。そうして、三十一年になると潜水艦まで造り始めるのです。当時、設計図なんていうのは皆焼いちゃって公のものはないのですね。ところが川崎重工の当時の技師が自分の家に設計図を持って帰って隠しておったのです。そんなのを中心にして千百トンの「おやしお」というのを昭和三十一年から造り始めるのです。そんなようなことをやったのが一次防なのです。

ところが、一次防にはどういうことを目標にしてやるかというのがあまりなくて、ただ骨幹、基盤になるものだけを作っていこうというものですから、海原さんが大変ご自慢なさるのですけれども、大きな構想というのはないのです。その構想というのが出てくるのは二次防だと思うのです。

二次防も、実はこれも私は久保さんあたりから出た構想だと思うのですけれども、二次防では、防衛力の整備目標が、これは目標のところに作戦の指針と効果なんかに書いてあるのですけれども、整備の目標を、「通常兵器による局地戦以下の戦略に対処する実力」という書き方をしているでしょう。先生方もお読みになっていると思うのですけれども、通常兵器による局地戦以下の戦略に対処する能力を持つということだというわけです。ところがこれだって考えてみればまったく内容的には分からないわけです。抽象的で。これもあとでいろいろ問題が出てくるのですけれども。

その前に、実はいま私が説明しているなかで申し上げるのを忘れたのですけれども、一次防というのは三年間ですけれども意外にいろんなことをやっているのです。それを付け加えさせていただきます。三十一年から航空自衛隊は86Fの採用を始めているのです。そしてライセンス生産を始めています。三十四年度にF104の採用を決めているのですね。例のグラマン・ロッキードの問題がありましたね。ということは、とにかく航空自衛隊が発足して三年か五年ぐらいで世界でもっとも性能の高いジェット機を持つ決心をしているのです。これはやはり大変なことだったと思います。それから三十五年度になりますと誘導弾を入れているのです。現に予算化したのは海上自衛隊のターターという対空誘導弾ですね。これを予算化している。それから三十五年には、前にもお話ししましたけれども、あとで出てくる飛行艇の研究開発というようなこ

と。だから、研究開発とか装備の近代化、あるいは経済力との均衡、それから防衛産業の育成なんていう重点事項があるのですけれども、そのなかでやはり研究開発にもそういう芽が出ておったということ。装備の近代化では、F104とかタ―ターの導入というような芽が出ておったということで、三年間の計画だったのですけれども、長期計画を作っておった意味というのはその辺にあるのではないかなという気はするのです。ですからそれなりに成果を上げたと思うのですが。そこで出てくるのが「赤城構想」ですね。「赤城構想」で海原さんが大変憤慨するわけなのですけれども。

その「赤城構想」も、考えてみればそんなにめちゃくちゃな構想でもないのです。例えば国民所得の二パーセントぐらいは防衛費に充ててもいいのではないかというような感じですね。当時の世界の常識からいって、二パーセントぐらいというのはそう大げさなものではないだろうという感じはあったのでしょうね。それから、装備についてはかなり画期的な刷新を図ろうというような気持ちがありまして、この中に例のヘリ空母が出てくるわけです。そのヘリ空母が出てきたので海原さんなんかは非常に気に入らないところがあったのですけれども。誘導弾は、ナイキ、ホークに加えて、ボマークなんかが「赤城構想」ではありました。

「赤城構想」というのが目標とするのは、「陸」については十八万ですから二次防と同じでしょう。「海」が一六万四千トンです。二次防の目標というのは一四万トンぐらいですから、そんなに飛び抜けて大きいわけでもないですね。航空自衛隊はF104を七隊持ちたいと言うのですから、これだって特に機数を増やすというのではなかったと思います。

伊藤(隆)　何機ですか。

伊藤(圭)　何機ぐらいですかね。これはちょっと調べてみます。それから、例えばバッジ(BADGE)を持ちたいとか。バッジは現に二次防に入っているわけですから、そんなにでたらめな数字ではないのです。経費も一兆三千億円ぐらいなのです。二次防は実際にかかったのは一兆三千五百億ぐらいかかっていますから、そうめちゃくちゃでもないのですけれども、とにかくあまり事務的な検討をしないうちに公にしたということで問題になったのでしょうか。それで、たまたまそれの直後に防衛局長が加藤(陽三)さんから海原さんに交代するわけですね。海原さんは加藤さんに対する対抗意識がありましたから、もう一度見直すというようなことになったわけです。ただ、三十六年に何もしないと困るということで、三十六年の一月十三日に一応形式的に国防会議を開くわけです。そして十八万の陸上自衛隊を十三個師団に改編するということだけを国防会議で決めるわけです。

■日本の防衛力の限界と二次防の内容

伊藤(圭)　そんなことがあって、二次防に入るわけですけれども。結局二次防が決まるのが三十六年七月十八日ですから、半年間、これは村上(信二郎)さんという今の村上(誠一郎)代議士のお父さんが中心になって海原さんのもとで作ったのが二次防になるわけです。結局、最初の防衛力の整備目標というのがあって、今度は二回目の五年計画になるものですから、このときから「第二次防衛力整備計画」という名前に変わるわけです。第二次防衛力整備計画というのを三十六年七月十八日に今度は閣議決定するわけです。だから、このときにはやはり大蔵省もそれなりに折れてきたのでしょうね。それで、五ヵ年計画を立てて毎年度の予算で勝負しようというようなことになったのです。そのときに、おそらく「赤城構想」を踏襲していると思うのですけれども、防衛力整備の目標を、先ほど申し上げました「通常兵器による局地戦以下の侵略」に対するというもので、これがまたあとでいろいろ問題になるわけです。局

地戦〟とはどの程度のものなのか、誰も分からないわけですね。だけどこれは海原〔防衛〕局長が決裁した文書なのですけれどもね。

河野　「局地戦以下の」と言うときに、非常にお役人的言い回しかなと思いますけれども、例えば米ソではなくて台湾とか朝鮮半島とか、そういう具体的なことはなかったのですか。

伊藤(圭)　そこまで具体的なことはありません。まず核戦争はもう全然だめだと。だから核戦争はアメリカとソ連にお任せしましょう。日本の場合に可能性があるのは、朝鮮戦争のとき、釜山が落ちそうになったでしょう。非常に危ないことがあったでしょう。ああいうような事態が起きるかも知れない。そのときに耐え得る力。もう一つは、その頃日本に対して軍事力を直接行使し得る能力というのはソ連しか持っていないわけです。だからソ連が通常兵器で攻めてきたときに対抗できるもの。それも、一年も二年も準備してくるのではとてもだめだということなのです。あの頃の考え方で、今から考えると、あまり準備をしないでとにかくちょっかいを出そうということに対しては抵抗する力を持とうという程度の考えだったのではないかと思います。

伊藤(隆)　逆に言えば、できることしか書けないという。

伊藤(圭)　そうです。

河野　どこまでできるのかということですね。

伊藤(圭)　そういうことですね。実は、平和時の防衛力、それからその後の防衛力整備のときに、久保さんが局長で私が課長の頃も私は盛んにそれを主張したのです。日本の世論からいって、あるいは経済力からいって、できることをやるのが精一杯であって、あまり大きな目標を作ったって意味がないんじゃないかと言いましたけれども、久保さんは自分の〝久保理論〟というものを完結させたいという気持ちがありました。だから、日本に及んでくる可能性のあるものでわりあい蓋然性の高いのはこういう事態だから、それに対してはこういう対処をするというところまではなんとか作り上げたいというのが久保さんの思想だったようです。

伊藤(隆)　しかし実際にはできることを、逆に、これぐらいのことだったら想定、要するに攻撃そのものを日本が防衛できる範囲でこういう攻撃という。逆になるのではないですか。

伊藤(圭)　極端なことを言うと、日本に対して何かやろうと思ったら、まったく被害なしに占領はできないよ、何か抵抗するよということだけを相手に覚悟させる程度の意味かなという感じがするのです。

河野　メッセージ性を持たせて、誤ったシグナルは送らないと。

伊藤(圭)　そうそう。というのは、同時にある意味で非常に日本人はか弱いという感じがするのは、テポドンが一発来たときに皆びっくりしちゃったでしょう。そうすると、中距離弾道弾は沿海州に山とあるわけですね。あんなのが幾つも飛んできたら、今の日本人は何もしないですぐ手を上げると思うのです。だから、誘導弾とか何とかを使わないで、このあいだ北朝鮮の偵察船が来たようなときには追いかけていって捕らえるというような抵抗力を示すという意義というのが、日本の防衛力としては今のところは限界かなという感じがするのですけれども。

佐道　逆にこの当時ですと、海原さんのお話とか海原さんのご本とかを読むと、実際の自衛隊の力をあまり信用しておられない。

伊藤(圭)　信用していない。ただ、信用していないと同時に、彼は日本人は信用しているのです。沖縄戦ではないけれども、最後まで日本人は抵抗するだろうと。自衛隊はその中核にならないといかんというような気持ちは持っているのです。私はそれはちょっとあり得ないと思ったのですけれども。

佐道　あれほどものごとを合理的におっしゃる方が、〝郷土防衛隊構想〟をずっとおっしゃるというのは、僕は凄く違和感があるのですけれども。

伊藤(圭)　そうです。

河野　部内でもやはりそういうお声があったわけですね。

伊藤(圭)　いやいや、あったかどうかは分かりませんよ。だけど私はそう思っていました。満州の独立守備隊みたいになるのだというのですけれども、あの独立守備隊というのを私は知っていますけれども、彼らの意気込みと今の日本人とはまったく異質ですよね。

佐道　ずっとおっしゃっていますから。それで、この当時のいわゆる限定的な侵略に対して対応できるという戦力は、ただ実際に本当に本格的な侵攻があったら、これはもうお手上げだということが前提だと思うのですけれども。でも、少なくともそのくらいの目標を立てないと防衛整備計画は立てられない。そのためにもこの程度の目標は立てないといけないということもあったのかなと思うのですけれども。

伊藤(圭)　そうですね。割合に、海原さんは合理的な議論をなさる方ですけれども、戦車なんかについては、僕なんかは一個師団に六十両の戦車がどうして要るのかと思うのですが、それに対してはあまり強く非難しないのです。だって日本の国のなかで戦車が走るという地域は北海道ぐらいしかないでしょう。

佐道　まったくそう思います。

伊藤(圭)　そうすると、この辺にいる師団が六十両持っていたってしようがないわけですよね。

佐道　今もあの五〇トンもある九〇式戦車があんなに大量に要るとは私はとても思えないのですけれども。ヘリ空母は一隻たりとも許さないけれども、戦車は許すという(笑)。

伊藤(圭)　だから僕が局長になったときに「陸」に言ったのは、「戦車はどこに対してもとても説明つかないよ」ということです。だからもし僕ならこういう説明をすると言ったのは、日本はこういう状況だから要塞は作れないでしょう。だから、いざというときには戦車が海岸に並んで要塞になるんだと、そういう説明しかできないじゃないかと言ったことがありましたけれども。

伊藤(隆)　長い海岸線ですからねえ。

伊藤(圭)　ところが、長い海岸線ですけれども、主力が上陸してくるところというのはやはりおのずから決まるみたいです。例えば北海道のどことか、それから……。

佐道　九十九里とか。

伊藤(圭)　九十九里はありませんでした。日本海側だけです。それで私がびっくりしたのは、五年前にアメリカに遊びに行ったのです。サンフランシスコで観光バスに乗ったのです。モントレーまで行く観光バスです。あそこはハイウェイが通っているのですけれども、どういうわけか普通の道を行く観光バスがあったのです。海岸線をね。日本語の説明がついているからよく分かったのですけれども、ずっと行ったら、本当に荒涼とした海岸に木造のバラックが建っているのです。これは、今から五十年前に日本軍が攻めてくるかと思って駐屯地を作ったのだというのです。

河野　それがまだあるのですか。

伊藤(圭)　あるんです。もちろんもう廃屋になっていますけれども残っているのです。日本が攻めてくると思ってアメリカがそこに防衛線を作ったということが凄いと思うのです。日本は上陸されそうになっても何もやっていないでしょう。それこそ海原さんが慌てて高知かなんかで。

河野　ええ、資材がなくて。

伊藤(圭)　それだけでしょう。それが、アメリカは四一年にそれを作っているのです。いや、凄いなぁと思ってね。

伊藤(隆)　日本軍に対する過大評価が(笑)。

伊藤(圭)　過大評価です。だからパールハーバーが教訓になるわけですよね(笑)。

伊藤(隆)　過大評価と過小評価とあったわけですよ。

伊藤(圭)　今度は二次防になるわけですけれども、これは三十七

年から四十一年ですね。私が防衛課にいた頃、それから施設庁、広報課長になる頃なのですけれども、この間に二次防で目指したのは、「局地戦以下の武力行使に有効に対処する」というのがありますね。そこでもう一つあるのが、最初の一次防の骨幹防衛力の内容を充実する精強な部隊を作るというふうになっています。じゃあどういうことをやったかということでは、二次防では、旧式な装備品を更新して対空誘導弾なんかを導入する。それから新しい装備の運用研究を行うというようなことが謳ってあるわけです。

そこで何をやったかというと、この五年間というのは割合にいろいろなことをやっているのです。まず一つは、陸上自衛隊がL19というセスナをヘリコプターに変えているのです。ヘリコプターというのは当時日本で初めてなのです。日本にはヘリコプターはまだなかったのです。それが、L19というセスナをヘリコプターに変える。というのは、L19というのは何に使うかというと、その頃ですから、弾着観測飛行機なのですね。大砲で撃つでしょう。それを、少し行き過ぎたとか近いというのを連絡するために飛ばすのがL19なのです。それをアメリカからもらったわけですが、それをヘリコプターに変えているわけです。

伊藤(隆)　ヘリコプターのほうがいいのですか。

伊藤(圭)　ヘリコプターのほうがじっとしているから滞空するのにいいのではないですか。それから、ヘリコプターがもう一ついいのは、機動力があるわけです。人を運んだりなんかするのに、どこにでも降りられる。それはもう、L19に比べれば断然いいわけです。だから陸上自衛隊の機動力を増強するというような意味でも非常にいいわけです。それでヘリコプターの採用というのがあるわけです。同時に、このときに海上自衛隊もヘリコプターを入れるわけです。いわゆる対潜作戦のために。だからヘリコプターが入ったというのは航空の面では非常に大きな進歩でした。

伊藤(隆)　海上のほうは、ヘリ空母ではなくて陸上の基地からということですね。

伊藤(圭)　そうです、その頃はまだ。そのあとは護衛艦に乗せるというふうになっていくわけですけれども。それから、戦車は二次防のときに国産するわけです。六一式戦車。それまではアメリカからもらっていた戦車が初めて国産になった時代というのがこの二次防の時代なのです。同時に、小銃とか対戦車砲というのがあるのですよね。あんなのをみんな国産するわけです。陸上自衛隊の装備品のいろんなものを国産した時代なのです。

ところが、国産でもまたこれが失敗したのがあるのです。私は今でも覚えているのですが、昔は馬をつかって大砲、山砲なんかを引っ張ったでしょう。だんだん馬がなくなってくるのか、馬に代わる野砲を引っ張る小さなキャタピラの付いた牽引車みたいなのを開発するのですが、これが全然役に立たないのです。というのは、坂道なんか、馬だとどんどん登っていくけど、(キャタピラ付の牽引車は)道がないと登っていかない。それで失敗したのがあるのです。だけど、そんなこともいろいろ研究したのがあるんですよ。面白いでしょう。そんなことをやったのです。

「陸」では、このあいだに高射砲がホークになるのです。九十ミリの高射砲だったのですけれども、先生方はご存じかも知れませんけれども、我々の頃の高射砲というのは四百発に一発しか当たらないと言われた。それが、このホークだと二発に一発当たるのです。最初は、二個中隊分はアメリカからもらうわけです。だけど、もらったのはもらっただけかなり高くつくのは、「二十四時間待機する態勢をとれ」ということを言われて、最初はもらうことになるわけです。

海上自衛隊は、今までもらったPFですか、パトロール・フリゲート艦、あれをだんだん護衛艦DDに変えていくわけです。二千トンですね。それから先ほど申し上げましたように、三十一年度には「おやしお」という潜水艦まで造る。かなり近代化した時期なので

す。

伊藤(隆)　護衛艦というのは昔の巡洋艦みたいなものですか。

伊藤(圭)　駆逐艦です。デストロイヤー・デストロイヤーですから駆逐艦です。

航空自衛隊は、最後の年になるのかな、四十一年度に入ってくるようになるのですかな、バッジになるのです。バッジというのは、当時アメリカにはセイジというのがあったのです。「半自動誘導装置」というのですか。そういうようなものだったのですけれども、これは完全自動ということでバッジ。これは世界でも初めて作ったのです。このバッジができたあと、NATOがナッジというのを入れるのです。そういう意味では最先端を行っておったのです。それから航空自衛隊には、これは「陸」から持ってきたのですけれども、ナイキを入れるわけです。それから、三次元レーダーを国産し始めるのです。

伊藤(隆)　国産ですか。

伊藤(圭)　まだ研究開発ですね。その三次元レーダーの研究開発は海原さんが推進しているのです。三菱電機がやるのですけれども。当時は、レーダーサイトのレーダーは、回るのと、上下に動くのと、二つあるのです。それを一つにしてやるというのは非常に画期的な研究だったみたいです。

この二次防の目標が、「陸」は十八万人ですけれども、予備自衛官がこのとき初めて出るのですかね。三万人かな。それから、海上自衛隊は一四万トン。それから航空自衛隊が千機に減ってしまうのです。これは結局、アメリカからもらったジェット機の次世代の戦闘機を、ライセンス国産するようになるでしょう。F104になって〔一機あたりの価格が〕五倍にもなってしまうわけです。それで、これはとてももたないというので数を減らすというのが原因だったと思います。

この三次防のときに初めて五年間の予算の規模というのが出るわけです。二次防までは、予算の規模というのは実際には出ていないのです。

伊藤(隆)　結果だけですか。

伊藤(圭)　結果として出ているだけで、目標としては出ていないのです。二次防は出ていないでしょう。三次防になってからでしょう。ああ、そうか、二次防は出ているんだ。出ているというのは、平均百九十五億円と、それから二百十五億円の間で増やしますということです。百九十五億円と二百十五億円の間で増やしますということで。これは、基礎を三十七年度の予算においているのです。三十七年度の予算が確か二千八十五億円だと思いました。そんなところから出発しているのです。だからこのときにその規模が出るのですけれども、全体幾らという形では出ていません。ところが実際にこれを計算してみると、二百十五億円よりは多いみたいですね。結果的には一兆三千六百六十九億円になっているのです。最初の頃の計算では確か一兆二千億ぐらいを予定しておったみたいですけれども、この時期は四十一年までですから、物価がずっと上がった時期なのですね。

伊藤(隆)　この経費というのは装備だけの経費ですか。

伊藤(圭)　いやいや、全体の経費。

伊藤(隆)　人件費も含めて。

伊藤(圭)　人件費も含めて全部。それで、確か二次防に出てくると思うのですけれども、一ヵ月分の弾薬を持つということが出ていますね。一ヵ月分の弾薬といっても、誰も分からないのですね。それで、これがあとでいろいろ問題になるのですけれども、海原さんが言う一ヵ月分の弾薬というのと、「陸」「海」「空」が計算するのと違うわけですよね。それが最後まで揉めて、未だにまだ一致しない。

伊藤(隆)　海原さんのほうが多いわけですか。

伊藤(圭)　海原さんは多いだろうと言うのです。というのは自分

の重機関銃士をやっておった経験から、何分間しかないというようなことを言っていて。

河野　ああ、そのお話はありました。

伊藤(隆)　あれは何回もありましたよね。

河野　強調していらっしゃいました。

伊藤(圭)　それで、自衛隊もそうだというのです。だから十何分とか撃つとなくなっちゃうと。だけど、考えてみれば十何分続けて撃っているわけでもないんですね。

河野　やはり、想定されている場面が多少違う。

伊藤(圭)　非常に極端な場面をやるものだからああいうことになってしまう。彼が気に入らなかったのは、一ヵ月分の弾薬の備蓄の基準になるのを、こういうのを基準にしているのです。アメリカが海外で戦闘行動をするときに一日で補充するのは何発かというのがあるらしいのですね。それをもとに各幕が計算するのです。そうすると、海原さんにしてみれば、アメリカは全世界でやるのだからそれの平均値でやるのであって、日本の場合には違うだろう、それをちゃんとシミュレーションして出せと言うのですけれども、シミュレーションするにも、どういう状況で来るのか分からんですから、これはなかなか容易ではないのですよね。ただこの二次防で、これは案外出ていないのですけれども、そのほかにアメリカの供与を九百億円ぐらい期待しているのです。

伊藤(隆)　これはそのほかにという意味ですか。

伊藤(圭)　そのほかにアメリカの供与を九百億円程度期待するというのがあるのです。ところが三十八年からやめてしまったのです。池田(勇人)さんが、ギルパトリック(Gilpatrick,Roswell.L.)という国防次官補が来て「無償援助打ち切り」と言ったのを、そんなのはいいよと言って。だからこれは実際は九百億まで行っていないで六百億ぐらいだと思います。実際は一次防も千五百億ぐらいもらっているのです。

伊藤(隆)　先生は千五百億と書いてありますよ。

河野　千五百億円供与。

佐道　これは「赤城構想」。

伊藤(圭)　「赤城構想」だね。だから一次防はちょっと分からない。確か六百億ぐらいじゃないかなと思います。

伊藤(隆)　じゃあ、実質前と同じぐらい期待したということですね。

■三次防と研究開発

伊藤(圭)　もう一つ、誘導弾は、これも追加分から国産を始めるのです。ナイキ、ホークを四個隊ずつ持つわけですから、これは国産を始めるわけです。三次防になってから国産になるのですね。

伊藤(隆)　その国産というのはライセンス生産ですね。

伊藤(圭)　ライセンス生産です。

伊藤(隆)　その国産ということについても海原さんはなんかしょっちゅう(言及されていますね)。

伊藤(圭)　そうそう、非常に言うのですよね。国産じゃないというのは、それはそうかも知れないです。YS11だって国産だと言っていますけれども、エンジンはロールスロイスですからね。だから全部国産ではないですね。T1という富士重で作った練習機も、最初はエンジンは輸入しているわけです。あとではエンジンも国産化しますが。

　私が広報課長をやっている頃に三次防が決まります。その三次防は、さっき申し上げましたように、海原さんも直接はやっていないけれども決裁のときなんかはいろいろ検討しています。その三次防のなかで大綱では、「陸」「海」「空」別に載っているわけです。その目標とするのは、周辺海域の防衛力を上げるということ、地域

の防空能力と機動力。べつに特におかしいことはないわけです。「陸」「海」「空」の有機的協力体制というのは、総合的に運用しようということですから、これも統合運用だからそうおかしくはないこと。それから、特にこの頃は景気が好くなってきたものですから隊員の確保が難しかったので処遇改善とか教育訓練の充実。べつにおかしくない。それから有事即応。これは海原さんもよく言っていたこと。継戦能力というのは、日本はロジスティックの面が十分ではないものですから、立ち上がったときは非常に優秀だけれども持続性がないということを言われたのです。これは、特に海上自衛隊が米海軍と一緒に共同訓練をやると、最初の一日ぐらいは物凄く優秀だと言うのです。二日、三日たつと、例えば乗っている人数も、こっちは当時は隊員が少ないものですから交代要員がなかなかいないわけです。だんだん弱ってくるわけですね。そういう点の、いわゆる継戦能力と言いますか、持続性をもたせるということがこの頃は大きな問題でした。それから弾薬の問題はいずれにしてもある。この弾薬がどうして問題になっているかと言いますと、海原さんのような計算の仕方もありますけれども、同時に、ご存じのように、例えば船なんかを造るようなときに予算が削られちゃうわけです。そうすると、艦艇を造るときの魚雷を積む予算なんかも船の船体のほうにつぎ込んじゃうわけですね。だから、本来なら十発乗せていなきゃならん魚雷を六発ぐらいに減らしちゃっているわけです。そういうようなことをやったのですね。それで弾薬の補充ということが非常に大きな問題でした。

伊藤(隆)　後方支援体制といったって、日本は今度自衛隊ですから、海外で活動するわけではなくて日本の国内でやるわけですからね。日本国内が戦場になるわけですから、継戦能力というのはなかなか大変ですね。要するに、弾薬を補充するといったって。

佐道　ただ工場を作っていればいいという話ではないですしね。

伊藤(圭)　継戦能力というのは、この頃はむしろ交代要員がないというような意味が非常に強かったですね。昔は、海軍は一回航海に出ると三ヵ月間は戦闘行動ができるようなものを積んで行ったはずなのです。今の自衛艦というのは二週間たつと基地に帰ってこなきゃならんのです。それで継戦能力がないというので補給艦みたいなのを造っていくわけです。補給艦なんていうのはこの頃まだなかったですから。今の補給艦は、水も積んでいますし油も積んでいますから非常に大型になっていますでしょう。だから掃海艇がペルシャ湾に行くときもそれがついていく。掃海艇もほとんど寄らないで行けたでしょう。そういうのが継戦能力の一つなのです。弾なんていうのは、これはなかなか大変なんですよね。

佐道　海原さんの関係で言えば、本当はこれは海原さんにお訊きしないといけないのでしょうけれども、この三次防の大綱の一番最初に、「周辺海域防衛能力」という問題と、それからそのあとに装備の国産化を推進するという、これはお気に召さなかったのではないかなという気がするのですけれども。

伊藤(圭)　しかし、海原さんは周辺海域というのがいわゆる船団護衛とかなんとかのことを言っておられるとするならば、海原さんの時代だってそれはあったんですよね。一次防、二次防はサイパンから横須賀まで船を船団護衛するというような考えがあったのです。〝沿岸防備〟ということを盛んにおっしゃるでしょう。周辺海域の防衛能力というのをどう解釈するかということですね。いわゆる中曽根流に千海里全部をやるというと、これは海原さんの気に入らないところでしょうけれども、周辺海域というのは沿岸防備で、沿岸防備ということは、やはり国内で、例えば船が北海道から物資を九州まで運ぶとか、自衛隊員を運ぶとか、そういうことが自由にできないといかんわけですから周辺海域の防衛というのは必要になってくるわけです。周辺海域をどこら辺に置くかということでしょうね。

佐道　ただこれは一次防、二次防には入らなかった言葉なので。

伊藤(圭)　そうだ、入らないですね。入ってないのだけれども、実際は計画のなかでは出てくるわけですよね。いわゆる船団護衛という形で。あの船団護衛なんていうのは凄いんですよ。私は今でも記憶しておるのですけれども、P2Vを六十機国産したいということを国防会議に出して、河野(一郎)さんの反対で確か四十二機に削られます。六十機の計算というのはどういう計算をやっているかというと、サイパンから船団を護衛して横浜に着くまでの間、常時その船団の上にP2Vを一機飛ばしておくために必要な機数というのが六十機なんです。交代で行く。それが六十機というような計算が出ていました。あれはサイパンと日本の基地の両方に置いておくのかな。それで交代でね。そんなような計算でしたものね。

伊藤(隆)　サイパンに日本の飛行機を置けるのですか。

伊藤(圭)　いやあ、置けないけれども、日米共同体制ですからね。サイパンまではアメリカの船が守ってきてこっちは日本がやるときには当然使えるでしょうから、そんなような計算をしていたみたいです。

伊藤(隆)　「シーレーン」なんていう言葉になるとちょっとだめなんですね。

伊藤(圭)　だめなんです。だから、考えてみると船団護衛というのだってこれも相当難しいですね。一機ぐらいで見ておったってねえ。

佐道　本当にそうですよね。

伊藤(隆)　撃ち落とされたらお仕舞です。

佐道　一機ぐらいじゃできっこないですからね。

伊藤(圭)　結局、一番最初の頃に申し上げたかも知れませんが、宮沢(喜一)さんが総理を辞められてからだったかな、(ヘルムート・)シュミット(一九七四―八二年西ドイツ首相)が来たときに、「ドイツは五十万の軍隊でだいじょうぶなのですか」ということを言ったら、「それはやってみなければ分からない」とあっさり言われてがっくりしておったのを覚えているのですが、まさにそうだろうと思うのですよね。最近何かの新聞か雑誌で読んだのですけれども、ドイツだって条約で五十万以上持ってはいかんということになっているのですよね。ところが五十万全部兵隊が揃ったことはないのだそうです。ということはやはり、だんだん人的資源というのは先進国では減っているということでしょうね。中国とかああいうところは相変わらず多いのでしょうけれどもね。

伊藤(隆)　やたら数が多いわけですよね。

佐道　そうですね。あまり給料要りませんからね。

伊藤(圭)　あれは給料も要らないし、あんまり金も要らないのですよね。独力で畑は作るし、薬は作って売っているし、靴は作って売っているしね。

河野　そういうところと一緒に考えると、ちょっと難しい面がありますね(笑)。

佐道　戦国時代の兵とあんまり変わらないですね(笑)。

伊藤(圭)　変わらないですよね。それはやはり昔の軍閥の伝統があるんじゃないでしょうかね。

　それで、三次防には広報活動と民生協力というのが入っているわけですね。

伊藤(隆)　大綱のなかにちゃんと盛り込まれている仕事をなさったということになるわけですね。

伊藤(圭)　今度、主要項目が決まるのが四十二年になってからでしょう。このときなのですよ。担当者の話を聞くと、発表の前の前の日だと言いましたね。『朝日新聞』に抜かれたので急遽内容を組みかえた。これは考えてみるとおかしな話で、海上防衛力の強化といったら海上自衛隊に決まっているわけですね。このなかで入り混じっているといえば、どこなんだろうな。陸上防衛力の強化あたりのところに多少入っているのかな。

伊藤(隆)　輸送機？

伊藤(圭)　輸送機ね。これは空自なんですよね。ここら辺に入ったぐらいで、あとはあまり変わっていないはずなのです。これは、五十六隻四万八千トンでしょう。主要項目のなかに内容も書いてあるわけですね。これは三次防というのは比較的充足していると思うのです。調べてきたのですけれども、達成状況というのがあるのですよね。

三次防では、まず海上防衛力で五十六隻の四万八千トンになっていますでしょう。それに対して実際は四十二隻の四万八千トンなのです。トン数は変わってないのです。隻数は減っているのですね。それからP2Jという飛行機が六十機になっているのが五十八機ですから、ほとんどうまくいっている。HSS、これはヘリですね。これは対潜ヘリなのですけれども、三十三機の予定が三十二機なのです。防空能力でいきますと、ナイキも四隊になっていますしホークも四隊になっていますから、大体うまくいっているのです。防空能力の強化では、新戦闘機の採用が四十四年に決まっているのです。ファントムですね。

伊藤(隆)　あとは陸上ですか。

伊藤(圭)　陸上は大体こんなものだったと思います。私もフォローしていないのですけれども。

それから教育訓練体制。これはかなり力を入れたと思うのです。それから救難機。これは、訓練用の飛行機とか救難用の飛行機五十五機になっていますね。これもかなりいっていると思います。それから訓練支援艦。これは確か造っています。訓練支援艦というのは、例えば潜水艦の訓練に行くときの潜水母艦みたいなものとか、標的を引っ張る船とか、そんないろんなのがあります。それから研究開発ではT2なんかをやっています。

この三次防の一つの大きな特徴というのは、この頃は日本のまさに高度成長期なものですから、研究開発を思い切ってやっているのです。ですからこの三次防の期間に輸送機のC1の研究開発とT2、それから例のPS、これが完成しているのです。飛行艇ね。海原さんがよく言われるのは、C1というのは失敗機だというのですけれども、まあ、失敗機は失敗機だと思うのですね。T2は、あとで国産のときに海原さんはN156ですか、ノースロップ社の戦闘機がいいということをおっしゃいますけれども。私はこれはそれなりに意味があったと思うのは、C1というのは日本で初めて大型のジェット機を作ったのがこれなのです。それまでは単発しか作っていないのです。T1なんていう練習機は単発ですから。そういう意味では大型のジェット機を作ったのでは意味があったのかなという感じがします。T2は、超音速のジェット機というのはこれが初めてなのです。そういう意味があったのかなと。飛行艇はこの前申し上げた通りなのですけれども。三次防のときには「陸」「海」「空」ともあまり大きな変化はないのですね。内容の充実ということに重点をおいていったと思うのですけれども。

このときに総経費が二兆三千四百億で、最後に佐藤さんのところで決まるわけですけれども、そのときに上下に二百五十億円の幅を持たせるというのです。ある意味では三次防の時代というのが内容的にはかなり大きな進歩をした時期でもあるし、日本だからこういう無茶ができたのかなという気がするのです。

というのは、飛行機というのは大体三百機ぐらい作らないと費用対効果が出てこないのですね。日本では五十機ぐらいでどんどん国産するわけでしょう。だから例のYS11なんかも、百五十何機で打ち切っているでしょう。あれは、あのときに打ち切るのが一番赤字が少なくてすむというので打ち切ったのです。本当は三百機ぐらいは作らないとペイしない。ところがこのPS1にしてもT2にしても、みな数が少ないですからね。C1なんてどのくらい作ったのでしょうかね。

佐道　実際こういうのを作る日本における航空機産業なんていう

のは、ほとんど自衛隊〔機〕だけを〔作っているのではないですか〕。

伊藤(圭)　これは自衛隊〔機〕だけというより、大体各飛行機会社の七割から八割が自衛隊の飛行機でした。自衛隊で非常に困ったのは、日本には航空機製造会社が多すぎるのです。だからどこかに仕事をやってなきゃいかんでしょう。そのために機種を選定したり、なんだか逆のような。いわゆる産軍癒着というようなことがありますけれども、会社をつぶさないために何かを作らなきゃならんという、変な脅迫感みたいなのを感じたこともありました。

伊藤(隆)　やはりある程度の飛行機の数を稼がないとペイしないわけですね。だけど輸出できない。

伊藤(圭)　ペイしないというのは、会社は損しないのですよ。それは予算がつきますからね。

伊藤(隆)　でも、一機が物凄く高くつくわけでしょう。

伊藤(圭)　普通なら、例えばアメリカなんかだったら十億ぐらいで買えるようなのを日本では二十億ぐらいで買うわけです。そうすると機数をたくさん買えないわけです。よそには出せませんからね。

伊藤(隆)　それがよそに出せれば機数をたくさん作って単価が安くなるということですね。

伊藤(圭)　可能性はありましたね。というのは、例えばインドネシアなんていうのは島ばかりのところですから、飛行艇なんていうのを少し小さくしてもっと安くすると、かなり欲しがったみたいですものね。

佐道　そうですよね。救難活動専用ということで出せばなんとかなったと思いますけれどもね。

伊藤(圭)　それから、これはご存じかも知れませんけれども、航空自衛隊が発足した当時の一番最初の初級練習機なのですけれども、「メンター」という練習機があるのですよね。そのメンターなんかも賠償としてフィリピンに四十機ぐらい持って行っていますね。

佐道　航空会社はそうやって数が多いということですけれども、造船なんかはどうなのですか。

伊藤(圭)　造船は、私が〔防衛〕局長の頃、造船の受注が減ってきたのかな。それで非常に自衛艦を欲しがりました。そのときに、自衛艦というのは予算が少ないから儲けが少ないということを盛んに船会社が言うのです。そんなに儲けたいならやめたらいいじゃないかと言ったら、やめないと言うのです。というのは、自衛艦を造っているということはよその国から注文をとるときのステータスになるというのですね。軍艦を造っているというのは技術があるということになるらしいのです。実際、自衛艦というのは〔建造に〕三年も五年もかかるのです。予算が少ないものだから何年間も。だから船台を三年も五年も占領しているわけです。そうすると、タンカーなんかをどんどん造ってやったほうがいいものだから非常に損するという。それならやめたらいいと言うのだけど、やめないのですね。ここで造っているということによって注文が入るのだというようなことを言っていました。そんなことがあるのではないでしょうか。

海原さんは「日本の技術というのはだめだ」とおっしゃいますけれども、例えばアメリカの民間航空のボーイング社の747の部品でハニカム(honeyccomb)という、蜂の巣みたいになっていて中を空洞にして軽くする技術なんかは日本でいち早くやっていましたからね。だからそういう技術を身に付けるのは非常に早いのではないでしょうか。そういうのを作って、非常に厳しい検査をやっていて、アメリカの検査官が来てびっくりするというのです。こんなに検査をしたらアメリカの飛行機の部品会社は皆失格すると、そんなことを言っていたことがありました。

伊藤(隆)　海原さんが一貫して言われていたのは、日本の技術水

準は非常に低いと、もう話にならないというような。

伊藤(圭)　これは私はしようがないと思うのです。戦後十年間、飛行機は作っちゃいかん、戦車は作っちゃいかんでしょう。それで海原さんが自衛隊を発足した当時技術が劣っていたというのはしようがないと思うのです。

伊藤(隆)　日本の産業そのものに、非常に技術水準が低いのだという言い方でしたね。

伊藤(圭)　その頃は日本の製品が安かろう悪かろうという時代でしょう。それが安くて良くなっていくのですからね。それはやはり軍事産業の部門でもだんだんそういうふうになっていくわけですよね。

佐道　この研究開発費は、C1とかT2とかを開発している会社に与えるわけですか。それとも防衛技術研究所。

伊藤(圭)　両方なのです。予算がついて、防衛技術研究所が全部やる能力がないわけです。

伊藤(隆)　作るまでいかないでしょう。

伊藤(圭)　結局会社と一緒になっている。だから、最初のP2Vを作るときなんか、これは全部会社が作っているのです。私はあのときにびっくりしたのですけれども、これじゃあ防衛産業というのは儲かるなと思ったのは、工場から何から全部作ってやるのですね。できたのを買うわけですよ。そうすると会社なんて全然損するところがないわけです。なるほど、これはいいものだなと思ったことがありましたけれども。

佐道　一度納入が決まると、そのあいだは安泰なんですよね。

伊藤(圭)　これは凄いのです。そのあいだどころか、あとのオーバーホールまで全部その会社がやる。

佐道　メンテナンスも全部ですからね。

伊藤(圭)　それは「航空機製造事業法」で決まっているのです。私が防衛課長になったときに、あれはP2Vだったかな、一回オーバーホールするのに一億円ぐらいかかるのです。私もこれは高いなと思ってびっくりして、別の会社に聞いたら、五千万でやると言うのです。やらせようと思ったらできないのですね。作った所じゃないと。ああいうのはやはりよくないですね。

佐道　それは通産が作った法律ですか。

伊藤(圭)　でしょうね。「航空機製造事業法」という。

河野　事業法行政ですね。

伊藤(圭)　それがまた変な話ですけれども、私もあとで三菱電機に入ってみて、エレベーターというのは半年に一回点検しなきゃいけないでしょう。あれは自由なのですね。どこでやってもいいのです。ですから今度は安くやるところに太刀打ちできないわけです。自分のところで作ったエレベーターはやはり自分のところの子会社でメンテナンスしたいわけです。ところがもっと安くするところが出てくるでしょう。そうすると困る面もあるみたいなのです。というのは、直したあとに具合が悪いと、エレベーターが悪いと文句を言われるのです。メンテナンスをする会社が悪かったのかどっちか分からなくなる。飛行機もそういう点もあるのかなという感じがしましたけど、いずれにしても一回とってしまうと十年以上はそれである程度食っていけるわけです。

佐道　飛行機はそうでしょうけれども、戦車とかトラックとかたくさんありますよね。そういうのは自由ですか。

伊藤(圭)　というけど、例えば戦車なんかを造っているのは三菱〔重工〕しかありませんから三菱でしょう。それから自衛艦は、これはどこでもいいようなものだけれども、日本は貧乏なものですから、一つ艦を造るごとに新しいアイデアで少しずつ変えていくわけです。そうすると自分のところで造ったものは自分のところじゃないと分からないようなところが出てくるわけです。例えば二隻とか同じような同型艦というのは造りますけれども、すぐ変わるわけです。だから、私が人事一課長をやっているときにある意味

でかわいそうだと思ったのは、船が全部一艦ごとに少しずつ違っているので隊員が危険にさらされることがあるのです。ここに立っておれば安全だと思っているところにいたらぶっ飛ばされたりなんかすることがあるのです。前の船ではここは安全地帯だったけど、次の船では安全地帯ではない場合があるのですね。

佐道　アメリカなんかだったらかなりの隻数ほとんど同じものを造っているのですか。

伊藤(圭)　それはもう、アメリカだって旧帝国海軍だってそうですよ。同じものをかなり造るわけです。ところが、いま日本は数が少ないものだから、一つごとにいろいろ考えていくわけ。それだけに高くもなるのでしょうね。

佐道　弾薬とかこまごました部品の共有化とか共通化とかそういうのは。

伊藤(圭)　これはアメリカと大体同じだったのではないかな。

佐道　ＮＡＴＯ規格に合わせるとか、そういう。

伊藤(圭)　ＮＡＴＯ規格なのかどうか知らないけど、アメリカの規格がありますよね。そんなのに合わせていましたよ。だから日本だけというのはあんまり造っていなかったような気がします。

伊藤(隆)　それは共同作戦をやるのにまずいでしょう。

伊藤(圭)　もともとアメリカからもらった弾を撃っていましたからね。

伊藤(隆)　あれは弾付きでもらったのですか。

伊藤(圭)　いや、弾付きって、日本に米軍の弾薬庫があって弾を貯めてあったでしょう。例えば江田島なんかにもありました。あんなのを皆くれるわけです。

佐道　しかし、もらったやつはもう消化してしまうわけですか。

伊藤(圭)　ずいぶんありましたよ。私が防衛課長の頃もまだあったんじゃないかな。

佐道　じゃあ、訓練でも大事にしてあまり使わない。

伊藤(圭)　いや、かなり自由に使ったけど、ずいぶんありましたね。

佐道　やはりアメリカはふんだんに。

伊藤(圭)　もっともアメリカは、最初占領したときには三十万とかなんかいたでしょう。だからかなり持ってきておったのでしょうね。

佐道　火薬とかそういうのも、あまり長期だと劣化してしまって危なくなるとか。

伊藤(圭)　それもあると思いますけれども、いわゆる昔のものというのは割合持ちがいいのですね。徹甲弾なんていうのはいつまで置いても何ともないみたいです。ところが、ナイキとかホークとかああいう誘導弾になると大変なのですね。あれは二年たつと命中率が半分になると言うのです。そうすると直していかないといかんでしょう。だから、海原さんはおっしゃいますけれども、誘導弾というのはそんなに長い間備蓄できないのです。あれはどんどん使って新しいものを作っていかないと命中精度が落ちるのです。だから、これもなかなか難しいものだなと思いました。

伊藤(隆)　ずいぶん高いものにつくのですね。

伊藤(圭)　おかしな話ですけれども、沖縄が返還になりますでしょう。あのときにナイキとホークは沖縄に置いてあるのをそのままもらったのです。ホークは新しくオーバーホールをした直後のものだったものだから高いのですね。ところがナイキのほうはかなりたったのをもらったものだから物凄く値段が安いのです。結局それをまたオーバーホールしたりなんかしたのでしょうね。

佐道　沖縄なんていうところに長いこと置かれると潮風でだいぶやられて。

伊藤(圭)　でしょうね。特にナイキとかああいう誘導弾みたいな精密兵器というのはそうでしょうね。だからソ連の沿海州にあるＩＲＢＭですか、中距離弾道弾なんかだって、撃とうと思ったら発

射できないような(笑)。

佐道　発射してもどこに行くか分からない(笑)。

伊藤(隆)　やはり絶えずメンテをやっていなきゃだめでしょうね。

伊藤(圭)　それからこれは海原さんからお話があったと思うのですけれども、魚雷の調整なんていうのは難しい技術みたいですね。魚雷の調整で困ったのは、一度、私が課長の頃か局長の頃かはっきり覚えていませんけれども、タンカーが燃えて海上自衛隊が沈めたことがあったでしょう。あのときに急遽調整して持って行ってやったんです。そうしたら最初はなかなか当たらなかったのです。結局、調整が悪いものだから、下を通って行ったりなんかするのですね。だからなかなか難しいものでした。ずいぶん苦労したみたいですね。

佐道　なかなか沈まなかったんですよね。

伊藤(圭)　そうなんですよ。私はあとで当時の指揮官から話を聞きましたけれども、海軍の者にとって船を沈めるというのは非常に辛いことだと言うのです。やはり自分の分身が沈んでいくような気持ちだというのですね。戦争でもあれば何ともないのでしょうけれども、ああいうときに静かな状態で沈めるというのは非常に辛いことだということを述懐しておったことがありました。

佐道　ちょうど時間になりました。どうもありがとうございました。

伊藤圭一
オーラルヒストリー

第9回

開 催 日：2001年7月17日（火）
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時00分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

河野康子（法政大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

記録者：有限会社ペンハウス　矢沢麻里

■『防衛白書』の執筆と中曽根長官

伊藤(圭)　いまそこにコピーを差し上げましたが、靖国神社の参拝の問題があるでしょう。たまたまこれがあったものだから持ってきたのですけれども、A級戦犯を含めた千六十八柱の霊が法王庁に祀られているのだそうです。実はこれを海原さんが私に教えてくれたのです。海原さんは、よくこういうのをあちこちから探してくるのです。「おまえ、知っているか？」と言うから、「いや、知らない」と言うと、こういうのをコピーしてくれたのです。

　このなかに、品川のお寺がありますでしょう。「パウロ六世の約束が実現した」というところの二行目の終わりごろに、「品川にある真言宗醍醐寺派の別格本山・品川寺（ほんせんじ）」と書いてありますね。この品川寺というのは、私はいつかテレビで見たのです。

伊藤(隆)　真言宗のお寺ですか。

伊藤(圭)　その真言宗のお寺に戦犯を祭ってあるというのはいつかテレビで見たことがあるのです。海原さんがその後これをくれまして。一九七五年に、戦犯を祭っていた和尚さんは死んでいましたが、その息子さんがパウロ六世に会っているのです。日本では戦争で死んで戦犯になっている人がいるのだけれどもという話をしたら、ミサをやってくれるということになったのです。ところがパウロ六世が死んでしまうのです。その後にヨハネ・パウロ一世があとを継ぐのですが、この人も死んでしまうのです。その次に一九七五年に出した手紙に対する返事が今のヨハネ・パウロ二世から八〇年に来たみたいなのです。八〇年に来て、五年前の法王が約束したことを果たすというので行くわけです。そのときに、「千六十八の霊は五重塔の小塔に納められて、日航貨物便で運ばれて、五月二十三日、ヴァチカンに奉納された」と言うのですから、五重塔が行っていて、その中に七戦犯も入っているのです。だから、靖国神社で大騒ぎしているのですけれども、皆、ローマに行くとあそこで拝んでくるわけです。だから世の中は面白いなぁと思って。

伊藤(隆)　そうですか。これは小泉さんに教えてあげたほうがいい（笑）。

伊藤(圭)　これを教えてくれたのは海原さんです。実はきのうも海原さんに会って来たのですけれども、元気になったのです。元気になったのですけれども、このあいだもお話ししたように、やはり理性というのがなくなっているのです。きのうも私がたまたま行ったら奥さんと喧嘩をしているのですね。大きな声を出して口喧嘩を。「伊藤君、喧嘩をしているんだ」と言うのですけど、僕も喧嘩の原因なんか聞いてもしようがないから、「家内がいま注射をしていますから」と、すぐに帰ってきてしまったのですけれども。看護婦の話を聞くと、夜眠れるときは寝ておとなしいのだそうですけれども、昼間寝てしまって夜寝られないと大きな声を出すらしいですね。

佐道　体のほうはだいぶ元気になられたのですか。

伊藤(圭)　体は元気ですよ。

伊藤(隆)　だって、元気じゃなければ、そんな大きな声なんて出せないでしょう。

伊藤(圭)　意識もかなりはっきりしていますね。僕なんかが行くと分かるのですから。ただ非常に感情的になるのですね。

伊藤(隆)　何か読んだりしていますか。

伊藤(圭)　いやあ、読んだりしていないんじゃないかな。

伊藤(隆)　あれだけ新聞を読むのが好きな人があんまり読まなくなって困るとか、奥さんがこの前おっしゃっていましたね。

伊藤(圭)　これも雑談なのですけれども、このあいだ佐道先生から訊かれて変なことを思い出したのです。一飛行隊は何機かということを訊かれましたね。私も忘れていたのですが、防衛庁に行って、庁史室の島田という人が航空自衛隊の人なのです。彼に、「一飛

行隊って何機かな」と言ったら、定数が十八機だという。それで思い出したのですけれども、86Fのときには、定数が二十機です。そして、予備機が三機か四機かあるものですから、一個飛行隊というと大体二十三機か四機あったのです。これはオーバーホールするために。それが104Fのときにいっぺんに一機五億円になってしまったでしょう。それで定数を減らさなきゃいかんというので、理屈としては、性能が上がったから飛行機の数を減らしていいというので十八機になって、それがずっと今も生きているのです。ところが、考えてみれば、性能がよくなったのは事実だけど、向こうも性能がよくなっているのですね。だから、理屈はつけようだなぁというのを思い出したのです。

もう一ついろいろ読んでみて思い出したのは、先生方はご存じかと思いますけれども、防大生が毎年卒業すると、卒業した途端に何人が辞めたというのが新聞の記事になるでしょう。あれは義務がまったくないのです。だから自由に辞めていくのです。ところが防衛医大には義務があるのです。九年間あって、その九年間の前に辞めると金を払わなきゃいけないのです。その違いがあるのですけれども、防大ができた頃というのは、いわゆる職業選択の自由だから義務というのは課せられないというので、それが未だに続いているわけです。そういう問題をちょっと思い出しました。

もう一つは、防衛医大で医者を養成するわけですね。これは中曽根さんの指示でやったのですけれども。その頃は自衛隊の医者が足りなかったのです。ところが、今は医者が九〇パーセントぐらいの充足。ということは、お医者さんの世界というのは、職場というのが先輩の引きじゃないとなかなか行けないわけでしょう。防衛医大を出た人の就職先は自衛隊がほとんどでしょう。だから、ほかの大学へ行ったり、あるいはほかの職場の診療所とか、国立病院なんかにはあまり行けないのですね。そんなことで皆いるものですから、充足率も高くなったのでしょう。

それから思い出したのですけれども、先生方に前にお話ししたかどうか知りませんけれども、〝封建五者〟という言葉をご存じですか。これは新聞記者に習ったのですが、〝封建五者〟という言葉があるのです。これは、医者、学者、芸者、役者、新聞記者。これは新聞記者が自嘲を込めて話してくれました（笑）。部長なんかに睨まれたら即日替えられちゃう。その封建五者というのを思い出してね（笑）。

佐道　これはうまいことを言いますね。

伊藤(圭)　封建五者というと、何だろうと思うでしょう。この五者なんですよ。

伊藤(隆)　芸者もそうなのかな（笑）。

伊藤(圭)　役者がそうでしょう。

佐道　学者はそうですよね。

河野　おっしゃる通りですね。

伊藤(隆)　これは随筆のタネだな。

佐道　どこかで言いたくて（笑）。

伊藤(圭)　新聞記者というのは面白いことを言うなぁと思って。

新聞記者の話では、去年同窓会をやったでしょう。また今年もやるというのです。このあいだ、その打合せをやるからと言われていたのを、私はうっかり忘れてしまいました。その日に内田（一臣）さんという元の海自幕僚長が死んだのです。

伊藤(隆)　一臣さん？

佐道　亡くなりました？

伊藤(圭)　亡くなったのです。

伊藤(隆)　僕、知らなかった。

伊藤(圭)　それで私はお葬式に行こうと思っていたのです。お葬式に行こうと思っていたら、うちの孫が熱を出して、一人がおたふく風邪で寝ているからちょっと家に来てみていてくれと嫁に頼まれて、それでお葬式に行けなかったのです。そんなことですっかり

そっちのことを忘れて行かなかったのですけれども、「十月四日に決まりましたから」と後で電話をもらって、その封建五者を思い出したのです。

伊藤(隆)　でも、新聞記者だって相当もう年を取っているでしょう。

伊藤(圭)　もう年を取っていますよ。皆もう定年になって、このあいだ『朝日』の中馬(清福)という専務も辞めましたし、クラブにおった人で今も現役というのは、『読売新聞』の大阪本社の社長をやっている。

伊藤(隆)　そんなになっちゃったのですか。

伊藤(圭)　社長と、それから専務をやっている老川(祥一)という今の編集局長、この二人ぐらいですね。

佐道　かつての若手の記者も、今は。

伊藤(圭)　そうなんですよ。皆さん方が新聞なんかでお読みになった篠原(宏)とか堂場(肇)なんていう人は皆死んでしまいましたしね。

伊藤(隆)　そうですね。

伊藤(圭)　まあ、そんなことで。佐道先生、これ本当にありがとうございました。僕はこれをいただいたおかげで、「あ、これなら話せるな」と思いました。この年表がなかったら、もう全然忘れていますね。この年表を繰りながらいろいろまとめて、人事一課長時代というのを持ってきたのですけれども。

　考えてみると、いかに人間の記憶というのはでたらめかということが分かるのは、三人の幕僚長の人事をやったなんて偉そうなことを前に言ったでしょう。幕僚長の人事というのは私は全然やっていないのです。見てびっくりしたのですけれども(笑)。その航空幕僚長の人事があったのは、私が防衛課長になってからなのです。海上幕僚長の人事というのは、私が人事一課長になる十日前に内田さんがなっているのです。だからこれもやっていないわけでしょう。陸幕長の人事は、私のあいだはもちろんなっていない。私がやっているあいだにやったことというのは何もないのですね。「三島事件」のときは僕が人事一課長ですから、事件のあとに益田(兼利)さんが辞めることになったでしょう。そのあとに誰を持ってくるかというときに中村龍平を十一師団長から持ってきたのが、それが結果的に彼が陸幕長、統幕議長になるのですね。そんなことが重なってしまって。

　それと、空幕長の人事というのは私が防衛課長になってから半年後なのです。当時の白川(元春)副長が私のところに相談に来たのです。おそらく、人事一課長が私のところに誰がいいだろうかと相談に来て私が石川(貫之)というのを推したので、そのことを聞いたのでしょうね。植村という人を空幕長に推したいと思っていたら、私が反対しているとどこかから聞いたのですね。私のところに白川さんが来て、「あなたは植村というのを幕僚長にするのに反対しているそうだな」と言うから、「私は意見を聞かれたから反対だと言った。その理由はこうだ」と言って話したのは、やっぱりこういう非常のときには訳分からんでもいいから勇ましい人がいいじゃないかと。それは、石川貫之さんはパイロットですから、あれのほうがいいんだというようなことを言ったら、「分かった」と言って。それで、「白川さん、あなたが副長で留まって補佐すればいいじゃないか」と言ったのが頭にあったものだから、だから幕僚長の人事もやったというふうに申し上げて、大変申し訳ありませんでした。

佐道　いえいえ、はっきりしてきてよかったです。

伊藤(圭)　本当にはっきりしてきました。とにかく、これを見ておって、人間(の記憶)というのは全然でたらめだなぁと思いました。

　その人事一課長時代というのは、ここに書いてありますように、四十五年七月から翌年四月一日までです。このあいだというのは、私はあまりたいしたことがないのです。それで少しその前のとこ

ろから書いています。

まず、F104Jが金沢に落ちた話をこのあいだしましたね。これはなぜ書いたかというと、このあいだたまたま北海道で変な事故があったでしょう。引き金を引かないのに弾が飛んでいったという。だから、飛行機なんていうのはときどき変な事故があるという例の関連で申し上げようと思ったのです。これは雷にぶつかっているのです。飛行機が雷にぶつかるなんていうのはちょっと考えられないでしょう。しかも、避雷針がついているわけですから。物凄く大きな雷でもあったのでしょうかね。今度の場合に非常によかったのは、弾が出て行ったけど人に危害を加えていないでしょう。金沢のときは人が死んでいるのです。しかもパイロットは飛び出て助かっていたのです。やっぱりジェット機というのは、ある意味では、私が乗っていたプロペラ機なんかに比べると、人間が制御できないような場合もあるということを感じたものですから、ちょっとこれを最初に書いたのです。

そのあとに、調べてみると、四十五年になってすぐ、中曽根さん〔の長官就任〕が一月ですね。そして、佐道先生からいただいた年表で分かったのですけれども、あの人はすぐ十七日に、「三相会議」という、当時の外務大臣と防衛庁長官と官房長官の会議を月一回やるということを提案して、やり始めるのです。これを彼は気取って「三相会議」と言っていました。それをまずやります。そして、二月から例の「防衛を診断する会」をやって、これを六月までやるわけです。

それを一方でやっていながら、そのほかに、彼は三月から自分でいろんなことを言っているわけで。それがこれに出ているわけなのですけれども。「これからの日本の防衛」というので、これは中曽根さんが自由民主党でしゃべっているのです。これで中曽根さんの考え方というのは出ています。その次に、「自主防衛五原則」というのが出ています。これは、中曽根さんが幹部会同をやるのですね。防衛庁では高級幹部会同というのは例年秋にやるのです。ところが、調べてみたら、これを中曽根さんは三月にやっているのですね。就任してすぐにやって、この「自主防衛五原則」というのを出すわけです。とにかく自分の国は自分で守る。それから、ほかの政策との調和を保ちながらやるということ。それから文民統制をやって、〝非核中級国家〟というのですね。非核三原則の。最後に日米安保をやると。これをもとにして国防の基本方針を改正するということを言い始めるのです。

そのほかに、四月にソ連がオケアン演習というのを世界的規模でやるわけです。初めてこっちに〔ヘリ空母の〕ミンスクなんかも持ってきて、そして太平洋でも演習をやるのです。ソ連が軍事力を誇示する時期だったのです。そんなようなことで中曽根さんがいろいろおやりになった。六月二十二日には安保条約が自動延長になるわけです。このときは政府声明でやっているみたいです。政府声明でやって、それが終わって七月十日に私が人事一課に行くわけなのですけれども、この年表を見ると七月一日に内田さんは既に海幕長になっているわけです。

伊藤(隆)　中曽根さんはこういう演説や何かを自分で書くのでしょうか。

伊藤(圭)　そうだったのではないでしょうか。私はよく知りませんけれども。この当時は、私は直接中曽根さんとはあまり話をしていないのです。ただ、「診断する会」がありますね。そこのときなんかにこういう話をしておったのでしょうね。全然記憶にないのですけれども。ところが、かなり影響を受けておったのではないかなと思うのは、私が人事一課長になって十月に最初の『防衛白書』が出るわけです。この『防衛白書』の〔第〕一部は私が書いたのです。この〔第〕一部はかなり長いものなので、これは三日で書いたものではないのです。やはり一ヵ月ぐらいかかったのでしょうか、何度も書き直して。この〔第〕二部というのは防衛局で書いたのです。

そしてこの〔第〕三部が、大変申し訳ないのですけれども、私が全部書いたわけではありませんで。これを三日でなんか書けるわけがないのですけれども。その〔第〕三部のなかで私が書いたのは、最後のところ、「世論と防衛」というところですね。長官はこれが気に入らないのです。広報課長が書いたのをすぐ書き直せというので、このところを、これは本当にその三日間で私一人で書いたところなのです。申し訳なかったのは、何でも全部自分が書いたようなことを言いましたけれども、それは間違いなのです。

それから、これは私が書いたものじゃないんですよ。この全体の統括をしておったのは、当時の高瀬（忠雄）という審議官なのです。その人が〔第〕一部は私に書けと言われて、それで〔第〕一部は私が書いています。〔第〕二部は防衛局が担当するからということで、防衛局で書いたのです。そして〔第〕三部を私の後任の広報課長が書いたのです。その〔第〕三部が差し戻しになったものですから、慌てて私がそこを書いたわけです。

佐道　書き直しを命じられて「世論と防衛」というのを伊藤先生がお書きになったわけですけれども、それは中曽根さんから、こういう方針で書き直せということが。

伊藤（圭）　いや、そういうのはないのです。

佐道　具体的な指示はなかった。

伊藤（圭）　高瀬という審議官が私のところに来て、「どうもこの『世論と防衛』が気に入らなくて、伊藤に書かせろと言われているからおまえが書け」と言われて、それでしようがなしに書いたのです。

伊藤（隆）　じゃあ、その前から中曽根さんはご存じだったのですか。

伊藤（圭）　これはあとでもお話ししますが、私が広報課長のときに中曽根さんが長官になって来たでしょう。それでしかも二月から六月まであの人がやった「防衛を診断する会」というのは全部私がやっていますから。

伊藤（隆）　じゃあ、その過程で、もうすっかり信頼が…。

伊藤（圭）　信頼があるのかどうか分かりませんけれども。それで、私は最初に一部を書けと言われたときに、まあ、その構想なんかは高瀬審議官を中心にいろいろ話し合うわけです。一部でどういうことを書こうかというので始まったわけです。それで、「現代社会における防衛の意義」というような格好で、おまえ書けというようなことで、「どうして俺がいま書かなきゃいかんの？」と言ったら、「中曽根さんからおまえに書かせろと言われた」と言うから、しようがなしに書いたわけです。二部は防衛局で書いて、三部は今の広報課長に書かせるということだったのです。そうしたら最後のところでだめということで、それでまた書かされたわけです。

私も何十年ぶりかに読んでみて、自分ながら、これは結局中曽根さんにかなり洗脳されているような感じがしました。ご存じのように、海原さんは軍事力そのものの運用とか組織とかそういうものには物凄く詳しい方ですね。だけど、軍事力というのが安全保障政策全体のなかでどういう役割を果たすかというようなことについてはほとんど言及なさらない方です。ところが中曽根さんは、海軍の少佐だった経験があるわけですけれども、彼はやはり政治家ですから、広い意味の安全保障政策というものを考えながら、軍事力というのはどうあるべきか、それで、〝非核中級国家〟なんていう彼独特の発想が出てくるわけです。それから、あとで問題になる「わが国を不沈空母にする」というようなことが出てくるのですけれども、そういう意味でやはり政治家だったのでしょうね。

私が自分で書いてこれをいま読んでみると、結局、かなり中曽根さんに洗脳された感じがするのです。中曽根さんに洗脳されながら、やはり「久保理論」というものにも私はずいぶん影響を受けているなという感じがします。ある意味では、中曽根さんがほかの政策との調和を保ちながらというなかに外交も入れていますね。普

通は、ほかの政策との調和というなかには、財政問題との調和ということが中心なのですけれども、外交を含めた安全保障というのを中曽根さんが言っています。そういう点は考え方としては妥当じゃないかなという気がするのです。

佐道　この渡していただいた資料のなかの国会の議論のなかの、「防衛と外交との一体性」ということですよね。本来でいえば、あたりまえといえばあたりまえということなのですけれども、それまでは、伊藤先生がおっしゃるように、財政面での配慮というのは確かにありましたけれども、防衛力とか軍事力とかは実は外交力とも非常に結びついたものなのだということを初めてはっきりと言ったのは中曽根さんが最初ぐらいじゃないかなという気がします。

伊藤(圭)　かも知れませんね。というよりは、やはり中曽根さんというのは重光(葵)さんの薫陶を受けているでしょう。

河野　改進党で。

伊藤(圭)　重光さんは外交官でしょう。あの人は降伏のときにも調印に行っていますし、このあいだちょっと新聞に載っていましたけど、アメリカへ行ってもかなりいろんなことを言っているみたいですね。だからそういった影響なんかもあって中曽根さんの発想のなかに外交というのが入ってきたのかなという感じがするのですけれども。

伊藤(隆)　そもそもさっきおっしゃった「三相会議」というのがそういう発想ですね。

伊藤(圭)　そうそう。

伊藤(隆)　しかし、これは事務方ではどこが。

伊藤(圭)　これは防衛局です。ただ、これも結局だんだん消えてしまったのです。

■海原VS中曽根―対立の真相

伊藤(隆)　消えちゃったのですか。

伊藤(圭)　結局、中曽根さんは張り切っておったのですけれども、当時の官房長官は誰だったのかな。あんまり乗り気じゃなかったのかも知れませんね。何回かやっているのですけれども。

伊藤(隆)　たぶん、外務省も嫌なんじゃないですか。

伊藤(圭)　外務省は嫌がっていましたね。

伊藤(隆)　安保は自分のところのだと思っているから。

佐道　さっきおっしゃった国防の基本方針改定というのは、今まで安保を主にして自主防衛は自助ということだったのを、それを逆にしようということですからね。これは、外務省は聖域に触れたということになることでしょうから。防衛局の防衛一課か何かが直接の担当…。

伊藤(圭)　だったと思います。

佐道　中曽根長官のときにはずっと続いていたのでしょうか。

伊藤(圭)　いやあ、私が防衛課長になってからはあまり記憶にないのですよ。

伊藤(隆)　防衛課長の時代はこういうふうな摩擦は全然ございませんでしたか。

伊藤(圭)　なかったような気がするのです。

伊藤(隆)　外務省との何か。

伊藤(圭)　私が防衛課長のときには外務省とは一緒にやったのです。

伊藤(隆)　それは個人ですか。

伊藤(圭)　あの頃は防衛局全体が外務省とは常に情報交換なんかをしていました。

伊藤(隆)　いい関係にあったわけですか。

伊藤(圭)　いい関係でした。それはやはり海原さんの伝統じゃないでしょうか。海原さんと安川(壮、元駐米大使)さんというのが一高時代の同級生でしょう、非常に親しかったわけです。久保さんは多少違いますが、海原さんの影響を受けたせいか、私は非常に外務省とは仲が良かったのです。防衛局長のときも外務省と一緒にやりました。私の後は、また別れていきますね。情報もあまり入って来なくなったようです。

佐道　やはり人によるということなのでしょうか。

伊藤(隆)　それはやはり何でもそうでしょう。幾ら会議体を作ろうが何をしようが、とにかく人と人の結びつき以外にないですね。

河野　外務省の条約局ですか。

伊藤(圭)　アメリカ局です。今は何ていうのだろう。

佐道　今は北米局です。

伊藤(圭)　課長時代は北米局の安全保障課ですね。局長になってからはアメリカ局長です。私が非常に親しくしていた局長というのは、あとで最高裁の判事になった、あれは何ておっしゃったかな。

佐道　中島(敏次郎)さん。

伊藤(圭)　中島さんとは私は親しかったです。あの人は条約局長からアメリカ局長になっていましたから。だから、国会なんかではほとんど二人でやっていました。あの頃は防衛庁長官もあんまり頼りなくてね。金丸(信)、三原(朝雄)さんでしょう、全然分からないのですよね。だからタッグマッチでお互いに補いながらやっていました。

佐道　金丸さんというのは全然分からない。

伊藤(圭)　まったくアバウトです。三原さんも、真面目な人なのですけれども、あんまり真面目すぎて分からんところがあるのです。私も初めてだったのですけれども、あの人の答弁で、速記者が私のところに来て、「いま三原さんの言った意味はどういうことなのですか」「それはこういうことを言ったんだよ」と教えてやったことがありました。あんまりあの人は真面目なものですから、緊張して理解しにくい答弁をしたりしてました。

　このあいだ猪木(正道)先生が校長になるときに伺ったと申しましたが、あれはもちろん私が頼みに行ったわけではないのです。「防衛を診断する会」が終わって後でお礼を持って行くわけです。そのときに京都におったのが猪木先生と高坂(正堯)先生だった。お二方のところにそれぞれお礼を持って行ったときに、猪木先生に防大のことについていろいろ聞かれたという、それだけのことなのです。

佐道　実質的にそのときには防大のことは決まっていたわけですか。

伊藤(圭)　もう引き受けておられたのです。

佐道　中曽根さんがなられて、さっき伊藤先生もだいぶ中曽根さんに洗脳されたとおっしゃったのですけれども、来られてすぐ、それこそ部隊の人も含めていろいろ対話をされたりしましたね。中曽根さんの意見とか考え方とかは省内にかなり広まっていったとか、やっぱりこういうふうにやってもらいたいなということになっていったのですか。

伊藤(圭)　例えばよく話題になるトイレットペーパーの問題なんかがあるのです。これは、部隊に行って泊まったところのトイレットペーパーが、予算がないので隊員が出し合って買っているという話を聞いて、すぐそういうのに予算を付けろと言った。それはこの中にもあったかも知れませんね。これを読んだのですけれども。隊員の生活環境の改善なんかには努力しました。

　ただ、彼はかなりスタンドプレーみたいなところがあるのです。これはきょうのあとの話題になるのですけれども、三島事件で、三島さんを最初に紹介したのは私なのです。中曽根さんは三島さんのことを知りませんでしたから。「会いますか」と言ったら、「会い

たい」と言うから。そのときに、まあ、三島さんも変わった人だと思ったのですが、日本刀を持ってきたのです。それを見せて中曽根さんと一緒にやっていましたけれども。結局、中曽根さんは三島さんを物凄く利用するわけです。青雲塾に連れて行って話をしてもらったり、彼を連れて選挙区をまわったりするのです。そんなようなことで、かなり派手な動きをする人ではありました。それがやっぱり海原さんはあまり気に入らないのでしょうね。

伊藤(隆)　海原さんはあまりパフォーマンスをやる人ではないですね。

伊藤(圭)　そうですね。

佐道　海原さんは、当時は国防会議の事務局長であるわけですよね。

伊藤(圭)　そうです。

佐道　たまに接触とか。

伊藤(圭)　いや、ほとんどなかったのではないですか。決定的に海原さんと中曽根さんの仲が悪くなったのは、〔中曽根さんが〕「国防会議の事務局長というのはお茶汲みだ」ということを国会で言うわけです。それで、〔海原さんは〕「この野郎」と。というのは、〔中曽根さんは〕内務省では海原さんの二年後輩ですからね。それ以来、もう全然だめです。

伊藤(隆)　だって昔から仲が悪いのでしょう。

佐道　そうみたいですね。

伊藤(隆)　僕らが行ったときに、奥さんも一緒になって中曽根さんの悪口を言っていたじゃないですか。

佐道　ともに天を戴かず(笑)。

河野　凄かったですね。

伊藤(隆)　「なんであれが大勲位なんだ」というのが口癖で(笑)。

伊藤(圭)　あの人も大勲位なんかをもらうからいけないのですよね。

伊藤(隆)　でも、やはり防衛庁長官としては前後に類のない人ですね。

伊藤(圭)　類のない人です。結局、あの人が防衛庁というもの、自衛隊員に対して非常に影響力を持ったというのは、防衛庁自体も中曽根さんを利用してこの際国民にアピールしたいという気持ちがありました。彼はまたそういうのには乗るほうですから、早速乗ってやったわけです。そういう点が両方で一致しておったのでしょう。『防衛白書』なんかでとばっちり受けたのはこっちなのですけれども。

構成が似ていると前に私がお話ししましたけれども、構成が似ているというのは、三つに分けたということで、最初がいわゆる情報、二番目が防衛政策、最後が国民と自衛隊という、こういう構成はまさにこれなのです。ただ、これを私が今度読んでみて分かったのは、いわゆる情勢判断なんかも二部に入っているのです。だから、一番最初のところは何を書いたのかなと思って。「新しい日本の進路」とか何とか、勝手なことを、いいかげんなことを書いておったなと思うけど、何からこれをとって書いたのか私も記憶がないのです。

伊藤(隆)　そうですね、軍事情勢については第二部の頭に入っていますね。

伊藤(圭)　二部の頭でしょう。だから、私のところはあんまりたいしたことないのです。

佐道　こういうのをお書きになるときに参照するようなものというのは具体的にはなかったのですか。

伊藤(圭)　いやあ、何を使ったのか分からないのです。

伊藤(隆)　これは、先立つものは何もないわけでしょう。

伊藤(圭)　何もないです。

佐道　正式にあれされたものとかはないのですよね。

伊藤(隆)　いや、非公式にも。

伊藤(圭)　非公式にも何もないのです。ただ、どういう構成でやろうかというのは高瀬審議官を中心にやって、第一部は防衛の意義、いわゆる自衛力、武力というものが国の安全と平和を守るためにどういう意義を持っているかということをまず言って、それからわが国の防衛政策はこういうものであって、それが国民との関係でどうなるかというふうに、現状と問題点というようなことで。

佐道　これは高瀬審議官を中心に書かれているということですけれども、関係部署といいますか、そこをまわったり。

伊藤(圭)　私は大蔵省なんかとは折衝しました。

佐道　大蔵省ですか。

伊藤(圭)　ええ。

伊藤(隆)　これは閣議了解になるのでしょう。だから予め関係部局と。

伊藤(圭)　外務省なんかは高瀬さんがやったのかも知れませんけれども、大蔵省は私が行った記憶があるのです。高木文雄さんが官房長で、彼のところに説明に行きました。別にあんまり文句を言われなかったのですが。

伊藤(隆)　やはり防衛力整備の関係で、大蔵、外務、ほかには何があるかな。警察……。

伊藤(圭)　警察もありました。それは高瀬さんが皆やっておられました。私は大蔵省だけは行った記憶があるのです。

伊藤(隆)　当然、次官会議で了解を得て、閣議了解ということになるのでしょうね。

伊藤(圭)　最初は了解ではなかったと思うのです。その後から了解がつく。これは報告ぐらいだったのではなかったかな。

伊藤(隆)　でも、一応正規のものとして。

伊藤(圭)　いわゆる閣議で了解されて出たわけですからね。いまこれを読みながらちょっと思い出したのですけれども、この最後のところに「自衛隊の特色」というのがありますね。第三部の一が「自衛隊の現状」で、二が「自衛隊の特色」ってありますね。「文民統制」とか「市民としての自衛官」というのは、どうも私が書いた記憶があるのです。

伊藤(隆)　じゃあ、やっぱり、「世論と防衛」だけじゃないじゃないですか。

伊藤(圭)　「防衛施設と基地対策」は施設庁の関係だから施設庁が書いたと思うのです。私が書いたのは、結局、前の人が書いていたのを書き直した部分だけなのです。そのときにこの「市民としての自衛隊」なんていうのはどうも私が入れたような気がするのです。「市民としての自衛隊」というのはどうして入れたかというと、この頃、ドイツで盛んに、「兵隊は兵隊である前に市民でなければいかん」ということをシュミットあたりが国防大臣の頃に言っているのです。そんなのをどうも思い出します。いずれにしても第三部をずっと見直せというようなことで、三日かかって、実際に書いたのはそこら辺のところです。

河野　先生が修正されて、全体的なトーンはだいぶ伊藤カラーが出た感じになりましたか。

伊藤(圭)　よく分かりませんけれどもね。最後のところに、「国際世論と防衛」というところがありますね。その二つ目のフレーズのところに、「いわれなき懸念というべきであろう」ということを書いてあります。「戦後のわが国は、平和国家であることを国是とし、こと防衛に関しては、必要最小限の防衛力を保持して、専守防衛に徹するきびしい制約をみずからに課しているのであって、そのような批判は、いわれなき懸念というべきであろう」と書いてあるでしょう。この「いわれなき」という言葉がどうも中曽根さんの気に入ったみたいで、びっくりしたのは、いろんな彼の答弁とかのなかによく出てくるのです。

河野　先生のフレーズを中曽根さんが取ったのですよね。

伊藤(圭)　この「いわれなき」というのがなんかとても気に入られ

たみたいで。

河野　じゃあ、逆洗脳のような感じですね。

伊藤(隆)　中曽根さんというのは、そういうキャッチフレーズ的な言葉が好きでしょう。

伊藤(圭)　好きなんですね。

伊藤(隆)　だから、人のでいいなと思ったら、すっと使うと(笑)。

佐道　実質的には人事課長時代には中曽根さんとの直接の接触はあまり…。

伊藤(圭)　人事課長のときはほとんどありません。幕僚長の人事もやっていませんから、直接中曽根さんのところに説明に行った記憶はないです。

伊藤(隆)　でも、広報課長の時代にあった……。

伊藤(圭)　広報課長のときは、もうずっと。

伊藤(隆)　それはそうでしょうけれども、多少はいろいろ意見を聞かれたり何かというようなことにはならないのですか。

伊藤(圭)　ならないです。

伊藤(隆)　職務だけですか。

伊藤(圭)　広報の問題とか何とかですか。

伊藤(隆)　広報課長の時代にそういう職務であったということで。

伊藤(圭)　そうでしょうね。

伊藤(隆)　しかし、おやりになったことは広報課長の職務でもないのでしょう?

伊藤(圭)　職務でもないのでしょうね。なんだか分からないのですけれども。

伊藤(隆)　「〔防衛を〕診断する会」なんて、べつに広報じゃないですしね。

伊藤(圭)　必ずしも広報でないこともないのでしょうけれども。

佐道　外との接点ということでは。

河野　広い意味では広報ですよね。

伊藤(圭)　結局、私はそれから五年後に坂田(道太)さんが長官のときに、「防衛を考える会」というのを審議官でやらされるのです。これは全部私が、当時の広報課は全然タッチしないで私がやったのです。

伊藤(隆)　前にやっているからですよ。じゃあ、中曽根さんとの関係というのはそこから先はほとんどなしですか。

伊藤(圭)　そうですね。私が防衛課長になったのが四十六年四月でしょう。私が四月になって、七月にはもう辞めてしまうわけです。これが、辞めるときは面白い……面白いというのは不適切ですけれども。あの人がレアード〔国防〕長官(在任一九六九年一月〜七三年一月)を招待するのです。レアード長官が防衛庁を訪問するときに第三次佐藤〔改造〕内閣ができてしまうのです。もう後任が決まってしまうわけです。それで、歓迎行事を急ぎ、〔七月〕四日の午前中に歓迎式をやって、離着任式を九日に伸ばすのです。防衛課長になったのが四月一日で、七月ですから、三ヵ月ぐらいしかないわけですから。人事一課長のときには、いま申し上げたようにほとんど関係がなかったですから。まあ、『白書』ぐらいですね。

伊藤(隆)　『白書』はその時代でしたか。

伊藤(圭)　『白書』は四十五年十月に発表していますから。

伊藤(隆)　それは人事一課長としての仕事とは全然関係ないですね。

伊藤(圭)　全然関係ないです。だから、「どうして俺がやらなきゃいかんのか」と言ったら、高瀬さんが、「いや、君に書いてもらえと長官が言っているから」というわけです。

伊藤(隆)　よほどご信任厚かったみたいですね。だけど、あんまり中曽根さんのご信頼を受けたのでは、海原さんとうまくいかない(笑)。

佐道　そうですよねえ(笑)。

伊藤(隆)　あれは絶対自分の後輩だと思っていますから。

佐道　海原さんは中曽根さんのことを。

伊藤(圭)　そうですね。

佐道　この『防衛白書』の頃は、まさに、海原国防会議事務局長と中曽根防衛庁長官はチャンチャンバラバラですよね。

伊藤(圭)　そのとおりです。

佐道　なかなか難しい。

伊藤(圭)　おそらく国防会議のほうとの関係では高瀬審議官は苦労したのではないでしょうか。私はそっちのほうは知りませんけれども。

■人事一課長として

伊藤(隆)　人事一課長というのはどこまでの人事をやるのですか。

伊藤(圭)　一佐以上は内局の人事なのです。

伊藤(隆)　一佐というのは大佐ですか。

伊藤(圭)　大佐です。だから大体、一佐に昇任する、それから一佐の配置とか、そういうのをやるのですけれども、私が部員たちに言っていたのは、とにかく一佐なんてやたらにいますからね。

伊藤(隆)　たくさんいるのですか。

伊藤(圭)　たくさんいますよ。だって私がいた当時で、「陸」だけで一佐が七百人ぐらいいたかな。

伊藤(隆)　そうですか。

伊藤(圭)　物凄く多かったですからね。

伊藤(隆)　ということは、一佐止まりになる人が多いということですか。

伊藤(圭)　いや、二佐止まりが一番多いのです。

伊藤(隆)　二佐止まりですか。でも、一佐から将補に。

伊藤(圭)　それは一割ぐらいじゃないでしょうか。一佐止まりも多いですよね。

佐道　二佐で終わるということは、つまり、それは各幕の幕僚監部の人事。

伊藤(圭)　そうですね。

佐道　そこが一応ふるいにかけて、二佐ぐらいで止めて、退役とかいうことに。

伊藤(圭)　そうです。

伊藤(隆)　一佐に上げる部分だけは上に上がってくる。これを一佐にしたらどうかというのは。

伊藤(圭)　そうです。

佐道　七百人もいらっしゃると、その上のポストはもっと限られているわけですから、そうすると内局の人事課が、将軍、提督になれるかなれないかのあれ〔決定権〕を握っているということになるわけですね。

伊藤(圭)　それはそうでしょうね。しかし幕僚監部の意見は聞きますよ。

伊藤(隆)　だって、意見を聞かざるを得ないでしょう。分からないですものね。内局の人事はどのくらい。

伊藤(圭)　人事は官房でやるのです。防衛庁の官房、昔は総務課だったのですけれども、今は秘書課でやっているみたいです。

伊藤(隆)　そうですか。人事一課というのは、そうすると内局は関係ないのですか。

伊藤(圭)　全然関係ないです。全部「制服」。その代わり、人事もありますし、賞罰があるのです。賞罰というか、例えば懲戒処分とかそういうのも処分をする案を作るわけです。

伊藤(隆)　賞のほうはどうですか。

伊藤(圭)　例えば報奨なんかがあるわけです。これはほとんど幕〔僚監部〕から上がってくるのをそのままなのですが、永年勤続と

か、善行賞とか。

佐道　ほかの国、例えばアメリカとかは「制服」の人の人事とかはどうなっているのでしょうか。

伊藤(圭)　やはり国防総省のなかに人事局という人事関係のところがあります。

佐道　そこが司っているのですか。

伊藤(圭)　それから人事といいますか、昇任とか何とか、配置なんかも全部そこでやっているという話です。もっとも、あれは地方に、各軍にあるわけでしょう。だから上のほうというか、あれは全体をやっているのだろうなあ。やはり異動なんかでも大変ですね。

伊藤(隆)　人事一課がその……。

伊藤(圭)　人事一課はそういうことで、人事二課というのが募集をやっているのです。

河野　新規募集。

伊藤(圭)　そうそう。それから人事三課というのは、いわゆる手当てとか給与もやっていました。俸給表とか何とかね。給与と手当て。

伊藤(隆)　そうですか、そうすると、一課はそういう一佐以上の人の履歴や何かというのをバーッと揃えて持っているわけですね。

伊藤(圭)　それは全部持っています。

伊藤(隆)　人事考課も上がってくる。

伊藤(圭)　おそらく佐官というのは大体内局も全部持っていると思うのです。一佐は全部もちろん持っていますけれども、二佐とか三佐までは確か持っていると思いました。

佐道　ただ昇任ということではなくて、つまり一佐を将補にするということではなくて、誰それをどこのポストに就ける、どういう配置にするということも含めて全部やって。

伊藤(圭)　そうそう、配置もね。だけど、それは大体幕(僚監部)から来るのです。それから、あれも一課でやっていました。例えば殉職したときの弔慰金とか、ああいうのはやっていました。殉職が多かったですから。私のときにやったのは、ジェットパイロットが死んだときの特別弔慰金というのを創りまして、あの当時で千五百万か一千万か払えるように。

佐道　殉職された自衛官はやはり当時かなり多かったのですか。

伊藤(圭)　多かったですよ。私が人事一課長のときにびっくりしましたのは、慰霊祭がありますでしょう。あのときは、今からもう三十年前ですけれども、とにかく合祀されている人が八百七、八十人ありましたから。事故で亡くなった方。それは陸上自衛隊も海上自衛隊も航空自衛隊ももちろんあるのですけれども、かなりのものだなと思いました。あれは三十年ぐらい前ですから、おそらく今は千名以上でしょうね。

伊藤(隆)　戦争はないですけれどもね。

佐道　訓練中の事故ですか。

伊藤(圭)　訓練中の事故です。それから災害派遣のときの事故というのがあるのです。これは私が人事一課長のときだったかな。呉で水が出まして、川に溺れかかっている人を助けに飛び込んで死んでしまった人がいました。それから伊勢湾台風のときに、確か名古屋で死んだ人がいました。

佐道　なかなかそういうのは逆に新聞などにはあまり出ないですよね。

伊藤(圭)　そうですね。出てもベタ記事ですから、ほとんど誰も気がつかないのです。警察官の場合には、これはしょっちゅう大きく出るでしょう。これは仕事として任務をやっているときの殉職ですから、まさに殉職なのでしょうけれども。そういう意味では訓練中の事故なんていうのはかわいそうですね。それから、特にかわいそうだと思いましたのは、ヘリコプターでも、「海上」とか「空」のヘリコプターというのはかなり人が乗っているでしょう。だから、落ちるといっぺんに十人ぐらい死ぬことがあるのですが、あれは

かわいそうだなと思いました。

先生方はおそらく記憶にないと思うのですが、いつだったか、部員の頃だったかも知れませんけれども、まだ福岡が米軍に提供されている頃です。福岡でバートルというヘリコプターに二十人ぐらい航空自衛隊の人が乗っていて、それが落っこちて全部死んでしまったのです。その調査のためにヘリコプターに乗って行ったのですが、そのヘリコプターが落っこちてまた死んでしまった。そういう二重の事故がありました。そんなこともありましたが、事故で亡くなる方というのはかなりいるのです。

伊藤(隆)　ヘリコプターというのはよく落ちますね。このあいだも何かあったじゃないですか。ヘリコプターで世界一周とかいうので。

佐道　あれは飛行機。

伊藤(隆)　軽飛行機か。

佐道　名古屋かどこかで、訓練中か何かに軽飛行機とヘリコプターがぶつかって、それで落っこちたというのがありましたね。幸い死人が出なかった。

伊藤(隆)　人事一課長の上司というのは誰になるのですか。

伊藤(圭)　人事局長です。

伊藤(隆)　そうすると、人事局長がいて、それから今度はこっちにまた別に官房があって、そこに人事をやるところが。

伊藤(圭)　総務課のなかで内局の人事をやる。内局の人間というのは五百人しかいませんから。

伊藤(隆)　五百人ですか。五百人というのは結構いるような気がしますが。

河野　でも多いですよね。

伊藤(隆)　これはなかなか難しいわけでしょう。内局だと、他省庁との行き来がありますから。

伊藤(圭)　そうそう。

伊藤(隆)　だから、人事としてはまったく人事一課とはやり方が違うわけですね。

佐道　教育関係はこの当時は人事を。人事教育局って一緒になったりしますね。

伊藤(圭)　以前は教育局というのが別にありました。

伊藤(隆)　昔から陸軍や海軍がそうですけれども、学校にやって、術科学校へやって、それで原隊へ戻して、またその次のレベルの学校に行ってと、こういうのをやるでしょう。だからやはり人事と学校というのはかなりつながっているのではないかなと思うのですけれども。でも、この人事一課でやるような大佐ぐらいになれば、それはもうないだろうと思いますけれども。

伊藤(圭)　それは必ずしもそうではないんです。コースはないのですけれども、研修みたいなのはあったのではないですか。

伊藤(隆)　幹部の。

伊藤(圭)　はい。

佐道　防大に何百人も同期で入って、だんだん、だんだん、いろいろコースが違ってきて、例えば陸上自衛隊でも部隊回りをずっとやっている人もいれば、部隊にちょっと行って、あとは六本木に行ってからもうずっと本庁、行政のほうとかをやって。海上自衛隊でも、海にばっかり行っている人と、横須賀なんかにずっといる人と、コースが少しずつ選別されていきますね。大体どのくらいでコースの選抜というのは。一番最初の選抜というのがあると思いますけれども。

伊藤(圭)　幹部学校というのがありますでしょう。あそこに初級幹部課程というのがあるのです。CGSと言っていましたが、そのCGSの課程というのが昔の士官学校の予科みたいなものなのです。だから、そこに入れた人というのが、いわゆるジェネラル、アドミラルに行く可能性がある人なのです。それを終わって、今度はその上にAGS(高級幹部課程)というのがあります。これがいわ

ゆる大学校みたいなものです。そこにまた行って。これは二佐か何かで行くのかな。それを終わって最後の仕上げというのが防衛研究所ですか。昔の研修所。そこに行くともう大体、ジェネラル、アドミラルは間違いないということでした。ただ研修所は、行く人もいるし、行かない人もいるのです。大体そのＣＧＳの上までは必ず行くようでした。

伊藤(隆)　防衛大学校のあとは、そこと幹部学校の間にはあまり教育というのはないわけですか。

伊藤(圭)　いやいや、今度は職種学校があります。例えば富士学校に行ったり何かやるわけです。

伊藤(隆)　行ったり来たり、行ったり来たりやっているわけですね。

伊藤(圭)　武器学校に行ったり、これはやるわけです。

伊藤(隆)　そういうことも成績に加味されて、幹部学校に行けるかどうかという問題が決まるわけですか。

伊藤(圭)　そうです。

佐道　いつでもどこでも大体「人事は水もの」と言われますけれども。同期で、例えば海上幕僚長候補というのが何人かいて、誰がなるかとか、それはやはりそのときの状況と〔関わるのですね〕。

伊藤(圭)　そうでしょうね、私もそこのところは分かりませんけれども。ただ面白いと思いましたのは、人事一課長というのは地方に出張すると物凄く大事にされるのです。大事にされるというのは、変な意味ではなくて、師団長なんかが、将来こいつが偉くなってほしいというような人をなんとなしに紹介するのです。こういう男がいるよというようなことを。とにかくまわってきたときに何か印象つけたいというような気持ちがあるみたいで、大事にしてくれました。それは防衛課長で行ったときなんかよりは、はるかにいい待遇。

河野　違うのですか。そういうときに、その師団でこういう人がいるということをかなり先生は覚えてといいますか、参考にされるわけですか。

伊藤(圭)　いや、それは……。だって私は十ヵ月しか(笑)。

河野　そうですねえ。

伊藤(隆)　人事一課長としての仕事といっても、そのあいだに『防衛白書』を書いたりなんかやっているから、あんまり実務についての〔お仕事はおやりにならない〕。

伊藤(圭)　実務というのはあまりないのです。ただ一つ印象に残っているのは、公正審査会というのがあるのです。これは、処分を受けたとき不利益にならないように訴える審査会です。人事一課がその事務を担当していました。

伊藤(隆)　人事一課長が兼務。

伊藤(圭)　私のときにたまたまこんな問題があったので覚えているのですけれども、お医者さんがナースと仲良くなってしまって何か問題が起きた。私もよく分からなかったのだけど、医者のほうが反論してかなり政治的な動きをして、なんかゴタゴタがあって、そんなことで会議が二回ぐらいあったような気がするのです。そんなことぐらいですね。

伊藤(隆)　そこで審判をするわけですか。

伊藤(圭)　審判をするのです。懲戒処分の適否について。

伊藤(隆)　まあ、お医者さんとナースというのはしょっちゅうありますね(笑)。

佐道　ちょっと違うのですけれども、さっき、防衛医科大学校を出た人はよその医者と違って、封建五者で、なかなかほかで行く場所が……。

伊藤(圭)　いやいや、歴史が浅いものだから、ほかの大学の先生みたいに国立病院とか、なかなか引き手がないわけです。だから結局ずっとたまっているわけです。

佐道　でも、毎年決まった数出てきますね。

伊藤(圭)　出てきます。

佐道　それは、自営の独立をするとかでなければ、あんまり行き場所もなければ、ずっとたまりっぱなしということになってしまうわけですか。

伊藤(隆)　いやいや、そんなことは現実問題にはないよ。

伊藤(圭)　今たまって全部いっぱいになっているわけではないですよ。だけど、昔は四割ぐらいだったのが、今は八割とか九割まで定数を満たしているということです。

佐道　その防衛医科大学病院の防衛庁関係の病院にいない人は、それでもよそに少しずつは出て行きますか。

伊藤(圭)　出て行きます。これは大きな大学病院とか何とかではなくて、例えば地方の病院とか、それこそ県立病院とかああいうところには行っています。

伊藤(隆)　地域の病院にかなり出ていますよ。

伊藤(圭)　地域の病院にはかなり行っているのです。今の自治医大と似たようなところがあります。

伊藤(隆)　そうですね。だから逆に町のお医者さんが防衛医大を紹介するのです。あそこは設備がいいから、あそこに行きなさいと。

伊藤(圭)　だから九年たつと出て行く人もいるわけです。だけど、今はかなり女性が多くなりましたね。女性のほうが成績いいのです。

佐道　成績でいうとそうなるでしょうね。

伊藤(隆)　それはもう、どこの世界でもそうですよ(笑)。

佐道　じゃあ、野戦病院も女医さんばっかり。

伊藤(圭)　それは、アメリカ軍がまさにそうなのです。一番成績がいいのが女性、女の兵隊さん、その次が黒人で、最後が白人(笑)。

佐道　日本の男もがんばらないと(笑)。

伊藤(隆)　日本だけじゃないことが分かった(笑)。

■沖縄基地問題とはなにか

伊藤(圭)　それでは、いろいろあるのですけれども、どうしましょうか。『防衛白書』なんかは特にお話ししなくてもよろしゅうございましょう?

佐道　いえ、もっと。

伊藤(圭)　きょうは、たまたまいま沖縄の基地の問題があったものですから、その基地の問題なんかについて、全体として今までどういうことがあったかというようなことをちょっとお話ししようかと思いまして。よろしゅうございますか。

伊藤(隆)　はい。

伊藤(圭)　まず、沖縄で基地問題というのが起きているわけですね。これはどういうことかというと、アメリカの兵隊が悪いことをするわけです。これは、実は日本だけではないのです。ヨーロッパの国でもいろいろ問題が起きているのは事実なのです。ただ、日本人の沖縄という土地に対する感情というのは特別なものがあるでしょう。だから日本人は非常に大きなショックになるわけです。しかし、アメリカにしてみれば、沖縄の基地というのは世界にある米軍の基地の〝ワン・オブ・ゼム〟なのです。だから、日本人の思いとアメリカの現在の軍人の思いというのはギャップがあるわけです。これが大きな問題になってくると思うのです。

　それから、米軍の基地というものに対する日本人の感覚も、これも先生方はご存じないと思うのですけれども、日本が独立したときに基地を提供するわけですが、この頃は基地があるということがその周辺の住民に対してはプラスの面もあったのです。どういうことかといいますと、例えば、基地があるためにその町は停電がなかったのです。ほかのところは停電で。それから、アメリカ軍の兵隊が出てきてチョコレートを子どもにくれたりなんかするでし

ょう。こんなのが喜びだったわけです。そうすると、米軍がいるということがプラスにもなるし、あるいは就職先にもなるし、飲んだり食ったりしてくれるものですから商売にもなる。いろんなプラスの面があったでしょう。

ところが、いわゆる高度成長時代から基地の存在というのはまったくマイナスだけになってしまったのです。私が施設庁にいた当時のことを考えますと、基地があるために、本来はもっと経済活動をやって収入を得られるのに接収されているという不満が物凄くあったわけです。それに対する補償をしようというのが周辺対策費という、基地の交付金みたいな格好で始めたのが三十九年です。そんなようなことから米軍基地に対する反対運動が非常に強くなってくるわけです。

沖縄というところは、いま申し上げましたように思い入れがあるのですが、同時に沖縄の基地の問題の難しさというのは、いわゆる反戦地主というのがかなりいる反面、今度は基地があるために儲けている地主がいるわけです。ヘタに返してもらったら困るというのがかなり数がいるわけです。そうなってくると非常に複雑な問題になってくるわけです。

だから、ああいった黒人—今度の事件は黒人ですね—はアメリカでも犯罪がほかの白人なんかに比べると多いというのですけれども、やはり黒人なんかでちょっと酒なんかを飲むと暴れたりするのがいるのでしょうね。そういう問題がクローズアップされてくるから、アメリカ人の沖縄に対する感覚と日本人の沖縄に対する感覚のズレがだんだん大きくなってきているというのが現状ではないかという感じがするのです。

伊藤(隆)　しかし、このあいだの事件みたいなのはちょっと、アメリカの黒人好きの日本女性というような問題もあるじゃないですか。

伊藤(圭)　私もまだ読んでいないのですけれども、週刊誌か何かでそういうのも。

伊藤(隆)　前から、福生とかあの辺りのね。

佐道　危ない行動をとる女性たちがたくさんいるんですよね。

伊藤(圭)　日本の女性というのはやはりそういうところがあるんですよ。こんなことはまったく知らないでしょうけれども、終戦直後の占領されたときの有楽町のガード下なんていうのは凄かったですからね。当時、日本人が食うや食わずのときに、若い女性は派手な服装でチョコレートを食べたりしながらアメリカの軍人と腕を組んであそこらへんを歩くわけです。私らは本当にうらやましいなと思うぐらい(笑)。まあ、非常に開放的になるのですね。

佐道　普通の新聞などは、海兵隊員の悪の行状を暴くという方針があってあまり表には出さないですけれども、しかし、その裏には実はそれだけの問題ではないこともあるようですね。そこはなかなか構造的にあまり出せないというか、言えない話になっていて。そこが逆にアメリカのほうは不満もまた出てきているという。

伊藤(隆)　それはアメリカも不満だと思いますね。黒人も、「合意だ、合意だ」と盛んに言っているのでしょう。

佐道　こんなに長引いたのはそこら辺が大きいのではないかと思いますけれども。

伊藤(圭)　その沖縄基地の問題というと、前にも申し上げましたけれども、私が広報課長の頃は物凄く好意的だったという話をしましたでしょう。海上自衛隊が寄航したときに街の通りを軍艦マーチをやりながら行進したのですから。それが非常に反自衛隊の感情が起きたのが、私の記憶するところでは、なんか中曽根さんが行ってから非常に悪くなったような感じがするのです。あれが契機だった。というのは、(昭和)四十五年ですから、その頃まだ返還になっていないでしょう。そのときに米軍の基地にヘリコプターで行くのですね。そういうのが非常に反感を持たれた最初だったような気がするのです。中曽根さんは、九月にレアード長官に呼ば

れてアメリカに行くわけですが、その直後に行っているのです。十月七日に沖縄に行っているのです。このときからどうも具合が悪くなったような感じがするのです。私が広報課長のときに自衛隊の広報映画なんかまで沖縄で放映したのですから、どうして悪くなったのか分からなかったのです。どうもこれが、米軍の基地にヘリコプターで行ったというのがどうもね。

伊藤(隆)　あのときの運動は物凄く強い反米でしょう。

佐道　そうですね。ちょうどゴザ暴動とかそういうような時期ですよね。

伊藤(隆)　そのアメリカに対して日の丸を一所懸命彼らは振ったわけですから。だからやっぱり、米軍の基地に行ったのはまずかったでしょうね。

佐道　米軍と一体化してしまって。これは当時の沖縄の新聞なんかを調べてみると面白いですね。

伊藤(隆)　調べてみたほうがいいですね。その転機というのは非常に面白いと思うのです。ガラッと変わっているわけですから。

伊藤(圭)　これは本当に変わったのですよね。

伊藤(隆)　沖縄から自衛隊員の募集をやったって、募集させないというようなことで。

伊藤(圭)　それから二年後には返還になる。その返還のときに、例の切腹して死んだ右翼の影山(正治)さんが私のところに来て、「沖縄出身の人を最初に配置しないほうがいいよ」ということを言いました。というのは、自衛隊の沖縄出身の人を最初に配置すると、「また沖縄の人間を楯にするのか」という感じをもつというようなことを言ってくれました。それで一番最初に行ったのは沖縄出身者を省いて、地方連絡部の部長は首里の出身の人が行ったのです。首里の出身の人というのはやはり昔の王家の血筋ということで非常に尊敬されていると。人を持っていくときも、地連部長もどこかほかの者ではなくて、そこの者を持っていけという話がありました。最初の人選なんかは苦労したということがありました。

佐道　最初、返還直後は那覇市が自衛隊の住民登録を認めないとか、ずいぶんひどい〔ことをしましたね〕。

伊藤(圭)　これもひどかったですね。小学生を学校に入れてくれないのですよね。

伊藤(隆)　急に変わったんですよね。

伊藤(圭)　そうなんですね。

河野　日の丸を掲げていたのが、急に。

伊藤(圭)　まあ、そんなようなことをちょっと。

伊藤(隆)　中曽根訪米なんていうことはあまり関係ないのですか。

伊藤(圭)　これは直接関係ないのです。ただ、中曽根訪米のときに、百六十億ドルという四次防の希望を言ったというのが、後で私が防衛課長になってから、このことで海原さんに責められるわけです。

伊藤(隆)　なんで海原さんに責められることになるのですか。

伊藤(圭)　結局、中曽根というのはけしからんというわけです。四次防の希望の百六十億ドルというのをアメリカで発表したというわけです。その前に自由民主党の安保調査会なんかで説明しているときも、新しい計画をするというようなこと、それから自主防衛五原則の演説なんかもしているわけですけれども、実際に百六十億ドルというのを言ったのがこのワシントンのプレスクラブの講演なのです。それでけしからんということになって。このために大蔵省からは責められるしね。そのときはまだ私は防衛課長ではありませんから、そのときの騒動は直接知らないのです。だけど、後で何度も何度も同じようなことを言われました。これは、ご覧になると分かりますように、私が人事一課長に行ってから中曽根さんが国防の基本方針の改定の問題なんかを出すわけですが、これを海原さんあたりが真っ向から反対してつぶしにかかるわけです。

それから、日米定期閣僚会議というのは、これは年に一回ぐらい必ず防衛の責任者が会ったほうがいいというようなことで提案するのですけれども、まあ、これも。

伊藤(隆)　この閣僚というのは防衛閣僚なのですね。

伊藤(圭)　そうです。それから九月にレアード長官の招待で初めて行くわけです。そして十月に『白書』を発表して。その十月の『白書』を発表した翌日に「四次防の概要」というのを発表するわけです。これを発表するにあたっても、絶対に数字を出してはいかんということを大蔵省からきつく言われておって概要というのを発表するのですけれども、その概要を発表した後、翌日の新聞に「陸」「海」「空」の計画の具体的な内容が全部出てしまうわけです。それで大蔵省がカンカンになるし、海原さんもカンカンになるし。今まで話し合い、説明しておったのが止まってしまうわけです。ゴタゴタして。そして、結局、四次防の構想についての防衛庁の考え方というのをほかの省庁がなかなか聞いてくれないわけです。そんなことで、結局、四月一日に私が防衛課長に行くわけですけれども。

佐道　ゴタゴタしている最中に。

■三島事件の顛末

伊藤(圭)　私が防衛課長になったときにびっくりしたのは、初めて防衛課長になった日か翌日、長官のところで会議があるのです。四次防の構想、あれは四月二十日か何かに発表になるわけでしょう。その原案の議論が、四月一日か二日に、課長になった途端にあるわけです。私も全然見たこともないようなこともあって、これは大変だなと思ったことがありました。確か四月二十何日かに発表になるのですが。

きょうは、『白書』というのはいずれ四次防なんかのときにまた出てまいりますから、きょうはあれだけお話ししておきます。三島事件の前後だけ。

三島事件は、今年の『文藝春秋・新年号』に、まさにオーラルと同じなのですけれども、『文藝春秋』の人が来まして話をしてくれというので、一時間半ぐらい話したのです。そしてそれを起こしてきて、二人で直しながら書いたのがその新年号に載っている三島事件のことなのですけれども。

三島さんのことについては、広報課長になったときに少しお話しいたしましたけれども、そういうようなことで三島さんとずっと親しかったわけです。四十五年の十一月二十五日の朝、十一時過ぎだったと思いますが、私のところに電話が入ってきたのです。私は人事一課長で、警務隊も人事一課長の管轄なのです。

伊藤(隆)　警務隊ですか。

伊藤(圭)　警務隊も人事一課長が管轄しているものですから、私のところに市ヶ谷から電話がまいりまして、「いま三島由紀夫が演説をぶっている」と言うのです。そういうのが第一報でした。なんか大きな声でやって、人を集めろというので集めているが、どうも総監が縛られているようだというようなのが入ってきたのです。そして、テレビを入れたら、そのテレビの画面に出てきまして、そのうちに自殺したというのが来るわけです。

私は、最初、どういう状況になっているのかまったく分からなかったわけです。そのうちにだんだんテレビなんかを見ているうちに分ってきたのは、彼が総監と会っているうちに、総監を縛って、そしてすぐ全員を前庭に集めろということを言って、そして皆が集まってくる。そこで彼が演説をやったけれども、野次られたりなんかしてまったく反応がないのでそのまま自殺をしたというような、一連の連絡があったわけです。

そのときにまず私が思ったのは、市ヶ谷で訓練をするということを最初に彼が私のところに言ってきたのです。「楯の会の訓練を

やりたい」と言ってきたので、「どうしてなんだ」と訊いたら、「今まで国立劇場の屋上でやっておったのだけど、狭いので、〔市ヶ谷で〕やりたいのだ」ということだったのです。僕も割合に気軽に、「じゃあ、訊いてあげよう」と言って、〔担当部署に〕訊いたのです。そうしたら、楯の会の人が来て訓練するのは困ると言うのです。三島さんが私に言うのは、「普通の日に行くのではない。日曜日で誰もいないときに行くのだから、ちょっと広いところでやらせたいから」と言うので、また電話したのです。「日曜日に、休みの日に行くのだからということを言っているから」と言ったら、「それならいいだろう。あんまり目立たないような形で」というようなことで、これは五月頃からやっているのです。月に一回ぐらいだったと思うのですが、日曜日に行ってやるのです。

そしてその十一月の二十五日、これはウィークデーなのですけれども、その日はまず市ヶ谷会館に楯の会が集まっているのです。そして、あそこで壮行会みたいなものをして、あとの者は残っていたみたいです。五人だけが行くわけです。そして、最初は三十二連隊に行くのです。普通科連隊の三十二連隊がありましたが、その連隊長を訪ねていくのです。ところがちょうどその連隊が全部富士に演習に行っていないのです。いないので、彼がそこから総監に会いたいというので連絡をとって、総監のところに行って、あの騒動になるわけです。

だから、〔世間では〕彼はクーデターをやりたかったと言うのですけれども、必ずしもそうではないという気がするのです。もしクーデターをやる気なら、自分が最初にやろうと思って相談する人がいなかったら、その日はやめるのが普通でしょう。ところがそれをやめないで、すぐ相手を変えて、総監に会いたいと言っているでしょう。だから、あるいは自分がゲキを飛ばしたら自衛隊が立ち上がるかという気持ちもあったのかも知れませんね。しかし実際は、皆を集めろということで集めるわけですけれども、人が集まるのにやっぱり十五分とか二十分かかるでしょう。そのあいだに三島が総監を縛っているということが口伝えに広まっていって、「けしからん」というような気持ちがあったらしいのです。それであそこで野次った人がいるのです。それは事実らしい。私が当時聞いたのはそうではなくて、いわゆる七〇年安保を控えていろいろなアジテーションがあるから、そのときにはまず野次るということを教育しておったということがあったものだから、『文藝春秋』のときには話したのです。そうしたら後で、そういうのもあったけれども、それは確かに調査学校あたりでは心理戦でそういう教育をしておったのは事実らしいのだけれども、それが下のほうまで徹底しておったかどうかは分からないというのです。現場にいた人からそういう事実があったということも聞いたものですからその話をしたのですが、『文藝春秋』ではそこのところは削ろうということになったのです。なぜかというと、いろんな意見が交錯していると、ある一つのことを書くと、それは間違いだと言われると困るのでそこのところは削ろうと言って、削ったのです。

まあ、そういうふうなことがあって自殺するわけなのですけれども、例の森田必勝と二人が自殺するでしょう。自殺するのですけれども、三島さんは最初から裸の上に上着だけ着けているのです。それで、本当に切腹しているのです。本当に切腹したというのはどういうことかというと、昔の切腹というのも形だけで、刺して、あとは首を切るでしょう。ところが彼は本当に腹を切ったのです。さすがに、気丈な人ですけれども、ここまで持っていったらもうグニャッとなったのですね。それで、首を切ったら、肩を切っちゃうわけ。もう一回起こして、それで首を切るわけです。森田必勝のほうは最初からこんなことはやりませんから、スパッと切っちゃうわけです。三島さんの遺体の写真が警務隊から私のところに来ましたけれども、肩が切れています。

それから、例の『朝日新聞』なんか二つ首がありましたね。その

ときに目をつぶっているですけれども、目が開いておって、その目をつぶらせたというのが私のところに報告が来ておりました。それをつぶらせたのは、後で陸幕長になる三好（秀男）さんという人が当時〔東部〕方面総監部の幕僚長でそれをやったという報告がきたのですが、それも違っているのです。というのは、三好さんはそのときに出張していないのです。そういう報告は来たのですけれどもね。後で聞いたらそうではなくて、その部屋に入れたのは、もう警察が来ておったものだからほかの人は入れなかった。警務隊長だけが入れたのです。その警務隊長というのがつぶらせたそうです。だからそこらへんはぼかして直したのです。

もう一つ削られているところがあるのです。お棺に入った遺体が返ってくるわけです。奥さんがその遺体にとりすがって号泣したというのが当時の週刊誌に載っているのです。ところが、彼が死んでから半年後ぐらいに村松（剛、仏文学者・評論家）さんと奥さんと私とご飯を一緒に食べたのですが、そのときにいろいろ話を聞いたら、奥さんが言うには、あれは嘘だと言うのです。私は遺体は見ていないと言うのです。それは首がないでしょう。いや、あるのだけれども、これは包帯で巻いてあるわけです。とても私は見る気がしなかったと言うのです。そのことを言ったら、いや、これもちょっと削っておきましょうと。というのは、それはそれを書いた週刊誌が文句をいうかも知れないと言うのです。それを言った奥さんがもう既に死んでいるでしょう。そうすると、名誉毀損なんて言われたら抵抗のしようがないからこれも削ってくれと言われて、そこも削ったのです。

そんな何箇所かを削って、私だけしか知らないことというのを中心にあれは書いたのです。だから、結局、六百万円近い補償金をすぐ払ってくれたのを中心にまとめました。

伊藤（隆）　補償金ですか。

伊藤（圭）　国が補償金を請求するわけです。まず何をしたかというと、総監室の絨毯からソファーから皆血だらけでしょう。これは全部損害でしょう。お金が四十何万円かでしたが、それは全部補償する。それを請求するわけです。それから、六人ぐらいケガをしているのですが、その治療費も全部請求する。それから後遺症が残るのです。後遺症が残ると、これは高いのですね。そういうのを入れると、これは国税局だったか大蔵省だったか忘れましたけど、ちゃんと計算して、六百万近い金でした。皆、三島さんの奥さんに言うのは嫌なわけですので、僕が電話で頼んだのです。「それは払います」と言って、すぐ払ってくれたのですけれども。

ただ、当時はもしこれが公になったら大変だと私は思ったのです。というのは、当時、右翼の人にとっては三島由紀夫というのは神様でしたから。それで、バレないようにと思ってじっとしておったのです。そうしたら、これはどこの新聞だったか忘れましたけど新聞記者が来て、「三島さんのところは金を支払っただろう」と言うのです。私は、「支払った。六百万近い金だったけど、これは頼むから書かんでくれ。いま書いたら、国はけしからんといって大騒動になるから」と言ったら、書きませんでした。だから結局今まで分からなかったのですけれども、もうあれから三十年もたっていますから、いいだろうと思って、それを言った。そうしたら、それを聞いて、ぜひこれは載せたいということになったのです。だから題が、「三島家は六百万円払った」というような題になっているのですけれども。

そのあと、三島さんの奥さんといろいろ話をしました。十年たったときにパーティーがあって、私はそのときも行きました。それから二十年のパーティーにも行ったのです。二十五年のときには自宅でやったのです。私もそのときには自宅に行った。確か村松剛さんもまだその頃は生きていまして自宅でお会いして、それから佐伯彰一さんなんかにも会いました。その後何年かたって奥さんが亡くなるのですけれども。

そこで、これまた中曽根さんの話が出てくるのですけれども、中曽根さんは、先ほど申し上げましたようにそれだけいろいろやったでしょう。ところが、死んだときに、「三島由紀夫は気が狂った」ということを言うわけです。それが新聞に載ったものだから奥さんが怒ってしまって、困りました。それでお葬式のときに私は言ったのです。中曽根さんに、「私は四年間付き合ったのだからお葬式に行ってきますよ」と言ったら、「行ってきてくれ」と言うのです。それで私は築地の本願寺に行きました。会葬者が七千人です。ずっと並んでおったら、新聞記者というのは面白いですね。それを探すのです。私がいたら、『朝日』の記事かな、『毎日』の記事かな、いろんな新聞に載っていましたけれども、人事一課長の伊藤が来ておったということで新聞記事に載っていました。「どうして来たんだ」と言うから、「僕は長い間付き合ったからおまいりに来たんだ」ということを言ったのですけれども。そんなことで、瑶子さんは最後はやはり中曽根さんのことをあまりよく言いませんでした。半年後にご飯を食べたときなんかも、「あの人はずいぶん三島のことを利用しながら、なんて冷たい人だ」というようなことを言っていました。そんなようなことがありました。

伊藤(隆)　いまおっしゃった警務隊というのはそのときにどういう役割をしたのですか。

伊藤(圭)　警務隊は、犯罪者がそこにいるわけですね。その犯罪者を警察に引き渡すまでそこで現状を維持するというか、そんなようなことです。

伊藤(隆)　警務隊というのは昔の憲兵。

伊藤(圭)　憲兵は外に対してもやったでしょう。これは……。

伊藤(隆)　いや、元々憲兵というのは中のあれですから。

伊藤(圭)　そう、憲兵みたいなものです。だから部内の犯罪なんかを調べるのです。だから、警務隊の者は全部、犯罪捜査なんかについては警察学校に行って勉強してくるのです。

伊藤(隆)　その三島事件のときには、営内では起こっていますが、犯罪を犯した人は民間人ですよね。

伊藤(圭)　民間人ですから警察に渡すわけです。その間。

河野　それまでの間ですね。

伊藤(圭)　それはこういうことなのです。市ヶ谷の駐屯地に学生が殴り込みをかけてきたことがありました。そのときは、警察に渡すまでは警務隊が押さえておくわけです。これもあとで話を聞いたのですけれども、そのときに学生が、警察に引き渡されてホッとしたというのです。最初に警務隊に捕まっているときは、何をされるかと思ってね。警察だったらそんなにひどいことはしないだろうと思って安心したという、そんな話を聞いたことがありました。

伊藤(隆)　慣れているから(笑)。

佐道　人事一課長は、日本全部の警務隊を統括しているのですか。

伊藤(圭)　そうですね。いや、警務隊の本部はやっぱり、「陸」なら「陸」にあります。「海」も「空」もあるわけです。

伊藤(隆)　「海」も「空」もあるのですから。

伊藤(圭)　あります。

伊藤(隆)　昔は憲兵隊は「陸」だけだったでしょう。

伊藤(圭)　海軍もあったのではないですか。

伊藤(隆)　いや、海軍はどうですかねえ。あれは全部「陸」が代行していたのではないかな。

伊藤(圭)　だって「陸」は海軍の犯罪の捜査なんかはやらないでしょう。

伊藤(隆)　まあ、そうですねえ。どうしていたんだろうなぁ。

佐道　今の「陸」「海」「空」それぞれにあるのは、本部が昔は六本木にあって。

伊藤(圭)　あります。

伊藤(隆)　これは法務官でもあるわけですね。

伊藤(圭)　そうです。それで、これは警察官と同じように逮捕捜査

権とか逮捕権なんかもあるのではないですか。

伊藤(隆)　内部に対してはですね。

伊藤(圭)　最近は、僕もびっくりしているのですけれども、自衛隊でずいぶん麻薬を持っているのが多いみたいですね。この間も海上自衛隊で捕まったでしょう。女の自衛官もね。いま防衛庁で心配しているのは、「陸」にも「空」にもかなりあるんじゃないかというのです。今の若い人というのは、かなり麻薬を……。

伊藤(隆)　あるのでしょうかね。アメリカの軍隊はそういうことがあるでしょう。

伊藤(圭)　アメリカはベトナム戦争が終わった後に激しくなったと言いますから、どこの軍隊でもそうなのでしょうか。

佐道　でも、若い人が多いですからね。厳しく規律を定めていても、やっぱり外れる人はいるでしょうから。

伊藤(圭)　考えてみると、警務隊の関係はあるのですけれども、三島事件そのものは直接は人事一課とはあんまり関係ないのですね。それからその補償金の交渉だって人事課とはまったく関係ないのです。これは会計課がやるべきことなのですから。結局そういうことも三島家との関係でやらされたというようなことでしょう。

伊藤(隆)　私はそれを読んでいないのですが、三島事件そのものについては伊藤さんはどういうふうにお考えでしたか。あれはどういうことであいうことになったか。

伊藤(圭)　それもその本のなかには書いてあるのですけれども。まず、三島さんという人は、私が四年間付き合ったなかで感じておったのは、やはり一つは、これは中曽根さんと似たところがあって、パフォーマンスが好きな人ですね。特に切腹なんていうものに対して憧れていました。

憧れていたというのは、映画なんかでもやっていましたけれども、私が印象を受けたのは、円谷が自殺をしたときに物凄く感心していました。円谷というのが、立派な死に方をしているのです。円谷は正月休みに国に帰るわけです。今度は、「来年メキシコでがんばれ」と。もう自分は走れないことが分かっているわけです。それからもう一つは、当時結婚問題があったらしいのです。女の人が年上だったという話なのですね。それで上司が、「おまえ、考えたほうがいいんじゃないか」と言って、そんな悩みもあったというのですけれども。

とにかく凄いのは、私も現場は見ていないのですけれども、手首を切って血を出して、それを洗面器か何かに水を入れて、そのなかに入れているのですね。水に入れているものだから、どんどん、血が出て、そして死ぬのです。ベッドの上に座って、そして従容として死んでいるのです。その話をしたら三島さんが「今の日本にも侍がいるものだなあ」ということを言っていました。だから、そういった死に方に対する一つの憧れというのがあったことは事実です。

もう一つ原因があると思われるのは、いわゆる老醜というのですか、年老いた自分の肉体というものに対して物凄く不安感を持っておったのも事実です。それは、「四年前にはレンジャー部隊と一緒に行進でも何でもやったけど、全部負けなかった。今年行ったら、二十キロぐらい歩いたところで落伍してしまって、ジープに乗せられて帰ってきた。情けない」ということを言っていました。

伊藤(隆)　それはどこでの話ですか。

伊藤(圭)　富士学校です。そのときに、非常に情けないということを私のところに来て言っていました。それで、この人はそういった意味で自分の体を鍛えているのかなと思いました。それを感じましたのは、死体が並んだのを警務隊が写真を撮って持ってきたのですが、筋肉隆々たるものです。とても四十五〔歳〕の肉体には見えませんでした。それからそのときの写真が印象的で、私も初めて知ったのですけれども、人間というのは首を切ると首がこんなに

小さくなってしまうのですね。血がどんどんと出て。徳利みたいな形になるのです。非常に強烈な印象を持ちました。

伊藤(隆)　あのときはべつだんクーデターという感じではないのでしょう？

伊藤(圭)　私はクーデターはないと思うのです。ただ、そのまえに四十四年十月に反戦デーの騒ぎがあったでしょう。学生が防衛庁の六本木になだれこんで来る事件があったでしょう。あのときに赤坂の警察の者が来て、自衛官が押し出すと同時に、警察が一緒に来てそれを出してくれるわけです。そのときに私のところに来て文句を言われたのです。「自衛官が堂々と追い払えばいいじゃないか。なにも警察に頼む必要はないじゃないか。それで、今の自衛隊はだらしがない」ということを盛んに言っていました。だから、彼の一つの美学もあったのでしょうか。

もう一つ彼が非常に苦しんでおったのは、ある意味では文学というものに対して、これから先何を書こうかというような気持ちもあったのではないでしょうか。七月十日に、人事一課長に替わる日に彼がブラッと訪ねてくるのです。あの人は、前もって約束しないで来るということは今までに一度もなかった。来るときには前もって電話をしてきて、「何月何日に伺いたいのですが、ご都合はいかがですか」と必ずかけてきたのですが、それなのにブラッと来たのです。「伊藤さん、きょうこの本が出ましたから読んでください」と言ってくれたのが、『暁の寺』なのです。最後が『天人五衰』というのですけれども。筋書きは、その最後の原稿を渡して自殺するということになっているでしょう。ところが実際はもっと前にできているみたいですね。その『暁の寺』が印刷が終わってしばらくたってから最後の『天人五衰』というのを書き終わっているみたいなのです。それからいろいろ苦労もあったのではないかなという感じがするのですけれども、そこのところは分かりません。

ただ、その〔『文藝春秋』の〕新年号にも書きましたけれども、私は三島さんと長い間付き合いましたけれども、あまり防衛問題のことで話し合ったということはないのです。あの人と仲良くなったきっかけというのは、私のところに来て……。部隊に入る経験をしたいというのが三輪（良雄）さんから下って来たものですから私がやったのですが、最初、彼〔三島由紀夫〕は六ヵ月間富士学校に入れてくれと言うから、それはできないと言ったのです。海原さんも物凄く反対しているでしょう。普通のあれは大体一週間が限度ですよ。

伊藤(隆)　体験入隊ですか。

伊藤(圭)　体験入隊ですから、「どんなに長くても一ヵ所十日から二週間以内にしてくれ。あちこちの部隊は経験するのはいいけれども」と。分かったというので、それで空挺団に行ったりなんかするわけですけれども。ただ、そのあと、かなり陸上自衛隊はいいかげんだから、一ヵ月ぐらいやったところもあると思うのです。僕はそこは知りませんけれども。ただ、毎年来ていました。だから、そういう話はあまりしなかったのです。

一番最初に非常に親しくなったのは、これもまた偶然なのですが、あの人が、「小説家は誰が好きですか」と言うのです。私も突然言われて困ったのですけれども、たまたま私は学生の頃、文章がきれいだから泉鏡花が好きで、泉鏡花は全部読んでいたのです。「泉鏡花が好きだ」と言ったら、「いやあ、私もそうだ」と言うのです。それから非常に親しくなった記憶があります。

それから芝居の話なんか、これは私の得意なところの歌舞伎の話なのだけど、『椿説弓張月』を、最初に歌舞伎の脚本を書いたときに舞台を見てくれというので国立劇場に行きまして、「どうでしたか」と言うから、「『椿説弓張月』というのは歌舞伎の特色は全部入っていると思います。ただ、まだ最初の舞台なので役者が慣れていないでしょう。だから、役者がこれをこなすとよくなるのではないですか」と言ったら、「そうですねえ」なんて言って。そんな記憶が

あるのです。だから、あんまり防衛の話というのはないのです。

防衛関係でやや記憶があるのは、婦人自衛官の話があるのですが。もうその頃は婦人自衛官がいましたから。あの人はやっぱり昔の軍人的な考えなのでしょうかね。婦人自衛官なんかに鉄砲なんか持たせて訓練するのはやめろと言うのです。女の人はああいうことをさせるものではないということを言っていました。防衛の問題はそんなことぐらいで、あとはもう、今の日本人は腐っているというようなことを言いました。東大紛争のときに、行って、学生と話しているのですね。学生の言っていることがまったく何を言っているのか分らないと言うのです。今の若い人の言葉というのは、その言葉自体が分からんということを盛んに言いました。

伊藤(隆)　その楯の会の連中を引き連れて市ヶ谷会館にいるわけでしょう。それで五人だけ行くわけですよね。ここに残った連中はどうしたのですか。

伊藤(圭)　私は知らなかったのですけれども、私の部下だった梅岡というのがたまたま何かの用で市ヶ谷に行っていたのです。市ヶ谷会館に行ったら、楯の会の連中があの廊下に並んで、皆泣いていると言うのです。それで何かあったのだろうかと思っていたら、いま三島由紀夫が自殺したというのがあって、それからすぐ彼は市ヶ谷〔東部方面総監部〕に行ったのです。だから、そこで壮行会みたいなのをやったのではないでしょうか。よく分からないのですけれども。

伊藤(隆)　そうですか。仮にクーデターをやるのだったら、それは要員なはずで。

伊藤(圭)　そうですね。もう一つ、あの人はその日に会った人のことを必ずメモに書いている人らしいですね。だから自衛隊でもずいぶん多くの人が警視庁に呼ばれているのです。どういう話があったかと。私は一回も呼ばれていないのです。だから私と会ったことだけは全然メモしていなかったみたいです。それで、新聞記者もそれを書かないでくれました。新聞記者は知っているわけです。しょっちゅう私のところに来ていましたから。だけどそれは新聞には書かなかったものですから、私は一回も警視庁に呼ばれていないのです。ところがずいぶんたくさん陸上自衛隊の人は呼ばれて。

そこのところで、いま新しく書いた山本（舜勝）という調査学校の副校長をしたのがいるでしょう。あれが最近死んだのです。あの人のことは奥さんは非常に嫌っていました。「あの山本というのはけしからん。三島を利用して売名行為をしている」と言って、俺が一番三島由紀夫から信頼されていたのだということを盛んに本にして。なんか、今また本を出したみたいですね。

佐道　ええ、「自衛隊『影の部隊』――三島由紀夫を殺した真実の告白」。

伊藤(圭)　それはもちろん奥さんは読んでいませんけれども、その前には雑誌か何かにいろいろ書いたみたいです。それで、けしからんということを言っていました。

どうして私がいまお話ししたかと言うと、たまたまこの間御殿場にいる広報課時代の私の部下だった陸上自衛隊の一佐だった人が電話をかけてよこしたのです。それで、山本というのが死んだと言うのです。実は、その山本というのが調査学校にいたときの生徒で心理戦か何かの教育を受けたらしいのです。実は、山本というのは同期生とか仲間が非常に自己顕示欲が強い男だということを言っているというようなことをたまたま電話で言ってきたものですから思い出したのです。

伊藤(隆)　しかし、この三島事件というのはいろんな形で衝撃は与えましたが、実際のところ何であったかというのはちょっとはっきりしない。

伊藤(圭)　これは奥さんも知らなかったのです。奥さんがこういうことを言っていました。あとでいろいろ話を聞いたのですが、「ご主人が自殺をするということを奥さんは知っていましたか」と

言ったら、「まったく知らなかった。私が知ったのは、息子が当時学習院に行っていたのですが、それを迎えに行く車の中でラジオで聞いた」と言うのです。それでびっくりしたと言うのです。

そのあと会って食事したときに、実際知らなかったのだけど、今から考えると思い当たることがありますと言うのです。二つ言ってくれたのですけれども、一つは、今までなかったのだけれども、あの年は、ある日外出しておって夜十時ごろにバーか何かから、「おまえ、ちょっと来ないか」と電話がかかってきたのだそうです。女の人というのは、お風呂に入って化粧を落とすと〔外出するのが〕面倒くさいでしょう。だから断ったと言うのです。それがどうも心残りだったみたいですね。今までにないようなことだったと、それが一つ。

もう一つは、あの年の夏休みに、子どもを連れてアメリカのディズニーランドに行こうと言ったのだそうです。だけど、奥さんはちょうど馬が面白くなったときだったから、乗馬を楽しみにしているから来年でもいいじゃないですかと断ったと言うのです。その二つは、今から考えると死ぬ覚悟をしておったのだなという感じがすると言っていました。だけど、やっぱりその日まで知らなかったということを言っていました。

伊藤(隆)　三島夫人とは、三島さんとお付き合いになっている頃からお知り合いだったのですか。

伊藤(圭)　それは、三島さんが私と村松(剛)さんとイギリス人の記者と三人を自宅に呼んでくれたことがあったのです。そのときに奥さんがサービスしてくれまして。これも凄いのですけれども、どこかからシェフを呼んできて、フランス料理のフルコースですよ。僕なんかはお客さんをするとそこらへんからお鮨をとって食べるぐらいでしょう？　ところがフランス料理のフルコースです。それで奥さんが皿を運んでくれました。そのときに奥さんと会ったものですから、そんなことで。

伊藤(隆)　そんなに長い期間ではないのですよね。

伊藤(圭)　四年間。

伊藤(隆)　四年間というのは、考えてみれば短い期間ですよね。

佐道　短いようで、相手が強烈な人ですからね。

伊藤(圭)　ただ、三島さんが自殺したあと、彼の話をすると、芸者にもてました。芸者はああいう死に方はいさぎよいと言うのですね。芸者にはもてましたよ(笑)。

佐道　やはり封建社会だから(笑)。

伊藤(隆)　(笑)、驚いた。

伊藤(圭)　それでは、四時も過ぎましたので、この次からは防衛課長の時代に入って。その前提として、『白書』とか。

佐道　ありがとうございました。

平成15年度　文部科学省研究費補助金〔特別推進研究（COE）〕
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕
発行：2003年9月1日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト
〒162-8677　東京都新宿区若松町2ー2
Tel：03（3341）0458　　Fax：03（3341）0446